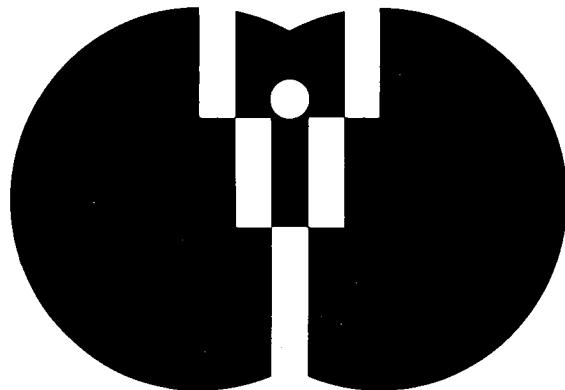


こどもの城

事業年報

平成6年度



財団法人 日本児童手当協会

子どもの城事業年報 平成6年度

目 次

I 事業の概要

1 事業と運営の基本構想	5
2 運営の基本的な考え方	6
3 「子どもの城」の活動概要	6
1) 「子ども活動エリア」の活動	6
2) 青山劇場・青山円形劇場	7
3) その他の活動	7
4 組織機構図と役員名簿	8
5 平成6年度の活動の概要	9
1) 事業活動	10
(ア) 入館者数	10
(イ) 一般来館児・者のための活動	10
(ウ) 講座・クラブ活動	11
(エ) グループ活動	12
(オ) 劇場事業	12
(カ) 各種の普及・協力活動	12
2) 國際家族年記念「家族芸術祭」と 「動く子どもの城」	12
(ア) 國際家族年記念「家族芸術祭」	12
(イ) 「動く子どもの城」	12
3) その他の活動	13
6 活動時間・入館料(子ども活動エリア)	13
1) 平常期間	13
2) 特別期間(学校の季節休み)	13
3) 特別期間(児童福祉週間特別行事等)	13
4) 入館料	14
5) その他	14
7 活動状況一覧	16
1) 入館者数	16
2) グループ活動実施状況	18
3) 講座・クラブ等	19
(ア) 講座	19

(イ) クラブ	20
(ウ) 短期集中講習会等	21
(エ) 専門指導者向け講習会等	21
4) 視察・見学実績	22
5) 1年の活動の歩み	23

II 各部の活動(1)

1 体育事業部	27
2 プレイ事業部	45
3 造形事業部	59
4 音楽事業部	73
5 A V事業部	87
6 保育研究開発部	101
7 小児保健部	115
8 企画部	123
9 劇場事業本部	131

III 各部の活動(2)

1 広報部	145
2 研修教養部	151
3 国際交流部	161
4 営業部	168

IV 「家族芸術祭」と 「動く子どもの城」

1 國際家族年記念 家族芸術祭	175
2 動く子どもの城 (キャラバン隊派遣事業)	180

V その他の活動

1 子どもの城全国連絡協議会	187
2 チャリティー事業	192
3 子どもの城友の会	193

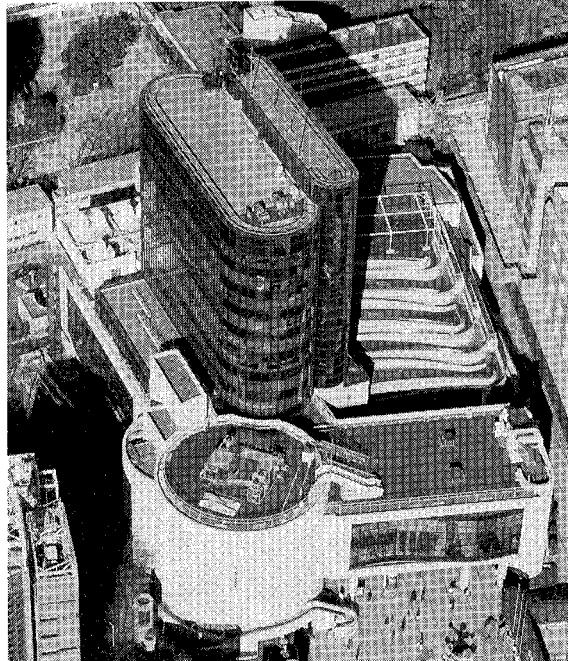
I 事業の概要

1	事業と運営の基本構想	5
2	運営の基本的な考え方	6
3	〔子どもの城〕の活動概要	6
4	組織機構図と役員名簿	8
5	平成6年度の活動の概要	9
6	活動時間・入館料	13
7	活動状況一覧	16

I 事業の概要

〔こどもの城〕は1979年(昭和54年)の国際児童年を記念して厚生省が計画・建設した、児童の健全育成のための総合施設。国が東京都から譲り受けた、渋谷区神宮前5-53-1の約1万m²の敷地に、昭和56年11月に着工された。以来、4年の歳月と323億円(土地取得費を含む)の国費をかけ、地上13階、地下4階のミラーガラスに包まれた美しい建物が完成、昭和60年11月1日に開館した。運営は、厚生省の委託を受けて(財)日本児童手当協会が当たっている。

開館以来、毎年100万人を超える多くの人々に利用され、開館9年目の平成6年10月30日には、利用者が1,000万人を突破した。



1. 事業と運営の基本構想

〔こどもの城〕の創設に当たって、昭和54年、厚生省により「こどもの城企画委員会」(葛西嘉資座長)が設けられ、「近年、わが国の社会の都市化、工業化に伴い、児童の健康や安全が損なわれており、また、核家族化、家庭規模の縮小に伴う児童の人間関係の変化によって、さまざまな問題が生じている。一方で、高年齢化が進んでおり、この中で、豊かな活力ある社会を維持していくために、未来を担う児童の健全育成の必要性が高まってきている。このときにあたり、わが国の児童をとりまく諸問題に適切に対処し、明るい21世紀を展望する総合施設を建設することは、時宜に適したものである。(要約)」という意見書が児童家庭局長に提出された。

以来、厚生省と(財)日本児童手当協会は、この「基本構想に関する意見」を踏まえ、協力しながら〔こどもの城〕の建設に当たり、運営に取り組んできた。

2. 運営の基本的な考え方

【子どもの城】は新生児から高校生までの全児童を対象に、幅広い福祉・文化活動を行っている。「子ども活動エリア」と総称される体育、プレイ、造形、音楽、A Vの各部門のほかに、保育研究開発、小児保健、企画、劇場事業（青山劇場・青山円形劇場）、広報、研修教養、国際交流などの部門があり、児童だけでなく、親をはじめ児童の福祉・文化関係者、研究者、教育者など、子どもの幸せを願うすべての人が利用できるよう開かれている。

「子ども活動エリア」で毎日行われている数々のプログラムのほかに、平日の午前中を利用して行われている保育所や幼稚園・小学校などの集団を対象とした「グループ活動」、そして【子どもの城】ならではのユニークな内容の講座・クラブなどの数々の実践を通して、次代を担う子どもたちが心身ともに健やかに成長していくことを目指して活動している。

また、子どもだけでなく、子どもを取り巻く親や児童福祉・文化関係者を視野に入れ、子育て支援活動や研究・研修活動にも力を入れている。

【子どもの城】は既成のプログラムだけでなく、先駆的で実験的なプログラムの開発を心がけ、全国に普及していくこと、そして国際的視野に立って世界各地の子どもたちと交流を図ることを運営の基本に活動している。本年度から国の助成を受けて始まった「動く子どもの城」は、【子どもの城】が持っているさまざまなノウハウを紹介すると同時に、全国の児童館・児童センターとの交流・情報交換を進める場として、重要な活動の1つになっている。

このように【子どもの城】では、①芸術・文化・科学・スポーツなどの活動による児童の健全育成 ②児童福祉関係者の研修・現任訓練 ③児童福祉に関する研究・開発 ④国際交流、といった各種の機能を併せ持つ総合施設として、これらの機能を相互に関連させながら運営している。

3. 【子どもの城】の活動概要

1) 「子ども活動エリア」の活動

いろいろな分野の専門スタッフがいる【子どもの城】は、その総合施設としての機能を生かして、来館児・者がいきいきと参加し、体験できるプログラムの企画・開発・実施に努めている。そして、①一般来館児・者を対象とした活動 ②団体を対象としたグループ活動 ③継続的に利用できる講座・クラブ活動——の3つの柱を中心に運営している。

一般来館児・者を対象とした活動は、毎日「こども活動エリア」で行われ、〔子どもの城〕に遊びに来た子どもやその家族が楽しみながら参加、体験できる〈あそび〉を通して、出会いと発見、そして仲間作りができるように工夫されたプログラムで、初めての子どもでも、自然に〈あそび〉の輪の中に入って楽しめる。

平常期間の平日は、スタッフとの触れ合いを大切にしたきめ細かいプログラムを、土曜日・日曜日・祝日には、多くの子どもたちに対応できるようにプログラムの内容などを工夫している。また、学校の季節休み（春休み、夏休み、冬休み）の期間と児童福祉週間（ゴールデウイーク）を特別期間とし、開館時間を午前10時にして、各部門が協力して、たくさん的人が参加できる大型のプログラムを集中的に行っている。

「グループ活動」は、保育所、幼稚園、小学校、ハンディキャップを持った子どもたちのグループを対象に、平日の午前中に行う活動。一般来館児・者活動や講座・クラブ活動の経験をもとに、〔子どもの城〕ならではのプログラムを開発、積極的に受け入れをしている。

「講座・クラブ」は、平日を中心に〔子どもの城〕の整った施設・設備を利用して実施。幼児と親が一緒に受講するもの、就学前の幼児を対象にするもの、小学生から高校生までを対象にするもの、高校生から一般成人、さらに専門家を対象にするものなど50種類を超える講座・クラブを開講している。

2) 青山劇場・青山円形劇場

〔子どもの城〕には、青山劇場と青山円形劇場の2つの劇場がある。あらゆる世代の人間が、それぞれの視点で楽しめ、見終わった後に對話が生まれるよう、眞の意味での“ファミリー向け”の演目を上演している。自主公演はもとより、貸し劇場の場合も、企画の内容を吟味し、〔子どもの城〕の劇場としてふさわしいものを選んで上演している。

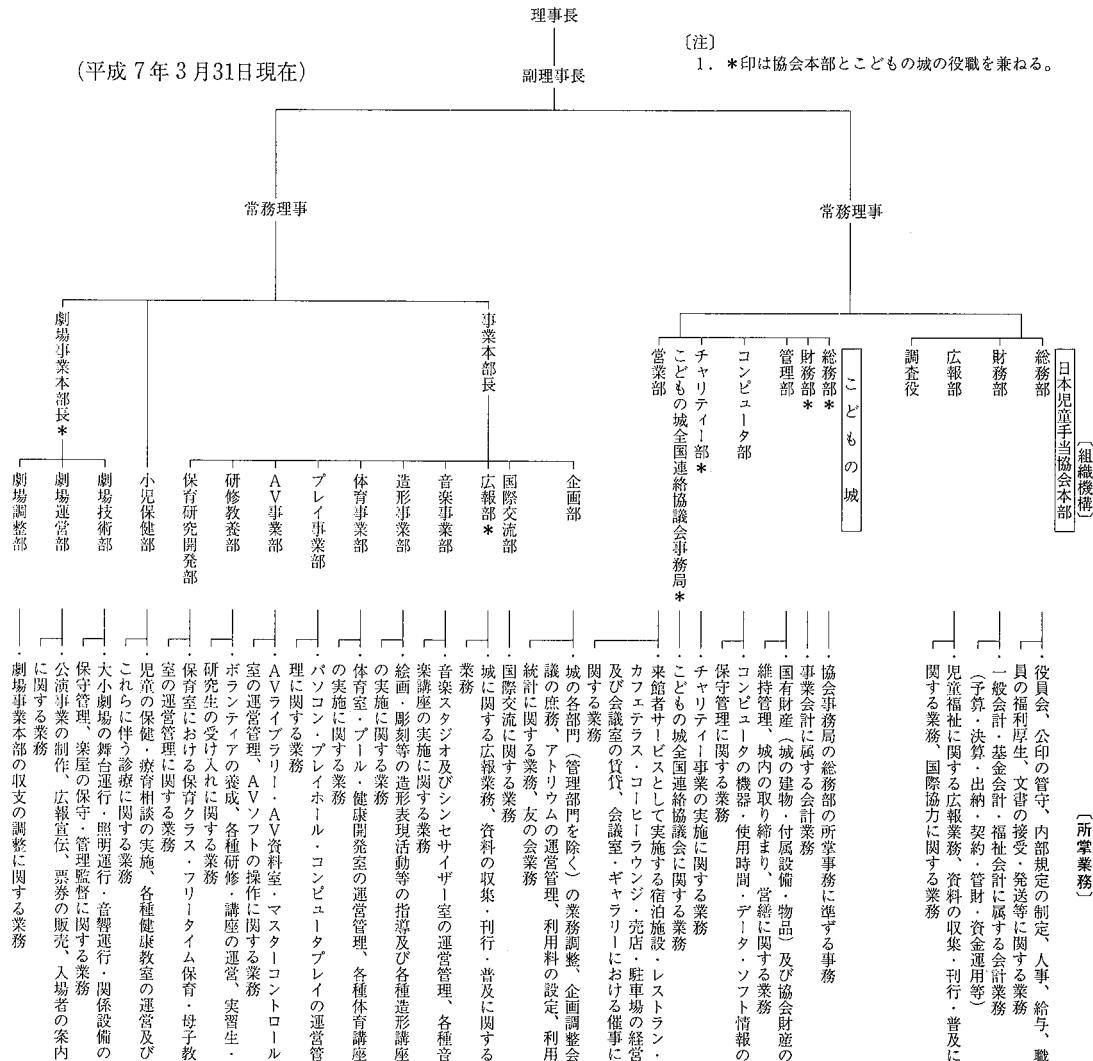
3) その他の活動

「こども活動エリア」や劇場事業部門のほかに、保育の実践と研修事業の2つを中心に活動する保育研究開発部門、子どもの心や体の健康について取り組む小児保健部門、ボランティアの養成とコーディネイトを主に担当する研修教養部門、全体を円滑に運営するための調整をしたり、〔子どもの城〕全体にかかる業務を担当する企画部門、国際交流部門、広報部門、利用者サービス部門などがある。

〈あそび〉を通して直接子どもたちと触れ合う活動だけでなく、研究や研修活動など、〈こども〉を取り巻くさまざまな活動を展開している。

4. 組織機構図と役員名簿

(財)日本児童手当協会組織機構図



(財)日本児童手当協会役員

(平成7年3月31日現在)

役 職	氏 名	
理事長	小島 弘仲	
常務理事	弓掛 正倫	
理事	石野 清治	資生堂取締役会長
理事	大野 出穂	
理事	金平 輝子	東京都副知事
理事	小山 敬次郎	経済団体連合会専務理事
理事	品川 正治	経済同友会副代表幹事
理事	竹内 嘉巳	(社福) 日本肢体不自由児協会理事長
理事	谷村 昭一	日本商工会議所専務理事
理事	瀬成 健生	日本経営者団体連盟常務理事
理事	平田 寛一郎	早稲田大学政治経済学部教授
理事	平山 宏	日本総合愛育研究所所長
理事	松崎 芳伸	日本携帯電話株式会社取締役相談役
監事	杉本 敏雄	(社福) 慶福育児会麻布乳児院院長
監事	松尾 正人	財社会保険健康事業財団東京支部長

5. 平成6年度の活動の概要

通常の【子どもの城】の活動に加えて、平成6年度は国際家族年に当たるため、【子どもの城】においても国際家族年を記念する数々のプログラムを実施した。国で行う「国際家族年記念事業」の1つとして、(財)こども未来財団から助成を受け、『国際家族年記念家族芸術祭「地球は家族」展』の名称のもとに、3つの“家族”をテーマにした展覧会と1つのワークショップを実施した。

①田沼武能の写真による「世界の子どもと家族」写真展 ②全国児童館造形フェスティバル「わたしたちの家族」を表現した共同制作展 ③【子どもの城】親子体験ワークショップ「おやっ!と発見 子と発見」 ④家族・はがきアート展「はがきにのせた、わたしの家族」の4つのプログラムである。

また、本年度は、来年度に迎える開館10周年の節目を控えて、過去を総括し次の10年に踏み出すための準備の年でもあった。開館以来蓄積されてきた【子どもの城】のノウハウをまとめ、全国の児童館・児童センターなどで子どもたちや指導員を対象にプログラムを“出前”する「動く子どもの城」は、その象徴とも言える。本年度から国の助成を受けて、秋から本格的に活動を始めた。

本年度の【子どもの城】全体の運営に要した費用は、年間26億4,000万円。

スタッフは年度末現在126人。

1) 事業活動

(ア) 入館者数 (16~17ページ参照)

本年度の年間入館者数は、一般来館児・者が422,621人、劇場入館者が473,195人、これに保育、小児保健、講座・クラブ関係のほか、研修・会議関係の来館者を加えた総数は1,114,178人。前年度に比べ、約3万人の増となり、平成4年度とほぼ同じ水準の入館者数となった。

(イ) 一般来館児・者のための活動 (各事業部の項参照)

(1) 平常期間

文化体育事業（体育、プレイ、造形、音楽、AVの「こども活動エリア」を担当する部門の事業）は、各事業部とも来館者の家族が一緒になって楽しめる活動を強化することを目標として活動した。特に、親子が一緒に参加・体験できるプログラム、学校5日制に対応する活動として、小学生以上を引きつけ、友だちづくりができるプログラムの開発・提供に努めた。

また、平常期間の平日に多い幼児と母親のための子育て支援のプログラムについては、保育研究開発部と小児保健部を含めて、活動の強化を重点目標として内容の充実に努めた。

このように、対象年齢に応じたプログラムの開発も行われるようになり、来館児・者の多様なニーズにこたえられるようになってきた。

各事業部のプログラム内容も【こどもの城】らしい独自のものが定着し、好評を得ている。

体育事業部のミニサッカーやドッジボールなど独自のルールを設定してだれもが楽しめるように工夫したプログラム、造形事業部が前年度から継続して取り組んできた「造形宝島」の数々のプログラム、AV事業部の映像をより深く理解するための「不思議な映像実験室」のプログラムなど、それぞれのスタッフの創意工夫が生かされ、来館児・者の人気を集めた。

プレイ事業部では、親子が一緒になって楽しく遊べる「ファミリープレイタイム」を本年度から実施し、遊びの幅を広げる活動を展開した。また、音楽事業部では、ロビーで行われる音楽活動をより充実させるために、竹で作ったインドネシアの楽器「アンクルン」（ハンドベルのように、1つの楽器が1つの音階を出す楽器）を追加購入し、さまざまな楽器で親子が自発的に遊ぶことができるよう環境の整備を図った。

保育研究開発部は、実践活動として「幼児グループ」「保育クラブ」「母子教室」を実施してきたが、親子(父、母、子=家族)が参加して楽しく遊びながら育児への視野を広げていくことをねらいとして「母子教室」を「親子教室」に改め、内容の充実を図ったほかに、「保育セミナー」「育児相談研修会」の開催

や「ニュースレター」の発行など保育関係者向けのプログラムを推進した。

小児保健部の活動は、クリニックの診療・相談活動、講座や育児支援活動、専門家向けの研修会などの啓発活動に分けられる。他事業部との連携事業である「健康スポーツ教室（太りすぎクラス）」などのプログラムを継続して実施した。また、若い母親向けの現代版“井戸端会議”「赤ちゃんサロン」も定着し、親同士の語らいと交流の場を提供した。

(2) 特別期間

学校の季節休み（夏、冬、春の各期の休み）の期間および児童福祉週間（ゴールデンウィーク）を特別期間とし、外部の企画などを取り入れ、斬新で多くの来館者が参加できるように、各種のプログラムや大型の行事を集中的に行つたほか、前年度から引き続き一部公演について、「こども活動エリア」入館券と劇場入場券を共通にして、来館児・者のサービス向上に努めた。

夏休み特別期間には、「人形劇見本市」（東日本専門人形劇団協議会と共催）、ギャラリー展示「世界の子どもたちII～アジアの仲間とくらし」（（社）日本ユネスコ協会連盟ほかとの共催）、「すばらしいアニメーションの世界II」（キンダー・フィルムフェスト・ジャパンの特別協力企画）など、外部の企画協力を得て【こどもの城】ならではのプログラムを開催した。

造形事業部のプログラム「造形発見展～造形宝島」は、前年度から継続して実施してきたシリーズの総まとめとして、やしの木が林立しジャングルの中を川が流れる「宝島」を造形スタジオに出現させ、「宝島」という架空の物語が含んでいる要素をモチーフに造形活動を行った。

音楽事業部では、0～3歳の幼児と親が一緒にゆったりと音具で遊ぶことができるプログラム「ゆったり親子のおんがく園」を今夏から実施した。

また、夏休み特別期間中に恒例の「渋谷スタンプラリー」に参加。本年度で11回目。【こどもの城】、東京都児童会館、電力館、たばこと塩の博物館、五島プラネタリウムの5館（NHK展示プラザ＝現NHKスタジオパークは改装中のため不参加）で実施した。

(ウ) 講座・クラブ活動

継続的・体系的に【こどもの城】を利用できるプログラムとして、講座・クラブを実施し、その充実と活性化に努めた。

講座は42種・82コースで受講者数は2,397人、クラブは10種・11コースで会員数996人となった。また、夏休みや春休み特別期間には、体育、造形、プレイなどの事業部で11種46コースの短期集中講座（880人受講）を開いた。このほかに、専門指導者向けの講習会を7種11コース（813人受講）実施した。

前年度の途中から実施した「エレクトリックアンサンブル」は、2年目を迎えて定着した。

(エ) グループ活動

平日の午前中に、保育所や幼稚園、小学校などを単位とした児童やハンディキャップを持った児童のグループの活動を積極的に受け入れ、本年度は105グループ、2,429人を迎えた。

グループ活動は、ここ数年利用団体が減少の傾向にあったが、受け入れ体制を充実させしたことなどにより、ピーク時に並ぶ結果となった。なかでも幼稚園が約半数を占め、また外国人の団体の利用も高かった。

(オ) 劇場事業 (131~136ページに公演名一覧)

自主公演は青山劇場で1公演、青山円形劇場で15公演行った。このうち青山円形劇場での「五線譜のなかの動物たちスペシャル～プラテ～ロ」と「こどもの城おまつり劇場～こども風土記」は、日本芸術文化振興会の助成対象に選ばれた。

貸し劇場としては、青山劇場が22件、青山円形劇場が46件で、両劇場とも年間フルに使用された。

運営面では、前年度からの景気低迷感が抜け切れず、企業協賛や入場券販売の面で“不景気”を痛感した年であった。このような状況の中でも、自主公演の質の維持向上、新鮮な話題性、オリジナル性などの面でそん色のないラインナップを展開した。

(カ) 各種の普及・協力活動

【こどもの城】の活動の趣旨・内容を広く知ってもらい、関係団体との交流を進めるために各種の事業を行った。

主なものは、児童厚生員等実技指導講習会(5月、10月、1月)、小児肥満のための指導者講習会(10月、3月)、保育セミナー(8月)などがある。

2) 国際家族年記念「家族芸術祭」と「動くこどもの城」

(ア) 国際家族年記念「家族芸術祭」

平成6年(1994年)は「国際家族年」に当たり、厚生省の呼びかけのもと、[こどもの城]未来財団の助成を受けて、4つのプログラムで構成される「家族芸術祭」を9月から平成7年1月にかけて実施した。“家族”を考える3つの展覧会と、[こどもの城]館内で繰り広げられる親子いっしょに参加する「親子体験ワークショップ」である。

(イ) 「動くこどもの城」

国の助成を受けた「動くこどもの城」(公称は「キャラバン隊派遣事業」)が本年度から始まった。[こどもの城]の活動を館外へ移動し、児童の福祉文化の活性化のために地域の児童館などと連携して、積極的に実践協力をするもの。本年度は全国12か所で「手作り楽器」「アニメ」「造形」などのワークショップ

を実施した。

3) その他の活動

前記の【子どもの城】の事業活動のほか、【子どもの城】の運営は活動内容の周知および来館児・者増を図るために重要な活動である次の事業を行った。①「子どもの城ニュース」の発行など各種のPR活動を行う広報 ②国際交流 ③子どもの城友の会の運営 ④子どもの城全国連絡協議会の運営 ⑤子どもの城の事業に協力するボランティアの養成 ⑥実習生・研修生の受け入れ ⑦チャリティー事業 ⑧【子どもの城】利用者の便宜を図るための利用者サービス事業など。

6. 活動時間・入館料（こども活動エリア）など

1) 平常期間

平 日 開館（午後0時30分～午後5時30分）

土曜日
日曜日
祝 日 } 開館（午前10時～午後5時30分）

月曜日 休館（祝日または振替休日に当たるときは開館、翌火曜日が休館。開館時間は、午前10時～午後5時30分）

2) 特別期間（学校の季節休み）

学校の季節休み（夏休み、冬休み、春休み）は特別期間とし、曜日にかかわりなく、午前10時から午後5時30分まで開館した。

夏休み特別期間（7月21日～8月31日）の休館日は7月25日、8月8日、22日の3日間で、このほかの月曜日を9月1日、2日、6日に振り替えて休館とした。

冬休み特別期間は12月23日～1月8日で、12月28日～1月2日は休館とし、1月3日は午後0時30分に開館した。また、春休み特別期間は3月24日～4月5日で、全期間開館した。

3) 特別期間（児童福祉週間特別行事など）

本来の児童福祉週間は5月5日からの1週間であるが、4月29日から5月5日までのゴールデンウイークを【子どもの城】の児童福祉週間特別期間とし、厚生省、(社)全国児童館連合会との共催で「おやこフェスティバル」などの特別プログラムを企画・実施した。

また、横浜開港記念日（6月2日）、千葉県民の日（6月15日）、川崎市制記念日（7月1日）、東京都民の日（10月1日）は、午前10時に開館し、特別行事を企画し、多くの来館児・者を迎えた。

4) 入館料

一 般	18歳未満	300円（保護者に同伴される3歳未満児は無料）
	18歳以上	400円
一般回数券	18歳未満	12枚つづり 3,000円
	18歳以上	12枚つづり 4,000円
団 体	18歳未満	240円
	(20人以上)	320円

5) その他

例年、5月5日の「こどもの日」と11月1日の「こどもの城開館記念日」は18歳未満の入館料を無料としているが、本年度は国際家族年を記念して、従来に加えて、11月1日の【こどもの城】の開館記念日から3日の文化の日までの3日間を無料とした。

参考：日本児童手当協会の助成事業等

1) 児童文化普及等事業

財全国児童館連合会が実施した、中央児童福祉審議会推薦による児童劇、映画を各地の児童厚生施設で上演等、児童福祉文化財普及を目的とする事業に対して助成を行った。平成6年度助成額 163,991,000円。

2) 啓発事業

ア) 児童手当制度の啓発、広報のため「児童手当」誌を発行

(1)発行回数・部数 月刊(12回) 延べ58,200部

(2)配付先 中央官庁、地方公共団体、社会保険事務所、各県経営者協会および商工会議所、中央児童福祉審議会委員等関係者

イ) 児童手当(受給者のしおり)を作成、配付

(1)発行部数 500,000 部

(2)配付先 地方公共団体、児童福祉施設等

[こどもの城] の建築概要

所在地 …… 東京都渋谷区神宮前 5 丁目53番地 1号
 地域・地区 …… 住居地域・商業地域(特定街区指定)・
 防災地域・準防火地域・一部第 2 種文教地域
 建築主 …… 厚生省
 敷地面積 …… 9,923.39m²
 建築面積 …… 6,001.5m²
 延べ床面積 …… 41,699.47m²
 建ぺい率 …… 60.48%
 容積率 …… 345.38%
 階数 …… 地下 4 階・地上 13 階・塔屋 1 階
 最高高さ …… GL+57.6m
 基礎下端 …… GL-28.5m
 主要構造 …… 高層部 鉄骨造
 低層部 鉄骨鉄筋コンクリート造
 地下 鉄筋コンクリート造
 設計・管理 …… 株式会社 山下設計
 着工 …… 昭和56年11月
 完成 …… 昭和60年9月

内部施設の概要

こ	○アトリウム(こども活動エリア入口)・ギャラリー	[1・1~2階]
ど	○フリーホール(休憩室・催し場)	[地下1階]
も	○プール・体育室・健康開発室・トレーニングジム	[地下2階]
活	○プレイホール・コンピュータプレイルーム	[3階]
動	○造形スタジオ	[3階]
エ	○音楽スタジオ A, B・音楽ロビー・シンセサイザー室	[4階]
リ	○A Vライブラリー	[4階]
ア	○屋上遊園(ふしげが丘, ともだち広場, プレイポート, ネット広場)	[3~5階]
保	○パソコンルーム	[10階]
保	○小児保健・診察・相談室	[5階]
育	○保育研究開発・保育室 I, II	[5階]
劇	○青山劇場	[1・2階]
場	○青山円形劇場	[3階]
サ	○駐車場	[地下2~4階]
ー	○売店	[1階]
ビ	○カフェテラス「アンファン・ひさご寿司」	[1階]
ス	○コーヒーラウンジ「アミティーエ」	[2階]
エ	○ホテル	[6・7階]
リ	○研修室	[8・9階]
ア		

7. 活動状況一覧

1) 入館者数

	一般来館者		劇場			その他	計
	有料	総数	青山劇場	青山円形劇場	小計		
4月	大人	(人) 8,833	(人) 28,489	(人) 32,020	(人) 6,961	(人) 38,981	(人) 87,159
	子ども	9,869					
	団体	8,977	推計				推計 (91,580)
	小計	27,679	(32,910)				
5月	大人	15,515	39,238	37,144	6,040	43,184	103,086
	子ども	12,711					
	団体	6,946	推計				推計 (109,751)
	小計	35,172	(45,903)				
6月	大人	8,665	18,973	24,358	10,765	35,123	77,424
	子ども	8,165					
	団体	1,146	推計				推計 (81,764)
	小計	17,976	(23,313)				
7月	大人	12,459	29,526	36,197	5,854	42,051	91,979
	子ども	13,804					
	団体	1,687	推計				推計 (98,217)
	小計	27,950	(35,764)				
8月	大人	26,164	69,837	29,025	8,100	37,125	120,143
	子ども	30,188					
	団体	9,731	推計				推計 (133,231)
	小計	66,083	(82,925)				
9月	大人	11,606	23,069	41,083	6,518	47,601	88,975
	子ども	9,783					
	団体	671	推計				推計 (94,785)
	小計	22,060	(28,879)				
10月	大人	9,271	20,021	45,532	7,324	52,856	94,649
	子ども	8,954					
	団体	917	推計				推計 (99,291)
	小計	19,142	(24,663)				
11月	大人	11,323	25,041	28,389	6,831	35,220	79,845
	子ども	11,157					
	団体	1,580	推計				推計 (85,511)
	小計	24,060	(30,707)				

	一般来館者		劇場			その他	計
	有料	総数	青山劇場	青山円形劇場	小計		
12月	大人 子ども 団体	(人) 7,206 7,542 847	(人) 16,464	(人) 27,169	(人) 6,739	(人) 33,908	(人) 15,084
	小計	15,595	推計 (20,072)				推計 (69,064)
1月	大人 子ども 団体	10,866 10,823 4,785	27,895	32,642	9,297	41,939	13,248
	小計	26,474	推計 (33,336)				推計 (88,523)
2月	大人 子ども 団体	8,385 7,280 2,005	18,620	23,859	6,017	29,876	16,840
	小計	17,670	推計 (22,819)				推計 (69,535)
3月	大人 子ども 団体	12,960 14,744 3,582	34,845	28,342	6,989	35,331	16,265
	小計	31,286	推計 (41,330)				推計 (92,926)
計	大人 子ども 団体	143,253 145,020 42,874	352,018	385,760	87,435	473,195	218,362
	小計	331,147	推計 (422,621)				推計 (1,114,178)



1,000万人目の入館者は、墨田区から遊びにきた丸山奈緒子さん(9歳)―10.30―

2) グループ活動実施状況

			保育所	幼稚園	小学校	養護学校	ろうあ学校	盲学校	小学校特殊学級	中学校特殊学級	幼兒教室・研究所	自主保育グループ	障害児施設	計
件 数			8	50	10	14	1	1	12	0	7	1	1	105
月別内訳	4月				2									2
	5月		1	1										3
	6月			2			1							6
	7月									3				3
	8月													
	9月		1	1		2				2				6
	10月			4	3	2	2			3				12
	11月		1	10	4	2						1		18
	12月			2	2	1		1					1	5
	1月		2	6			1							10
地域別内訳	2月		2	15	1	4		1						27
	3月		1	7		2							1	13
	東京都	区市	7	48	10	10	1	1	8		7	1	1	94
			1		2		2		3					6
参加児童数別内訳	他府県									1				5
	10未満				2		3							
	10~19		2	15		10	1	1	10			1		16
	20~29		6	14		1			2					36
	30~39			10	2									24
	40~49			4	7									12
	50~59			4										11
	60~79			1	1									4
	80~99													2
	100~149													
150以上														
参加児童数	延べ数 1件当たり	178 22.2	1,393 27.8	459 45.9	164 11.7	10 10.0	10 10.0	74 6.1			122 17.4	15 15.0	4 4.0	2,429 23.1
引き率者数 付き添い者数			30 26	185 272	43 18	156 5	5 10	2 10	46 15		12	3	2 4	484 360
活動部門	体育 ブレ 造形 音楽 AV プレイ自由 AV自由	1 5 1 1 6	13 10 6 30 4 28	6 8 1 1 3 8	1 1 1 11			3			3 1 1 3 1			27 26 16 51 7 50

3) 講座・クラブ等

(ア) 講座

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
体 育	幼児・母親水泳	幼児・母親	1 年 2 コース	60(組)
	幼児水泳	幼児	" 6 "	330(人)
	幼児体育	"	3 "	120
	小学生水泳	小学生	" 6 "	320
	シニア・スイミング	小・中学生	" 3 "	90
	シニア・スイミング・フレッシュ	"	1 "	30
	小学生体育	小学生	" 1 "	40
	小学生総合体育	"	1 "	40
	ジュニア新体操	"	1 "	35
	シニア新体操	小・中学生	" 1 "	35
	手足の不自由な子の水泳	"	1 "	15
	レディース・スイミング	女性	" 3 "	180
	レディース・リズム&ストレッチ	"	1 "	30
	幼児・母親体育	幼児・母親	3か月 3 "	90(組)
	母と子のすくすくランド	"	3 "	60
	母と子のパチャパチャスイム	"	3 "	90
プレイ	小学生パソコン教室 I (初級)	小学生	2か月 2 コース	40(人)
	小学生パソコン教室 II (中級)	パソコン I 修了者	" 2 "	40
造 形	A. クレイワーク	小・中・高校生	1 年 1 コース	10(人)
	B. わくわくワーク	"	1 "	10
	C. ゆかいな造形	"	1 "	10
	D. えいぞうたんけん	小3~高年生	" 1 "	10
	E. ハンズワーク	小4~高校生	" 1 "	10
音 楽	おんがく星みつけた (就園前のリトミック)	幼児・母親	3か月 3 コース	90(組)
	おかあさんもいっしょ (リトミック)	" 1 年	3 "	60
	リズムムービング	幼児	" 3 "	42(人)
	リズムムービング&パーカッション	小学生	" 1 "	20
	合唱	"	1 "	30
	ガムラン	小・中・高校生	" 1 "	10
	三昧線	"	3 "	36
	和太鼓グループ「日本のリズム」	"	1 "	12
	集まれ・みんなのリズム	小・中学生	" 1 "	10
	エレクトリック・アンサンブル	小・中・高校生	7か月 1 "	8
	おとなためのがムラン	一般	4か月 1 "	15
	混声合唱	高校生以上	1 年 1 "	15

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
国際交流	パフォーミング・アーツ・グループ	小学生	1 年 1 コース	30(人)
研修教養	手話講座	高校生以上	5 か月 2 コース	60(人)
	点訳入門講座	一般	1 年 1〃	30
	子どもの心を考える	〃	3回／年 1〃	60
保育研究 開 発	幼児グループ	幼児	1 年 1 コース	20(人)
	母子教室	幼児・母親	3 か月 3〃	39(組)
	育児相談の研修会	育児相談担当者	3回／年 1〃	30(人)
	保育内容研修会	保育従事者	通年 1〃	10
小児保健	健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉	小学生	1 年 1 コース	25(人)
	母と子のリトミック〈ダウン症児クラス〉	ダウン症児・母	〃 1〃	15(組)
	マタニティ・スイミング	妊娠 (16週～)	通年 1〃	35(人)
合 計		42種	82コース	2,397

(イ) クラブ

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
体 育	ダイナミック・ヘルス・クラブ	一般成人	通 年 1 コース	会員数 202(人)
プレイ	パソコンクラブ	小・中・高校生	通 年 1 コース	100(人)
	キッズクラブ	小学生	1 年〃	30
	ユースクラブ	中学生	〃〃	40
音 楽	児童合唱団	合唱講座修了者	1 年 2 コース	90(人)
	ガムラングループ	ガムラン講座修	〃 1〃	15
	パーカッション・アンサンブル	小・中・高校生	〃 1〃	15
研修教養	L. I. T. (高校生ボランティア養成)	高校生	1 年 1 コース	30(人)
	点訳サークル	入門講座修了者	〃〃	20
保育研究 開 発	保育クラブ	幼児	通 年 1 コース	会員数 454(人)
合 計		10種	11コース	996

*講師により指導しているクラブについては、講座に準じた。利用型のクラブについては3月末の登録者数とした。

(ウ) 短期集中講習会等

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
体 育	夏休みこども集中水泳講習会	幼児・小学生	5日間 4コース	180(人)
	春休みこども集中水泳講習会	" " 2 "		90
	ガンバ! '94	小学生	" " 1 "	30
	成人集中水泳講習会	成人	1か月 12 "	240
プレイ	小学生パソコン教室(自由課題)	パソコン教室II III 修了者	4日間 1コース	15(人)
	小学生パソコン教室 III	パソコン教室I II 修了者	5日間 1 "	20
造 形	遊びと造形発想セミナー夏休み造形教室	小学生3年生以上	2日間 20コース 1日間 1 "	200(人) 30(人)
小児保健 音 楽	夏休み健康教室(太りすぎ教室)	幼児・母親	3日間 1コース	20(組)
	成人ガムラン特別講習会	成人ガムラン修了者	1日間 1 "	15
AV	AVビデオ集中講習会	一般	2日間 2コース	40
合 計		11種	46コース	880

(エ) 専門指導者向け講習会等

部 門	プ ロ グ ラ ム	対 象	コ ー ス	総 定 員
研修教養	児童厚生員等実技指導講習会	児童厚生員等	4日間 3コース	150(人)
保育研究 開 発	保育セミナー	保育関係者	2日間 1コース	150(人)
小児保健	小児肥満のための指導者講習会	小児保健関係者	1日間 2コース	100(人)
	小児保健セミナー	" " 1 "		133
	小児保健研修会	" " 2 "		120
	小児肥満シンポジウム	" " 1 "		100
	小児アレルギー研修会	" " 1 "		60
合 計		7種	11コース	813

4) 観察・見学実績

年 度	都道府県・市区町村の本庁その他の行政部局、公共団体	児童館、保育所、幼稚園、学校、施設、サークル、これらの団体	外 国 人	そ の 他	計
昭和 60年度	(100)	1,122	(100)	1,578	(22) 169 (18) 410 (240) 3,279
	(121)	714	(192)	4,085	(52) 359 (31) 513 (396) 5,671
	(107)	439	(123)	2,437	(36) 347 (20) 477 (286) 3,700
	(91)	598	(69)	770	(30) 211 (32) 296 (222) 1,875
	(72)	541	(71)	931	(10) 86 (25) 195 (178) 1,753
	(65)	605	(27)	292	(8) 156 (17) 212 (117) 1,265
	(63)	417	(47)	705	(11) 77 (6) 274 (127) 1,473
	(78)	585	(62)	1,038	(9) 122 (6) 35 (155) 1,780
	(69)	698	(75)	1,182	(14) 119 (9) 41 (167) 2,040
	(3)	17	(2)	9	(1) 5 (1) 2 (7) 33
平成 元年度	(8)	54	(6)	246	(0) 0 (4) 19 (18) 319
	(6)	80	(1)	1	(1) 2 (2) 42 (10) 125
	(6)	45	(8)	161	(0) 0 (0) 0 (14) 206
	(7)	68	(4)	53	(1) 40 (1) 17 (13) 178
	(6)	21	(9)	274	(1) 10 (0) 0 (16) 305
	(11)	168	(3)	38	(3) 9 (0) 0 (17) 215
	(7)	68	(7)	127	(4) 57 (3) 8 (21) 260
	(5)	81	(15)	207	(1) 18 (0) 0 (21) 306
	(7)	27	(2)	9	(0) 0 (0) 0 (9) 36
	(7)	58	(8)	96	(0) 0 (2) 28 (17) 182
	(23)	95	(8)	30	(1) 3 (0) 0 (32) 128
	合計	(96)	782	(73) 1,251	(13) 144 (13) 116 (195) 2,293
累 計	(862)	6,501	(839)	14,269	(205) 1,790 (177) 2,569 (2,083) 25,129

※(1)「外国人」：韓国、中国、タイ、インド、ドイツ、アメリカ、その他

(2)「その他」：中央官庁、中央団体、会社など

5) 1年の活動の歩み

月 日	事 項
平成6年 4月11日～24日	アートスケープ展'94(ギャラリー)
4月22日	メキシコのパパローテ子どもミュージアムのマリア・エレーナ館長らが【子どもの城】を視察
4月29日～5月5日	児童福祉週間特別期間(ゴールデンウイーク特別期間) ＜いのち輝け　わいわいワールド　地球は家族＞ ※5月5日の「子どもの日」は18歳未満の入館料は無料
5月3日～5日	国際家族年記念「おやこフェスティバル」(青山円形劇場)
5月10日～13日	平成6年度第1回児童厚生員等実技指導講習会 ※第2回=10月22日～24日、第3回=1月18日～20日
5月22日	【子どもの城】友の会のファミリーハイキング(埼玉県・芦ヶ久保)
6月1日、6日	保育クラブ・幼児グループを対象に「動物とのふれあい」プログラム。協力=(社)日本動物病院福祉協会
6月11日～26日	第7回「遊びと造形発想展～見つける・見たてる・見なおす」(ギャラリー)
6月25日	特別講座・子どもの心を考える(第1回)「子どもの心が見える親とは」 (第2回=7月2日、第3回=7月9日)
7月20日～8月31日	夏休み特別期間<あそびのたからじま>
7月20日～8月31日	第11回渋谷スタンプラリー(NHK展示プラザが改装中のため、5館で実施)
7月29日、31日	〈動く子どもの城〉第1弾の音楽プログラムを岩手県で実施
8月6日・7日	「子ども・家族・社会」をテーマに第8回【子どもの城】保育セミナー
8月6日・7日	イギリスの人形アニメ作家のアリソン・ポークさんが「すばらしいアニメーションの世界」でワークショップを指導
8月10日～14日	第9回【子どもの城】キリンファミリー劇場 「ぼくのイソップものがたり」(青山円形劇場)
8月13日～14日	第9回「青山バレエフェスティバル～バレエ・ア・ラ・カルト」(青山劇場)
8月13日～17日	国際家族年記念「人形劇見本市」(青山円形劇場ほか)
8月20日・21日	【子どもの城】おまつり劇場「こども風土記」(青山円形劇場)

月 日	事 項
9月10日～10月10日	国際家族年記念 田沼武能の写真による「世界の子どもと家族」写真展（ギャラリー）
10月5日～11月4日	第8回青山演劇フェスティバル「女子高校生1994」（青山円形劇場）
10月8日～10日	〔子どもの城〕友の会のファミリーキャンプ（南足柄市・どんぐりの家）
10月9日・10日	10月から毎月第2日曜日に「子どもの城映画劇場」を定期的に開催
10月25日	中華人民共和国黄華副首相夫人の何理良さんが〔子どもの城〕を視察
10月29日～11月27日	国際家族年記念 全国児童館造形フェスティバル「わたしたちの家族」を表現した共同制作展（ギャラリー）
10月29日～11月27日	第9回造形スタジオ展
10月30日	〔子どもの城〕の利用者1,000万人を突破
11月1日	〔子どもの城〕開館9周年記念セレモニー
11月1日～3日	開館記念特別期間 国際家族年記念 〔子どもの城〕親子体験ワークショップ「おやっ！と発見 子と発見」 ※11月1日～3日は18歳未満の入館料無料
11月11日～13日	おりがみカーニバル（日本折紙協会と共催）
11月18日	チリ共和国マルタ・ララエチェア・デ・フレイ大統領夫人が〔子どもの城〕を視察
12月3日～1月8日	国際家族年記念「家族・はがきアート展」（公募）（ギャラリー）
12月17日・18日	ファミリーアイベント「ミセスサンタズクリスマス」（青山円形劇場）
12月21日～26日	「ア・ラ・カルト」～役者と音楽家のいるレストラン（青山円形劇場）
12月25～1月9日	冬休み特別期間＜あそびの夢中人＞
1月3日～8日	子どもの城・キリン・ファミリーオペレッタ「トンガリぼうしの魔法つかい～サボテン牧場のけつとう」（青山円形劇場）
1月11日～19日	五線譜のなかの動物たちスペシャル「プラテーロ」（青山円形劇場）
2月21日	平成7年度の〔子どもの城〕講座・クラブ募集開始
3月25日～4月5日	春休み特別期間＜あそび いっぱい 春いっぱい＞
3月25日～27日	ぼくらのサウンド'95（青山円形劇場）

II 各部の活動(1)

1	体育事業部	27
2	プレイ事業部	45
3	造形事業部	59
4	音楽事業部	73
5	A V事業部	87
6	保育研究開発部	101
7	小児保健部	115
8	企画部	123
9	劇場事業本部	131

1 体育事業部

体
育

(1) 6年度活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
プール 一般開放	水曜日～金曜日 16:30～17:30 土曜日 13:30～16:00 日曜日・祝日 10:30～17:30	各曜日にそれぞれの時間帯で一般開放。18歳以上300円、小1～17歳200円、幼児100円。 レンタル(タオル・水着)各200円。 幼児は保護者が1対1について利用。
体育室 一般開放 レクリエーション ゲーム ニューススポーツ ゲーム 卓球 ミニサッカー ユニホック	各月 第1日曜日と 前日の土曜日 第2日曜日と 前日の土曜日 第3日曜日と 前日の土曜日 第4日曜日と 前日の土曜日 第5日曜日と 前日の土曜日	週ごとに内容を変えて行っている。卓球の週は終日卓球のみ(混み合う場合は各グループ20分交代で利用)。他の種目は日曜日の①14:00～②16:00～の2回、土曜日の①14:00～の1回、練習とゲームを行い、それ以外の時間帯はフライングディスクの的当てとフリースローイングを行っている。 利用時間は土曜日が13:30～16:00、日曜日が10:00～17:00。
体力測定	土曜日 日曜日・祝日	健康開発室で7種目9項目の体力測定を行っている。4歳児くらいから大人までだれでも利用でき、男女別に全国平均値と比べることができる。利用料1人100円。土曜日が①14:00 ②15:00の2回、日曜日が①11:00 ②13:00 ③14:00 ④15:00 ⑤16:00の5回。
グループ活動	火・木曜日	午前中を使ってまとまった団体(グループ)を指導する。体育室を使っていろいろなプログラムを展開している。時間は10:00～12:00。
体育の日Special ウォールサッカー	10.8～10	独自のルールによる、体育室の壁を有効に利用したサッカーで大会を開催。PK合戦(ゴール前にブロックを置いた)も開催。
小児肥満のための 指導者講習会	10.28, 3.10	小児保健部との協力事業。体育では運動指導や測定についてのレクチャーおよび実践を行った。時間は10:00～17:00。
第7回水泳記録会	3.5	体育の講座受講者、D.H.C.のメンバーがエントリー(1人2種目500円)を行い参加。年齢別・男女別で記録に挑戦。10:00～15:00に実施。195人参加。幼児4種目、小学生・大人9種目、シニア・指導員によるデモンストレーション。
'95子どもの城 体操発表会	3.13	新体操のクラブ、幼児体操受講生による演技発表会。新体操専用のマットを敷き、観覧用の席を設置。受講者の家族のほか、「子どもの城」来館者にも開放している。時間は10:30～12:00、12:30～14:00。92人参加。国士館大学・日本女子体育大学の新体操部によるデモンストレーション。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
〈児童福祉週間〉 めざせ! ハッスルチャンピオン	4.29~5.5	体育室でいろいろな軽スポーツに参加して、最高記録に挑戦する。クロックバスケット、ビーチサンダル飛ばし、三輪車スラローム、バトミントンのシャトルコック投げ、のだれでもできるゲーム。全員参加のチャレンジゲームも実施。
〈夏休み〉 ハッスルスポーツ フェア '94		
ウォールサッカー	7.21~31	独自のルールによる、体育室の壁を有効に利用したボールデッドの少ないサッカー。30・31日はゲーム大会を開催。
ラージボール卓球	8.1~5	通常のボールより一回り大きく、柔らかいラージボールでの卓球。ボールの抵抗や台で跳ねてからゆっくりになる特性があり、だれでも簡単にラリーができる卓球。
第6回児童館 こども卓球大会	8.6	東京都児童館連絡協議会との合同企画。小学生32チーム、中学生16チーム参加。(財)日本卓球協会の協力を得て、練習会やデモンストレーションを行う。
国際家族年記念 親子ラージボール 卓球大会	8.7	国際家族年を記念し、ラージボールを使用した大会。親子5組(当日参加1組)の参加。総当たりのリーグ戦をダブルスで行う。
ビーチボール バレー	8.9~13	ビーチボールを使ったバレーボール。ボールがゆっくり落ちるのでラリーが容易。13日はゲーム大会を開催。
トランポリン	8.14・15	楽しく空中遊泳で空中感覚の向上に。見た目には楽そうだが、ハードな運動である。
フライング ディスク	8.16~20	ボールとは違った浮遊感覚のあるフライングディスクを楽しむプログラム。20日にトッププレイヤーによるデモンストレーションを開催。
母と子の ふれあい広場	8.21	元NHK体操のお兄さんの瀬戸口さんと遊ぶ、歌と体操の幼児向けプログラム。
つなひき	8.23~27	全員参加での綱引き。子ども対子ども、子ども対大人の対戦を行う。
ユニホック	8.28・29	室内で行う簡単なホッケーのゲーム。練習と試合を各時間に。
ラクロス	8.30・31	網の付いたスティックで、ボールを取ったり、投げたりしてゴールを目指す。
〈〃〉 ちびっこプール	7.21~8.31	夏休み特別期間中、5階屋上に仮設プールを設置、一般に開放した。利用料200円。レンタル(タオル・水着)各200円。
〈〃〉 こども一日ドック	7.28~29	小児保健部との協力事業。体力測定など運動面の指導を担当。
〈開館記念〉 ハッスルスポーツフェア	10.29・30, 11.3	ラージボール卓球、パタパタパター、ウォールサッカーの練習やゲーム大会を実施。
〈〃〉 家族でチャレンジ 体力測定	10.29・30, 11.3	健康開発室で7種目9項目の体力測定。年齢別・男女別に全国平均値と比較することができる。親子でチャレンジしてもらった。利用料は1人100円。
〈冬休み〉 ユニホック	12.23~28	室内で行う簡単なホッケーのゲーム。練習と試合を各時間に。

名 称	期 間	備 考
「冬休み」 スポーツ人生ゲーム ～金メダルへの道～	1.3~8	陸上、水泳、球技からコースを選び、体を鍛えていきながら金メダルを目指すところ。
「春休み」 ユニホック	3.25~31	室内で行う簡単なホッケーのゲーム。練習と試合を各時間に。
「 〃 」 こども一日ドック	3.30	小児保健部との協力事業。
「 〃 」 ドッジボール	4.1~5	“普通のドッジボール”的ほかに、独自ルールの“中当てドッジボール”“的当てドッジボール”の3種類を実施。
体力測定	特別期間中	健康開発室で7種目9項目の体力測定。男女別に全国平均値と比べることができる。
プール 一般利用	〃	10:30~12:00, 13:30~17:30に一般開放(プログラムにより変更あり)。

3) その他（野外活動など）

名 称	期 間	備 考
新体操 選抜合宿	6.18・19	小・中学生10人参加。新潟県越後中里丸善旅館。第6回東京ジュニア新体操選手権大会参加のため、選抜メンバーによる強化合宿。
新体操 合宿	8.3~ 5	小・中学生22人参加。福島県ルネサンス棚倉。3泊4日の合宿による集団生活や交流を深めた新体操の集中練習。
スポーツキャンプ	7.26~29	小・中学生80人参加。新潟県グリーンピア津南。アウトドアでさまざまなスポーツや登山に挑戦した、スポーツ体験キャンプ。
スキースクール I	12.25~28	小2~中学生80人参加。新潟県妙高高原池の平三つ山。ski技術のレベルアップを目指したキャンプ。
〃 II	3.26~29	小学1~3年生40人参加。新潟県グリーンピア津南。コテージに宿泊し、スキーや雪遊びで雪と親しむ低学年キャンプ。

4) 講座・クラブ

〈講座〉

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
幼児・母親水泳A	(組) 幼児・母親 (30)	(組) ① 26 ② 21 ③ 19	水曜日 10:00~11:00	1・2歳児と母親の楽しい水泳教室。プールの中でともに泳ぎ水慣れと運動刺激が得られるようアレンジ。受講料=1期・2期27,000円、3期19,000円。
〃 B	〃	① 19 ② 19 ③ 10	土曜日 〃	

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
幼児水泳	A (人) 3・4歳児 (50)	(人) ① 12 ② 18 ③ 13	火曜日 13:30~14:30	単に泳法の修得だけでなく、陸上と同じように水中でも楽しく活動できるように指導。プールでの活動を通して、水に慣れ、バランスよく水に浮く感覚など、水泳に必要な運動の基礎を身につける。全体にゆったりとした雰囲気の中で講座が行われている。
	B "	① 44 ② 46 ③ 44	水曜日 "	6段階にレベル分けをして、次のステップへの目標としている。 受講料=1期・2期21,000円、3期15,000円。
	C "	① 11 ② 10 ③ 16	木曜日 "	
幼児水泳	D 4・5歳児 (60)	① 56 ② 59 ③ 62	火曜日 14:30~15:30	水慣れから発展してより高い質と量の練習を行う。個人差に応じた班分けで上級者はクロール、バックにも挑戦する。
	E "	① 32 ② 42 ③ 44	木曜日 "	6段階にレベル分けをして、次のステップへの目標としている。 受講料=1期・2期21,000円、3期15,000円。
	F "	① 34 ② 35 ③ 29	金曜日 "	
幼児体育	A 3・4歳児 (40)	① 34 ② 39 ③ 35	火曜日 14:30~15:30	たくさんの友だちと一緒に思い切り体を動かし、運動遊び、リズム遊びなど楽しく動きながら健康な体の基礎をつくる。
	B "	① 14 ② 21 ③ 18	水曜日 "	
	C 4・5歳児 (40)	① 34 ② 38 ③ 36	木曜日 "	年齢が上がるので幼児体育A・Bを土台にした、より難度の高い内容で運動を行う。 受講料=1期・2期19,000円、3期14,000円。
小学生水泳	A 小学生 (60)	① 75 ② 73 ③ 62	水曜日 14:30~15:30	生涯楽しめるスポーツ「水泳」を基礎から学び、4泳法をマスター。シニア・スイミングへのステップアップを目標。
	B "	① 66 ② 61 ③ 61	火曜日 15:30~16:30	各学期の後半に進級テストを実施(10級~1級)。次への目標としている。受講料=1期・2期21,000円、3期15,000円。
	C "	① 69 ② 73 ③ 65	水曜日 "	10級 顔付け もぐり 息こらえ ポビング 水なれ 9級 伏し浮き 背浮き 板キック ボディーイメージ1 8級 伏し浮きキック 背浮きキック ボディーイメージ2 7級 ノーブレクロール バックキック ボディーイメージ3 6級 クロール・バック(12.5) ブレスト・バタフライ(キック)
	D "	① 61 ② 61 ③ 51	金曜日 "	5級 クロール・バック(25) ブレスト・バタフライ(リズム) 4級 クロール・バック(50) ブレスト・バタフライ(呼吸) 3級 ブレスト(50) バタフライ(25) 個人メドレー(タイム)
	E (40)	① 40 ② 37 ③ 30	木曜日 "	
	F 小2以上 (40)	① 38 ② 34 ③ 25	火曜日 16:30~17:30	2級 個人メドレー(100) (タイム) 1級 個人メドレー(200) (タイム)
	A 小・中学生 (30)	① 29 ② 27 ③ 23	火曜日 16:30~18:00	小学生水泳からの移行の場であり「シニアスイミングB・C」へのステップとしての役割もあるため、基礎体力の向上と4泳法の完成を中心に行った。
	B "	① 25 ② 24 ③ 22	水曜日 "	「シニアスイミングB・C」は、個別のメニューを組んでより速く泳ぐことにチャレンジする上級者向けのコース。泳力差によるクラス編成。バタフライまで進んで個人メドレーに挑戦。水球で球技も経験する。指導者の推薦が必要。

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
シニアスイミング C	(人) 小・中学生 (30)	(人) ① 9 ② 8 ③ 7	木曜日 16:30~18:00	
シニアスイミング フレッシュ	小3～ 中学生 (35)	① 36 ② 31 ③ 32	金曜日〃	小学3年生以上で泳ぎが不得意な人のクラス。クロールで25m以上泳ぐことを第一目標に練習を進める。90分の練習とあいまって上達の度合いが大きかった。 受講料=1期・2期21,000円、3期15,000円。
小学生体育	小学生 (30)	① 13 ② 12 ③ 13	木曜日 15:30~16:30	器械体操、球技を中心に多種多様な運動経験をし苦手な種目を克服する。受講料=1期・2期17,000円、3期12,000円。
小学生総合体育	小1～3 (40)	① 32 ② 31 ③ 23	火・木曜日 15:30~16:30	週2回、プールと体育室でバランスのとれた総合的な運動経験から楽しさを教え、苦しさを克服する気持ちを育てる。受講料=1期・2期25,000円、3期18,000円。
ジュニア新体操	小1～3 の女子 (40)	① 22 ② 23 ③ 23	水・金曜日 15:30~17:00	跳ねたり、跳んだり、回ったり、リボンやボールを使って楽しく身体を動かす。基礎的な運動も含めた新体操の初步を指導。受講料=1期・2期26,000円、3期20,000円。
シニア新体操	小3～中学生の女子 (35)	① 15 ② 15 ③ 13	水・金曜日 16:30~18:00	ジュニアから一步進んで新体操独特の美しい表現ができるような練習。創作活動や発表会も開催。受講料=1期・2期26,000円、3期20,000円。
手足の 不自由な子の水泳	小・中学生	① 14 ② 15 ③ 14	土曜日 17:00~18:00	身体に障害があり、水泳の機会に恵まれない小・中学生を対象にし、スタッフ・ボランティアの個人指導を中心とした活動。受講料=1期・2期16,000円、3期11,000円。
レディース スイミング A	女性 (70)	① 55 ② 56 ③ 52	火曜日 10:00~11:00	生活習慣の中に定期的な運動を取り入れることが健康づくりの第一歩。各クラスとも4班編成で、各自のレベルに合った班を選択し、クロールの練習から4泳法の修得を目指して健康づくりをしている。受講料=1期・2期21,000円、3期15,000円。
" B	"	① 55 ② 57 ③ 51	木曜日〃	
" C	"	① 48 ② 43 ③ 38	土曜日 11:00~12:00	
レディース リズム &ストレッチ	女性 (30)	① 25 ② 26 ③ 23	水曜日 10:00~11:00	ゆったりと気持ちのよいストレッチと軽快なリズム運動。楽しく動きながら明日への活力を生みだす。受講料=1期・2期21,000円、3期15,000円。
健康スポーツ教室 (太りすぎ クラス)	(組) 太りすぎの 小学生とそ の親 (25)	(組) ① 25 ② 25 ③ 25	土曜日 16:00~17:00	小児保健部との協力事業。医師によるチェック、栄養士によるチェック、体育指導者による体力チェック、この3者が協力してトータルな活動を行う。受講料=1期・2期22,000円、3期19,000円。
マタニティ・ スイミング	(人) 妊娠16週以降の妊婦 (35)	(人) 延べ 196	火曜日 11:00~12:00 木曜日〃	小児保健部との協力事業。水泳プログラムを通して、妊娠中を楽しく過ごすためのクラス。医師が活動前後にチェックを行い、活動中も不測の事態に備えて常駐する。お産や子育てに関するレクチャーや栄養・心理の相談も受けられる。受講料12,000円(月7回)。

講座回数=1学期14回 2学期14回 3学期10回 (総合体育・新体操は週2回)

<クラブ>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
ダイナミック・ヘルス・クラブ (D. H. C)	成人 メンバー ビジター 法 人 そ の 他 招 待 計	(人) 年間延 11,509 1,022 1,294 280 116 14,221	火～土曜日 12:00～13:30 18:00～21:00 日曜日・祝日 18:00～20:00	18歳以上の大人的ためのクラブ。プール、体育室、ジムほかを利用し体力作り、健康管理のために最適な環境で楽しく活動。個人会員は、入会金10,000円、年会費70,000円、4か月26,000円、利用料(利用の都度)300円。ビジター2,000円。本年度から、平日18:00 オープン。月会費7,000円、パス券(月3,000円、4か月11,000円)を新たに設けた。

<講習会>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
幼児・母親体育	(組) 2・3歳児 と母親 (30)	(組) ① 29 ② 29 ③ 26	水曜日 11:00～12:00	親子が体育室でリズムに合わせて跳ね、跳び、走るうちに運動神経を養い、楽しさを身につける。受講料19,000円(10回)。
母と子の すくすくランド	お座りので きる子～ (20)	① 24 ② 13 ③ 13	金曜日 10:00～11:00	はいはいから歩行へと成長していく時期の赤ちゃんを対象に、楽しい体操や親子での遊び、お母さんのシェーブアップも。受講料23,000円(10回)。
母と子の パチャパチャ スイム	1・2歳児 と母親 (30)	① 22 ② 31 ③ 14	金曜日 10:00～11:00	音楽に合わせて動物になったり、魚になったり、水慣れとともに母子のコミュニケーションを深める。受講料25,000円(10回)。
水泳集中講習会	(人) 18歳以上の 男女 (月20)	(人) 延べ 209	火・金曜日 18:00～19:00 (各月7回)	18歳以上の初心者やレベルアップを考えている人の集中水泳講習。月ごとに募集を行い、各月の講習種目に合わせて指導を行う。受講料10,000円(月7回)。

<短期講習会>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
春休みこども 集中水泳講習会A 〃 B	(人) 小学生(50) 幼 児(40)	(人) 50 40	4.1～5 9:30～10:30 〃 10:30～11:30	5日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。受講料7,000円。
夏休みこども 集中水泳講習会A 〃 B 〃 C 〃 D	小学生(50) 幼 児(40) 小学生(50) 幼 児(40)	50 40 50 40	7.22～24, 26・27 9:30～10:30 〃 10:30～11:30 8.23～27 9:30～10:30 〃 10:30～11:30	5日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。受講料7,000円。
夏休み特別 集中水泳講習会	水泳講座生 7級～(40)	26	8.2～4 9:30～11:30	クロールが泳げる講座生以上を対象とした、新たな泳力アップ特別プログラム。受講料7,000円。
ガンバ！'94	小学生(30)	30	8.23～27 9:30～10:30	器械体操や球技などの基本動作を習得する、体操の苦手な子の体操教室。受講料6,000円。

(2) 体育事業部の活動

体育事業部では一般利用、講座、グループ活動、ダイナミック・ヘルス・クラブ（D.H.C.）を中心に野外活動や他事業部との協力事業を含め、多岐にわたる活動を行っている。本年度も昨年までの活動を下地に、内容の変更も含め強化を行った。

一般利用は前年度の種目を引き継ぎ、多くの子どもたちが楽しめるように活動を行った。講座では指導体制の整備を行い、指導の充実を図った。グループ活動は活動件数も増加し、活気ある活動が行えた。

一般成人を対象とするD.H.C.では受付業務を体育事業部単独で開始し、新たな料金体制、パス券の導入を行った。また、プログラムの充実、新規開発を行い、メンバーのニーズの多様化への対応や新たなメンバーの確保に当たった。

1) 一般利用（平常期間）

定期的な利用ができる講座受講者や近隣に住む人々はもちろんのこと、年に数回程度の来館者に対しても、運動の楽しさを伝え、感激を味わってもらえるように工夫している。また、親子関係の大切さが叫ばれている昨今、親子が運動を介して触れ合いを持つ場を提供することも重要なポイントだと考える。これらの考え方を中心に、一般利用のためのいろいろなプログラムを企画し、実施した。

平常期間の一般利用は、昨年同様、プール、体育室、健康開発室を利用した土・日曜日、祝日の一般開放を中心に行なった（平日の一部分にも、プールを一般開放）。

体育室のプログラムは前年度の種目を継続し、子どもたちの定着を図り、より楽しいプログラムになるよう指導を行なった。特に幼児に対する指導やゲームの開発（ルールの変更）、幼児と小学生混在の活動での安全面について、スタッフやボランティアとで注意、対応をしていった。

また前年度からボランティアの参加が定期的になり、活動も充実してきた。

ゲームの中で、ボランティアが両チームに入り子どもたちの手助けや指揮を執りながら試合を行い、ゲームの流れをコーディネートしながら積極的に取り組んでくれた。

体育室の一般利用プログラムに定期的に参加する子が増え、活動の中で新たに仲間を作ったり、戦略をほかの子どもたちに教えたりと子どもたちの交流の輪も広がり、積極的にゲームを盛り上げている。ただ慣れという部分から、かってな行動をすることもあり、ほかの子との歩調を乱したりする場面も出ることがあるので、注意しながら、より楽しい時間を作っていくたい。

2) 一般利用（特別期間）

(ア) 児童福祉週間（ゴールデンウイーク）

児童福祉週間には例年どおりプールの一般開放、体力測定を行った。体育室では「めざせ！ハッスルチャンピオン」と銘打った、いろいろな種目の最高記録（チャンピオン）を目指す催しを開催した。種目はだれでも挑戦できるように考えた軽スポーツである。

「クロックバスケット」は数か所あるポイントから、バスケットゴールにシュートする。各ポイントには得点が付いていて、シュートが入るとその得点を加算し合計点を競うものである。低学年用と高学年用と2ゴール用意したが、低学年（幼児）はかなり難しかったようである。

「シャトルコック投げ」はバトミントンの羽を思いっ切り投げてその距離を競うもので、バトミントンでは簡単に飛んでいく羽だが、投げてみると、軽いのと開いた羽で思ったほど飛ばず、みんな苦労をしながら投げていた。

「三輪車スラローム」では、自分でタイム計測マシーンのスイッチを押してスタート、三輪車に乗ってポールの間をジグザグに回ってゴール、自分でタイム計測マシーンのスイッチを止めてそこまでのタイムを競う。これは高学年や大人は足がつかてしまい、タイムがあまり良くなかったが、低学年や幼児は巧みに三輪車を操作し好タイムをマークしていた。

最後に、靴飛ばしならぬビーチサンダル飛ばし、名付けて「フライングビーサン」。片足でビーチサンダルを履いて靴飛ばしの要領で飛ばす。これもビーチサンダルが軽いのと不安定なので、なかなか距離が出ずに四苦八苦していたが、要領をつかみ10数m飛ばしていた子もいた。

これらの種目に挑戦し（好きな種目は何度でも挑戦してよい）最高記録が出ると“ハッスルチャンピオン”として認定証を授与し記録ボードに掲載した。また、何度も挑戦している子には、どれだけがんばったかを独自の方程式（ハッスル方程式）にあてはめ、子どもたちのやる気をうながした。

また、午後2時と4時の2回、子どもたちを集めて団体戦を行った。1つの

種目を1度ずつ挑戦しそのなかでいちばん成績の良かった子に“ハッスルチャンピオン”的称号を与えた。

(イ) 夏休み特別期間

今年は「ハッスルスポーツフェア'94」と銘打ち、長期のプログラムを4つ、短期のプログラムを5つ行った。長期のプログラムは、期間の最終日に子どもたちを集めゲーム大会を開催した。

「ウォールサッカー」——【こどもの城】の体育室の特性を生かした、独自のルールで行うサッカーである。体育室全面を約1mの高さの壁で囲い、壁を使った壁バスができ、またゴールの後方も使用できるポールデッドの少ないスピーディーなサッカーである。通常は4対4もしくは5対5で行い、攻守の切り替えの早いスリリングな展開であった。このウォールサッカーの特色の1つに“逆オフサイド”がある。これは攻撃しているチームはセンターイン近くの逆オフサイドラインまで攻め上がっていないと、ボールがゴールに入っても得点にならないルールで、常に全員攻撃をしなくてはならず、運動量も増え大変だが、高学年は上手にこのルールを使い攻撃をしていた。

最後の2日間は、チームを募集してゲーム大会、W杯（ウォールカップ）を行った。チームで参加、個人で参加などさまざまであった。チーム対抗のトーナメントの大会と、その合間に行ったPK合戦で盛り上がった。PK合戦はゴールの前にブロックを置き、それをキーパーに見立てての合戦である。1回戦はブロックを1つ、2回戦はブロックを3つと数を増やしていく、最後までゴールし続けた子どもの優勝である。これは、低学年、高学年の差があまり出ず、1年生が優勝したりと、全員で楽しめた大会となった。

「ラージボール卓球」は受付でラケットとボール、使用する台の札を渡し各自で楽しんでもらった。混雑時は20分交代で、できるだけ大勢が活動できるようにした。

例年行っている、児童館親睦「こども卓球大会」も6回目を数えた。今回は(財)日本卓球協会の協力を受け、デモンストレーションや練習会を開催。子どもたちもトップ選手のラリーを見たり、元ダブルス世界チャンピオン、橋本佐枝子氏と練習会で打ち合いをしたりと、目を輝かせていた。また今回は国際家族年を記念して「国際家族年記念親子ラージボール卓球大会」を開催。親子も



〔こどもの城〕独自のルールで行う

「ウォールサッカー」

しくは大人と子どものペアでダブルスのゲームを行った。参加者が少なく残念だったが、親子で協力してゲームをしている姿がほほえましかった。

「ビーチボールバレー」は、その名のとおり、ビーチボールを使ったバレーボールである。普通のボールと違いゆっくりと落下するので、だれでも簡単にできると考えていたが、低学年の子などはボールを落とさずに突くことの経験がないのか、難しいようで苦労していた。逆に高学年の子は回転をつけて変化球にしたり、スパイクを打ったりと楽しんでいた。この種目も最終日に、当日に集まった子どもたちでチームを作り、トーナメント方式のゲーム大会を開催。初めて出会った子ども同士で協力しながら優勝を目指していた。

「フライングディスク」はフリスビーとしておなじみであるが、数種のゲームがあり、中からアルティメットというゲームを、午前中は指導者向けの講習会的に、午後は子どもたちを集めて練習とゲーム形式のものとした。アルティメットはパスゲームで、ディスクを持ったら動けなくなり、味方にパスをしてゴールエリアを目指す。最終的にはゴールエリア内でディスクを取れば得点である。ディスクの特性である、放物線を描かず、直線的に飛ぶことで独特な感覚が必要であり、知らず知らずのうちに追いかけて走ったりと、かなりの運動量が必要になる。これを安全に普及するように講習会、最終日に社会人トップチームによるデモンストレーションを行った。

そのほかにも短期で、人気のある「トランポリン」「母と子のふれあい広場」「ユニホック」「つなひき」「ラクロス」を後半に集め、夏休みを最後まで盛り上げていった。

プールの一般利用では、水遊び中心の幼児や低学年の子どもたちは5階屋上、しっかりと泳ぎたい高学年以上から大人は地下2階へと設定どおりに自然な流れができ、お互いに使いやすくなっていた。ちびっこプールは猛暑で利用者数が増え、プールの中で暑い夏を乗り越えていった。小さな子どもたちが安全にまた自由に水に親しみ、遊びを見つけだすことができる夏の遊び場の1つとしてこれからも施設の充実を図っていきたい。

(ウ) 体育の日

「ウォールサッカースペシャル」として午前中は練習と練習試合で、ルールなどの確認をして、午後にゲーム大会・PK合戦を行った。毎回参加の常連チームもあり活気ある大会になった。平常期間の日曜日などでもゲームをしてるので、ルールを把握している子が多く、スムーズに進行できた。

(エ) 開館記念特別期間

国際家族年を記念した「おやっ！と発見 子と発見」の中で、“親子でスポーツをやってみよう！”ということを基本コンセプトに、日替わりで3種目に挑戦する「ハッスルスポーツフェア」を開催した。

親子で一緒に汗をかく「ラージボール卓球」、親を中心に戸もたちが教えてもらいながら行う「パタパタパター」、戸もたちがやっていることを親が応援する「ウォールサッカー」とそれそれにねらいを持って、活動終了後に親子でコミュニケーションがとれるように考えて行った。

パタパタパターは人工芝を9ホール分いろいろな形に切り、体育室にレイアウトし、ホールの途中にブロックを配置し、難易度の変化をつけた。カップやパターはグラウンドゴルフ用のものを使用し、スコアカードに打数を記入していく。戸もたちは慣れない手付きでパターを扱っていたが、親(特に父親)がパターと一緒に振ったりして、ほのぼのとした雰囲気であった。

3種目ともそれぞれのねらいにある程度添うことができ、親子の触れ合いに一役買えたのではないかと考える。

(オ) 冬休み特別期間

冬休みは大きく、年末と年始からの2つのプログラムで実施した。年末は、室内ホッケーの「ユニホック」で、プラスチック製のステックでボールをコントロールしゴールを目指すゲームである。危険防止のため、ゴルフのように振り上げないよう(ひざの上まで振り上げたらファール)ルールが設定されている。ルールも簡単なので幼児から、初めての人でもすぐにできるようになる。

年始から実施した「スポーツ人生ゲーム～金メダルへの道～」では、さいころを振って進んでいきながら、トレーニングを積み全国大会に出場、金メダルに挑戦するスポーツすごろくである。受付で水泳、陸上、球技のコースを選択し、それぞれスタートしていく。基礎体力トレーニングやコースごとにある特別なトレーニング、時にはコース変更など、人生の浮き沈みのある課題を乗り越えて行くもので、戸もたちは、指示に従ってハーハー言いながらさいころを振り、真剣に取り組んでいた。最後には、メダルチャレンジゲームで金・銀・銅を決める。これは横にしたはしごの上で大玉を転がし止まったところのメダルがもらえるもの。一生懸命やって、最後に良い結果が出ない子もたくさんいたが、何度も挑戦する子もいて、楽しんでいた。参加者数が少なかったが、参加者はみな喜んで帰っていった。

(カ) 春休み特別期間

「ユニホック」を一般利用の時間帯に行った。2時と4時は練習とゲームを戸もたちを集めて実



スポーツすごろく「スポーツ人生ゲーム」

施。幼児から中学生までチームを分けてゲームをした。初めて経験する子どもたちもすぐに慣れて、上手にスティックでボールを扱い、白熱した試合をしていた。また、後半は「ドッジボール」を実施した。

3) 講座

体育事業部の中心となる活動の講座は、各曜日・各時間ごとに担当者を決め、体育事業部の基本概念のもと、水泳のクラス・体操のクラスとそれぞれの特徴を生かした指導を、幼児・小学生・レディースクラスと展開している。

(ア) 幼児・母親水泳と幼児のプログラム

「幼児・母親水泳」は学期によって受講者の増減が大きい。幼児と母親と一緒に参加する講座なので、子どもが母親を信頼していて、慣れないプールを嫌がらなかったり、怖くても母親と一緒に水の中に潜ることができたりするなど、母子関係の強さを感じる場面が多い。子どもたちも水慣れするのが早く、元気よく参加していた。

「幼児水泳」の3・4歳児クラスは学期始めに泣く子どもも多いが、親が粘り強く続けて講座に連れて来ると、ほとんどの子どもは水中での活動を楽しむようになってくる。幼児のクラスは子どものがんばりもさることながら、親の理解と協力も大きな要素になっている。

「幼児体育」は遊びから運動への移行を中心に行なったが、特に4・5歳児のクラスでは、リズム体操や球技、器械体操などを取り入れ、バランスのとれた運動、身体作りを目標とした。基礎的な身体の使い方に向上が見られた。

(イ) 小学生のプログラム

「小学生水泳」は、プログラム内容をより充実させるため、指導方法の見直しを前年度から図ってきたものが、指導のなかにもある程度定着してきたようである。特にクロール中心の指導から、早いうちからの4泳法の導入により、偏りの少ない上達が見えてきたようである。今後も更に研究を重ね充実した指導を目指したい。

また、第2土曜日が休日となったことにより、学校の授業体系の変更からか、木曜日の受講生が減少しており、残念なことだが「シニアスイミングC」を本年度限りで閉講することになった。

「小学生体育」などの体育講座は指導種目の研究が進み、指導方法などにも工夫がみられ、受講生個人それぞれに伸びが見られた。特に球技や器械体操の上達にはめざましいものがあった。

「小学生総合体育」はプールとフロア（体育室）の双方の活動を生かし、身体活動を総合的に向上させるねらいである。体操では体力の向上を中心に基礎的な技術の習得を、水泳では泳力のレベル別に分かれて個人のレベルアップを

目指した。数年続けて参加している子どもたちは体力・技術とともに進歩している。

「ジュニア新体操」では、巧ち性、柔軟性、瞬発力、持久力などを養い、新体操特有の美しく動くための意識を育てながら、練習を通して身体を動かすことの楽しさを知らせる。また、自主性を持って参加するよう促す。「シニア新体操」ではジュニアから一步進み、自分で動きを作り出す“創作力”やイメージを正しく表現する“表現力”，“忍耐力”や“自主性”，グループでの動きをまとめる“協調性”などを高い次元で身につけることが目標。ジュニアクラスは講座の人数が増え、活気が出て良い雰囲気になってきたので、シニアクラスにスムーズに移行できるよう基礎の練習に力を入れている。

「手足の不自由な子の水泳」ではボランティア・リーダーと一緒に、自分に合った泳ぎを見つけることから始めている。浮き身・背浮きから、独りで立つことができるようになり、泳ぐ練習に入っていく子どもや、長期で続けて、かなりの泳力を持ってきている子が増えてきた。

(ウ) 水泳記録会と体操発表会

講座・クラブ受講生を対象に行っている「水泳記録会」と「体操発表会」は、毎年趣向を変えながら3学期に年度のまとめとして行っている。今年もそれぞれに成果が現れた。

「水泳記録会」は昨年まで、小学生の水泳講座受講生と、一部の幼児で開催していたが、本年度は幼児、レディース、D.H.C.のメンバーからも参加の募集を呼びかけ，“プール講座受講生の交流ができる、開かれた記録会”を目指した。大人の参加が初めてであったため、参加者は多くなかったが、レディーススイミングとD.H.C.の会員との交流もあり、今後に向けての飛躍の大会になった。今回はシニアスイミングのメンバーと指導員による、デモンストレーション、レクリエーション大会と趣向を凝らした。今後も、大人の積極的な参加を呼びかけ、充実した大会にしていきたい。

「体操発表会」は、魅せるスポーツ新体操を体験する絶好の機会である。子どもたち1人ひとりが出演することで本来の良さを味わうことができる。今年も幼児体育講座受講生による体操を組み込み、講座の中で行っているリズム体操や、器械体操の発表を行った。当日は観客数も多



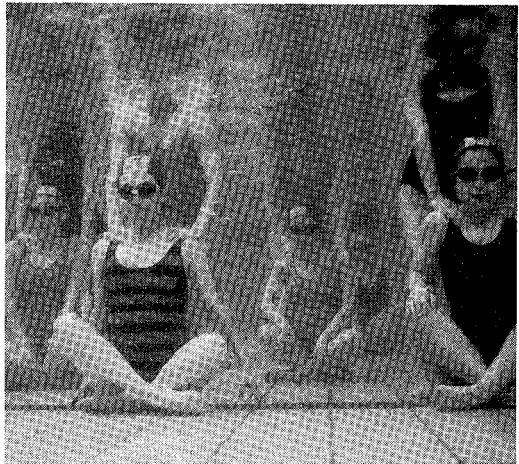
活動のまとめとして「体操発表会」

く、日本女子体育大学新体操部の学生2人の演技や国士館大学の男子新体操部の演技があり、活気のある中で進んだ。何よりも父兄の協力の下で行えた幼児たちの体操は、なんともほほえましく発表会を和ませてくれた。幼児の体育室での講座紹介とともにジュニア新体操への橋渡しの意味でも有意義であった。

(エ) 成人のプログラム

現在成人向きで年間を通じた講座形式をとっているプログラムは、健康づくりとシェーブアップを中心としたレディース・エクササイズ・コースのみで、「レディーススイミング」3コースと「レディースリズム&ストレッチ」1コースの2種類、4コースから2つまで取れるようになっている。このほかに、妊娠16週以降の妊婦を対象に月単位で実施している「マタニティ・スイミング」(小児保健部との協力事業)がある。

「レディーススイミング」は各クラスとも少し減少しているが、長年続けている人と新規の人の交流もあり、和気あいあいと活動した。「マタニティ・スイミング」は、夏期は人数が多く、活気のある活動を行っている。冬期に寒さのためか、参加人数が減る傾向にあるが、参加している人は積極的で、とても良い雰囲気の中で活動が行われた。



小児保健部と協力して「マタニティ・スイミング」

4) 講習会

「幼児・母親体育」「母と子のすくすくランド」「母と子のパチャパチャスイム」は10回で完結、「こども集中水泳」などの講習会は3～5回で完結する。講座と違い、開始時期までに対象年齢に達していれば参加できるので、講座に入る前に経験したい人や地域的に通い切れない人なども参加しやすくなっている。残念なことだが、本年度から、受講生の減少により「幼児リズム運動」を閉講することになった。

「母と子のすくすくランド」は、お座りができるぐらいの乳児が歩行までの運動（特にはいはい）を自発的にたくさんできるようにしたり、幼児期に向けての精神的、体力的な土台作りをしたり、また母子のシンシップと母親の体力維持などを図ることをねらいとして活動している。母親同士の交流や情報交換も見られ、サロンとして仲間づくりの場になっている。講座終了2・3か月後には体育事業部主催で子どもおよびその両親が集まり、思い出として近況

報告やゲームなどをして過ごす。ここでは、活動中に撮ったビデオを上映し、変化の大きなこの時期の記念として配布している。1時間半程度の会だが、父親の子育て論を聞くなど講習の中だけでは分からぬ部分をかいま見ることもあり、指導者としてはこのような点も重視したい。

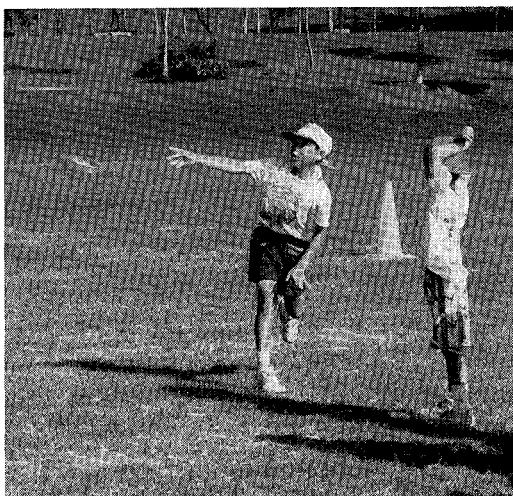
「幼児・母親体育」は、体育室で2・3歳の幼児と母親を指導。リトミック的な内容と親子体操を中心に多種多様な運動を経験できるように考えた。子どもだけ、親子一緒、親中心の3種類に大きく分けて活動を行っている。親から離れる練習も続けていたので、数m離れただけですぐに後を追っていた子どもたちも少しづつ平気になり、体育室いっぱいに広がっても不安になる子どもは少なくなった。

「母と子のパチャパチャスイム」は、1・2歳と変化の大きい年齢を対象にしているため、1歳児ではプールフロア（水深を調整するための台）1段に立てない子どもがいる反面、2歳児はどんどん独りで歩ける子どもがいるなど、個別に対応が必要であったが、最終回にはかなり水慣れが進み、差が縮まってきた。期間中に小児保健部の協力で、子育てについてのレクチャーがあり、心配事などを質問したり、熱心に育児に取り組む母親の姿が見られた。

夏休みと春休みに行っている「こども集中水泳」は、普段の講座プログラムとは全く違う5日間連続という特徴を生かし、いろいろな泳法への挑戦や経験ができるように考えている。本年度から夏休みに、泳力のある子どものためのレベルアップ講習会「夏休み特別集中水泳講習会」を実施した。3日間のプログラムであったが、体育室での準備運動を兼ねた運動と、プールでのトレーニングと、2時間のプログラムのなかで十分な効果が得られ、泳力もアップした。定員に満たなかったので、今後は広報を含め募集の方法を考えていきたい。

5) 野外活動

明るい太陽の下で体を動かし汗を流すことは、子どもにとって必要な経験である。運動技能や体力の向上を目指すことはもちろんだが、心を開いて仲間とのかかわりを持つことも重要であろう。季節に応じた内容で子どもたちに幅広い体験をさせたいと考えている。夏には「スポーツキャンプ」「新体操合宿」、冬や春には「スキースクール」などを実施した。



「スポーツキャンプ」でフライングディスクに挑戦

「スポーツキャンプ」は“チャレンジ”をテーマにして球技中心に、今まで経験したことのないスポーツを体験した。ボールも普通のボール、だ円形のラグビーボール、ボールではないがフライングディスクといろいろなボールを使い、サッカー、タッチラグビー、フライングディスクのゲームにチャレンジをしていった。今回の目玉として登山を行った。グリーンピア津南のゲレンデを頂上まで、お弁当を持って登った。登っているときはうつむいて、元気なかつたが、登り切った後は、お弁当も食べ、達成感も手伝ってか、元気いっぱい遊び楽しんでいた。

「新体操合宿」は、選抜合宿と通常の合宿の2度行った。①集中的に練習を行うことで講座ではできないレベルの活動を経験、習得する ②生活面、精神面での自立を促し、集団活動により協調性を養う、という項目を目標とした。選抜合宿は、東京ジュニア新体操選手権大会参加のためのレギュラーによる強化合宿で、演技の完成やチームとしてのまとまりを目指した練習を行った。例年行っている通常の合宿では、参加者1人ひとりが記録ノートを作り、新体操の勉強や練習内容を記録。小学1・2年生には少し困難な点も見られたが、上級生の手伝いもあり全員が完成させた。ジュニアとシニアの交流や、講座の中では体験できない集中的な練習ができたため、個人個人の精神面も含めた成長が見られた。シニアでは各自演技を創作して発表することができ、合宿の成果としては上々であった。

「スキースクールI」は、高学年が多く、スキーレッスンを中心に置いたため、昼間の指導にプラスしてナイタースキーを取り入れたり、夜のミーティングもスキー一色で行いスキー漬けの生活を送った。レベル別の班に分けた指導は、集団での指導の良い面が出て、班全体でのレベルアップが見られた。もちろん、参加者各自の技術向上は今まで以上に図られ、意識の上でもスポーツとしてのスキーが確立できたようである。今回はミニスキーも導入した。これはスキーの滑走感覚の向上、バランス感覚の向上を目指すもの。今後も用具の充実、指導方法を研究していくたい。

「スキースクールII」は、低学年で40人という少人数で開催している。ここでは、雪遊びとスキーレッスンを通して自然との触れ合いを楽しんだ。スキー初体験の子どもたちもすぐに慣れ、楽しみながら練習ができた。生活面ではコテージを使用したため、1軒丸ごと自分たちの世界という設定になり、子どもたちにとっては魅力的で、想像力をかきたてるものとなったようである。カウンセラーを務めたボランティアリーダーにとってもグループの動きを把握しやすく、1人ひとりの子どもに適切なアプローチができた。

夜のプログラムも雪上でグループごとにゲームをしたり、話し合いをしたりと自然に触れ合った。雨天のため雪で作る“氷の芸術”ができなかったが、室

内でゲームをして楽しく過ごした。新たな仲間づくりができた、思い出深いプログラムになった。

6) グループ活動

グループ活動は、他の講座・クラブとの関係で、火曜日と木曜日の午前中に実施している。6種類のプログラムを用意しているが、それぞれ体を動かすことの楽しさを伝えたり、日ごろできないような種目の紹介などを実施している。プログラム内容も利用団体のニーズに合わせて数種類の種目の中からピックアップして対応した。なかでも、児童ではパラバルーン、新体操などの人気が高く、多くの団体が活動に取り入れた。

本年度は実施件数が増え、充実した活動が行えた。新規の団体や、児童、障害児学級は増えたが、小学校の利用が少なく、今後に向けてPRやプログラムの検討が必要であると考えられる。

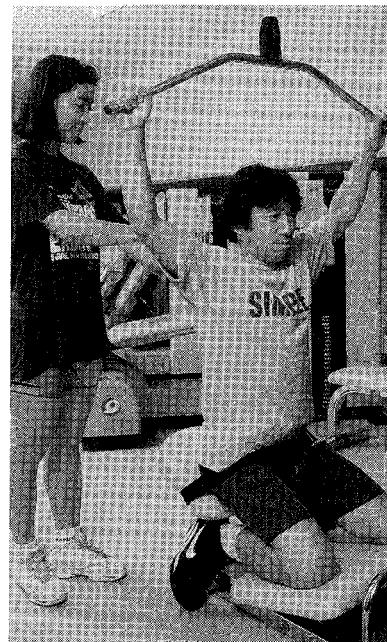
7) ダイナミック・ヘルス・クラブ (D.H.C.)

[こどもの城] の大人のクラブであるD.H.Cは、平日の昼と「こども活動エリア」が終了した後の夕方に、地下2階のプール、体育室、トレーニングジムなどを活用して行っている。このクラブ活動の場では、大人の健康づくりを主眼として考え、個人会員、法人会員、ビジターなどいろいろな方法で利用できるようにしている。

本年度から受付業務を体育事業部で行うようにした（今までアトリウムで受け付け）。それによって、受け付け時間を延長し（特に活動時間中の受け付けができる）多くの方に対応できるようになった。また、月会費の設定、定期的に利用している会員の方のパス券、継続時の手続きの手間をなくすために、銀行引き落としのシステムを導入し、会員の方がより使いやすいシステムになるように変更を行った。問題点を改善しよりよい方向に持っていきたい。

PRでは電車の中づり広告を掲載した。これを見て入会もしくは、見学に来られた方も多く、まずまずの成果があった。

内容的にもプログラムの新規導入を含め、スキーの陸上トレーニングやランニングなど



トレーニングジムも活用してD.H.C.

季節に合わせたプログラムなどを多く取り入れ、継続しているプログラムと併せて充実を図った。

8) その他の活動

(ア) 協力事業

「こども一日ドック」「マタニティ・スイミング」「健康スポーツ教室」「小児肥満のための指導者講習会」(以上小児保健部), 「ジュニア・スキー・キャンプ」(研修教養部・プレイ事業部と合同)などを行った。

(イ) 研究活動

本年度は各学会の発表、著書と幅広く研究を行っていった。学会では健康スポーツ教室から、肥満児水泳についての研究発表を行った。

【学会】

○「健康スポーツ教室」におけるグループ分け、水泳プログラムの考察

肥満児を対象とした水泳プログラムに対して、どのような内容構成が可能なのか、さまざまな角度から検討したプログラムの開発および実践を行った経過の報告・研究(第41回 日本小児保健学会 山崎綾子 羽崎泰男)。

【著書】

○小児科診療 1994 11月特大号 健康とスポーツ

「年齢別最適スポーツ種目と運動処方」 羽崎泰男(体育事業部長)

発行 株式会社治療社

9) まとめ

本年度は〔子どもの城〕10周年に向けて、今までの講座、D.H.C.の指導面、手続きなどで、手直しを多く行った。10年という期間によって、変化したもの、不要になったところをシンプルにすっきりとさせた。

一般活動も通常活動、特別期間での活動とそれぞれに特徴をもって行えた。幼児、小学生、中学生と幅広い対象に対応するためにも、今後も研究を行い、よりよい活動を目指したい。

D.H.C.は、受付業務の大幅な変更があり、好評である部分と、逆に問題のある部分が生じた。今後も多くの人々に満足していただけるようにしていきたい。またプログラムも有意義なものとし、PRも含めて新規会員を増やしていくたいと考えている。

来年度は10周年という節目の年になるが、今までの経験を生かし一層の飛躍をしていきたい。

2 ブレイ事業部

(1) 6年度活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
おはなし紙しばいの集い	毎週火曜日 15:00~15:30	青年・女性ボランティアを中心に37回実施。毎週3本の紙芝居の読み聞かせを行う。単に紙芝居を読むだけではなく、子どもと会話をし、子どもの声も拾いながら、読み手も聞き手も一緒に楽しめる広場となるよう心がけた。参加者は、幼児から小学生までと幅広い年齢層であったが、それぞれ真剣に見ている表情が印象的であった。
おはなし人形広場 I	毎週水曜日 15:00~15:30	人形劇、影絵、パネルシアターのボランティアグループとスタッフの運営によるプログラム。毎週異なる種類の劇を楽しんだ。ただ“見る”“見せる”的ではなく、演技者とそこに集った子どもたちとが、一体となって楽しみの空間と時間を作りだしていく活動となった。
おりがみ遊び広場	毎週木曜日 14:00~15:00	女性・青年ボランティアの協力を得て34回実施。活動も3年目を迎える季節に沿った折り紙と、今まで作った中で子どもたちに特に人気のあったものをうまく組み合わせて、活動日ごとの題材とした。今年もまた壁面装飾としてさまざまな折り紙に挑戦して、プレイホールの四季を彩った。
おはなし人形広場 II	毎週土曜日 14:00~14:30	プロの人形劇団や、地域に根ざしたアマチュア人形劇サークルなどに出演を依頼した。ゆったりと見ることができる音楽ロビーで実施。本年度は、出演者と【こどもの城】スタッフが協力してプログラムを作ることも試み、子どもの参加度を高めた。
ファミリー プレイタイム	年11回 11:00~12:30	子どもだけのためではなく、また親向けのものでもなく、親子が一緒になって遊び、楽しむことができる活動をねらいとした、本年度から実施のプログラム。内容は手作り工作から、パソコン、クッキングなど幅広いジャンルから選び、年間11回実施。参加率は7割を超えた。
<母の日> お母さんに 手作りプレゼント	5.7 13:00~16:00 5.8 11:00~16:00	お母さんへの感謝の気持ちをカードにしてプレゼントをするワークショップを実施。カードには似顔絵や好きな絵を書き、カードのポケットにカーネーション型のメッセージカードがしまえるようにした。カードが家の形をしているので、家の中の様子などを絵にする子どもが多かったのが印象的だった。
パソコンクラフト	6.10~7.8	コンピュータで設計をして、それを実際に工作することを楽しんでもらおうと、本年度も「紙飛行機」を実施した。機体、主翼、尾翼の各部を幾つかの選択肢から選んで組み合わせ、印刷、工作を楽しんだ。
<父の日> みんなであそぶ ～お父さんの 少年時代～	6.18 13:00~16:00 6.19 11:00~16:00	お父さんの少年時代の遊びを父子で一緒に経験し、コミュニケーションを図った。ビーチやめんこは、普段子ども遊びに参加しづらいお父さんも、夢中になって楽しんでいた。野球盤、オセロ、将棋、囲碁はじっくり取り組み、お父さんがやり方を教えてあげるという、ほほえましい光景も見られた。
<七夕まつり> 星にとどけ、 ねがいごと	7.2・3 11:00~16:00 7.5~7 13:00~16:00	短冊に願い事を書き、プレイホールに立てられた竹につるすプログラム。7月7日にはカラフルな短冊で竹が彩られた。総参加人数は965人。また、「めいろくん」の中に七夕にちなんだクイズを設置し、クイズ迷路として実施した。

名 称	期 間	備 考
<敬老の日> はかせクイズ大会 ～おばあちゃんの 知恵袋～	9.15 13:00～14:00 15:00～16:00	【こどもの城】ボランティアリーダーの協力を得て、おばあちゃんの知恵袋をテーマとした、「三人の博士クイズ大会」を実施した。子どもたちは正しい回答者を3人の中から当てようと一生懸命だった。正解と一緒に考えながら、先人から伝わる生活の知恵や遊びの工夫を紹介していった。
<秋分の日> バンバー大会	9.23 小学生の部 午前 中・高生の部 午後	小学生の部、中・高生の部と2部に分けて実施した。小学生の部には15人の参加があった。常連の子どもたちが多い中で、初参加の子どもたちの活躍が目立った。また、中・高生の部では10人が参加。前年まで何度も出場していた高校3年生組が卒業し初めての大会であったため、あたかも新人戦のような雰囲気となった。
<体育の日> キャッスル スポーツ '94	10.8～10 11:00～16:00	「国際家族年」にちなみ、親子で楽しむ運動会をテーマにゲーム大会を実施。年齢や体力で差が出てしまうものは避け、ゲームを見てすぐ内容が分かるものを題材に取ったため、親の参加も多く、中でも「追いかけ玉入れ」「万歩リレー」は親子で楽しめるゲームとなった。また、額縁の中でポーズを決めるとゴールとなる「仮装競争」では記念写真を撮る親の姿も多く見られ、親子で楽しもうというプログラムの主旨がうまく伝わる結果となった。
<節分> 節分会 まめまき大会	2.4 ①15:00～ 2.5 ①13:00～ ②15:00～	スタッフ扮する福の神が子どもたちに節分の由来を話していると、突然会場に鬼の軍団が登場。子どもたちと一緒に豆をまいて鬼を退治するというストーリー。家庭で行われなくなっている節分行事を、分かりやすい観客参加劇に仕立てて解説している。毎年参加している家族も増えてきているようで、本年度も各回300人近い参加者。
<ひなまつり> みんなでひなまつり	2.25 13:00～16:00 2.26 11:00～16:00	折り紙で雄びな、雌びなを折り、プレイホールの壁に設置したパネルに皆で飾るというプログラム。人形に自分の身の汚れや災いを移して川に流していた風習を紹介し、一緒に参加した家族の健康や幸せを祈った。色鮮やかなパネルに思い思いのおひなさまを飾りながら、親子の会話がはずんだ様子も見られた。
<春分の日> バンバー大会	3.19 小学生の部 午前 中・高生の部 午後	秋分の日と同様2部に分けて行う。小学生の部には19人という多数が参加し、善戦を繰り広げた。仲間たちの良いプレーには拍手を送るなど、好マナーのすがすがしい大会となった。また、13人が参加した中・高生の部はその実力も伯仲し、決勝まで予断を許さない展開となった。勝負に対して真剣に取り組む参加者の姿がとても印象的な大会であった。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<児童福祉週間> キャッスル ファイトII 「五龍大武闘大会」	4.29～5.5	「五龍大武闘大会」という架空のカンフー大会の中で、見知らぬ子とさまざまな種類のゲーム修行を行い、カードをいちばん多く集めた子が優勝というシステムの催し。子どもたちに人気のテレビゲームをモチーフとしてはいるものの、テレビゲームでは機会を失いかちな人ととの交流を楽しむことをいちばん大切なねらいとしている。
<〃> ことばであそぼう (パソコン)	4.29～5.8	言葉遊びをテーマとし、パソコンを利用したプログラム。しりとり、アナグラム、暗号解読、4W遊びなどを題材とし、パソコンを相手に楽しみながらコンピュータの機能、特徴を体験した。
<〃> 人形劇フェア	5.3～5	人形を作り、遊び、見るという3つの要素を持ち合わせたプログラムを、「ペベットマーケット」と大学の人形劇サークル「じゃんぐるじむ」と【こどもの城】が企画、運営した。子どもたちは自分で作った人形での表現遊びを楽しむことができた。
<夏休み> スケッチしよう (パソコン)	7.21～8.7	マウスを使ってパソコンの画面上に木や花などの絵柄を呼び出し、風景画を作るパソコンのプログラム活動。スタンプ遊びの感覚で絵ができていくためか、低年齢の子どもも簡単に取り組めたようだった。

名 称	期 間	備 考
<夏休み> ネイチャー・ ウォッキング (パソコン)	8.9~31	野鳥と植物のパソコンデータベースを利用して問題カードの鳥や花の名前を当てるプログラム活動。対象は小学校高学年以上でパソコンを使ってデータベースを検索する楽しさを体験できたようだ。今年は鳴き声によって鳥の名前を当てる鳥の鳴き声クイズも実施した。
<〃> ウォーター アドベンチャー '94	8.16~21	屋上ふしぎが丘を使って繰り広げられる、水鉄砲を使ったゲーム大会。宇宙からやってきたニュースポーツという設定で、屋上の4か所で、水鉄砲でホッケー、三輪車で撃ち合い、攻撃を避けながらボールを奪ってくるなどの予選のほか、決勝戦では2チームに分かれて陣地を作り、水鉄砲の撃ち合いを行った。保護者の参加も多かった。
<開館記念> 親子で楽しむ こどもの城人形劇 フェア	10.29~30, 11.3 (計3日間) ①13:00~ ②15:00~	「国際家族年」にちなんで、今回は特に親子で楽しめる演目をメインにし、来館の親子に呼びかけた。「こどもの城に来れば人形劇を見ることができる」ことを知っている利用者が増えてきたためか、演者と子どもたちの掛け合いなども盛んにあり、会場が熱気に包まれた。
<〃> 親子であそぼう パソコン体験	10.29~11.3	しりとり、暗号解読などの「言葉であそぼう」、花や木、雲や太陽などの絵を組み合わせてグラフィックス作りを楽しむ「スケッチしよう」の2つのプログラム活動を実施した。パソコン活動も、親子が教え合い、また相談しながら進めるなど、個人で楽しむものから、年齢差や経験差を越えて、だれでもが一緒に楽しめる活動となった。
<〃> 親子で楽しむ おはなし広場	11.1~2 15:00~	紙芝居や人形劇は子どものためだけのものと思われがちで、親の積極的な理解と参加は日々の活動の中でも難しい。少しでも親子で参加し楽しめる内容、雰囲気づくりをすることが今後も大きな課題の1つである。今回行った紙芝居と人形劇の広場でも、親への働きかけを行ったので、親子で一緒に楽しんでいる光景が見られた。
<〃> ファミリーゲーム 大会	11.3 11:00~ 15:00~	親子で一緒に楽しめるプログラムとして、輪投げ大会とbingo大会を実施。午前に行われた輪投げ大会は、30家族が3チームに分かれて参加。他の家族を応援するなどの光景が見られた。また、午後に行われたbingo大会では、親子を含め約600人の参加があり、bingoになったときには、親子ともども大喜びの姿が見られた。
<冬休み> カードをつくろう (パソコン)	12.1~1.8	パソコンを使ってX'masカードや年賀状作りを楽しむプログラム活動。パソコンでイラストに色を塗って印刷し、カード用の台紙にはって仕上げるまでを1つのプログラムとした。はぎれの紙やリボンを使って個性的に作ったり、子ども同士でパソコンの使い方を教え合うという場面もあった。
<〃> 人形劇フェア	12.23~25	都内近郊の大学の児童文化研究会・人形劇サークルで構成されている「じゃんぐるじむ」が企画・運営した。人形劇の上演のほかにワークショップを行い、積極的に子どもとかわる姿が見られた。子どもたちへ人形劇を通して児童文化を伝承するのと同時に伝えていく側の人間(学生)の育成にも力を入れた。
<〃> 新春 あ・そ・び・ぞ・め!	1.3~8	日本紙相撲協会の協力を得て、プレイホールでは紙相撲初場所を行った。自分たちで作った力士同士を戦わせて15勝し、横綱を目指した。また、エントリー制トーナメント戦を実施し、本場所の雰囲気を楽しんだ。お父さんがエントリーし子どもたちと勝負を楽しんでいる姿も見受けられた。屋上ではこま回しを行った。
<春休み> 人形劇フェア	3.25~27 ①13:00~ ②15:00~	外部の人形劇団に公演を依頼して実施。毎年各劇団には見せるだけではなく、子どもが参加できるような人形劇を依頼している。今回も子どもたちはお話の中に入り込み、主人公に声援を送ったり大声で笑ったりと、人形と同じ空間を感じ、同じ経験をすることができたようだ。
<〃> コンピュータで ミュージック (パソコン)	3.25~4.5	ロゴ言語を応用して作成した「動物ハンターゲーム」「簡単作曲マシーン」ほか、ワープロの要領でドレミを書いていくだけで演奏が楽しめる「ドレミファコンピュータ」など、コンピュータ内蔵の音源を簡単な操作で演奏させるというプログラム活動を実施。

3) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
小学生 パソコン教室 I	(人) 小4～6 (20)	(人) 20 22	I Aコース 4.10～5.22 日曜日 10:30～12:30 I Bコース 10.8～11.20 日曜日 10:30～12:30	初めてパソコン教室に参加する子どものためのコース。ロゴ言語を使用し、グループ活動によるグラフィックス作品の共同制作を内容とし、パソコンを媒体とした小集団活動を考えることがテーマ。5人程度のグループに分かれ、1人ひとりが絵の部品のプログラムを担当し、最後に部品プログラムを合体させグラフィックスを完成させる。
" II	" (20)	17 16	II Aコース 6.5～7.3 日曜日 10:30～12:30 II Bコース 1.15～2.19 日曜日 10:30～12:30	小学生パソコン教室Iを修了した子どものためのコースで、ゲーム作りがテーマ。ロゴ言語を使用し、ゲーム作りのプログラミングの中で、変数や再帰処理といった概念も学ぶ。
" III	" (20)	10	3.27～31 日曜日 10:30～12:30	小学生パソコン教室IIを修了した子どものためのコースで、ロゴ言語のリスト処理機能を使って、おみくじ、遊園地やヒーローの名前作成プログラム、5W遊びなど言葉遊びプログラムを作った。
" スペシャル	" (15)	8	8.23, 25～27 10:30～12:30	パソコン教室IIの修了者を対象に、参加者がそれぞれ自由に計画したテーマでプログラミングを楽しむコース。グラフィックスやゲームなど、さまざまな課題の楽しいプログラム作品が完成した。

<クラブ>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
キッズクラブ	(人) 小1～4 (30)	(人) 30	隔週土曜日 15:00～17:00 1期、2期は6回。3期は5回開講。	①家庭や学校では体験できない活動を行う ②地域や学校とは違う新しい人間関係づくりを目指す ③(ボランティアリーダーなど)大人の援助を得ながら、子どもたち自身がプログラムの企画・運営することで、創造的な発想と発言力、行動力を養う。この3点を大きなねらいとした遊びのクラブ。
ユースクラブ	小5～中3 (40)	38	隔週日曜日 13:30～15:30 1期、2期は6回。3期は5回開講。	①グループワーク的視点で新しい人間関係づくりを目指す ②自分たちで次回のプログラムを相談することで、創造的な発想と発言力を養う ③家庭や学校では体験できない活動を行う。この3点を大きなねらいとした遊びのクラブ。
パソコンクラブ	小4～高3 (40)	36	火～金曜日 14:30～17:30 土曜日 13:00～17:30 日曜日 10:00～17:30	パソコン教室を修了した子ども、またパソコンに興味のある子どものための交流を中心としたクラブ。パソコンに関する情報交換のミーティングやソフトの使い方の講習会を実施。

4) その他（野外活動など）

名 称	期 間	備 考
キャッスルキャンプ	7.21・22	親もとから離れて、普段接しているのとは異なった友だちと一緒にゲームや探検など楽しいプログラムを体験しながら生活することによって、親からの独立体験や仲間との活動を楽しむことを目的としたキャンプ。参加者は47人(年長児), スタッフは職員3人, ボランティア19人。場所は神奈川県横浜市・こどもの国セントラルロッジ。
ちびっこ冒険団'94	I期 7.26~29 II期 7.29~8.1	小学1~3年生を対象とした合宿のキャンプ。本年度は、那須甲子の森で起こるさまざまな不思議を探そうという探検隊ごっこを導入に、ハイキング、野外炊事、キャンプファイヤーなど、さまざまな野外プログラムを開催した。I期は参加者76人, ボランティア21人。II期は参加者76人, ボランティア25人。スタッフは各期3人。場所は福島県那須甲子少年自然の家を利用した。
ゆきんこ冒険団'94	12.25~28	小学1~3年生を対象とした、雪遊びをテーマにした合宿のキャンプ。新しい宿舎に一番乗りをしたり、地元西郷村の中学生が一緒に活動してくれたり、子どもたちにうれしいことが続いた。インフルエンザによって体調を崩す者も出たが、スキーや雪合戦、かまくら作りなど、冬の野外プログラムをたっぷり楽しむことができた。参加者は76人, ボランティア23人, スタッフ4人。福島県那須甲子少年自然の家で実施。
6年度第3回児童厚生員等実技指導講習会	1.18・19	ブレイ事業部のパソコン・プログラムを取り上げ、パソコン・クラフト作りなどの実際の活動例、〈あそび〉への応用の仕方、可能性などを紹介した。



児童福祉週間に行われた
「キャッスルファイトII～五龍大武闘大会」



47人が参加した「キャッスルキャンプ」

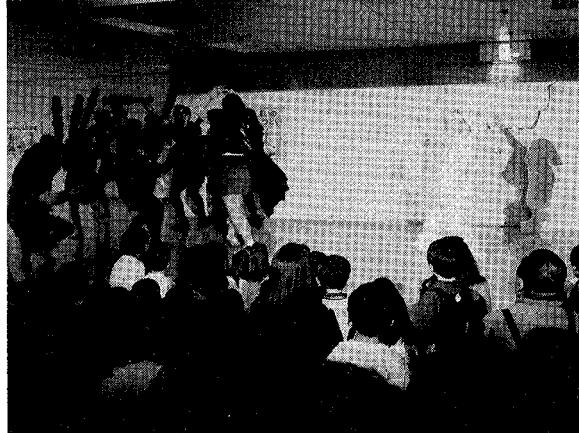


「人形劇フェア」では、人形作りのワークショップも

ブ
レ
イ

(2) プレイ事業部の活動

プレイ事業部は、プレイホール、コンピュータプレイルーム、パソコンルーム、屋上をフィールドとして、子どもたちが遊ぶことの楽しさ、仲間づくりの楽しさを体験できるような活動を展開している。本年度もその活動の充実を図ってきた。特に「ファミリープレイタイム」など、家族で楽しめるプログラムを実施し遊びの幅を広げ、そして、子どもたちやその家族がより楽しく快適に遊べるように、遊具製作や屋上プレイポートの改修など遊び環境の整備を行った。



「節分会まめまき大会」などの季節行事を実施

1) 平常期間の活動

(ア) 週間プログラム

平常期間には、曜日ごとに定期的に行う週間プログラムを実施した。これは、プレイホールに常設された遊具で遊ぶだけでなく、スタッフやボランティアなどの“人”が介在して楽しめる時間・空間を作ること、人形劇や紙芝居など子どもたちに文化を伝える場として実施しているもの。スタッフとボランティアが一緒に内容を検討し、実施した。

(イ) 季節行事

核家族化が進むにつれ、日本の伝統的な行事や遊びが失われつつある。プレイ事業部では、それらを大切にし、季節行事プログラムとして実施している。その中で、古くからの言い伝えや知恵をさまざまな遊びの体験を通して、子どもたちに分かりやすく伝えられるよう工夫して実施した。

2) 特別期間の活動

数多くの入館者のある特別期間には、平常期間の活動を土台としながらそれを発展させ、多くの人に楽しんでもらえるような行事を行った。各行事の内容も充実してきたが、それとともに行事にかかわるボランティアや人形劇団や学生人形劇グループなどとの連携も更に密になってきた。

(ア) 児童福祉週間（ゴールデンウイーク）

(1) キャッスルファイトⅡ

アニメやテレビゲームをモチーフにした“ごっこ遊び”である。カンフーや格闘技の達人たちが、さまざまなライバルと勝負して成長していくという、子どもたちに人気のある設定を生かしつつ、パンチやキックの代わりにじゃんけんで戦ってみようというのが「キャッスルファイトⅡ」である。

屋上ふしきが丘を“五龍（ウーロン）大武闘大会”という架空のカンフー（じゃんけん）大会の会場に設定。まず参加者は修行道場でさまざまなゲーム勝負を行い、勝負に勝ったら道場主からカードがもらえる。このカードをたくさん集めたら、1時間おきに開催される決勝大会に進出できる。決勝大会は、じゃんけんに勝ったら相手のカードを1枚奪い取ることができるというルール。最終的にカードの枚数が多い人ベスト5を表彰、スペシャルカード“ドラゴンの証”と、色帯（カラーリボンで作ったはちまき）を贈り、有段者の称号を与えた。

4月29日から5月5日までの参加者は約3,500人(500人／日)，ボランティアは延べ約120人，パートスタッフは延べ約35人。ただし、準備期間の人員は含まれていない。

(2) 児童福祉週間（ゴールデンウイーク）人形劇フェア

人形劇を見る、人形を作る、人形を使って遊ぶという3つの要素を持たせた。人形を作る、人形を使って遊ぶという2つの要素を、大学の児童文化研究会や人形劇団などのネットワークである「じゃんぐるじむ」、そして「パペットマーケット」と【子どもの城】が企画・運営した。この活動を通して、学生たちのつながりを育成することにも寄与した。

人形劇の上演は、普段から【子どもの城】の活動に協力をいただいている3団体の人形劇団の協力を得て行われた。

	出 演 団 体	演 目
5月3日	人形劇団 空中分解	「三角くん海へ行く」「ふくろうのそめものや」
5月4日	コロン団	「かみなりちゃんとてんぐちゃん」パネルシアター
5月5日	人形劇団 HOPPY	「玉人形の舞踏会」「うたうかめ」「てるてるぼうずてるぼうず」「がいこつさん」

(イ) 開館記念特別期間

(1) 開館記念人形劇フェア

「国際家族年記念 親子で楽しむ人形劇フェア」と題して実施した。子ども

をひざの上に抱えて、親子で楽しめるような雰囲気の会場づくりを心がけた。また、出演劇団にも、催しの主旨にそった演目を用意していただいた。

	出 演 団 体	演 目
10月29日	人形劇場 だぶだぶ	「ミーとムックのおかたづけ」「コッコさんはうたがすき」
10月30日	人形劇団 空中分解	「サンカクくん宇宙へいく」
11月3日	人形劇団 HOPPY	「なにができるかな」「動物コンサート」「うたうかめ」「ワニにたべられた王様」

(ウ) 冬休み特別期間

(1)クリスマス人形劇フェア

大学の児童文化研究会や人形劇団などで構成している「じゃんぐるじむ」が企画・運営に当たり、「パペットマーケット」と【子どもの城】が後援して行った。

衰退しつつある児童文化、特に人形劇や人形遊びを子どもたちに伝えることを大きな目標としている。そしてその文化を伝えていく担い手である学生たちの活動を援助し、育っていってくれることが願いであります、今後も継続して取り組んでいくべき課題である。

	出 演 団 体	演 目
12月23日	大妻女子大学パネルシアター部 東京家政大学 法政大学児童文化研究会 作新学院大学	パネルシアター 人形劇「たこやきマントマン」 人形劇「おもちゃどろぼうとボク」 リズム遊び
12月24日	法政大学児童文化研究会 創価大学児童文化研究部	パネルシアター 人形劇「心あわせて」
12月25日	創価大学児童文化研究部 青山学院大学 日本女子大学 作新学院大学	影絵「オカリナリーナメロディーナ」 大型絵本「忍者タンポポ丸」 ボードビル「ガンバルジャンの 恋のメロディー」 大型絵本「ペンタのおはなししさがし」 人形劇「3匹のこぶた」 無言劇 リズム遊び

(2)新春あ・そ・び・ぞ・め！

「独楽（こま）まわし」と「紙相撲」をテーマにプログラムを実施した。

「独楽まわし」は日本独楽博物館館長の藤田由仁氏に、回し方のこつと指導方法を、「紙相撲」は村杉紙相撲道場の村杉輝治氏に、力士や土俵を含めた雰囲

気づくりと楽しみ方を教えていただき、行事を計画、実施した。

また、ボランティアリーダーも過去の経験を生かし、力士が長く取り組みができるように土俵を改造したり、星取表のスタンプカードを用意し、子どもたちが何度も楽しんで横綱を目指せるように、道具や運営方法に工夫を凝らして実施した。

「独楽まわし」も「紙相撲」も熟練のための根気と時間が必要な遊びだが、さまざまな工夫によって、より多くの人たちに、それも参加者それぞれの限られた時間の中で楽しめる行事になった。

(エ) 春休み特別期間

(1)春休み人形劇フェア

3日間、異なる人形劇団による公演を行った。けこみを使ったもの、パネルシアター、舞台を抱えて1人で演じるものなど形態はさまざまであったが、どれも新鮮で子どもたちをひきつけていた。また、単に見るだけではなく、子どもも人形劇の世界に入り込み、楽しんでいた。

	出 演 团 体	演 目
3月25日	つばくろ人形座	人形劇「こぐまの体操」「ズギウギブーブー」
3月26日	くれよん	パネルシアター「ピノキオ」ほか
3月27日	歩く人形劇場+パントマイム	人形劇「あかずきんちゃん」ほか

3) 講座・クラブ等の活動

(ア) クラブ（キッズクラブ、ユースクラブ）

平成4年の4月にスタートした「キッズクラブ」「ユースクラブ」も、ようやく3年目を迎えた。両クラブとも継続的に来ている子どもが大半を占めており、新しく入ってきたメンバーに対しての指導性を発揮しているのが頼もしい。しかし、継続者優先のクラブであるため、新たな希望者の受け入れ間口が狭いのが現状である。今後検討を要する課題であろう。

本年度の夏休みには、キッズクラブとユースクラブの初めての合同プログラムである「夏まつり」を実施した。各クラブとも幾つかの班に分かれ、やきそば屋、水ヨーヨー釣り、的当て屋、ジュース屋、お菓子袋の魚すくいなど、ユニークなお店が出店された。今回は実施のみ合同で行ったが、今後は話し合いから両クラブ一緒に行っていくことも考えたい。

このように前年度より、更に広がった活動であるが、その内容は次表のとおり。

【キッズクラブ・プログラム内容】

期	4月10日	問題を解きながら、【子どもの城】の中をラリー形式で探検
	4月24日	ポートボールなど主に球技を中心に行なう「スポーツゲーム大会」
	5月22日	ダンボールを使って遊具や家などを作り、プレイホールに置く
	6月5日	屋上ネット広場でユニカールなどの「ニュースポーツ」を行う
	7月3日	Tシャツに特別なペンで絵を書き「オリジナルTシャツ作り」
	7月17日	第2土曜日なので朝から集まり、粉から「手打ちうどん作り」
	8月27日	夏休みにキッズ、ユース合同で「屋上夏まつり大会」を行う
	9月18日	室内でクロリティなどを行う「スポーツフェスティバル」
期	10月2日	グループ対抗のかくれんぼをしながら【子どもの城】周辺を歩く
	10月23日	中華まんじゅう作りを「料理の鉄人に挑戦」という形で行う
	11月6日	【子どもの城】周辺で陣取りなどの「路地裏遊び」を楽しむ
	11月20日	次回クリスマス会のプログラムを考える「クリスマス大作戦」
	12月18日	前回準備した内容で、手作りの「クリスマス会」を行う
期	1月22日	III期からの新メンバーを迎える、「かんけり・陣取り」などを行う
	2月26日	オリジナルかるたを作り、それを使って「かるた取り大会」
	3月5日	街中に隠れたスタッフを探す、探偵ごっこ「木谷さんを探せ」
	3月12日	迷路の壁にカッティングシートで、架空の「海の生物」を描く
	3月19日	一年の締めくくりの宿泊プログラム。生活をともにして思い出づくり

【ユースクラブ・プログラム内容】

期	4月24日	次回の大会に出場するため、城周辺で「ウォークラリー講習会」
	5月15日	日本レクリエーション協会主催の「第11回全国一斉ウォークラリー大会」に出場し、3位に入賞
	5月29日	グループごとに知恵を絞り合う「親睦ゲーム大会」
	6月12日	丹沢の「大野山ハイキング」では雨にたたられびしょ濡れに
	6月26日	オリジナルの定期入れを「レザークラフト」で制作
	7月10日	中学3年生がポイントリーダーになった「親子ウォークラリー」
	8月27日	夏休みにユース、キッズ合同で「屋上夏まつり大会」を行う
期	9月18日	クロリティとユニカールを使った「第4回ニュースポーツ大会」
	10月2日	各班ごとにスポンジの上にデコレートして「ケーキコンテスト」
	10月23日	写真に写った場所を発見する「渋谷じゃらんじゃらん」を実施
	11月6日	悪天候のため代々木公園に行けず、「推理クイズ大会」
	11月20日	6グループに分かれて作業分担して「クリスマスパーティー準備」
	12月11日	待ちに待った「クリスマスパーティー」は子どもたち自身で企画運営
期	1月15日	持ち寄ったクイズに演技も交えて「クイズの鉄人」を実施
	1月29日	子どもたちからの希望が強かった「もちつき大会」を実施
	2月12日	あんどのようない「立体たこ」を作る。チャレンジランキングも少し体験
	3月5日	二子玉川の川べりでたこあげ大会。最後には全部のたこを合体！
	3月11日	館内に宿泊しながらチャレンジランキング大会を催す
	・12日	初日はチャレンジランキング連盟の指導で、2日目は子どもたちが考えたオリジナル種目で

(イ) 野外活動

今年も「キャッスルキャンプ」「ちびっこ冒険団」「ゆきんこ冒険団」の3つのキャンプを実施した。①自然に親しむ ②仲間をつくり、その仲間とともにさまざまなことにチャレンジする ③キャンプ活動を通して、社会性を養っていくことを目的として行ってきたキャンプは、年々充実を見せていく。

特に「ゆきんこ冒険団」では、キャンプの利用施設でもある那須甲子少年自然の家と共に現地の中学生と一緒に雪上プログラムを楽しみ、交流を図るなど大きな広がりが見られた。

(1) キャッスルキャンプ

	1　日　目	2　日　目
朝	〔子どもの城〕出発 ↓	野外炊事(カートンドッグ作り) 子どもの国園内探検II(宿舎の周辺をリーダーと探検・クラフト)
昼	子どもの国園内探検I (宿舎の周辺を班のリーダーと探検・水遊び)	子どもの国出発 ↓
夕	野外炊事(カレーライス・ゼリ一作り) キャンプファイヤー	〔子どもの城〕到着

(2) ちびっこ冒険団 '94

	1　日　目	2　日　目	3　日　目	4　日　目
朝	〔子どもの城〕出発 ↓	冒険の旅(I期は小人と巨人の伝説を確かめに探検隊を結成、II期は「わくどき新聞」の新聞記者となって、那須甲子の森でどんな不思議な物が見つかるかを取材しに出発)	野外ゲーム(野原に隠されたカードを探し、メニューを決定する)	清掃～後片付け(片付けが終了した班から、表に出て記念撮影)
昼	施設周辺の探検(周辺を探検して虫や花を観察したりスケッチしたり)		野外炊事(6つのチームに分かれていなりずし、お好み焼き、カレーなどを縁日の出店ふうに出店。スタッフ扮するお祭り源さんに人気集中)	那須甲子少年自然の家出発 ↓
夕	仲良しになる集い(那須甲子の森で起ころざまざまな不思議を探るふしぎ探検隊を結成)	フリータイム(工作したり星を見に野外へ行ったり、班ごとに自由に過ごす)	キャンプファイヤー(I期は屋外で、II期は室内で)	〔子どもの城〕到着(解団式では涙を流してリーダーとの別れを惜しむ子ども)

(3) ゆきんこ冒険団 '94

ブ
レ
イ

	1日目	2日目	3日目	4日目
朝	[子どもの城]出発 ↓	歩くスキー (地元の中学生の指導のもと、施設周辺を歩くスキーを履いて散策)	室内フリータイム (班ごとに割りばし鉄砲作りや凧作り、お守り作りなどのクラフトを)	清掃～後片付け (片付けが終了した班から、表に出て自由時間、記念撮影)
昼	施設周辺の探検 (自然の家周辺で雪だるまを作ったり雪ぶつけを楽しんだり)	屋外フリータイム (雪だるま、かまくら作りなど) 餅つき (ついた餅はおやつに)	選択プログラム (風邪気味の子は室内遊びを、元気な子は第2スキー場で雪遊びを)	那須甲子少年自然の家出発 ↓
夕	仲良しになる集い (歌やダンス、ゲームなどで、楽しいクリスマスの集いを行う)	室内フリータイム (班ごとに宝探しやクラフト、パネルシアター鑑賞など自由に過ごす)	キャンプファイヤー ^一 (室内営火場で歌やゲームの楽しいキャンプファイヤーを実施)	[子どもの城]到着 (解団式では涙を流してリーダーとの別れを惜しむ子ども)

4) パソコン活動

パソコンを使って活動する場所が、3階のコンピュータプレイルームと10階のパソコンルームの2か所ある。どちらもコンピュータを使った遊びを土台にしているが、コンピュータプレイルームはパソコンに慣れ親しむこと、パソコンルームはツール（道具）としてパソコンを活用することを活動の主眼にしている。

(ア) コンピュータプレイルーム

20台のパーソナルコンピュータ（パソコン）でさまざまなソフトを体験できる部屋。母親と語り合いつつ「ぬりえ」を楽しんだり、父親に手を添えられマウスを動かしたりと、親子で楽しむ姿が多く見られた。「初めて触る」子どもに比べ、「子どもの城ができるソフトを体験しに来る」子どもの割合が高く、家庭にパソコンが普及してきたことがうかがえる。開館以来親



お母さんと一緒にパソコンに挑戦（「パソコンルーム」で）

しまってきた集団プレイは12月で終了し、個人プレイのブースを増設した（計24台）。本年度の利用者数は計6万5,145人であった。

(イ) パソコンルームの活動

パソコンルームでは、パソコンをツール（道具）として活用したさまざまな遊びの活動を実施している。カードやペーパープレインをデザインする道具として、野鳥や花の種類や名前を探し出す道具として、また、楽器が弾けなくても音楽を楽しむ道具としてパソコンを利用する幾つかのプログラムを一般活動として実施した。

また、一般来館児・者を対象とした活動以外にメンバー間の交流や各自の興味にそったパソコン活動をするパソコンクラブ、ロゴ言語を使用したパソコン教室も4コースで計6クラスを実施した。

5) グループ活動

プレイ事業部のグループ活動では、さまざまな遊びや劇遊びなどのプログラムを通して、豊かな心と社会性や子どもたち同士の連帯感をはぐくむことを主なねらいとして実施している。

本年度実施したプログラムは「忍者修行道場」が8回、「森へいこう」が3回、「キャッスルオリンピック」が9回、「パソコン体験」が2回、「みんないっしょに」が3回の計25回であった。

今年はブリティッシュスクールによる「キャッスルオリンピック」の利用が多くだったので、何回も検討しながら1つのプログラムとして確立することができた。この「キャッスルオリンピック」は親子で参加し楽しめるプログラムとしても高く評価できた。

また、3歳児プログラムである「みんないっしょに」の運営にも力を注いだ。30~40分という短い時間のなかで一緒に楽しめるプログラムを作る段階から幼稚園、保育所の先生にも一緒に参加していただいた。

今後、更に3歳児プログラムと障害児プログラムの開発に力を注いでいきたい。

6) その他（児童厚生員等 実技指導講習会）

平成6年度第3回「児童厚生員等実技指導講習会」のテーマは「遊



グループ活動「忍者修業道場」

びのニューウェイプを体験、考えてみよう」。プレイ事業部で実施してきたパソコンのプログラム活動を実際に参加者が体験しながら、パソコンが子どもたちの“遊具”として、またさまざまな知的活動の“ツール（道具）”として成り立つかを紹介した。

パソコンのプログラムを自作するのは専門知識が必要で、どこの施設でもすぐに取り入れるのは難しいが、市販のソフトの中にも利用の仕方では子どもたちの遊びを豊かにし、創造的な活動にしてくれるものもある。実技ではパソコンで絵を描くことをまず体験し、その応用でクリスマスカードや年賀状作りなどペーパークラフトへと展開した。初めは操作することに戸惑いを見せていた参加者も、近くの人の画面をのぞきこんでは教え合い、自分のデザインしたものがプリンターから印刷されて出てきたときには歓声が聞かれた。ほかに、【子どもの城】のオリジナルソフトも含め、さまざまなソフトを体験した。

また、パソコン通信についても取り上げ、児童館相互での情報交換、情報提供や全国の子どもたち同士のコミュニケーションへの利用を提案し、活動にパソコンを“道具”として取り入れていく可能性を示し、まとめとした。

7) まとめと今後の課題

ここ数年進めてきたプレイホールの遊具整備が一部を残してほぼ一段落する。次は屋上の遊具整備が課題となろう。非常に人気の高いプレイポート、そしてそれに続くネットの遊具はそろそろ老朽化が目立ってきた。また、ふしぎが丘全体の遊び場としての活性化も大切である。

コンピュータプレイルームやパソコンルームの活動も【子どもの城】全館の中での科学的な遊びや機能を統合して、新しい形を作り上げていくことが今後の大きな課題であると考える。

3 造形事業部の活動

(1) 6年度活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
やってみよう！ つくってみよう！ 「造形宝島」	4.7~7.10	夏休み特別期間の造形発見展「造形宝島」に向けて、昨年9月から実施してきたオープンスタジオ「造形宝島」での、さまざまな素材と技法を組み合わせたプログラムから、更に環境設定も取り込んだプログラムを実験的に実施した。
第7回 遊びと造形発想展	6.11~26	造形作家、大学講師などで構成される「遊びと造形発想の会」と共催で実施してきた展覧会。造形の発想の視点をテーマにとり、展覧会を通して、造形のおもしろさを発見し、体験するものである。今回のテーマは「見つける・見たてる・見なおす」。
オープンスタジオ やってみよう！ つくってみよう！	9.7~12.24 1.10~3.19	開館10周年記念「第10回造形スタジオ展」に向けて、9年間の活動プログラムからテーマを組み替え、プログラム内容を検討し実施した。春休み特別期間までは、主に紙、木といった「素材との出会い展」のプログラムを中心に新たなプログラムも開発しながら、オープンスタジオの形式で制作テーマを決めて実施した。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<夏休み> 造形発見展 「造形宝島」	7.16~8.13 8.15~9.4	造形スタジオ全体にく「宝島」という架空の物語状況や環境の設定を行い、その物語が含んでいる要素をモチーフに造形活動を行った。物語の状況が引き起こすイメージの広がりと造形活動を結び付けるように、環境設定と連動したプログラムを夏休み期間実施した。
<〃> たからじま おんがくかい	8.14・15,20	<造形宝島>では、造形だけではなく音楽から宝島探検の物語をたどる特別イベント「たからじまおんがくかい」を開催。宝島をテーマとした音楽による子どもたちとのコミュニケーションを行った。
<開館記念> ドカドカぐつを つくろう	10.29~11.6	国際家族年記念「親子ワークショップ」として実施。大きな白のクレープ紙を使い、足を包み、ラシャ紙で飾りをつけて作る「ドカドカぐつ」。お父さん、お母さんの大きな靴、子どもたちの小さな靴、親子でそれぞれ楽しい靴が完成した。
<〃> 第9回造形スタジオ展	10.29~11.27	平成5年9月から6年9月までに造形スタジオで実施されたプログラムを、作品と写真などで紹介した。
<冬休み> オープンスタジオ やってみよう！ つくってみよう！	12.13~25 27~1.8	過去9年間のプログラム活動から季節に即したものを見直してピックアップして実施した。クリスマスまでを前半部分にし、新聞紙で共同制作する「ペーパー・クリスマス・ツリー」、粘土のようにパラフィンでいろいろな形を作る「かざりロウソク」を実施した。後半部分では、お正月らしい「パクパクししまい」や冬の森の動物たちをイメージした「森のいえ」、色のない版画「から刷り」を実施した。

名 称	期 間	備	考
<春休み> オープnstジオ やつてみよう! つくってみよう!	3.21~4.9	自然木の調達が比較的可能な伐採時期に当たる春に、「木と造形」の3回の活動の中からプログラムを選び出し、実施した。「はっぱのフロックージュ」、「わぎりゲーム」、「木でなにをつくろうかな」のプログラム進行、材料、道具を再検討し、実施した。	

3) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備	考
こどもクリエイティブクラブA クレイワーク	(人) 小1~高3 (10)	(人) ① 10 ② 10 ③ 10	火曜日 16:00~17:30	造形素材としてのく土>を改めて見直し、遊びを通して更にその魅力が体験できるよう、過去4年間にわたって実施してきた内容に新プログラムを加えた。 (受講料年間 87,000円)	
" B わくわくワーク	"	① 10 ② 10 ③ 10	水曜日 16:00~17:30	子どもたちが見慣れた素材や廃材、そして新素材や工業資材などを違和感なく組み合わせ、全身を使った表現活動や制作活動自体がおもしろく興味を広げるプログラムを実施した。 (受講料年間 63,000円)	
" C ゆかいな造形	"	① 10 ② 10 ③ 9	木曜日 16:00~17:30	子どもたちが日常的にはあまり手にすることの少ない素材を使い、形のあるもの、無いものを包んだり遊びを取り入れたオブジェを作ったり、年齢の低い子どもでも抵抗感なく「立体」を意識できるプログラムを実施した。 (受講料年間 63,000円)	
" D えいぞうたんけん	小3~高3 (10)	① 7 ② 7 ③ 7	金曜日 16:00~17:30	前年度、実施した小学2年生以上対象の「えいぞうたんけん」をベースにし、更に写真、映画、ビデオなどの映像の仕掛けをきっかけに体験を深めた。A V事業部と共同で実施した。 (受講料年間 63,000円)	
" E ハンズワーク	小4~高3 (10)	① 10 ② 10 ③ 7	土曜日 10:00~17:30 (随時)	土曜日の【こどもの城】の開館時間中に、作りたいものを自分で計画をし、時間を気にせずに制作に取り組むことができる、高学年向きのクラブ。 (受講料年間 63,000円)	

[開講回数: 1期(4月~7月)=9回, 2期(9月~12月)=11回, 3期(1月~3月)=7回。講師はすべて【こどもの城】専門職員]



自分たちで木の皮をむき、紙すきを体验
(こどもクリエイティブクラブ
「わくわくワーク」)



ざるに、流木や貝、みつろうで顔を制作
(こどもクリエイティブクラブ
「ゆかいな造形」)

<短期集中講習会>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
夏休み造形教室A 宝島博物誌	(人) 小3以上 (各日10)	(人) 4日間 計 34	7.26~29 12:30~17:00	2つのパネルをちょうどつがいを付けて合わせ、本のような体裁を作る。この中身は自然物や造形で構成され、想像上の宝島探検の採集物や記録の展示された博物誌となっている。ここにはそれぞれの子どもたちが思い描く宝島の自然環境が映しだされる。
〃 B ミツロウの器	〃	〃 35	8.2~5 12:30~17:00	自然に覆われた宝島での生活を想定しての、自然物を利用した器作りを行った。みつばちの巣から採れる油脂である「みつろう」は接着剤あるいは防水剤の役割を果たす。これを塗り重ねるようにして布や木の枝を活用した器を仕上げていく。
〃 C 宝島昆虫標本	〃	〃 40	8.9~12 12:30~17:00	海岸に打ち上げられた流木をベースに、くぎや針金を用いて昆虫を幾つか作る。でき上がった昆虫は、マジックミラーで仕切った標本箱に収められる。マジックミラーの下には昆虫の住んでいた環境が紙で作られ仕掛けた螢光灯をつけると浮かび上がる。
〃 D 宝島セイリング	〃	〃 40	8.16~19 12:30~17:00	宝島と宝島を目指す帆船の様子をそのままジオラマにしていくプログラム。アクリル板の台の上に模型用粘土で作る島と、底に磁石を付けた帆船を浮かべる。長い棒に取り付けて磁石をアクリル板の下から操作すると帆船が動く仕掛けとなっている。
〃 E メリほネット	〃	〃 36	8.23~26 12:30~17:00	海岸に打ち上げられた流木を採集し、その有機的な形を組み合わせた生き物を作る。それはあたかも骨だらけの怪物のよう、ひもでつり上げる箇所を考えて関節をつないだ操り人形にする。その動きはまるで本当に生きているかのような迫力を持つ。



水の流れる宝島のジオラマに、作った舟を浮かべる
<宝島クルーズ>（「造形宝島」から）



「造形宝島」の特別イベント
<たからじまおんがくかい>

瓶にいろいろなものを詰めて制作した
<宝島からの手紙>（「造形宝島」から）

(2) 造形事業部の活動

〔子どもの城〕 造形スタジオは、子どもたちの豊かな感性やクリエイティブな発想を育てていくことを目指して、単に作ることだけではなく、さまざまな実践活動の中で子どもたちの全身的な活動を生み出す環境づくりを行ってきた。本年度は、これまでと同様に①一般来館児へのワークショップ活動 ②講座・クラブの活動 ③グループ活動を中心に造形スタジオの運営を行った。

造形スタジオの日常活動としての“一般来館児へのワークショップ活動”では、前年度の9月から3月まで実施してきた「造形宝島」のテーマを継承し、夏休み特別期間まで引き続きその内容を展開した。これまでの基本コンセプトに加え、新たな環境設定が行われ、その環境に子どもたちが積極的にかかわっていく造形活動プログラムを実施した。

また、本年度の9月から3月までは、これまでの開館以来9年間に造形スタジオが開発し、実践を続けてきたオリジナルプログラムから、テーマを組み替え、内容を再検討し、更に新しい要素も付け加えながら、ほぼ2週間単位で活動プログラムを実施した。これは、来年度に10周年を迎えるに当たり、これまでの造形スタジオの活動内容を問い合わせし、見直しを図ること目的としたものである。

“講座・クラブの活動”では、<子どもクリエイティブクラブ>として5コースを実施した。少人数によるメンバー制のクラブだが、ここでの活動のために、試作され実施された数々のプログラムは、これまでと同様「一般来館児へのワークショップ」の活動内容にも大いに反映されていった。

事前申込制による“グループ活動”では、より多くの団体が活動に参加できるように、一部受入方法を改めた。

1) 平常・特別期間の活動

(ア) 造形発見展《造形宝島》

(平常期間=4.8~7.20、夏休み特別期間=7.21~9.4)

これまでさまざまなテーマを掲げ、造形スタジオではさまざまな企画の催しを行った経緯のうえに、子どもと造形とのかかわりについて新たな切り口からアプローチする試みで、企画《造形宝島》は平成5年の9月から開始され、7年の春休みまで展開された。ここで改めて企画《造形宝島》の試みの内容を説明すると——、

「<宝島探検>という1つの物語の状況設定を行い、その物語状況の中に含まれているさまざまな要素をモチーフとして造形活動を行う」

ということであった。物語状況の持つ魅力によって子どもたちの冒険心をかきたて、個々のイメージ喚起力を状況設定による刺激によって高めることをねらいとして実施したものである。これは、「インスタレーション型ワークショップ」(注)とも呼べるもので、従来のワークショップの形態よりも積極的な仕掛けが造形活動に持ち込まれたユニークなワークショップとなった。平成5年の9月から継続された《造形宝島》のワークショップは期間が積み重なるごとに、造形スタジオ内の「宝島環境」は充実し、子どもたちへのイメージ喚起力も増幅させて、造形的な遊びの可能性を広げるものとなった。

(注) インスタレーション=元来は、据え付け、架設などの意味を持つ普通名詞。最近では、美術用語として、物質としての作品そのものから、ものが置かれた空間や、観客が作品を見ることで起こる状況も含めて作品と考えること。《造形宝島》では、スタジオ全体を宝島と仮定し、そこに参加してくる子どもたちも含めて、1つの環境と考えた。

特に夏休み特別期間中に実施された「宝島クルーズ」や「きょうりゅうかわくだり」などのプログラムは、「インスタレーション型ワークショップ」の形式が最も色濃く出た内容となった。これは造形スタジオ内に縦半分に割った太いパイプ(直径約30cm)で四角に囲んだ水路(縦2.5m、横4m)を作り、2台のポンプで水流を起こして、子どもたちが制作した《ポート》や《きょうりゅう》を流して遊ぶプログラムである。水路の周りは宝島内の様子を表すジオラマ風景や、電気仕掛けの人形が備え付けられており、ミニチュアの宝島世界のファンタジーに参入することができる。子どもたちは《ポート作り》や《きょうりゅう作り》の【制作する遊び】に加えて、制作したものを使って【ファンタジーを遊ぶ】ことができるのである。

このほかにもさまざまなプログラムにおいて、子どもたちが造形スタジオ内に設定された宝島の環境を示すイメージをくみ取っては自分の制作に生かしていくという風景が見られた。これはいわば鑑賞と制作が自然になじみ合うことのできた環境であるともいえるだろう。芸術作品には限らないごく一般的な造形活動の中で、同じ設定の上に立つことによってイメージとイメージを行き交わせ新たなな



宝島のジオラマを双眼鏡を通して探検
（「造形宝島」から）

イメージが生成されていく状況が子どもたちの制作活動の現場に生まれたことは、企画『造形宝島』の最も大きな成功であったといえる。

また、夏休み特別期間中には特別イベントとして「たからじまおんがくかい」を開催。ミュージシャンの渡辺亮氏のブラジルの弦楽器やパーカッションを使った演奏は、子どもたちを宝島の自然に導いた。それは、『造形宝島』の物語に別の角度から膨らみを与える、音によって宝島の風景を感じ取ることができた。

企画『造形宝島』は、子どもの造形活動を展開するうえでの実験的な試みが盛り込まれたワークショップであり、これらの試みから今後の活動に向けて多くの収穫を得ることができた。ここから新たな方向性が生まれることも期待されるものである。

(イ) オープンスタジオ やってみよう！つくってみよう！

(平常期間＝9.7～12.24, 1.10～3.19, 冬休み特別期間＝12.25～1.9,

春休み特別期間＝3.19～4.9)

これまで造形スタジオでは、さまざまな企画のワークショップ活動を実施してきた。展示・体験・制作を基本にした造形スタジオでのワークショップは3つの大きな企画を柱に実施してきた。「素材との出会い展」「造形発見展」「オープンスタジオ」である。平成6年9月からは開館以来9年間に造形スタジオで開発・実施してきたプログラムから、テーマを組み替え、内容を再検討し、更に新たなプログラムを加えながら実施した。これは、来年度に開館10周年を迎えるに当たり、これまでの造形スタジオの活動内容を見直し、再構成することを目的とした活動である。

身の回りにある素材を造形的立場から見直し、子どもが素材と広くかかわり、手を動かし、制作の過程で素材の特質を体験していく活動が「素材との出会い展」である。「造形発見展」は、子どもたちの視点・発想を広げるためのテーマを設け、造形と直接かかわりのないものを造形と結び付け、表現領域の拡大を目指したワークショップである。そして、道具と素材と技法の密接なかかわり合いを、具体的な制作を通して体験するワークショップが「オープンスタジオ」である。それぞれにワークショップのテーマは異なるが、子どもたちにテーマに含まれている要素の何を体験させるために環境を設定していくかということが、一貫した課題である。

テーマを組み替える作業は、1つ1つのプログラムに内在していた造形的要素に改めてスポットを当てるようになった。また、造形的要素以外の要素と組み合わせることで、変化するプログラムもある。例えば、プログラムに季節感を要素として組み込むことで、子どもたちのイメージは広がりを見せたり、同じ素材・技法を使いより身近なテーマをとることで制作の幅が広がり、充実した作品が多く生まれた。これは、プログラムが固定化したものではなく、いろ

いろいろな要素を取り込んだり、スポットを当てることで発展していく現在進行形のものであることを再認識できた。

プログラムは9月からほぼ2週間ずつ、親子プログラムと高学年プログラムの2種類を期間中行った。それぞれに大きなテーマは掲げなかったが、「家」「街」「食」「遊び」「変身」「飾り」などをキーワードにプログラムを構成・実施した。

冬休み特別期間は季節感を重視したプログラム構成で「クリスマス」と「お正月」の2部構成でプログラムを実施した。造形スタジオを訪れた子どもたちの共同作業で徐々に大きく高く作り上げていった「ペーパー・クリスマス・ツリー」は、時間とともに作品自体が変化していく参加型インスタレーション・プログラムといえる。また、春休みは、街路樹の伐採期間に当たり、この時期に最も適した「木」のプログラムを中心に実施した。

2) 講座・クラブ

(ア) こどもクリエイティブクラブA 「クレイワーク」

さまざまな造形素材があふれる現代で、「粘土は楽しい」と実感できるよう子どもたちが遊びのなかから造形的な楽しさを体感できるよう企画したのが本講座であり、5年目を迎えた。

今回は過去4年間のプログラムに加え、焼成すると重くて実用には即さないようなものも制作した。大きな粘土の塊を転がし、ボーリングの球のようなオブジェや、大量の粘土を使い焼成窯に入らないような大きな建物、頭に乗せることのできないような陶器のヘルメットなどダイナミックな活動を中心に行つた。

丸める、つまむ、こねる、延ばす、たたくなどの基本的な技法と全体を使って体験する活動を交互に行い、焼成できる作品は1期から素焼き、本焼き、焼き締め、釉薬（ゆうやく）による肌合いの変化というように、順を追って制作に取り入れた。

(イ) こどもクリエイティブクラブB

「わくわくワーク」

このクラブでは、<土><木><紙>など日常身近な素材を用い、見慣れた素材を改めて見直し、新たな接点を子どもたちとの間につくることで、子どもたちが本来持



こわれた自転車、なべなどを組み合わせた作品
(こどもクリエイティブクラブ「わくわくワーク」)

っている自由な発想や創造力を造形活動を通して表現できることを目的とした。

1年間を通してさまざまな素材を体験するなかで、子どもたちは自分自身を包み込むような広い空間での表現活動から、自分たちが虫の世界に入り込むようなミクロの世界のイメージをつくったり、体全体を意識したプログラム活動にした。

1期では、素材自体に慣れるように＜土＞を中心にプログラムを組んだ。粉状→粘土状→泥状と変化していく＜土＞の過程を体験したり、自分の体重より重い粘土を倒れないようにできるだけ高く積み上げ大きな塔を作った。何かを作るというより体全体を使い、素材を体験するダイナミックな活動であった。

1期の後半から2期は、素材体験から「包む」という行為をテーマにして、更にいろいろな身近な素材を使い活動した。屋外で自分たちが虫になり木立に色とりどりの紙テープで巣を作る、新聞紙で友だち同士を包み合う、石膏体で立体的な足型を作る、いろいろな廃材をつなげビニールテープで包むなどその表現方法は多岐にわたった。

3期は、伐採された桜の枝を煮立て、皮をむき纖維を取り出し、紙をすいた。更に、その紙を染め、木の枝を使ったモビールを制作した。3期全期間を通して子どもたちは物ができる過程の体験を通して、改めて素材の特質、肌触りなどを学んだ。

(ウ) こどもクリエイティブクラブC 「ゆかいな造形」

昨年の「ゆかいな造形」のテーマである、子どもたちにとってのくたからもの＞とは何かを引き続きテーマとして推し進めた。

今回は、1期にくたからもの＞を入れるアクリル板で作る背負いかばんを作ることから、その中に少しずつ、くたからもの＞を作って入れ、最後には宝箱ができるようにした。そして宝箱に入れていくものは、鉱物や流木、蜜蠟（みつろう）、松やに、竹などの自然物を使った制作内容にした。日ごろ、なじみの薄い素材でも、制作行為や道具、方法がおもしろかったり、ほどよい抵抗感があるものには、子どもたちの反応は早く、次々に自分だけのくたからもの＞を制作していった。また、制作内容が「石のおまもり」「ミツロウの器」「石膏のゲーム板」など子どもたちの興味をくたからもの＞へとつなげやすいものにした。

(エ) こどもクリエイティブクラブD 「えいぞうたんけん」

今日の子どもたちの日常生活の環境を見渡すと、写真、映画、テレビ、ビデオ、ファミコンと、さまざまな映像があふれている。子どもたちは、当然のようにこれらの映像環境を生活の一部として受け入れている。しかし、この日常的な映像環境とのかかわりのほとんどは受容一辺倒のもので、子どもたちは一方的に大量の映像情報の洪水に浸っているというのが現状である。こうした現状は子どもに限らず、大人においても映像による情報の無批判な受け入れや、

映像情報の未消化を引き起こしやすく、個人が映像メディアによって振り回されかねない危険性さえはらんでいる。

こどもクリエイティブクラブ「えいぞうたんけん」は、映像を作り上げるしくみを知り、更には自ら映像表現を行うことによって、映像情報を一方的に受け入れるのではなく、能動的に映像を操作できる能力を、さまざまな映像メディアを使った遊びのなかで経験することで獲得できることを目的として開講された。

受講した子どもたちは、映像によるトリック撮影の技法（逆回転映像、クロマキー合成処理、アニメーションなど）を使った映像遊びを経験し、更にはいわば映像文法とも呼べる、場面と場面のつなぎ方によってある文脈を持った映像表現を言葉遊びや映像フィルムの組み合わせの遊びを通して学んだ。そして最終段階ではそれぞれの子どもたちが「わたしの夢」ということをテーマに、現実にはできないことを自ら出演して、ビデオ作品として完成させることができた。それぞれの作品は1巻のビデオテープに編集されて、子どもたちはその複製を「えいぞうたんけん」のクラブ終了時に受け取って持ち帰ることができた。

(オ) こどもクリエイティブクラブE 「ハンズワーク」

小学4年生以上の子どもたちを対象に「作りたいものを自分で計画し、素材を選ぶことから始め、じっくりと制作を進めることのできるクラブ」として開設されたのが「ハンズワーク」である。第2土曜日が休みとなり、土曜日のこのクラブの要望は多かった。しかし、「じっくりと制作を進める」ことのできる子どもたちは意外に少なく、試行錯誤を繰り返した。それでも、1人ひとりの子どもたちは、わずかな時間でも自分のペースをつくり、自主的に制作活動を行った。1年をかけて1つの作品を完成させた子どももいれば、何作品も作りだした子どももいたが、それぞれの子どもが主体的に制作を続けていったことは、貴重な体験になったようである。

3) グループ活動

「かげをうつそう」「木をつくろう」「粘土のジャングル旅行」そして、障害児用プログラムとして「粘土であそぼう」を実施した。

利用団体の約6割が幼稚園、保育所で、4割近くが小学校特殊学級や障害を持ったグループで、「かげをうつそう」や「木をつくろう」のプログラムでも内容を再検討し、それぞれのグループに適した内容に改変し実施した。前年度から実施受入日を火曜日から金曜日までにし、多くの団体を受け入れられるようにした成果が少し現れ、件数は伸びた。

4) その他の活動

(ア) 第9回〈造形スタジオ展〉(10.29~11.27)

第9回造形スタジオ展は、平成5年9月から6年8月までに造形スタジオで実施されたプログラムを写真と作品で紹介したものである。展示内容としては、1年間をかけて実施した「造形宝島」と「こどもクリエイティブクラブ」とスペース・構成ともに2部になった。

造形スタジオ展は、1年間の活動プログラムを総観できる機会である。今回は特に、「造形宝島」のプログラムを一堂に集め、プログラムの流れや関係、そして、探検という物語性が子どもたちにも分かりやすく伝わったように思う。

第1部の「造形宝島」が博物館形式で展示したのに対し、「こどもクリエイティブクラブ」は額縁に納まりきらない作品群を、壁面いっぱいに展示した。

(イ) 第7回〈遊びと造形発想展〉(6.11~26)

〈遊びと造形発想展〉は、昭和63年から毎年〔子どもの城〕ギャラリーを会場として、遊びと造形発想の会と共に催して実施してきた展覧会である。

遊びと造形発想の会は、長年にわたって「造形の基礎とは何か」を実践的に追求するかたわら、数多くのデザイナーや造形作家、造形教育専門家を育ててこられた高山正喜久氏（元筑波大学教授）の活動に賛同する造形教育関係者で構成されたグループである。

今回のテーマは、「見つける・見たてる・見なおす」で身近なものを別の目で見直すことによって新たな造形発想へのアプローチを試みることを軸とした。それぞれの現場で実践しているプログラムやカリキュラムの中から、テーマに基づいた児童・生徒・学生の作品を選び、展示を行った。今回は、来場した人たちの直接の質問や展示内容について、高山氏をはじめとした出品作品指導者自らが説明とQ&Aの場として「ギャラリートーク」を設けた。また、〔子どもの城〕造形スタジオのプログラム「何に見えるかな」を会場で行った。

更に、11月19日には、「かえる・かわる・みちがえる」をテーマに第5回〈遊びと造形発想セミナー〉を〔子どもの城〕研修室で開催し、造形指導関係者約20人が参加した。

5) 実施プログラム一覧

(ア) 造形発見展『造形宝島』 実施プログラム一覧

プログラム名	実施期間(対象)	内容
光るたからもの	4.8~10 (親子)	企画『造形宝島』の中で、自分だけの宝箱作りを行った。あらかじめ台紙の上に指定された箱の展開図に、はさみを入れたり折り曲げたりして立体の箱にしていく。箱の中身は金や銀の色紙、あるいは螢光クレヨンで飾られ、ブラックライトの下で輝く。
宝島の地図	4.8~10 (小3以上)	布の巻物として作り上げる宝島の地図。紙を島の形にちぎり布の上に乗せて、紙の周りを絵具で塗る。紙をはがすと島の形が影のように残るので、そこに島の内外の様子を描き加えていく。布の端にはひもと小枝をつけて巻物止めの仕掛けも取り付けた。
えもじブロック	4.12~5.8 (親子)	粘土で小さなブロックを作り、焼成させてできた煉瓦の表面に、竹ひごの先につけた絵の具で「えもじ=（自由な模様や形の組み合わせ）」を描く。でき上がったそれぞれの作品であるブロックは並べ替えることで模様や形のつながりの変化が楽しめる。
たからじま ヒエログリフ	4.12~5.8 (小3以上)	ポリエステルの容器の中に流し込んで固めた石膏を取り出し、その表面に絵の具を一様に塗る。絵の具が乾いた後で、先のとがった道具で表面を引っかくと石膏の白が現れる。これをを利用して古代の象形文字（ヒエログリフ）にも似た作品作りを行った。
みみだこカリンバ	5.10~29 (親子)	紙コップの口から底にかけて輪ゴムを張り、紙コップを共鳴器、輪ゴムを弦とする楽器である。大きな音を出すことはできないが紙コップの口に耳を当てて輪ゴムの弦を弾くとアフリカの民族楽器「カリンバ」の音のようである。
パンブージャラン	5.10~29 (小3以上)	長い竹ひごをゆっくりと曲げ、端と端とを合わせて針金でしばり付けると、竹で縁取られた空間ができる。その空間に音の鳴る物（穴を開けた木片や金属片など）を通した針金を渡して結び付けると、竹をしならせて振るたびに音の出る楽器ができる。
ジャングルのはっぱ	5.30~6.19 (親子)	それぞれが1枚の「はっぱ」を作り上げるプログラムであると同時に、それをそれぞれの子どもたちが造形スタジオ内に設置された網に結び付けることでしだいにうつそうとしたジャングルのようになり、共同制作の環境づくりの要素も含んだプログラムとなる。
たからじまからの手紙	5.30~6.16 7.10~8.13 (小3以上)	空き瓶の中に手紙を入れ、潮流に乗せてその手紙を届けるという遊びから生まれたプログラム。空き瓶はいわば一種の情報カプセルであり、子どもたちはさまざまな素材によるさまざまな造形を作っては瓶に詰め、飾り付けたっぷりのカプセルを仕上げた。
ジャングルの木	6.21~7.10 (親子)	紙ひもで根を作り、竹ひごで茎を作り、色ラシャ紙で葉を作って仕上げる「ジャングルの木」。幼児の造形制作は、平面的な内容に偏りがちであるが、ここでは地面に対して垂直に立ち上げていく立体的な制作内容となっている。
ミニチュア宝島	6.21~7.10 8.15~31 (小3以上)	文字どおり小さな宝島を制作するものであるが、このプログラムは、複雑さや困難さは少ないもののさまざまな素材やさまざまな道具の活用が要求される。作者である子ども自身の工夫によって多様なアレンジが可能となっている。
たからじまクルーズ	7.10~8.13 (親子)	造形スタジオ内に、太いパイプを巡らせ、ポンプによって水流を起こして、想像上の宝島を流れる川の風景のジオラマを設置した。子どもたちは、クレヨンを塗って防水した自作の紙製ボートをこの川に浮かべ、制作と同時にファンタジーを楽しんだ。
きょうりゅう かわくだり	8.15~9.4 (親子)	造形スタジオ内に、太いパイプを巡らせ、ポンプによって水流を起こして、想像上の宝島を流れる川の風景のジオラマを設置した。子どもたちは、防水製の紙を使って恐竜を作り、エアパッキンの浮きを取り付けて川に流して遊んだ。

造
形

(イ) やってみよう！つくってみよう！ 実施プログラム一覧

プログラム名	実施期間(対象)	内 容
かみのまち	9.7~18 (親子)	ケント紙の帶で丸、三角、四角のユニットを作り、同じケント紙の帶と合成のりで接着して建物を作る。あらかじめ池や山、道などを描いた大きな紙の地図の上に子どもたちがそれぞれに作った家を置いて、紙の街が作られた。
ウッディ・タウン	9.7~18 (5歳以上)	さまざまな形に切り残された木の端材を使ったプログラムである。木つ端を積み木の要領で家の形に組み上げ、木工用ボンドで接着する。不定形に残された木と木の組み合せでモダンな家の集合体を作った
ペーパーマーケット	9.20~10.2 (親子)	新聞紙を丸めたり、巻いたり、ねじったりして、紙を粘土のようにいろいろな形にして野菜・魚などの形を作った。カラーペーパーとラシャ紙の端材を張り合わせ、張り子のように新聞紙を包み込んでいくといろいろな食材が完成した。
メタリック・シティー	9.20~23 (小3以上)	アルミ・真ちゅう・銅の板(0.4mm厚)や金網を厚さ15mmくらいの木つ端の側面にくぎで打ちつけて壁を作り、家に仕上げていく。子どもたちは不定形に切り残された木の中から好みの形を選びだし独特な形の建物を作り上げている。
造形キッチン	9.24~10.2 (小3以上)	アルミの板材と線材を自然木と組み合わせて使い、料理道具を作った。アルミは金属の中でも比較的柔らかい素材であり、細工も簡単である。子どもたちは職人のようにアルミをたたいて延ばし、いろいろな形のスプーン、フォークなどを作った。
ふくろおめん	10.4~16 (親子)	大きな紙を折り、のり付けして頭がすっぽり入るくらいの大きさの袋を作る。頭にかぶり目の位置に印を付けはさみで穴を開ける。クレヨンとラシャ紙などで飾る。袋の形をゆがませ思いの立体面ができる。
ドラヤキだいこ	10.4~16 (小3以上)	セロハンテープのしんを使ってでんでん太鼓ふうにしたプログラム。セロハンテープのしんの上下にポンチで穴を開け、ひごを通す。しんの両面にトレーシングペーパーを張り、ポスカで彩色する。
造形サーカス	10.18~28 (親子)	いろいろな道具の形を印刷した紙の中から1枚選び、その道具の形を使ってサーカスに登場するものを描く。硬い感じのする道具もよく見るといろいろな表情を持っている。
ペーパージャングル	10.18~28 (小3以上)	ペーパーマーケットで新聞紙を丸めたり、ねじって形を作ったようにして動物の手、足、胴体、頭などの部材を作る。結束線という柔らかい針金を使い新聞紙で作った塊を止める。それぞれの部材をつなぐと新聞紙で作った動物ができる。
ドカドカぐつを つくろう	10.29~11.6 (親子)	大きな紙で自分の足を包み、セロハンテープで要所要所を止めしていく。子どもたちは靴を作ることで自分の足の形や量を確認していく。形ができ上がるとラシャ紙などで飾りを付けて完成。国際家族年記念「親子ワークショップ」として親子で実施。
はんしゃめがね	11.7~13 (親子)	ケント紙を虫眼鏡の形に切り抜き、レンズ部分にトレーシングペーパーを張る。アルミ蒸着紙（スペシャリティーズ）の裏面にボールペンで絵を描く。反射面を表にして光を当てる。鏡面にできた凹凸が反射してトレーシングペーパーのスクリーンに映し出される。
ひかりのてんびょう	11.7~13 (小1以上)	黒のラシャ紙に鉛筆で下書きをする。スチレンボードを下敷きにして鉄筆で下書きに穴を開けていく。カラーテレビのブラウン管にできた作品を当てると、針穴から赤・緑・青の光の点が動き始める。
はっぱのはがき	11.15~27 (親子)	絵本に白い紙を張り、葉っぱの形に切る。紙面にマーカーで葉っぱのデザインを施し、絵本面にあて名を書き、造形オリジナル切手を張る。スタンプを押してもらい卵型のポストに投函すると足元に配達されるしくみ。遊びの中で木肌の感触を体験する。

プログラム名	実施期間(対象)	内容
はっぱのはんが	11.15~27 (小1以上対象)	ケント紙に葉っぱの裏面を表にして接着剤で張る。クーピーペンやクレヨンで葉っぱの形を生かした絵を描く。ローラーで絵の具を乗せ、その上に絆木を当ててはれんでこする。葉っぱの葉脈と絆木の木目が合わさり独特な表情を生みます。
糸はんが	11.29~12.11 (親子)	3層の段ボールにクラフトテープの接着面を表にして両端をセロハンテープで止める。クラフトテープの接着面に適当な長さのたこ糸で線画を描く。スタンプインクをつけ版より少し大きめの紙に写し取るとりっぽな版画の完成である。
小さな木のかけら	11.29~12.11 (小3以上)	けやきの木の太い枝に丸のみを打ち込み、ひとかけらのけやきを掘り出す。かけらを紙やすりで丁寧に磨き、油性ペンで模様を描く。その上から木工用ボンドを薄く溶いたものをはけで塗る。
ペーパー・クリスマス・ツリー	12.13~25 (親子)	新聞紙を何層にも巻いて直径10cmくらいの棒を作り、それを何本も束ねて木の幹を作る。子どもたちは、2・3枚の新聞紙を丸めて結束線で結び小さな枝を作る。幹に何本も枝をつないで共同制作の大好きなペーパー・クリスマス・ツリーができ上がる。
かざりろうそく	12.13~25 (小3以上)	パラフィンはある温度を維持すると粘土のように可塑性を持つ素材である。湯の中に入れて熱くして溶かしたパラフィンをラップに薄く伸ばし温度を下げる。たこ糸をしんにしてパラフィンが固まる前にいろいろな形を作り、色パラフィンで彩色する。
ねんどであそぼう	12.13~25 (小1以上)	粘土の大きな魅力の1つはどんな形にでも変化することである。このプログラムは集まった子どもたちが一齊に丸める、こねる、たくさんの粘土の基本的な技法を体験しながら粘土の塊から大きな球、ひも、板などを作っていく。
パクパクしまい	12.27~95.1.8 (親子)	ラシャ紙をくしゃくしゃにもむと布のように質感が変わる。そうしてできた柔らかな1枚の紙を袋のようにして、しし頭を作る。手にすっぽりとはまつたしはパクパクと楽しそうに踊る。
森のいえ	12.27~95.1.8 (小1以上)	正方形の緑の紙を4つ折りにし、1本の折れ線に中央まではさみで切る。切った部分を重ねると立方体の空間が生まれる。小枝や葉っぱで内部を飾る。その部屋に住むのはケント紙に描かれ切り取られた動物たちである。
から刷り	12.27~95.1.8 (小3以上)	銅板の上に線画を描くように、結束線をラジオペンチで曲げてセロハンテープで固定していく。できた版の上に版画用紙を乗せ、プレス機で刷ると色のない凹凸の版画ができる。



「ペーパー・クリスマス・ツリー」



「ふくろおめん」

プログラム名	実施期間(対象)	内 容
木のカード	1.10~22 (親子)	1枚の白い紙に木の絵を描く。輪郭に合わせてはさみで切る。それぞれの木を同じ大きさの絵木に張ると陰と陽の2枚の木のカードができる。色紙やマーカーで葉っぱや実、花を付けて光に透かすと絵木と色によって光の通し方が違い、いろいろな木が生まれる。
くっつけ虫	1.10~22 (小1以上)	5cm幅の床用両面テープを8cmくらい切り、10×12cmの白い紙に張る。接着面に木の枝やおがくず、葉っぱなどで虫の形をコラージュしていく。自然の素材で作られた虫たちはまるで本物のようである。
絵木のむし	1.24~2.5 (小1以上)	木を薄く削り取った絵木の中心にセロハンテープを張り、両端から木目に合わせて裂いていく。何本にも切り裂いた絵木を曲げたり、折ったり、マーカーで色を付けていくと1枚の紙切れのようだった絵木は虫や生き物に変身していく。
まほうの棒	1.24~2.5 (小3以上)	直径1~2cmの枝を20cmくらいに切る。棒を木工用万力に挟み、丸・三角・角・平・粗い・細かいさまざまな棒やすりでいろいろな模様を刻んでいく。木の色と削られた色との清そな色調に更にボスカで彩られ、山林の小枝は魔法の棒へ生まれ変わる。
はっぱのかんむり	2.7~19 (親子)	紙バンドを頭の大きさに合わせて、セロハンテープで止め輪を作る。つや紙やラシャ紙、カラーペーパーで葉っぱを作り、紙バンドに接着する。
小枝とねんどで つくろう	2.7~19 (小2以上)	木から作られた粘土を使ったプログラム。小枝と葉っぱ、そして木の粘土を使い、子どもたちは森の住人を作っていく。作られた生き物たちは、小さな木立ふうに設定された森に置かれる。
おしゃべりバード	2.11・12, 19, 26 (小3以上)	桜やしいなどのやや硬めの木の枝を切り、ドリルで穴を開ける。ドリルの太さより少し太いボルトをねじ込む。ボルトを回して木と擦れる音が鳥の声のように聞こえる。くぎ・針金・金属板で羽や目などを付けると鳥の形をしたバードコールの完成。
ちびなかざり	2.21~3.3 (親子)	粘土を蘭玉くらいの大きさにして焼成したものに竹ひごの先に絵の具を付けておひなさまの顔を描く。段ボールをひな壇にしてラシャ紙やカラーペーパーで飾りを付ける。1対の小さな素焼きのひな人形ができ上がる。
木や虫のワッペン	2.21~3.5 (親子)	丸い型紙を使い、ラシャ紙を直径10cmの円に切り台紙にする。1本の紙バンドを裂いて虫の足を作り、更にさまざまな色紙を切って羽や飾りを付ける。ワッペンという形の規制が逆に子どもたちに制作の意欲をもたらす。
はっぱむしの ペンダント	3.7~19 (親子)	透明セロハンに油性ペンで模様を描く。けやきの葉っぱを透明セロハンで包みセロハンテープで止める。ラシャ紙やカラーペーパーで手足や目を付け、糸を付けて首からぶら下げる1枚の葉っぱはペンダントになる。
ブランコむし	3.7~19 (小2以上)	直径1~2cmの枝を5cmくらいに切る。片方の切り口を棒やすりと紙やすりで削り、丸くする。そこに顔を描き、そのすぐ下に6mmの手回しドリルで穴を開ける。穴より少し細めの枝を通し、両端をたこ糸で結ぶと、ブランコ虫の完成。
はっぱの フロッタージュ	3.21~4.9 (親子)	けやきの葉っぱの着いた台の上に紙を乗せ、クービーペンでこする。浮かび上がった色のついた葉っぱから手足が伸びて虫に変身する。ペンの擦り方の強さによって葉の形が鮮明に出たり、出にくかったりする。
わぎりゲーム	3.21~4.9 (小2以上)	木工用万力で固定した直径7~10cmの丸太をのこぎりで切る。切った丸太の両面がスペスペになるまで紙やすりで磨く。片面に絵の具を塗り、ボスカで模様を描く。最後にカーリングふうのゲームをして磨いた成果を試して遊ぶ。
木でなにを つくろうかな	3.21~4.9 (小4以上)	子どもたちが自分の作りたいものを、木を使って自分の考えと力で制作していくプログラム。まず子どもたちは、作りたいものの図面を描き指導員と制作方法を相談し、材料・道具を選択し制作した。じっくりと時間をかけたプログラムで朝から丸一日かけて制作した子どももいた。

4 音 樂 事 業 部

(1) 6年度活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
みんなでライブ!	毎週火曜日 14:30~	季節にちなんだ童謡やアニメソングなどをスタッフが演奏し、それに合わせて子どもたちが歌や歌遊び、ダンスなどで参加するプログラム。特にダンスでは、前年度に引き続き、親と子がペアになって楽しめる振り付けを工夫している。
水曜コンサート	毎週水曜日 15:30~	スタッフが主に打楽器による演奏を行い、子どもたちがいろいろなリズムや音を聞き分ける。その後、子どもたちが何種類かのリズムや音楽に合わせて、参加者の自由なイメージで、音楽とともに体を動かすのがねらい。
みんなであそぼう 木よう広場	毎週木曜日 14:30~	親子を対象としたプログラム。音楽を聴き体を使って遊び、体を動かして自由に表現をすることをねらいとしている。聴くことに重点をおき、使用楽器も固定せず民族楽器なども用いている。
木ようワンダーランド	毎週木曜日 16:00~	音楽スタッフ扮する「楽器屋さん」では世界各地の楽器を素材別に取り上げ、店長(司会者)と子どもたちのリラックスした交流のなかで、音楽や楽器の楽しさを伝えていくことをねらいとした鑑賞型のプログラム。希望者は楽器の体験もできる。
楽器であそぼう	毎週金曜日 15:00~	「サンバ」音楽を基本に考えており、参加者には楽器を媒介としたさまざまな体験(合奏遊び)を提供することをねらいとしたプログラム。今年で5年目となる活動で、女性ボランティアとともに毎学期新しいプログラムを積極的に展開している。
ワールド・ ミュージック・ チャレンジ	毎週土曜日 13:15~ 15:30~	【こどもの城】所蔵の楽器を毎回2~4つに絞って紹介。演奏を聴く・楽器に触る・演奏してみるという体験を通して、さまざまな楽器の持つおもしろさ、豊かさを実際に感じ、音・楽器で遊ぶという楽しさの原点を子どもたちに発見してもらう。
うたってHappy	毎週日曜日・祝日 13:00~ 14:00~ 15:00~ 16:00~	弾き語りの幅をダイナミックに広げる活動。レパートリーは童謡のほかに、テレビアニメのヒットソングやドラマの主題歌など子どもからのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる時間になっている。
サンバコンサート	わいわいスタジオ が、音楽事業部担 当ない日曜日・ 祝日(隔週~月 2・3回) 14:30~	今までどおり、コンサートのオープニング、楽器紹介、ダンスの3部構成になっているが、楽器紹介とダンスの部分は来館者の状態を判断して、毎回説明を変えてみたりしながら、少しずつ新しいことを試みて、マンネリ化を防いでいる。
音楽広場		手遊び、歌遊び、リズム遊びを中心にして豊富な内容で展開するプログラム。担当職員1人ひとりの個性とレパートリーを生かした内容を行い、またパネルシアターやダンスなども豊富に加えたバラエティー豊かなプログラムである。
いろいろ楽器 コンサート	毎週日曜日・祝日 16:30~	世界各地の楽器を演奏し、紹介する鑑賞型のプログラム。世界のさまざまな楽器を演奏し、リズムを感じさせ、楽器の特長を紹介し、居ながらにして音楽の豊かな世界を実感するプログラムであり、今後も新しい音楽を紹介していく予定。
わいわいスタジオ	日曜日・祝日 (隔週) 13:30~ 15:30~	来館している親子全般を対象にしているコンサートで、特に幼児でも楽しめるような内容に構成している。アフリカ、インドネシア、ブラジル、中国などの民族音楽、絵書き歌やロックなど、さまざまなジャンルの音楽を取り上げるように努めている。

音
楽

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<児童福祉週間> 親子であそぼう 音楽広場	4.29~5.5 (音楽スタジオA)	3~5歳児とその親を対象に親子の触れ合いを大切にした音楽遊びを行った。手遊び・パネルシアター・ダンスを中心としたものとスカーフを使い「桃太郎」を題材としたリトミック的なプログラムの2種。親子で夢中になる姿が印象的。
<〃> 音楽の世界旅行	4.29~5.5 11:00~ 13:30~ 15:30~ ※4.30は2回のみ (音楽スタジオB)	子どもや大人がゆったりとさまざまな国の音楽で世界巡りができるようにした。基本的には元気で明るい性格を持った音楽に、ユニークな形や特徴的な音を持つ楽器が日替わりで登場し、子どもたちに大いに興味を持たれた。
<〃> うたってHappy	4.29~5.5 13:00~ 14:00~ 15:00~ 16:00~	バンド演奏による弾き語り。毎回そのときの歌姫の個性により、バラエティー豊かな内容。子どもからのリクエストも多く、時間にはとても大勢の人が集まつくる人気の高いプログラムで、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しんでいる。
<〃> おんがくがスキ!	5.3 11:00~ 13:30~ 15:00~ (青山円形劇場)	音楽事業部の職員とオブザーバーによる4人編成のバンドコンサート。楽器でおしゃべりをしたり、いろいろな打楽器の紹介、スプーンの演奏、有名な童謡をさまざまな国の大囲気でアレンジした演奏、観客参加の手遊びなどで構成。
<夏休み> ワイワイおんがく村	7.21~8.7	音楽の各エリアを村として設定し、スタッフはその住人。童謡などを演奏し、子どもも打楽器などで遊ぶ「ワイワイバンドこんさあと」や、民族楽器などを紹介する「村の楽器じまんこんさあと」などのイベントを実施した。
<〃> 南洋音楽座	7.21~28 (音楽ロビー、音楽スタジオB)	インドネシア・バリ島のガムランを体験するプログラム。参加劇の形をとり、幼児は踊りを、小学生以上は楽器演奏を体験。音楽スタジオBを南の島ふうにセットし、内容も昨年よりも更に分かりやすく充実させ、満足感を持って体験できたようだ。
<〃> ゆったり親子の おんがく園	7.21~8.31 (音楽スタジオA)	0歳~3歳の幼児と親が一緒にゆっくりと音具で遊ぶことのできる部屋としてこの夏からオープン。特にイベントは行わず、あくまでも親子で触れ合いを楽しむためのスペースとして位置付けた。松本秋則氏製作の「竹の楽器のオーケストラ」も展示。
<〃> 面白楽器商店街	8.9~31	各國の民族楽器と手作り楽器などを紹介・体験できる各コーナーを楽器店として設定し、順番に各店が主催するイベントを行う。1日1回商店街全員によるサンバコンサートも行った。
<開館記念> 親子で歌ってHappy Happy	10.29~11.3 13:00~ 14:00~ 15:00~ 16:00~	通常行っている「うたってHappy」の中に、子どもたちがマイクを持って歌を歌うコーナーを設けた。リストの中から選曲している間にお姉さんが童謡を聴かせるようにして、スムーズな流れになるよう新たに工夫した。参加者には記念品を進呈。
<〃> 親子でおどろう 音楽広場	10.29~11.3 14:30~	親子がより楽しく音楽を体験できることをねらいに、だれでもよく知っていて、大人にはちょっと懐かしいフォークダンスや、ボルカを取り上げた。人が輪になり、アコディオンやマリンバの生演奏に包まれ、とてもいい雰囲気でダンスを楽しめた。
<〃> 親子で体験 竹の楽器の アンサンブル	10.29, 30, 11.3 11:00~ 13:00~ 15:00~ (音楽スタジオA)	インドネシアの竹の楽器アンクルンの演奏を親子で体験するプログラム。事前に参加者を募集し、1時間にわたり、アンクルンの演奏方法だけでなく、インドネシアの人々の生活、文化や音楽をスライドを使って紹介し、参加者の興味を引きつけていた。
<〃> いろいろ楽器 コンサート	10.29・30, 11.3 16:30~	世界各地の楽器を演奏し、紹介する鑑賞型のプログラム。珍しい楽器に加え、その独特的な音楽を十分実感できる楽しいコンサート。
<冬休み> 元気なクリスマス ソングコンサート	12.18, 23~25 13:30~ 14:30~ 15:30~ 16:30~	今回初演となるエレクトリックアンサンブルのコンサート。有名なクリスマスソングの数々をシンセサイザー、ベース、ドラム、パーカッションのアンサンブルで元気に演奏した、鑑賞型のコンサート。

名 称	期 間	備 考
<冬休み> うたってHappy	12.18, 23~1.8 13:00~ 14:00~ 15:00~ 16:00~	バンド演奏による弾き語り。毎回そのときの歌姫の個性により、バラエティー豊かな内容。子どもからのリクエストも多く、時間にはとても大勢の人が集まつくる人気の高いプログラムで、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しんでいる。
<〃> いろいろ楽器 コンサート	12.18, 23~1.8 16:30~	年内は通常日曜日・祝日のコンサートとほぼ同じ内容だったが、正月期間は、箏、和太鼓、中国の打楽器(京劇や新年の行事で演奏されるもの)など華やかでおめでたい感じの曲を集め、にぎやかに演奏した。
<〃> ゆったり親子の おんがく園	12.23~1.8 (音楽スタジオA)	夏休み終了後も多くの問い合わせがあり同じ形で開園した。今回はよりよい環境の提供に重点をおいた。混雑した館内で安心して過ごせる貴重な場所であるという声が多く聞かれ、何組もの親子が一日に繰り返し訪れていた。
<〃> 初春箏之館	1.3~8 (音楽スタジオB)	日本の伝統楽器「箏」の演奏を体験するプログラム。より短時間で簡単に弾けるように体験曲も「チューリップ」にするなど工夫し、幅広い層の子どもたちに「箏」のおもしろさを感じてもらえたようだ。太鼓道場とともに入れ替え制で実施した。
<〃> 太鼓道場	1.3~8 (音楽スタジオB)	締め太鼓、うちわ太鼓、桶胴、太太鼓などの和太鼓を演奏するリズム遊びのプログラム。さまざまな年齢の子どもたちが一緒に演奏する。年齢は幼児から中学生まで幅広いので、どちらにも楽しめるようにリズムや担当する楽器などを工夫した。
<春休み> ぼくらのサウンド'95	3.25 14:00 (青山円形劇場)	三味線の3クラス、ガムランの2クラスのコンサート。三味線の独立した演奏の最後に、日本のわらべ歌による合同演奏を行い、ガムランの演奏に移行する構成。子どもたちによる司会・進行は見る者を最後まで引きつけていた。
	3.26 13:00 (〃)	リズム・ムービングA,B,C、およびリズム・ムービング&パークッションとパークッション・アンサンブルの合同コンサート。体や声、言葉を使つたりズムの表現や、オルフル楽器、パークッションのアンサンブルをバランスよく展開。
	" 15:00, 17:00 (〃)	リトミック初級・II・IIIと合唱講座・合唱団・混声合唱が一堂に会してブロードウェーのミュージカルやディズニーの歌、踊り(リトミッククラス)をにぎやかに楽しく披露。幅広い年齢層の子ども同士の交流が特徴的。毎回満席となっている。
	3.27 14:30 (〃)	エレクトリック・アンサンブル、集まれ!みんなのリズム(サンバ)、和太鼓、のコンサート。単独の演奏ではその講座の特徴が十分に発揮され、八木節の合同演奏ではジャンルの異なった音楽が1つとなり、音楽の楽しさを表現した。
<〃> 春は元気に1.2.3! 元気がでるリズム	3.28~4.5 14:30~	アフリカのリズム体験と、ブラジルのサンバのリズム体験の2部構成。アフリカのリズムはアフリカの太鼓のアンサンブルに合わせて、子どもはスタッフの手作りの太鼓でリズム遊びをしたり、アフリカの歌を歌った。サンバでは缶で作った振る楽器「ガンザ」に持ち替え、演奏者と一緒にパレードをしながらリズム遊びを行った。
<〃> いろいろ楽器 コンサート	3.28~4.5 16:30~	世界各地の楽器を演奏し、紹介する鑑賞型のプログラム。珍しい楽器に加え、その独特的の音楽を十分実感できる楽しいコンサート。この春は、サンバとアフリカの音楽を新曲にして、フレッシュなスタートを切った。
<〃> うたってHappy	3.28~4.5 13:00~ 14:00~ 15:00~ 16:00~	バンド演奏による弾き語り。毎回そのときの歌姫の個性により、バラエティー豊かな内容となっている。子どもからのリクエストも多く、時間にはとても大勢の人が集まつくる人気の高いプログラム。今回は卒業、入学にちなんだ曲を多く取り上げた。
<〃> ゆったり親子の おんがく園	3.29~4.5 (音楽スタジオA)	利用する親子から、音具についてなどの積極的な問い合わせが増えた。スタッフは子どもだけでなく親子にかかるようにし、よい雰囲気づくりを心がけた。3回目を迎えたスタッフと入園した親子の間でよい交流を持つことができた。

音
楽

3) 講座・クラブ

〈講座〉

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
リズムムービング A	(人) 3歳児 (12)	(人) ① 14 ② 11 ③ 10	火曜日 13:30~14:30 (全32回)	子どもに自分の名前を使ってリズム遊びをさせることから始まって、身の回りのさまざまなことからリズムを感じさせ、子どもたちの眠っている感覚を振り動かし、創造性を引き出し、はぐくむことをを目指した活動を行っている。主にコンガ、ポンゴなどの打楽器、リズムやメロディー、ハーモニーを即興で演奏できるオルフ楽器を使用しているが、幼児のクラスはそのほかに、全身でリズムを表現したり、造形活動を行ったりしている。
" B	4歳児 (15)	① 16 ② 12 ③ 8	火曜日 14:30~15:30 (全32回)	
" C	5歳児 (15)	① 12 ② 9 ③ 6	火曜日 15:30~16:30 (全32回)	
リズムムービング&パーカッション	小1~3 (20)	① 26 ② 26 ③ 25	火曜日 16:30~17:30 (全32回)	リズムによる自己表現も行う。更に読譜力など、音楽的基礎力の理解、打楽器演奏法の導入、オルフ楽器を使った即興演奏をするなど一步踏み込んだ指導を行う。
お母さんも一緒にリトミック初級	(組) 3~5歳児と母親 (20)	(組) ① 25 ② 21 ③ 20	水曜日 13:30~14:30 (全32回)	子どもの発達段階に即したリズム遊び、歌遊び、簡単な造形活動を通して親子のコミュニケーションを図り、音楽を楽しむ心と豊かな感受性を養うことをを目指している。
" II	4歳児と母親 (20)	① 16 ② 16 ③ 16	水曜日 14:30~15:30 (全32回)	初級で培ってきた感性や音に対する感受性を引き続き伸ばすよう心がけ、それぞれの成長の実際に合わせながら、個性豊かな発達を促すような活動へと更に高めていっている。
" III	5歳児と母親 (20)	① 17 ② 15 ③ 13	水曜日 15:30~16:30 (全32回)	就学を控えるころになると子どもの感受性も親離れが始まり、子どもたち同士の接触の機会が多くなり、生き生きと目を輝かせて音楽を楽しみ、遊んでいる子どもたちが印象的。
おんがく星 みつけた	2歳児と母親 (30)	① 30 ② 30 ③ 30	木曜日 10:30~11:30 (1期10回 2期10回 3期9回)	就園前の幼児と母親が対象で、リズム遊びや手遊びを中心に、造形活動や身体表現なども取り入れた活動を行っている。母親とスキシップをしながら楽しく音楽と遊べることを目指す。
和太鼓グループ	(人) 小3~高3 (12)	(人) ① 17 ② 16 ③ 12	土曜日 14:00~15:30 (全32回)	日本の伝統音楽の1つ、湯島に伝わる「助六太鼓」のコース。大太鼓、中太鼓、締め太鼓の3種の太鼓を使って演奏する組み太鼓。樂譜は一切使わずに、口唱歌で指導をしている。
集まれ! みんなのリズム	小2~中1 (10)	① 8 ② 10 ③ 10	土曜日 15:30~17:00 (全29回)	ブラジルの独特的な打楽器を使い、サンバのリズムを楽しくアンサンブルするコース。合奏だけにとどまらず多彩なリズムを生かし、体操、ゲームなどの体を使う活動も取り入れている。
合唱講座	小1~4 (30)	① 41 ② 41 ③ 39	土曜日 14:00~15:30 (全32回)	遊ぶを通して無理なく声を出し、身体表現なども取り入れて、上手に歌うことだけではなく、体全体で音楽を表現するユニークな合唱活動プログラム。
混声合唱	高校生以上 (15)	① 32 ② 29 ③ 26	土曜日 19:00~21:00 (全32回)	子どもたちに豊かな音楽や表現のすばらしさを伝えることを指している。コンサートや合宿などのときは、常に「こどもの城児童合唱団」と活動をともにしている。

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
エレクトリック アンサンブル	(人) 小5～高3 (8)	(人) ① 9 ② 9 ③ 8	日曜日 10:00～12:00 (全29回)	アンサンブルの中での各楽器の役割が分かりやすいバンド形式のプログラム。無限の音色が操れるシンセサイザーを活用することで、さまざまなジャンルの音楽にチャレンジしている。
三味線講座 初級	小1～高3 (12)	① 8 ② 7 ③ 10	日曜日 10:00～11:15 (全32回)	日本の伝統音楽でありながら、日常では触れる機会の少ない三味線。五線譜に慣れている子どもたちにも、分かりやすい譜面を取り入れることや、なじみのある童謡やわらべうたから始めるこによって、楽しみながら楽器に親んでいく。進むにしたがって伝統的な長唄の曲にも取り組んでいる。青山円形劇場での「おまつり劇場」や、音楽スタジオでのイベントなどにも出演した。合奏することによって、始めたばかりの子どもでも、楽しく演奏に参加している。
" 中級	"	① 4 ② 4 ③ 4	日曜日 11:15～12:30 (全32回)	
" 上級	"	① 15 ② 11 ③ 11	日曜日 12:30～13:45 (全32回)	
ガムラン講座	小1～高3 (10)	① 14 ② 15 ③ 16	日曜日 14:00～16:00 (全32回)	インドネシアの青銅の打楽器アンサンブル「ガムラン」の初心者のクラス。さまざまな音楽的な要素が潜在しているガムラン音楽は、アンサンブルでその特異さが分かる民族音楽。
おとなための ガムラン講座	18歳以上 (15)	① 21	日曜日 18:00～20:00 (1学期のみ)	インドネシアの代表的な民族音楽である「ガムラン」の幅広い世界を見聞し、既成の音楽感にとらわれずに、音楽の多様な可能性を体験する入門的なコースである。
" 特別講座	18歳以上	20	日曜日 10:00～17:00 (1回12月18日のみ)	おとなためのガムランコース修了後、好評で続けて受講を希望者が多かったため開講した。10回の講座の経験を、再確認し、更に深めるという、より充実したコースとなった。

〈クラブ〉

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
パーカッション アンサンブル	(人) 小4～高3 (15)	(人) ① 19 ② 17 ③ 16	火曜日 17:30～19:30 (全32回)	さまざまな打楽器をふんだんに使い、演奏したり、体を楽器にしてリズム打ちを行ったり、子どもたちはじけるようなリズム感を表現する。初心者も、ていねいな指導で、すぐに楽しんでいる。
こどもの城 児童合唱団 I	小2～3 (30)	① 44 ② 41 ③ 39	土曜日 15:30～17:30 (全32回)	音楽を通し、協調性・創造性・幅広い知的好奇心を養い、豊かな音楽性を育てることを目的としている。合唱活動だけでなく野外活動、シンセサイザーやリズム楽器による合奏なども体験するユニークな総合プログラムを展開。
" II	小4～中3 (60)	① 65 ② 64 ③ 60	土曜日 17:00～19:00 (全32回)	
ガムラングループ	小2～高3 (15)	① 8 ② 8 ③ 8	日曜日 16:00～18:00 (全32回)	ガムラン講座の継続者のコース。年齢の差を超えて、子どもたちは打楽器の合奏を楽しむことができる。初級卒業者と経験者が一緒になってアンサンブルをして練習している。

4) その他（野外活動など）

名 称	期 間	備 考
子どもの城児童合唱団 児童福祉文化賞発表会	5.7	(財)朝日生命厚生事業団の主催で厚生省などが後援する平成6年度児童福祉文化賞表彰式にゲストとして公演。合唱団I・IIのクラスのメンバーと混声合唱団のメンバー合わせて110人で出演。会場は、朝日生命ホール。
おまつり劇場 '94	8.20,21	今年は「こども風土記・五つの節句」というタイトルで青山円形劇場で開かれ、三味線グループからは、受講生20人、和太鼓グループからは、受講生14人が出演した。
平成6年度 子どもの城児童合唱団 夏期合宿	8.25~29	毎年行っている夏期合宿を三重県熊野少年自然の家で行った。28日には御浜町中央公民館のホールでコンサートを行い、御浜町リトルリトルコーラスの小学生とのショイントコンサートも実施した。
「おんがくがスキ！」 静岡県島田市公演	10.21	音楽事業部のオリジナルプログラムが、静岡県島田市健康課から依頼され、市の主催する健康まつりの一貫として出張演奏を行った。1回だけの公演だったが、小学生の親子を中心に580人が参加。
子どもの城児童合唱団 キリン劇遊びフェスティバル	1.28	(社)全国児童館連合会、(財)キリン福祉財団、(社福)子どもの国協会の主催で厚生省が公演するキリン劇遊びフェスティバルにゲストとして参加。合唱のほかにも詩の朗読などを行った。会場は、子どもの国。
子どもの城混声合唱団 狹山市立第2児童館合唱団コンサート	2.11	かねてより交流のある狹山市立第2児童館の合唱団の定期コンサートに、混声合唱団のメンバーが友情出演。狹市民会館中ホールにて公演。
「いろいろ楽器コンサート」千葉市稲毛海岸 わかくさ幼児教室	2.20	千葉市美浜区稲毛海岸公務員住宅内にある「わかくさ幼児教室」の依頼により、同教室3~5歳児70人を対象に「いろいろ楽器コンサート」を実施した。音楽事業部の日々の活動を地元で展開してほしいといった父兄の強い希望により実現した。
和太鼓グループ 日本の楽器で国際交流	3.11	世田谷区の上祖師谷ばる児童館からの要請で和太鼓グループの受講生、指導の今泉氏が演奏および体験指導を隣接する留学生会館内講堂で行った。参加者は留学生会館内の居住者、地域住民など。各国の音楽を通じ文化、国際交流の場となっていた。
「こんにちは！春」 静岡県島田市親子リズム体操教室	3.20	静岡県島田市健康課の依頼により、健康課および福祉事務所の主催する親子学習会のリズム体操指導を行った。1~3歳児とその母親、スタッフなど約40人が参加。親子の交流を図り豊かな時間を持ち、楽器・題材の選び方なども参考になったようだ。



「初春箏之館」



「親子で体験 竹の楽器のアンサンブル」

(2) 音楽事業部の活動

本年度の事業で特筆すべきものは幾つかあるが、①児童福祉週間（ゴールデンウイーク）の「こどもフェスティバル」（青山円形劇場）で昨年に引き続き“おんがくすき”の公演「おんがくがスキ！」②夏休みなどの特別期間に3歳以下の幼児と親を対象にした「ゆったり親子のおんがく園」（音楽スタジオA）を開催——の2つが独創性と新鮮さにおいて、重要視すべきものである。



“おんがくすき”の「おんがくがスキ！」公演

1) 平常期間の活動

平常期間には、一般来館児活動と並行し、音楽スタジオAとBで講座・クラブを運営しているために、一般に使用するスペースは、日曜日・祝日などに音楽スタジオBで行うコンサート、イベントなどを別とすれば、基本的に音楽ロビーに限定されている。昨年とほぼ同様の活動を行った。

平日のプログラムが特に職員の固有のレパートリーや得意な楽器などに負っているところが多いために、各々のスタッフの特長を生かした日替わりのプログラムが主になっている。特に幼児の多い平日は、手遊び、リトミック、音楽遊びなど、親子が一緒になって楽しめるプログラムを中心とした“子育て支援”あるいは“家族ぐるみ”が基本となっている。これらのプログラムは、おおむね来館者の多い午後の時間帯、2時から3時に行われ、イベントやコンサートの形態を採用している。

イベント以外の時間は、ロビーに配置してあるさまざまな楽器（マリンバ、ガンザ、ポンゴ、シンセサイザー、タンバリン、コンガ、アフリカンタムタムなど）をだれでも自由に利用できるように「いろんな楽器やってみよう」の時間にし、親子で自発的に楽しんだり、スタッフの弾き語りに合わせて、合奏参加したり、活動内容はさまざまである。音楽遊び、音楽体験への導入的な活動と位置づけている。

高学年の子どもたちが多く来館する土曜日、日曜日、祝日などには、音楽スタジオBを利用して、年齢層にかかわりなく楽しめるプログラム「わいわいス

タジオ」を実施し、さまざまな音楽が体験できるコンサートを行っている。

火～土曜日の日替わりのプログラムは過去の経験を生かして、幼児ばかりの参加形態になる場合には、付き添いの保護者も参加するように積極的に呼びかけたり、あるいは親子が対象のプログラムにするなど改善に努めている。基本的には、前年度と同様の活動を展開した。

音楽ロビーを利用する親子連れを観察すると、平日は幼児連れが多く、日替わりの平日定番プログラムを特に求めて来館する親子が多くなってきている。日常活動が活性化してきていると言える。また夏休みなども、事前のプログラム告知が行き届き始めてから、特定の活動に参加し、音楽体験を豊かにしようと繰り返して来館する利用者が増えてきている。

2) 特別期間の活動

(ア) 児童福祉週間（ゴールデンウイーク）

音楽ロビー、音楽スタジオA・Bでの活動のほかに、5月5日に青山円形劇場で音楽事業部のグループ“おんがくずき”による「おんがくがスキ！」の公演も行った。来館者の多いゴールデンウイークであったので、平常期間のロビーでの活動をより充実した形で実施した。

「親子であそぼう音楽広場」は、子どもと親を対象に定員制をとって実施した。子どもの日常生活に題材をとった歌遊びやリズム遊び、パネルシアターなどを通じて、親子のコミュニケーションを図り、家庭でも家族みんなで楽しめる音楽遊びを紹介することをねらいとしている。1回目と2回目とは違ったプログラム内容で行ったが、今年は特に親子の触れ合いを大切にした遊びを中心に構成した。参加者は毎回ほぼ満員となり、どの親子も積極的に楽しんでいた。参加者はピアノやさまざまな打楽器の音に巻き込まれ、音と動きが一体となり、生き生きと親子で遊ぶ楽しいプログラムとなった。

「音楽の世界旅行」は、昨年に続く企画で、「わいわいスタジオ」と同じ規模のコンサートを実施した。昨年の経験から、青山円形劇場の公演「こどもフェスティバル」とかち合わないように時間帯などの改善を試みたが、結果はたいして変わらず、今後の検討課題として残っている。なお、6日間のプログラムは以下のとおり。

4月29日＝トルコの旅

30日＝日本の旅（チンドン）

5月1日＝南米アンデスの旅（フォルクローレ）

3日＝インドネシアの旅（バリ島ガムラン影絵人形劇）

4日＝ブラジルの旅（サンバ）

5日＝地中海の旅

青山円形劇場で実施された「こどもフェスティバル」で昨年に引き続き“おんがくづき”の公演「おんがくがスキ！」を行った。昨年の事業年報でも報告したが、「おんがくがスキ！」は音楽事業部が日常活動から地道に掘り起こしてきたもので、短時間ででき上がったものではなく、一般来館児との対応活動や「わいわいスタジオ」のミニコンサートなどで恒常に続けてきたものが結晶化したものと言ってもよい。4人の出演者（今年は女性ボーカルを入れて4人編成となった）が、パーカッション、ベースギター、シンセサイザーなどを縦横無尽に使いこなし、歌遊びあり、手遊びありで、「音楽はひとりでなく、みんなといっしょに歌ったり、演奏したりすればもっと楽しくなる」という、ふだんの音楽活動からのメッセージを込めて4人の出演者がみんな音楽が好きということを前面に押し出し、観客に参加を呼びかけるこのコンサートは今までにないたぐいの公演である。

観客が単に聞くコンサートとか、手拍子を舞台の演奏者に合わせて打つとかいうものではなく、客席の観客とステージの演奏者との間の境界がなくなり、両者がまさに一体となって行う、眞の意味における参加型のコンサートといえるであろう。このコンサートは、近い将来に専門家から参加型の音楽活動の1つのモデルとして認知されると思われるほど時代を先取りしている。

このプログラムは、本年度から国庫補助事業として始まった「動く子どもの城」の派遣事業の1つになっているが、年間の派遣の頻度が多い場合には、通常の業務に支障が生じる可能性もあり、十分対応ができなくなることが予想される。

(イ) 夏休み特別期間

春休みや夏休みなど、来館者が特に多い期間には、大きな子どもたちの活動が躍動的で、激しいものになり、静かに親子が楽しめるプログラムが少なくななり、幼児連れの親子がのんびりと安心して遊べるスペースがなくなってしまう。そのために、ロビー活動の1つとして年来計画していたプログラムを夏休みに試みに実施した。内容は、3歳未満の乳幼児と親とを対象にして、音のできる玩具（音具）を取りそろえて、親子がのんびりと、気の向くままに楽しめる「ゆったり親子のおんがく園」というものである。フローリングの床で、ゆったりとくつろ



親子でのんびり、「ゆったり親子のおんがく園」

げる音楽スタジオAで実施した。

乳幼児が安全に遊べる空間をこのような形で実現したとして利用者の反応もたいへんよく、今後も継続して設定してほしいという声がたくさん聞かれた。親子のコミュニケーションを最重要視するために特にプログラムの提供をすることはせず、子育て支援の一環としてとても効果的な場となった。この企画は好評であったために冬休み、春休みにも再び実施した。

また、夏休み特別期間中の8月11日から31日まで、“音と造形”をテーマにしている造形作家の松本秋則氏の竹製の「音具」を10作品借用し、同じスペースの一部に設置して親が音に耳をすまし、良質の音楽体験ができるような環境づくりも考えた。

企画意図を十分に理解し、音の出る玩具を幼児とともに楽しむ親もいたが、子どもを放置したまま、休憩室と取り違えたかのようにくつろいでしまう大人も見かけられ、施設を積極的に活用できない大人をどのように啓発していくか、これは非常に大きな課題といえる。[こどもの城]は、活動の対象を子どもだけではなく、随伴してくる親や保護者にまで広げてゆくことは、今後の方針として検討すべきものではあろう。「子育て支援」という概念からすれば、事業部としては今後取り組まざるをえない事業になってくるのではないかとも予測している。

夏休み前半の「ワイワイおんがく村」では、音楽のエリアを村として設定し、その住人であるスタッフが、さまざまな活動を提供するというコンセプトで行った。来館児・者の多い午後1時以降に、30分ごとに「ワイワイバンドこんさあと」(2種類)、「村の楽器じまんこんさあと」(3種類)をイベントとして行い、子どもたちが一日遊んでいても飽きないよう工夫した。

童謡など親しみやすい曲を歌とキーボード・ドラム・ベースなどで村人たちがにぎやかに演奏し、子どもたちが太鼓や木琴、タンバリンなどの打楽器で演奏に参加したり、手遊び・ダンスなどを体験する「ワイワイバンドこんさあと」は、子どもたちにとって親しみやすく、常に人気のあるプログラムとなっていた。ただ、比較的低年齢の子どもたちに特に人気があり、小学生の高学年くらいとなると、興味があっても恥ずかしがり、なかなか積極的に体験できない雰囲気があることも多く、広い年齢層に対応するためには今後一層の工夫が必要である。

「村の楽器じまんこんさあと」は、さまざまな民族楽器を紹介するコンサート形式のイベントだが、時間帯によって、子どもたちも楽器の演奏体験ができるようにし、好評だった。コンサートは、幼児から大人まで皆で楽しめ、特に夕方4時30分から行った「村の楽器じまんスペシャルこんさあと」は、一日たくさん遊んだ後にはっと一息つくように和やかに行われ、特色を出していた。

「南洋音楽座」はインドネシア、バリ島のガムランを体験するプログラム。音楽スタジオBで開催したが、スタジオという特色を生かして、照明、大道具、装飾などで南国バリをイメージしたセットを作り、参加劇の形をとって自然に体験ができるように工夫した。イベントは、2回行い、1回目は幼児対象に音楽に合わせて踊る活動を、2回目は小学生以上を対象に楽器の演奏体験ができる活動を行った。定員制にしたので、積極的に楽しもうという姿勢の親子が多く、それぞれの子どもたちが充実した体験を味わい、満足していたようだ。見知らぬ文化を遊びを通して自然に体験するというスタイルが十分に実現できた。楽器の数やスタジオの広さの問題などで、一度に多数の子どもたちが利用できないのが課題である。

夏休みの後半は「面白楽器商店街」というタイトルで、音楽のエリアを楽器屋が立ち並ぶ商店街に見立て、各店がさまざまな楽器・音楽を紹介する企画を催した。ガムラン屋（インドネシア・バリ島のガムランの演奏を体験）、めずらし屋（中国、日本、アフリカ、ブラジルなどの民族楽器をコンサート形式で紹介）、竹屋（インドネシアのアンクルンの演奏を体験）、電気屋（シンセサイザーなどの自由利用）、がらくた屋（手作り楽器の紹介、体験）、和太鼓屋（和太鼓の演奏体験）を30分ごとのローテーションで開店し、また全体のイベントとしてブラジルのサンバのコンサートを行った。

〔子どもの城〕が所蔵する楽器をうまく活用しており、また子どもたちにとっても日ごろ身近に接することのなかなかできないさまざまな音楽を実際に体験できたりしたこと、夏休みの貴重な経験を得られたようだ。幅広い年齢層に対応でき、興味を引きやすい装飾（ちょうちん、万国旗）などによる雰囲気づくりも効果的だった。今後の課題としては、①体験方法を更に充実させること ②がらくた屋の手作り楽器の作り方・材料に対する質問が特に後期に多く、自由研究などの宿題対策の一端を担うものを今後、より強化してみること——などがあげられる。

(ウ) 開館記念特別期間

企画部の主催で、国際家族年関連事業のために、厚生省、子ども未来財団の代表出席の開館9周年記念および国際家族年記念のセレモニーがアトリウムで実施された。その際に、インドネシアの竹の楽器アンクルンなどで演奏を行い会場の雰囲気づくりに尽力した。竹



手作り楽器の店「がらくた屋」

の楽器アンクルンの柔らかい音質と珍しい楽器の形態に初めて接する人も多く、好評な背景演奏であった。開館記念日のセレモニーを盛り立てる事業として十分機能したと判断する。

また、国際家族年のプログラムの1つである「おやっ！と発見 子と発見」でアンクルンのワークショップおよびロビーでの特別プログラムを実施した。

(エ) 冬休み特別期間

年末年始は、最も伝統的な行事が多い季節で、その時期に日本の伝統的な音楽を体験してもらうということを中心に行われた。12月中は、クリスマスの日も含まれているので、「元気なクリスマソングコンサート」と題し、スタッフのアレンジによるにぎやかなクリスマソングの名曲の数々をシンセサイザーなどのエレクトリックアンサンブルで演奏し、鑑賞してもらうコンサートを行った。

1月中は、箏の演奏を体験する「初春箏之館」、和太鼓の演奏を体験する「太鼓道場」を音楽スタジオBで行い、例年どおり多数の希望者で埋まった。日本の伝統を身近に体験できることで好評のため、しばらく毎年同様の催しを行っているが、毎回、改良が加えられ、更に今後も発展させていくことが望まれる。

また、全体を通して、「ゆったり親子のおんがく園」(夏休みと同様)、「うたってHappy」(童謡・アニメソングなどの生演奏に合わせて子どもたちが打楽器などを体験する)、「いろいろ楽器コンサート」(世界の民族楽器、特にこの時期は日本の楽器を中心に紹介)の3つの定番プログラムを催し、安定してほのぼのとした雰囲気の中で親子が楽しむ姿が見られた。

(オ) 春休み特別期間

年度変わりの学校休みなので、宿題などがなく子どもたちが自由に遊べる時間があるので、比較的高学年の児童が来館する。そのため、大きな子どもたちでも十分参加できるプログラムを考え、実施している。

音楽の活動エリアでは、「元気が出るリズム」というにぎやかなアフリカやブラジルの音楽に合わせて楽器によるリズム遊びを体験するプログラムを中心に行なった。新曲を取り入れたり、歌も歌わせるなど、定番のジャンルの音楽も、改良を加え、新鮮で躍動的な内容を子どもたちに提供した。

「ぼくらのサウンド'95」は、年度末に、音楽事業部の講座・クラブが1年間の成果を発表する合同コンサートで、青山円形劇場で3日間にわたって開催された。

一般の来館者など、広く〔子どもの城〕の活動を知ってもらうという目的で実施されているが、実際には、人数の多い講座の公演日には、父兄や親類ではほぼ満員の状態である。内容的には、子どもたちの生き生きとした音楽を楽しむ姿がどの公演にも見られ、日ごろの活動の成果が現れた。

3) 講座・クラブ

本年度は特記すべきものはない。しかし、一般来館児・者に対応する活動をしながら、1週間に20クラスほどの講座・クラブを運営しているので、これ以上の増はスタッフの人数・仕事量から考えて、ほぼ限界状況。開館から9年の経験を積み重ねてきた結果、現状では活動の3つの柱（一般来館児・者への対応、講座・クラブ、グループ活動）が均衡がとれた運営がなれています。

利用者から、新しい講座・クラブ開講の要望があると予測されるが、これ以上の増設は困難であると思われる。邦楽、民族音楽、リトミックなど、音楽領域全体にバランスある取り組みになっていると考えている。

4) グループ活動

グループ活動の利用率が下降し始め、活性化を求めていたが、音楽事業部はその要望にこたえて、できるだけ受け入れに応じた。一般来館児・者を対象とした活動と講座・クラブ、グループ活動の3つの柱をバランスよく運営していくには、どれか1つに力を注げば他はおろそかになりかねない。グループ活動が多くなると、平日の午後の一般来館児・者を対象とする活動に影響が出てくることも予測しておく必要があろう。

5) その他の活動

(ア) 「動く子どもの城」

国の助成を受けて始まった「動く子どもの城」のプログラムとして、年来培ってきた「手作り楽器のワークショップ」のプログラムを富山の子どもみらい館や広島市で児童厚生員を対象に行った。（180ページ参照）

(イ) 他事業部との協力事業

例年どおり「母と子のリトミック〈ダウン症クラス〉」は、ダウン症児とその親を対象とした小児保健部との共同プログラム。開講して今年で8年目に当たるが、音楽事業部からは2人のスタッフが音楽的な内容においてプログラム実践にかかわった。カスタネットを使ったリズム遊びやリトミック活動、リラックス、歌遊び、仕上げのリトミック体操などである。どの活動においても親子のスキンシップを十分に図ることと、それらを通して特に母親の気持ちが解放される場であることを目指している。

(ウ) 交流活動・協力活動

子どもの城合唱団は、恒例の5月の厚生省児童福祉文化審議会推薦の授賞式の日に、コンサートを要請されて出演した。そのほか職員の外部派遣も増えて

きている。また、講座・クラブの活動が外部から注目を受けて、外部の組織や団体から派遣の要請を受けて、出張してコンサートなどを行う機会が増えてきている。

子どもの城合唱団は、10回目の合宿を三重県の熊野少年自然の家で行い、ナイトウォーキング、池遊び、すきやき作り、竹のコップ作り、キャンプファイヤーなどのプログラムを体験した。三重県南牟婁郡美浜町中央公民館で、地元の合唱団「リトルリトルコーラス」とのジョイントコンサートが行われた。このコンサートは「動く子どもの城」のプログラムとして実施された。

和太鼓は、「国民文化祭'94みえ」に招待を受けて、三重県南牟婁郡美浜町中央公民館で演奏活動を行った。

(エ) 職員の外部への派遣

職員を他の自治体などから講師として派遣してほしいという要請は、年々増加している。国の助成を受けて行う派遣業務の「動く子どもの城」が活発になってくる一方で、職員が1人で出張する小規模な“講師派遣”的依頼は今よりも増加する傾向もあり、業務量が予想以上に増えて、そのことが両者をバランスよく併存するのを困難にさせるのではないかと予測される。

大きな動きでは、島田市から公式要請を受けた“おんがくずき”的グループが「動く子どもの城」のプログラムとは別にコンサートを行った。また稻毛市の私立の幼稚園の先生方が、[子どもの城]に見学に来た際にロビーでの活動に感銘を受けて、プログラムを実施してほしいという要請をしてきた。しかし、「動く子どもの城」の事業が広く児童の福祉・文化にかかわるという原則なので、私立の1幼稚園のためには適用できない。そこで、「動く子どもの城」とは別の[子どもの城]としての派遣業務として「ワークショップ」を実施した。

5 A V 事 業 部

(1) 6 年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
A V ライブライ ー 自由利用	開館時間中	趣味、教養、娛樂、スポーツ、アニメなど、さまざまなジャンルにわたるビデオソフトが、12,000タイトル網羅されたビデオの図書館。利用者は、A V ライブライー内に設置された35のブース（小部屋）で好みのソフトを視聴できる。
ビデオ玉手箱	毎週木曜日 15:30~17:30	10月まで、MS Xパソコンを利用した「人間ばたばたアニメ」を実施し（音楽スタジオB）、11月から「ファミリー・ビデオ・クラブ」の宣伝を兼ねて、ビデオカメラの撮影体験コーナーを設置。ビデオに対する来館者のいろいろな質問なども受け付けた。 4階ロビー。
おもしろビデオ館	毎週金曜日 15:30~16:00	A V ライブライーのビデオの中からテーマを決めて作品を選び、上映。絵本を基にしたやマハの「世界絵本箱」シリーズ、身近な生き物を紹介する岩波の「いきもの大集合」シリーズを紹介。音楽スタジオB。
ばたばたアニメを つくろう	毎週土曜日 16:00~17:30	2枚の絵をビデオで撮影して簡単なアニメを作るワークショップ。音楽ロビー。
こどもの城映画劇場	日曜日・祝日 (隔週~月1回)	「武藤行雄記念文庫」収蔵のカナダ(N F B C)のアニメーション映画を音楽スタジオBで上映。①11:30 ②13:30 ③14:30 ④15:30の4回上映。
不思議な映像実験室	日曜日・祝日 (隔週~月1回) 11:00~17:30	映像が動いて見えるしくみや写るしくみを応用した、映像遊びを展開する催し。2つの絵が合成されて見える「ソーマトロープ」、1枚の風景写真から昼と夜の景色を作りだす「ライトパノラマ」、円すい形の鏡で見ると像が浮かび上がる歪み絵「アナモルフォーシス」などを実施。音楽スタジオB。
A V ライブライ ー 「人間特集」	開館時間中	年間を通じ、「人間」にスポットを当てた作品の視聴促進プログラムを実施。
バンダイビデオ試写会	日曜日・祝日 スペースの使用が 可能な日に実施。	A V ライブライーの待ち利用者を対象に、玩具メーカーのバンダイと提携して行っている人気ビデオ作品の試写会。場所は地下1階フリーホールまたは8階研修室。開催時間は12:45~17:15。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<児童福祉週間> A V ライブライ ー 人間特集 「目のしくみと錯覚」	4.29~5.5	人間の目のしくみや働きをポスター、ビデオ、パソコンなどで解説するとともに、利用者自らが錯覚を体験するための装置を自作し、関係ビデオの視聴促進を図った。

A
V

名 称	期 間	備 考
<夏休み> AVライブラリー 人間特集「目と耳」	7.21~8.7	人間の目と耳のしくみや働きをポスター、ビデオ、パソコンなどで解説。特に音についてはNHK放送博物館の協力でさまざまな擬音装置を展示し、関係ビデオの視聴促進を図った。
<〃> こどもの城映画劇場 特別企画 「すばらしいアニメーションの世界2」	7.30~8.12	「キンダー・フィルムフェスト・ジャパン」(主催・同実行委員会)の特別協力企画として実施した、子ども向けの優秀短編アニメーションの上映会。イギリスから招へいした人形アニメ作家、アリソン・プークさんによるワークショップや撮影技師らによるセミナーも実施。音楽スタジオB。
<〃> 夏休み工作コーナー 「マックロースコープ2を作ろう」	8.9~31	AVライブラリー内に設けた制作コーナーで、塩化ビニールパイプやレンズなどを使って、簡易顕微鏡を制作。対象小学4年生以上。材料費800円。1日2回実施(各回定員5人)。
<〃> 夏休み工作コーナー 「手作り電話でお話しよう」	8.9~31	AVライブラリー内に設けた制作コーナーで、紙カップや風船、ばねなどを使って、糸電話を制作。対象小学3年生以下。材料費無料。1日2回実施(各回定員10人)。
<〃> 不思議な映像実験室 「光の魔法～うつす」	8.16~21	映像のしくみを解き明かすワークショップやショー、展示などによって構成される「光の魔法」シリーズ第3弾。幻灯や映画などスクリーンに映る映像についてがテーマ。幻灯の種板を作るワークショップを実施。また、影絵、映写機、実物投影機、ビデオプロジェクターなど“映す”ハードウェアの展示、更に映写のしくみや歴史を解説するショーを実施。音楽スタジオB。
<開館記念> 家族芸術祭 親子体験「アニメワークショップ」	10.29~11.3	武藤行雄記念文庫のカナダ・アニメーションの上映と、不思議な映像実験室で実施しているワークショップ「くるくるアニメ」「ソーマトロープ」「シネカリグラフ」を組み合わせて音楽スタジオBで開催。
<〃> AVライブラリー 人間特集「家族」	11.1~3	動物やアニメに登場する家族など、いろいろな家族をビデオで見ることを促進。また、パソコンにより、家族診断を行えるようなコーナーも設置した。
<冬休み> AVライブラリー 人間特集「人間の不思議な力」	12.23~1.8	人間に備わったいろいろな能力をポスターや装置などで紹介。また、自主制作の頭脳トレーニングビデオの公開も併せて実施した。
<〃> こどもの城映画劇場 「カナダのアニメーション」	12.24~28	武藤行雄記念文庫のカナダ・アニメーションから“子どもの権利宣言”をテーマにした作品集「ライツ・フロム・ザ・ハート」と新着作品3本を上映。音楽スタジオB。
<春休み> ぱたぱたアニメをつくろう	3.25~27	2枚の絵をビデオで撮影して簡単なアニメを作るワークショップ。音楽ロビー。
<〃> AVライブラリー 人間特集「総括編」	3.25~4.5	人間の体の要である脳について、ポスターやビデオで紹介。
<〃> 糸でんわ工作、おもしろ糸でんわ工作	3.25~4.5	夏休み工作コーナーと同様に、AVライブラリー内に設けた制作コーナーで紙カップなどを使って糸電話を制作。対象小学3年生以下。材料費無料。1日2回実施(各回定員10人)。

名 称	期 間	備 考
<春休み> 子どもの城映画劇場 「カナダのアニメーション」	3.28~31	武藤行雄記念文庫のカナダ・アニメーションからテーマを決めて作品を選んだ2つのプログラム、7作品を上映。音楽スタジオB。
バンダイビデオ試写会	スペースの使用が可能な日に実施。	A Vライブラリーの待ち利用者を対象に、玩具メーカーのバンダイと提携して行っている人気ビデオ作品の試写会。場所は地下1階フリーホールまたは8階研修室。開催時間は12:45~17:15。

3) 講座・クラブ

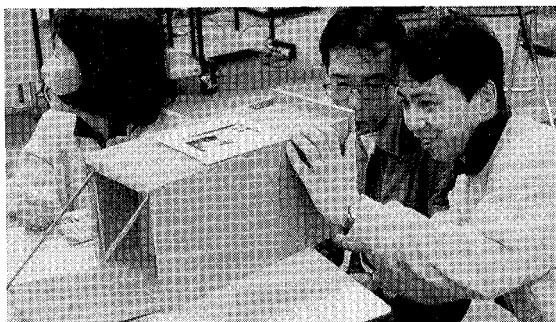
<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
ファミリー・ビデオ・クラブ	(人) 成人 (10)	(人) ① 6 ② 8 ③ 2 ④ 8	①初心者コース 9.30, 10.7 ②編集コース 10.15, 22 ③初心者コース 3.3, 10 ④編集コース 3.11, 18 各日 10:00~12:00	ビデオカメラの使い方や撮影の方法など、基礎的なノウハウを伝える「初心者コース」と、簡易編集、電子編集などを体験する「編集コース」を実施。映像調整室ほか。
子どもクリエイティブクラブD えいぞうたんけん	小3~6 (10)	7	金曜日 16:00~17:30	造形事業部と共同で実施。子どもたちが、簡単なストーリーを組み立てて、ビデオで撮影して映像づくりを楽しむ。クロマキー合成などを取り入れたり、アニメ撮影で絵を動かしたり、1つずつ違った作品を制作した。

4) その他

名 称	期 間	備 考
劇場公演および館内外活動の記録		劇場公演や他部で行われた館内外のプログラムをビデオ撮影しオリジナル作品としてA Vライブラリーに登録。また、一部の作品については関係者に限りビデオを有料頒布した。
平成6年度第3回児童厚生員等実技指導講習会	1.19	A V事業部の映像ワークショップを基に、その実技指導を実施。「ぱたぱたアニメ」や「ソーマトローブ」など、絵を動かして楽しむ遊びやビデオカメラを使用した遊びを紹介。

児童厚生員の講習会



(2) A V事業部の活動

子どもたちが映像に接する機会は多々あるが、そのほとんどが内容や年齢層などを一方的に定めて送られてくるTV放送によってであろう。そこで、AV事業部では子どもたち自らがソフトを選択できるビデオライブラリーの運営や、普段あまり目にすることのない国内外の優れた作品を提示する上映会の実施を通じ、さまざまな〈みる〉機会を提供した。

また、〈映像=見るもの〉という観念を抱きがちであるが、実際には文章や絵のように映像で表現する——〈つくる〉ことができることも知ってほしいと考えている。このことを1人でも多くの子どもに体験してもらおうと、ワークショップなどのプログラムを実施した。

ともすれば、〈みる〉という映像の一側面の、しかも限られた範囲でしか接する機会のない子どもたちに、〈つくる〉という別の視点からも映像に触れてもらいたい、さまざまな形で多面的に映像の世界にアプローチしてほしい、と願いつつ本年度の事業を行った。

1) 平常期間の活動

(ア) 見る活動

(1) AVライブラリー

AVライブラリーでは、前年度から6歳未満の幼児が単独でも利用できるようにしたが、本年度はそれが浸透したようで、幼児1人あるいは、友だち同士で利用するケースが増えたように感じられる。安全管理の面で多少の不安はあったが、本年度に限っては何事もなく終わることができた。しかし、今後は地震や火災に際しての対応策なども更に強化していかなければならないだろう。

本年度の特に印象に残ったものとして、[こどもの城]オリジナルソフト「インフォビジョン」の新作『恐竜世紀』を製作したことが挙げられる。ここ数年の恐竜ブームと合わさったことで、年間の視聴件数も上位であった。また、前年度まではこのインフォビジョンシステムは、全35ブースのうちの12ブースのみ対応していたが、本年度は機器更新により全ブースで対応できるようになった。そのため、この『恐竜世紀』も多くの人たちに視聴された。

ライブラリーの利用件数は、組数で前年度比99.9%の69,531組でほぼ同数の利用があった(開館日数=302日、機器入れ替えのため1週間閉鎖)。平均視聴時間でも昨年よりわずかに伸びた。利用の多かった作品として、前述した『恐竜世紀』のほかに『クレヨンしんちゃん』が挙げられ、昨年同様『セーラームーン』のシリーズが圧倒的に多く利用された。

(2) 子どもの城映画劇場

優れた映画やアニメーションをフィルムで上映するこの催しでは、「武藤行雄記念文庫」に収蔵されているカナダ国立映画制作庁（N F B C）のアニメーションをずっと上映している。N F B Cの作品は、ドローイング（普通の絵）の作品だけでなく、積み木や人形などの立体物を使ったり、特殊な素材や撮影を組み合わせた不思議で幻想的な作品が多い。独自に開発した

1つの技法をずっと使って作品を作り続けている作家も多く、作品1つ1つに作家の個性が反映されている。どの作品も同じように見える日本のアニメーションがいわば工業製品的な流れ作業で作られる製品とするならば、カナダN F B Cの作品は全く対照的な絵画や彫刻など美術作品に取り組むようにしてつくられた芸術作品といえる。そこで本年度は、新しく収蔵された作品を中心にアニメ制作の技法を見せるプログラムと、N F B Cの作家別のプログラムを組んだ。

また本年度は1作品ごとに詳細な解説を記述した「武藤行雄記念文庫目録」を発行し、上映時に有料頒布した。

(3) パンダイビデオ試写会

年間の試写総日数は87日（前年度より7日増）、試写回数は607回（前年度より66回増）。総利用者数は15,274人（前年度比2%減）であった。

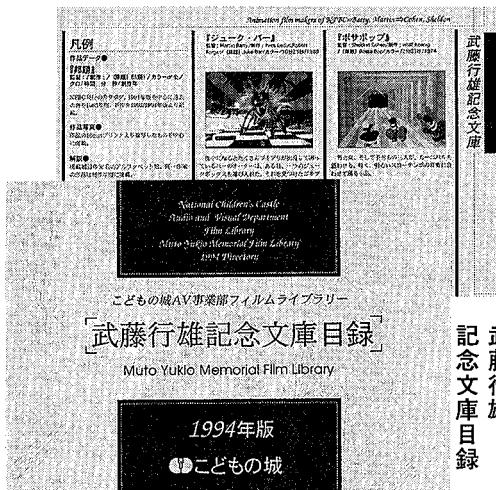
試写回数を増やしたにもかかわらず、利用者数は前年度並みにとどまった。1日当たりの平均利用者数は、特別期間が前年度並み（1%減）であるのに対して、平常期間では前年度比21%減である。恒常的な利用者が多い傾向にある平常期間の利用者数が減じたのは、本年度メーカーから供給された新譜が少なかったことも、大きな原因の1つだろう。ウルトラマンに人気があるとはいえ、同じ作品を2度3度と見たがる子どもは少ない。

なお、前年と同様、冬休み期間には、他部の企画との関係で会場が確保できず、試写会は行わなかった。

(イ) 参加させる活動

(1) ビデオ玉手箱

ビデオ機器を使用しておもしろい遊びを展開するこの催しでは、MSXパソコンを用いて、記憶した2つの画像（動作）を交互に再生して不思議な動きを



楽しむ「にんげんぱたぱたアニメ」をずっと行ってきた。しかし、このプログラムを実施している木曜日には幼児とお母さんの来館者がほとんどなので、9月からは、お母さんを対象にした、全く別の内容に変更した。それは「ビデオ体験コーナー」と題し、家庭に普及しているビデオカメラの撮影体験やいろいろな質問・相談を受けるコーナーで、ビデオカメラやデッキなどの楽しい使い方などを紹介する展示を中心に展開した。更に4階に訪れるより多くの来館者の目に留まり、同時にAV事業部で開催している「ファミリー・ビデオ・クラブ」の宣伝にもなるようにと考え、12月からは、4階のエレベーターホールとAVライブラリーの間のスペースに開催場所を移して実施した。

(2)ぱたぱたアニメをつくろう

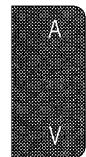
【こどもの城】定番プログラムともいえるこの催しは、土曜日の午後に実施している。毎回盛況で、特に第2土曜日は学校が休みのため、かなりのにぎわいになり、高学年の参加も増加した。混雑緩和のため「ぱたぱたアニメ」は1人1回に制限しているので、それを終えた子どもには「くるくるアニメ」づくりに参加させていた。これは1枚の紙で簡単に作れて特別の再生装置を必要としないので、幼児の中には「ぱたぱたアニメ」より熱中して何度も参加する子どもが多い。そこで今後この土曜日の催しについては、「ぱたぱたアニメ」以外の自分で作れるものを中心にしていくプログラムを考えている。

(3)不思議な映像実験室

このプログラムは、①映像が動いて見えるしくみ、映るしくみ、写すしくみなどを簡単な作画や工作で体験するものと、②ビデオカメラで撮影したり、ビデオ合成画面で遊ぶビデオなどの電気的な映像体験の2つに分けられる。

①について=映画が生まれる以前から存在した“視覚玩具”は、単純な仕掛けで絵が動いたり、映ったりする。その原理が分からなくても幼児や低学年でも、十分に遊びとして楽しむことができるような内容。高学年向けには、解説や現代の機器とのつながりなどをちらしやポスターなどに記し、映像への興味を高めるようにした。“視覚玩具”的なしくみは現代の映画やテレビなど、動く実写を再生する映像のしくみの元となったものばかりなので、これらを自分の手で作り、見てみると、映像の成り立ちを理解するのに役立つ。本年度は、円すい形の鏡に反射させてみると絵が浮かび上がる歪み絵を描く「アナモルフォーシス」、写真に針穴を開けて、夜景をつくりだす「ライトパノラマ」などを中心に行った。

②について=「ビデオであそぼう」はビデオカメラで実際に撮影したり、ゲームを作ったりして楽しむプログラム。配線やテープ装てんなどの用意から、撮影～再生、後片づけまでを4・5人のグループで体験する。もう1つの「ビデオアスレチック」は、不思議なビデオ画面体験スペース。ビデオのクロマキー



一合成（特定の色を抜いて、そこに別の映像を合成する）や2組のビデオカメラとモニターを組み合わせてテレビ電話のような会話が楽しめる装置などを用意し、自由参加で遊ぶことができるプログラム。

2) 特別期間の活動

(ア) 見せる活動

(1) A Vライブラリー

ここ3・4年は、年度ごとにテーマを決めてライブラリーの視聴促進を行ってきた。そして、本年度は「人間」をテーマとした。

「人間」をテーマにした場合、とても範囲が広いため、今回は「人体」と「家族」に焦点を絞り、人体では、「目」「耳」「感覚器」そして「脳」といった部分を取り上げ、その構造や働き・役割などを、図解や器具・パソコンやビデオで紹介した。また、「家族」の場合は、動物や鳥・昆虫などにスポットを当て、各々の特徴や変わった部分をビデオやポスターで紹介した。

夏休みと春休みの特別期間には、AVライブラリーの一角に工作コーナーを設け「マックロースコープ2」「糸でんわ」「おもしろ糸でんわ」などを制作した。

○「目の特集」と「耳の特集」

ゴールデンウイークに行った「目」の特集では、目の構造や働きをポスターにし、残像や立体視はビデオや立体眼鏡を作製して説明した。そして錯覚については事例をプリントしたカードを作り、どのように見えるか体験できるようにし、目の不思議なところや優れた部分などを紹介した。

夏休みに行った「耳」の特集でも、耳の構造や働きなどを紹介した。そして、音についてもいろいろな装置を使用して紹介した。中でもNHK放送博物館から借用した擬音装置には、子どものみならず大人も大いに興味を示した。油紙を内側に張り付けたかごに小豆や小さな豆を入れて転がす“潮さいの音”がとても評判だった。ほかにも、手製の車輪で厚手の布をこすると出る“強風の音”，かたくり粉の入った布袋を握って鳴らす“雪を踏む音”，2枚の貝の外側を擦り合わせて鳴らす“かえるの鳴き声”，砂利の上をやしの実の殻やおわんでたたく“馬で行進する音”，うちわと二十数個の豆をでんでん太鼓のよ



好評だった「糸でんわ工作コーナー」

A
V

うにして鳴らす“雨音”などの装置を展示した。

そして、音の波形を見る装置（オシロスコープ）で自分の声の波形とお父さんお母さん、兄弟や友だちの波形の違いが調べられるコーナーなどを置き、音についての理解を深められるよう工夫した。夏休み後半には、糸でんわ・おもしろ糸でんわ工作コーナーを設け、糸、釣り糸、ばね、風船など材質の違うものの用いて音の伝わりを体感できる場も設けた。

○「家族の特集」

開館記念特別期間に実施した「家族の特集」では、動物や鳥・昆虫や魚などの親子関係をビデオやポスターで紹介した。例えば、鳥の託卵性（卵を他種の巣へ産み落とし、その巣の持ち主に育ててもらう）の代表例としてほととぎすを紹介。奇形として生まれた日本猿モズが高齢になってから産んだ子どもの親子関係を紹介。そのほか数家族の親子関係の心温まる話や自然界の残酷さを紹介し、親と子、そして家族とは何かを考える機会をつくった。また、アニメに登場する代表的な家族をポスターで紹介した。

○「超能力の特集」と「脳の特集」

「超能力の特集」（冬休み）では、超能力を見せるということではなく、“頭を柔軟にし、応用力を鍛えると超能力と呼ばれるような力を発揮できるかも”というキャッチフレーズで、いろいろな問題を解く頭脳トレーニングビデオ（自作）を公開した。

「脳の特集」（春休み）では、「目」「耳」に加え「その他の感覚器」と「脳」との関係や役割を図解やポスター・ビデオなどで紹介した。

本年度行った「人間特集」全般を振り返ると、当初小学校高学年向け以上として考えていたので、幼児および低学年の子どもが多い現状では、視聴率の飛躍的伸びはなかった。しかし、一昨年と比べた場合、数%程度の改善はあり、本特集を行った意義はあったと思われる。

今後も特集を行うに当たっては、あまり見されることのない良質な作品が、より視聴されるよう工夫していきたい。

(イ) 参加させる活動

(1) こどもの城映画劇場

夏休み特別企画「すばらしいアニメーションの世界 2」

前年度に続き、キンダー・フィルムフェスト・ジャパンの特別協力企画として実施した。キンダー・フィルムフェスト・ジャパンは、ドイツのベルリン国際映画祭の子ども映画部門「キンダー・フィルムフェスト・ベルリン」公認の日本で開かれる国際子ども映画祭。この上映プログラムの中で世界各国で作られた短編アニメーションの特集プログラムを【こどもの城】で実施した。更に、イギリスと日本の子ども向けアニメーションの特集、1993年に若くして事故の

ために亡くなったアニメーター、齊藤美緒子さんの追悼特集、カナダN F B C の新着作品特集などいろいろな上映プログラムを組んで実施した。

また、イギリスの人形アニメーション作家、アリソン・パークさんを招き、豊富な資料や実際に使用した人形を使って、人形アニメーションの制作方法を子どもたちに公開するワークショップを開催した。夜間は、研究者や学生を対



アリソン・パークさんのワークショップ

象としてアニメーションの撮影やコンピュータ・グラフィックスなどの専門家を講師にセミナーを開催した。

上映やワークショップには、子どもたちだけでなく情報誌などに掲載した情報を基に大人の観客も多数来場し、総入場者数は、上映約4,000人、ワークショップ約170人、セミナー約220人を数えた。

夏休み特別期間に実施するこの催しは、優れた作品の鑑賞だけでなく、それを制作している作家とその仕事を子どもたちに紹介するのが目的。実際に制作現場の裏側を見て、作品への興味を一層膨らませることにつながるような構成（展示→解説→作品上映→ワークショップ）を心がけている。

今回のゲスト、アリソン・パークさんは、自分が作った人形や撮影の小道具を惜しげもなく子どもたちに触らせた。人形の樹脂できている顔や、可動する関節を動かしたりして、子どもたちは手でその感触を体験した。人形アニメーションの撮影で最も重要なのは、アニメーターの手で微妙な動きを付けていく作業であり、このワークショップはアニメート感覚の体験といえる。実際に人形を触った子どもたちは、くねっと曲がる関節を動かすことでのいろいろなポーズが付くことに驚いたり、顔の表皮を指で押して「こんなに柔らかい！」と不思議そうに触っていた。

このようなワークショップでは、対象とする子どもたちの年齢、進行やねらいなどに関する綿密な打ち合わせを作家との間で十分に行なうことが最も大切である。今回はブリティッシュ・カウンシルの好意的な協力により、来日前に、内容や展示物に関する情報を得ることができたのでスムーズに進行できた。

(2)不思議な映像実験室「光の魔法ーうつすー」

夏休み特別期間プログラムとして「光の魔法ーうつすー」を開催。前年度の夏と春に開催した「光の魔法ーうつるー」「光の魔法ーうごくー」に続く、映画

のしくみと歴史を扱った映像ワークショップシリーズの第3弾。

『光の魔法』では、映画の原理を3つに分けて紹介してきた。“写す”すなわち写真技術に関連した、画像を記録する技術。“動き”をつくりだす技術。そして、それをスクリーンに再現する技術として“映写”の3つに分けて、それぞれを紹介してきた。今回はその“映写”について扱ったプログラム。

『光の魔法』のシリーズでは“映画”というものを扱いつつ、個々の催しでは映画そのものをほとんど紹介していない。それは映画技術そのものを紹介するよりも、むしろなぜ映画が生みだされたのか、ということを伝えたほうが映画を発明してきたさまざまな人々の好奇心や興味をダイレクトに伝えることができ、結果として映画、あるいは映画原理のおもしろさをストレートに感じてもらえるのではということからである。

「光の魔法—うつすー」はこれまでのスタイルと同様、展示・ワークショップ・簡易ショーの3つの要素で構成している。展示により、さまざまな視覚玩具に触れ、ワークショップで実際に制作体験し、簡易ショーで展示やワークショップでは紹介できない要素を補足紹介する目的からである。

展示は、影絵、マジックランタン、実物投影機、スライドプロジェクターなどを用意し、さまざまな方式の映写映像が体験できるような構成をとってみた。マジックランタンは今回のプログラムのために再現品を制作。資料を参考に、かつて実在した、複数（今回のものは2つ）の画像を同時に映写できる幻灯機を再現してみた。また、前回までと同様に展示会場では独自に制作した展示映像として幻灯を紹介するVTRも上映。

ワークショップでは前記のマジックランタンを使って、2つの幻灯映像の移り変わりを楽しむ、幻灯の種板作りを実施。2枚のOHPシートの小片（自家製マジックランタンの種板のサイズに合わせたもの）にOHPマーカーで2枚組の絵を自由に描画し、最後に全員の作品を映写、鑑賞する内容。

簡易ショーは、影絵の見世物から幻灯の見世物への登場と移り変わりを便宜的に設定した登場人物で紹介する内容のショーを開催。かつて行われていたであろう幻灯上映の手法として、語り手と映写技師の2人組みで物語の内容を紹介した。展示を主軸に、ワークショップと簡易ショーを日替わりで1日2回ずつ実施した。

「光の魔法—うつるー」の開催で映画原理の3本柱の紹介を一応終えたわけだが、次回は映画そのものを主軸とした内容でこれまでの3つの催しを総括するプログラムを実施したいと思う。

(3)家族芸術祭 親子体験「アニメワークショップ」

AV事業部のプログラムは、「アニメワークショップ」と題し、日本とカナダのアニメーションの上映と、同一会場で「不思議な映像実験室」のワークショ

ップを交互に時間決めて実施する内容。新しいワークショップとして、感光した現像済みの真っ黒いフィルムを針で引っかいて絵を描く「シネカリグラフ」を実施。「ばたばたアニメ」と同じように2枚の少し動きのある絵を描き、スライド映写機2台を使って交互に映写すると動いて見えるというもの。

(4) AVライブラリーの工作コーナー

夏休み前半には「マクロスコープ2を作ろう」、後半は「手作り電話でお話しよう」、春休みには「糸でんわ工作」、「おもしろ糸でんわ工作」を実施した。

「マクロスコープ2」は、前回の「天体望遠鏡」と前々回の「立体メガネ」と同様にレンズを使った工作として、「顕微鏡」の工作をした。材料は身近にある塩化ビニールパイプや紙などを使用した。ただし、今回使用したレンズは、直径1センチ以下の小さい物であったため、レンズを押さえるホルダーは、あらかじめスタッフが作ったものを使用した。

工作に参加した子どもたちの様子といえば、土台の部分の紙を切ったり、折り曲げたりして作り、鏡筒の内部にレンズ3枚をホルダーで固定するといったものであり、前回の天体望遠鏡より工程数が少ない分、容易に作れたようだ。そして、でき上がった顕微鏡で、用意していたみじんこや人体の細胞を見てみた。ピントや明るさの点で苦労していたようだが、見えた瞬間には「あっ、見えた」と言って、一緒に参加した子どもたちに自慢するといった光景も見られた。

夏休み後半の「手作り電話でお話しよう」では、糸、釣り糸、ばね、風船など材質の違うものを用いて音の伝わりを体感できる工作をした。また、好評にこたえて春休みにも「糸でんわ工作」、「おもしろ糸でんわ工作」コーナーを設けた。中でも糸の代わりにばねを用いる“ばね電話”は大人にも好評だった。

このような工作に関心のある子どもたちが多いことで今後も、AVライブラリーの視聴特集を考えながら、工作コーナーを続けていくよう努力したい。

3) 講座・クラブ等の活動

(ア) ファミリー・ビデオ・クラブ

この名称のクラブは、2年前に休講して以来、新規募集による講座は開講せず、過去の受講生を対象とした機器の貸与のみを細々と行っていた。この間、



親子で「アニメワークショップ」を楽しんだ

A
V

ビデオの講座に関する問い合わせや、[子どもの城]のビデオ編集機器を使用したいという要望も聞かれ、新たな講座開講を検討することになった。

以前の講座は幼児を持つ母親を対象とした、家庭でのビデオ撮影のノウハウが中心で、3か月単位のコースであった。しかし、受講希望者は少なく、やむをえず休講となった。そこで、以前の講座で希望者が少ない理由を推察して改善したカリキュラムを組んだ。その改善点は、対象を母親に限らず一般成人とし、2回で完結する短期講座に設定したこと。初心者を対象にビデオ機器の操作や撮影を中心にした「初心者コース」、簡易編集から電子編集までを体験する「編集コース」の2コースを設けたこと。2回完結では、細部にわたる講義はできないので、日常的によく体験する疑問や失敗についてを取り上げ、ポイントを絞った講義内容にした。そして、終了後に受講者それぞれの質問に個別に対応したり、機材に対するアドバイスを加えるようにした。

また「初心者コース」終了者には、毎週木曜日の「ビデオ玉手箱」の時間に質問を受け付けたり、機材を貸与したりするサポート体制を設けることにした。「編集コース」終了者には、映像調整室のビデオ編集機器を有料で貸与するサービスを本格的に開始することにした。ビデオの編集機器貸与を行っているのは、プロ向けの施設以外ほとんど存在しないので、今後も機器使用を希望する「編集コース」受講者が増加すると思われる。しかし、開館以来使用している機器が故障続きで不安なこと、現行の高画質フォーマットであるHi 8やS-VHSなどに対応した機器が少ないことがこの講座や機器貸与のネックとなっており、改善が必要である。

(イ) こどもクリエイティブクラブ「えいぞうたんけん」

前年度同様「えいぞうたんけん」という名称で造形事業部との共同でクラブを実施。前年度は映像のハードウェア的な要素を多く取り上げた内容であったが、本年度は“映像作品を作る”ということに挑戦してみた。近年のAV事業部のワークショップ内容が特にハードウェアを扱ったものに偏りつつあることと、昨年から引き続き受講する子どももいるので、内容的に変化をつけたいという2点が主な理由である。

使用するメディアは経済的、設備的理由からVTR、主にS-VHS、Hi 8を利用。実作業は、1学期に映像表現に関するトレーニングという目的で、1回から2回単位でこま落とし映像やクロマキー合成などを使った小作品をグループ制作。2学期からは個人個人でストーリーを作り、スタッフと撮影プランを練って撮影開始。3学期にかけて、全員の撮影、編集録音を行い、1人1作品ずつの短編作品を完成させた。

スタッフの人数や安全面から、ロケーション撮影はほとんど行わず、スタジオ撮影や、スタジオを利用した合成撮影がほとんどになってしまい、少々偏っ

た表現になってしまったようである。

(ウ) その他（児童厚生員等実技指導講習会）

本年度第3回の児童厚生員等実技指導講習会では、A V事業部の「不思議な映像実験室」のプログラムを体験する講習を行った。前半は、ビデオ機器などの特別なハードを使わずに、簡単な作画や工作で動く映像を作り出す視覚玩具作り（2枚の絵を交互に見ると動きが再生される「くるくるアニメ」、円板の裏と表の絵が合成されて見える「ソーマトロープ」など）を行った。ほかの施設すぐに利用できるものについては、詳しい解説と実習で、多少の機材や技術を必要とするものについては、展示してあるものを操作しながら体験してもらうようにした。

後半は、家庭用のビデオ機器を利用してできる映像遊び（「ぱたぱたアニメ」や「にんげんぱたぱたアニメ」）を紹介した。資料として「不思議な映像実験室」のリーフレットや視覚玩具の型紙などを配付した。

4) その他の活動

(ア) 「動く子どもの城」

本年度から新しく始まった「動く子どもの城」でのA V事業部プログラムは、「ぱたぱたアニメをつくろう」、「映画劇場～日本とカナダのアニメーション」を基本プログラムとし、そのほかに「不思議な映像実験室」で実施している視覚玩具作りをサブプログラムとして組み合わせて実施することにした。

本年度は2件実施。まず最初は、1月29日に広島県尾道市の尾道市児童センターで実施し、「ぱたぱたアニメ」作りや映画の上映に約50人ほどが参加した。2件目は、岐阜県恵那市の大井児童センターで、3月5日に実施し、約90人が参加した。ここでは、「ぱたぱたアニメをつくろう」と「映画劇場」に加えて、近隣の児童施設の職員を対象にした講習会も実施し、視覚玩具作りの実習を行った。

A V事業部で実施しているプログラムは、ほかではほとんど実施していないオリジナル性が高いものなので、この「動く子どもの城」で全国に普及していくことは、たいへんにうれしく、これは積極的に進めていきたいと考えている。今後の課題は、少ないスタッフ数で機器の運搬～会場準備～実施～撤収までを効率よくこなす工夫とほかの児童施設で実用的なプログラムを上手に普及させていくための実施内容の工夫であると感じた。

(イ) 劇場公演および館外活動等の記録

本年度行われた劇場公演や館内外活動のビデオによる記録は、別表のとおり計43件であり、大きな伸びを示した昨年の件数と比較した場合、減少傾向となつた。理由は定かでないが、ビデオによる記録は各部からの依頼によるものが



中心であるため、年度により差異が発生するのはやむをえず、これは一昨年の総記録回数が本年とほぼ同数の42件であったことからもうかがい知ることができるものだろう。

一方、今年も記録された素材などを中心にA Vライブラリー用オリジナルソフトを制作したが、こちらは昨年の18件から24件へと増加した。従来は劇場と館内外活動の記録素材のみをソフト化してきたが、今年は初の試みとして、A Vライブラリーの年間テーマである「人間（人体）」にターゲットを当てたオリジナル作品（「音づくりにチャレンジ」、「超能力にチャレンジ」など）計4タイトルの制作を手がけた。

本年度を皮切りにこれらの新規分野ソフトの制作にも力を注いでいきたい。

(平成5・6年度収録状況)

		6年度	5年度
青山劇場	自主公演	1	1
	外部公演		1
青山	自主公演	29	42
	外部公演	5	10
館外活動等	—	8	7
収録回数計		43	61

5)まとめと今後の課題

A V事業部の各種プログラムも開館以来9年が経過し、さまざまな改良や発展への努力を加えることにより、幾つかの課題はあるものの、ほぼ成熟期に達したといえるだろう。このことからも、今年の事業運営のねらいである「さまざまな形で多面的に映像の世界にアプローチしてほしい」という役割は担えたものと考える。

しかし、全国のための施設といわれる【こどもの城】も物理的条件により、東京およびその近県の利用者が圧倒的に多いという現実を考えると——、

○成熟期に達したプログラムを全国の児童福祉施設で活用してもらう。

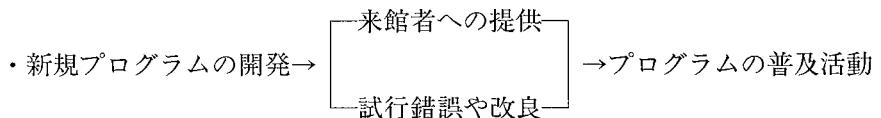
=<プログラムの普及活動>

○【こどもの城】を訪れるリピーターに満足してもらう。

=<新規プログラムの開発>

などが、今後の重要なキーになるであろう。

前者については、本文でも記したとおり「動くこどもの城」としてようやく始動し始めたところであるが、この前者と後者をいかにして



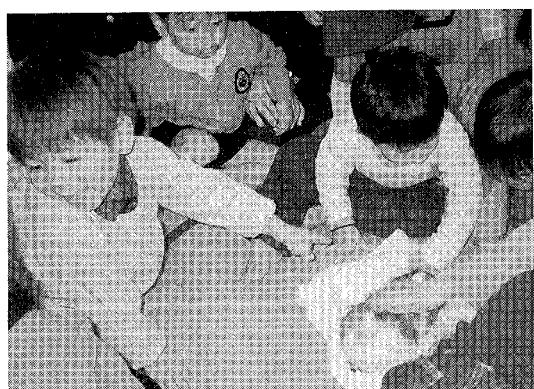
という図式で効率的に結び付けていくかが、10年目を間近に控えるA V事業部の課題であると考える。

6 保育研究開発部

(1) 6年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
親子遠足	5.14	保育クラブ、幼児グループ2～5歳児の親子プログラムとして実施。公園の自然を生かして親子で楽しめるゲームや交流を深めるゲームを工夫した。家族84組が参加。国際家族年らしく父母・祖父母・第2土曜日で学校が休みの兄姉など家族ぐるみの参加が目立ち、解散後も家族でくつろぐ様子が目立った。父親の参加は昨年より更に増えた39人。東京都立砧公園。
動物とのふれあい	6.1, 6, 12.12	前年度に継続して(社)日本動物病院福祉協会の協力により、幼児と動物が出会い触れ合う体験プログラムを実施した。年齢別に分けてポイントを絞ったのが今年の特徴。並行して保育室にモルモットの飼育活動を取り入れ、子どもと動物のかかわりの過程をビデオ化、プログラム紹介ビデオソフトをAV事業部と共同で製作した。プログラム参加者は第1回22組・第2回22組・第3回28組であった。
青空プレイ大会	10.8	保育クラブ、幼児グループ2～5歳児の親子プログラムとして実施。親子75組が参加した。父親の参加(45人)、学校の土曜日休校による小学生の参加(兄姉)が目立った。プログラムは家族で楽しめ、公園の自然を生かした内容を工夫した。東京都立代々木公園。
保育活動展	2.25・26	1年間の保育クラブ・幼児グループの保育活動について、写真や子どもの作品を中心に展示紹介、保育クラブスタッフが1年間の保育クラブ活動について説明。2歳児には染紙の体験プログラムも用意した。展示写真を頒布し阪神大震災の義援金の一部とした。保育室I・IIで開催。
保育室の一般開放	土曜日 14:00～17:00 日曜日・祝日 10:00～17:00	保育室IIに遊具や玩具を用意して一般来館の親子が自由に遊べる場を提供した。父母そろっての利用や祖父母の姿、また中にはベビーシッターによる利用もみられた。ここを目指して来館する年少児の親子が増えている。大きい子どもたちと混じり合うほかのスペースと違って、親子が安心して過ごせる空間となっている。



「動物とのふれあい」プログラム



代々木公園で「青空プレイ大会」

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<夏休み> 作ってあそぼう 親子工房	8.13~16	フィルムケースやプラスチック容器などに粘土を詰め、その上にクリップやボタン、ひも、葉っぱなどを置いてオリジナルスタンプを作る「ねんどでスタンピング」を保育室Ⅰで実施。4日間で90組の親子が参加した。親子のコミュニケーション・身近な素材で遊ぶことがねらい。
<〃> 幼児グループ宿泊保育	8.29・30	5歳児の保育の一環として「渋谷区桧原自然の家」で宿泊保育を行った。参加9人。
<開館記念> 作ってあそぼう 親子工房	10.29・11.1	用意した発泡スチロールに、木の枝やどんぐりをボンドでつけ、最後にカラースプレーで仕上げてオブジェを作る「秋のオブジェ」を保育室Ⅰで実施。2日間で41組の親子が参加した。親子のコミュニケーション・身近な素材で遊ぶことがねらい。
<〃> 写真展「育まれて」	10.29~11.3	子どもは、人とかかわりながら育ち、集団に参加しながら育つことの意味を考える写真展。保育活動の中から、子どもたちのいろいろな表情や場面を集めて4階ロビーに展示了。
保育室の一般開放	特別期間中の 土曜日 14:00~17:00 日曜日・祝日 10:00~17:00	保育室Ⅱに遊具や玩具を用意して一般来館の親子が自由に遊べる場を提供した。父母そろっての利用や祖父母の姿、また中にはベビーシッターによる利用もみられた。ここを目指して来館する年少児の親子が増えている。大きい子どもたちと混じり合うほかのスペースと違って、親子が安心して、のんびりとゆっくり過ごせる空間となっている。

3) 講座・クラブ

<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
親子教室	(組) 1期 1歳児親子 2期 (各期14) 3期	(組) 14 14 14	月曜日10:15~12:30	保育スタッフの指導による親子遊びや友だちと遊ぶ体験、お父さんお母さん同士が育児への思いを交換し合うディスカッション、医学、心理発達などに関する講義など、全12回の講座。父親も対象にしたこと、保健婦をスタッフに加えたことが今年の特徴。申し込みは定員を上回った。受講料は35,000円。
	(人) 4歳児 (10) 5歳児 (10)	(人) 13 9	火曜日～金曜日	【こどもの城】を保育の場として週4日、2年間にわたる継続的な保育活動。保育クラブの3歳児と一緒に異年齢混合のグループ保育。学生、主婦や社会人、また外国人などのボランティアも参加。60～70歳代のシニアボランティアなど数多くの人と出会い一緒に遊ぶ場面が多く見受けられた。館内人事交流により音楽部門からのスタッフを加えて保育内容に新たな視点を取り入れた。【こどもの城】内外のスペースの活用に心がけ保育の場がダイナミックに広がるよう努めた。母子教室、保育クラブからの継続参加者に加えて新規登録者も受け入れ4歳児は定員を超えて受け入れた。保育料は月額33,000円、給食費は月額4,800円。

<クラブ>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
保育クラブ	2～5歳児 (登録児童 数437)	12 10 (1日 当たり)	月曜日～土曜日 (2歳) 火曜日～金曜日 (3～5歳)	集団への参加、母親の社会参加などを主な目的とした育児支援策として、日時を選べる保育プログラム、イベント、通信、育児相談などの家族プログラムを行った。父親の参加が目立ってきた(送迎、イベント参加など)。3歳児以上の活動は4・5歳児の幼児グループと統合し異年齢混合形態で保育を進めた。2・3歳児の需要が高く応募者が定員を上回った。 入会金5,000円、年会費3,000円。保育料として、2歳児1,200円(1時間)、3歳児以上850円(1時間)。昼食代600円、おやつ代200円。

<講習会等>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
第8回こどもの城 保育セミナー こども・家族・社 会 PART 1	(人) 保育関係者 親など (150)	(人) 149	8.6 9:00～17:00 8.7 9:00～12:00	基調公演(対談)「家族の中のデモクラシー女性と家族ー」 菅原眞理子(内閣審議官兼内閣総理大臣官房男女共同参画室長)、柏女豊峰(淑徳大学社会学部福祉社会学科助教授) 分科会 I. ワークショップ「子どもの気持ちをくみとる」 小杉道雄(こすぎ社会教育研究所長・児童文化研究家) II. 「親の気持ちをくみとる」 山崎美貴子(明治学院大学教授) III. 「保育のバックグラウンド制度・財政・福祉ー」 山田美和子(全国社会福祉協議会高年福祉部長)、清水康之(日本児童手当協会副理事長) IV. 「子どもの健康を守る」 上別府圭子(東京慈恵会医科大学精神医学教室心理カウンセラー)、中原裕美(松戸市保健計画係副婦長) V. パネルディスカッション「家族のイメージ」 布施英夫(共愛館保育園園長)、宮村和美(子どもの城親子教室参加者)、岩崎清(子どもの城企画部長) 分科会報告・全体会 シンポジウム「伝統的家族イメージからの出発」 司会・山田美和子 シンポジスト・山崎美貴子、柏女豊峰、豊田叡徳朗(子どもの城保育クラブ保護者)、深谷ベルタ(子どもの城保育研究開発部)
育児相談研修会	育児相談担 当者 (30)	41	5.21, 11.26, 2.25 14:00～20:00	テーマは「家庭育児の支援について～育児相談事業のすすめ方～」。スーパーバイザーは、山崎美貴子(明治学院大学教授)と山田美和子(全国社会福祉協議会高年福祉部長)。
ニュースレターの 発行	児童福祉関 係者 (発行部数 1,500部)	無料 161部 有料 1,013 部	第5号(7.1) 第6号(12.1) 第7号(3.15)	一昨年度から発行してきたニュースレターが好評を得て、前年度は全国児童・保育関係所管課などから、追加申し込みなどが多かった。全国各地で育児センター機能についてさまざまに取り組まれ具体的な資料が求められていることを痛感した。本年度はニュースレターを定期的な刊行物として形を整え、年3回発行し、頒布価格を年間講読料1,000円(郵送費、印刷代一部負担金)とした。内容は、行政、経済界、利用者に関する情報、および子育てをめぐって世界の情報、育児相談研修会の内容の概要など。主な配布先は、市長会、見学者、関係所管課。

保
育

(2) 保育研究開発部の活動

エンゼルプランが示されるなど、本年度も保育・育児の環境の大きな変化が続いている。これは、育児支援を受ける親にも、プログラムを提供する側にもそれぞれの問題として受け止められている。

本年度の活動は保育情勢の変化が実際にどのように具体的な姿として現れてきているのか、その問題点や課題はどんなところにあるのかに留意しながら、保育実践活動として「親子教室」「保育クラブ」「幼児グループ」、情報活動として「保育セミナー」「育児相談研修会」や「ニュースレター」の発行を行った。

また、平成6年度日本保育学会では「保育者の現任研修のありかたについて」を報告した。前年度発行した『母子教室の手引』の反響があり、各地の保健所・教育委員会などからの要請にこたえて、親子遊び・母子教室などのプログラムの実際を出張、紹介した。更に、(社)日本動物病院福祉協会の協力をえて、保育プログラムの1つとして行っている「動物とのふれあい」プログラムのビデオ製作にA V事業部と共同で着手した。

1) 保育事業（親子教室）

本年度は「母子教室」を「親子教室」と改めて実施した。子育てを取り巻く環境の厳しさを8年間の「母子教室」の実践から確認したからである。

育児や子どもの対応に悩む母親が、親子遊びや母親同士の交流を通じて自分の育児を見直す、という「母子教室」のねらいに加えて新たに「家族」「健康」の視点を取り上げてスタートした。

(ア) 親子教室に期待する親のニーズ

「親子教室」は文字どおり親子（父、母、子＝家族）が参加して親子で、楽しく遊びながら育児への視野を広げていくことをねらいとしている。

「親子教室」を企画するに当たり、父親にプログラム参加を積極的にアピールするようにした。そのせいもあってか、「親子教室」の応募理由として新たに「父親のプログラムが魅力である」「夫が参加を勧めた」などとする理由が加わり、子育てに対する父親の関心の高さをうかがわせる結果となった。

このほか、都市に住む祖父母同居の家族や2世帯家族からの参加希望者が目についた。住居の周辺には、同年齢の子どもの姿はほとんど見ることはなく、家の中で大勢の大人の中で過ごしている子どもが意外にも多くいたということである。ある若い父親と母親は休日になると子どもを連れて子どもが遊んでいそうな場所を探して出かけるのだと話していたが、「親子教室」に出会ったことで、子どもも大人も輪が広がったと感想を述べている。

健康についての新たな視点では、広い意味での家族の生活を含めた健康と考えていたが、参加者の反応からは、まだまだ子どもの体を中心の健康ととらえる傾向が強かった。この中には「母子教室」当時にも多く見られた発達についての母親の悩み（言葉、行動、友だち関係など）が数多く含まれていた。

注目させられたのは、仕事を持つながらの「親子教室」への参加者であった。育児休業中の参加者も目につき、在宅で専業に子育てしている母親とのコミュニケーションを図りたいと希望してくる母親もいた。

(イ) プログラムの工夫と効果

「母子教室」当時から父親参加プログラムは日曜日に行っていたが、本年度は土曜日の午後にも実施し、父親が参加するプログラムを増やした。土曜日や日曜日に行うプログラム内容は基本的には両親参加とした。両親がともに受講することで夫婦間の共通の話題となり、互いに子育ての認識が得られるという結果が既にアンケート調査からも判明している。

また新たにプログラム化した「子育てトークサロン」は講師を交えて、主に父親が発言する場——講義形式から自由に発言できるディスカッション形式となるように企画した(母親も同席)。このことは、社会の第一線で働く父親の姿と家族とのかかわりなどの話題提供にもつながり、父親と母親の双方から熱心な発言が相次いだ。保育者は初対面同士の父親をリラックスさせるためにも車座になり、参加者を紹介したり、だれもが知っている歌(フォークソングなど)を皆で歌うなど、親への配慮をきめ細かく行った。

参加した父親からは、「ほかの父親の意見を聞いて参考になった」「仕事は忙しいが、家族のことももっと考える必要があると思った」「今日の講師の話は自分にとっては目からうろこが落ちる思いでした」などさまざまな反応が返ってきた。

同席している母親からは「夫が堂々と自分の意見を言ったので驚いた」「いつも忙しいと言っている夫に不満を感じていたが反省した」「いろいろな家族があり、子育てもそれがあることが分かった」などという声が聞かれた(毎回のアンケート調査から)。



お父さんも一緒に「親子教室」

(ウ) これからの保育と「親子教室」

〔子どもの城〕の「親子教室」は「母子教室」から数えて10年目に入っているが、社会的な少子化問題などともからみ、今、各地の保育所から見学や資料請求が多数寄せられている。保育所が地域の子育てセンターとして果たす役割が今後ますます求められると予想したことと思われる。その背景には保育者は子どもを保育することがあたりまえとしてきたことから、更に一步進めて子どもが豊かに育つ環境を幅広く考える必要が求められていることがある。

保育者が、親の子どもへの理解度を深めさせることや、子育てに関する地域のさまざまな資源（保健所、福祉事務所、教育委員会ほか）との連携を考えるとき、〔子どもの城〕の「親子教室」はささやかではあるが、その手引きとなっていることを実感した。

2) 保育事業（保育クラブ・幼児グループ）

保育実践活動は2年間定期的継続的に保育参加する4歳児と5歳児の幼児グループと、1年ごとに会員登録を更新する保育クラブを統合して活動を行っている。2～5歳児が対象である保育クラブは会員約400人が登録。2歳児の保育、3～5歳児の保育、親子プログラム、育児相談などのメニューからプログラムを選択して参加するようになっている（保育クラブシステムは前年度の年報に報告した）。

(ア) 2歳児の保育

2歳児の保育は、近くに遊び場がない、友だちがいないなどの子どものために集団の場を提供することを目的とするAプログラムと、母親の仕事や社会参加などのために保育が必要な場合の保育援助を目的とするBプログラムがある。

Aプログラムは、月曜日～土曜日の中から、週1・2日（1日3時間）。4か月を1単位とし、そのほかにもフリー予約や緊急予約の枠を2割程度設け、できるだけ多くの保育需要を受け止め、かつ個人的な対応を十分に行う保育方法を実現するよう活動した。

Bプログラムは、火曜日～金曜日の中から、週1～3日（1日6～8時間）。6か月を1単位とし、午前中はAプログラムと一緒に活動し、午後は年齢の異なる小グループで活動した。

(1)本年度の利用者の特徴

今までも、母親がどうしても送迎できない場合の、祖父母またはベビーシッターの送迎はあったが、本年度は母親が仕事をしているために日常の子育ては祖母に頼み、保育クラブへの送迎も祖母が行うという例が見られた。

祖母から見た子どもの様子は毎回伝えてもらえたが、母親から見た子どもの姿も把握したかったので、母親とのコミュニケーションは、利用ノートを通して、保育者が電話をして様子を聞いたり伝えたりした。

母親は、子どもの生活面は全面的に祖母に安心して任せ仕事ができるが、その反面、子どもとコミュニケーションがなかなかとれないこと、また、どうしても祖母にべったり甘やかされてしまっていることも気にかけていた。都心部の核家族化の進行の一方で、ここ1・2年親との同居世帯も目立ってきた。今後、母親の就労に関して、このように祖母などの送迎が起こってくると思うが、その際に母親とのコミュニケーションをどのような形で進めていくかが課題であるように感じた。

また、本年度は自営の手伝い、仕事復帰の準備などの理由から2期目からAプログラムからBプログラムへ移行する子どもが目立った。移行する際には、子どもたちにとって負担にならないように考慮した。しかし、1期で十分環境にも慣れ、保育者とも信頼関係がしっかりとできていたため、時間が伸びたことで不安定になる子どもはいなかった。

このような利用形態が増えてきたのは、子どもを第一に考えながらも、母親の自己充実に目が向けられるようになったためと考えられる。子どもの安定は母親が自分自身にも目を向ける余裕ができるきっかけづくりにもつながっているということを改めて感じた。

(2)親子活動について

Aプログラムに参加している14人の子どものうち5人は、毎週月曜日に6回目まで母親と一緒に保育に参加した。子どもの分離不安を軽減し、分離を無理なく進めるためのプログラム。母親と最初から分離する子どもと一緒に保育することに対する是非論はあるもののニーズが高いことも否めない。

子どもの安定は、保育者が子どもをしっかり受け止めていくことは言うまでもないが、まずは母親の不安を取り除かなければ成り立つものではない。そのため、このプログラムは、自分の子どもだけでなく、いろいろな子どもと触れ合いながら、また、保育者や他の母親と話しながら、少しずつでも母親の不安が解消できるように配慮しながら活動している。

保育者は母親が保育に参加することでやりやすい面もあったが、母親と十分にコミュニケーションをとり、母親と保育者が一緒に14人の子どもたちを保育していく雰囲気づくりをした。このような雰囲気づくりがうまくいったのは、最近このプログラムは、親子教室



2歳児の親子プログラム「いもほり」

の出身者が利用しているということも一因している。

親子活動参加の母親には「ほかの子どもの様子を見ることはとても大切なことであるので、ほかの子どもとも一緒に遊んでほしいと伝える」「分離している子どもの母親とも交流を深めるために、遠足をプログラムの中に組み込む」などの配慮をしている。

育児休業制度が導入され、1年間はしっかり育児に専念できるようになった反面、保育所入所時に分離不安を起こす子どもも少なくない。そのため、より子どもの負担を軽くするために、育児休業明け前に親子で保育に参加できる保育所が少しずつ増えてきている。このプログラムも、このようなニーズにこたえられるようにしていけたらと考える。

(3)異年齢児との交流

2歳児と3～5歳児は保育室は違うが、テーマ活動の時間以外はほとんど自由に行き来している。3～5歳児が2歳児の保育室に遊びに来て、2歳児がやっているままごと遊びの中に、ごく自然に入って遊んでいる姿も見られた。反対に、2歳児が3～5歳児の保育室に行き、モルモットにえさをあげたり、折り紙を折ってもらったりしていた。

2歳児の中には3～5歳児に姉や兄がいる子も多く、兄や姉が心配して妹や弟の様子を見に来たり(泣いていないか、給食は食べたかななど)、妹や弟のほうが兄や姉の姿を見に行き落ち着くこと也有った。

(イ) 3～5歳児の保育

3～5歳児の保育は、週4日2年間の単位で行う4・5歳児の幼児グループと、週1・2回4か月を1単位とする3歳児の保育クラブを統合した保育。複数担当制、ボランティアの保育参加、[こどもの城]各部門との連携など集団保育プログラムの進め方について、いろいろな角度からの試みを行った。

本年度は「チーム保育」「ボランティアの受け入れ」「他部門との連携」「3歳児の保育」について報告する。

(1)チーム保育について

「1人ひとりを大切にする保育」について論議が盛んである。1人ひとりを大切にする保育の1つの方法として、複数の保育者がそれぞれの視点から子どもを捉え、意見を交換し合うことでより総合的かつていねいな保育実践が行えると考え、チームによる保育を行ってきた。今年は内部の人事交流によって保育者チームに音楽を専攻したスタッフが音楽事業部から加わった。

このことはプログラム展開の面から特に音楽に関連して保育内容を発展させる結果を得た。歌遊びやゲーム、劇ごっこなどは、子どもの生活と深く結び付いているものであり“音楽”の枠でくくるような性格ではないものが多い。音楽のプログラムを行う場合、音楽面からの視点と保育面からの視点の両方を取

り入れ、子どもと生活を共有することにより、子どもの音楽的な側面により深くかかわっていくと実感した。

更に本年度は、各スタッフが「テーマ活動」(日替わりの集団遊びプログラム)を分担して受け持った。具体的には運動、造形、音楽、視聴覚関係のプログラムであり、これら4つの視点からも各スタッフの持ち味を生かしたプログラムの計画・実践が行われた。

(2)他事業部との連携

〔子どもの城〕の特徴を生かして、本年度も各事業部と以下のような連携を組んだ。

○音楽事業部=和太鼓、ブラジルのパーカッションなど楽器の貸与を受けた。

○造形事業部=陶器用粘土の扱い方やプログラム展開の際の留意点についての助言を受けた。

○体育事業部=毎週1回ずつ、幼児プールを借りて、「水あそび水中運動」を実施した。

○国際交流部=ハロウィーンやクリスマスのゲーム・歌遊びを紹介してもらつた。アメリカの生の文化に触れる体験ができた。また本年度は連携プログラムの一例として、12月17日に青山円形劇場で行われた、国際交流部公演「ミセス・サンタズクリスマス」に、幼児グループと保育クラブの子どもたち47人が、友情出演した。

(3)ボランティアとのかかわり

平常期間の保育には、日替わりで女性ボランティアや青年ボランティア、シニアボランティアが加わり、持ち味を生かした温かい交流が生まれた。

週2回参加した青年ボランティアの男性は、4月当初から、子どもたちに人気があり、「ねえ、今日は来ないの?」とスタッフに毎日聞いてくる子どもがいるほどであった。特にエネルギーを持て余している子どもが、「戦いっこ」で体ごとぶつかっていく場面が多く見られたが、いつでもそれを全身で受け止めてくれる存在であることが、子どもたちにとってたまらない魅力となっていたようである。

また、火曜日に毎週参加した女性ボランティアが、給食のほとんど食べられない子どもに1対1でじっくりと付き添うことによって、



ボランティアとの交流も活発に

年度の終わりには残さず食べられるようになるケースもあった。

シニアボランティアには、ベランダや裏庭での球根の栽培に力を貸してもらった。また、保育室に慣れるまでの時間のかかる3・4歳児にていねいにつきあってもらう中で、保育者とは違った感覚で捉えた子どもの姿を情報として提供してもらうことができた。

夏休み特別期間には、初めての試みとして、小・中学生にボランティアとして保育活動に参加してもらうプログラムを実施した。参加したのは、小学5年生が5人、小学6年生が2人、中学1年生が1人の計8人。1人当たりの参加回数を換算すると、延べにして25人となった。

参加の動機は「自分からどうしても参加したい」という子どものほかに親が積極的に子どもに参加をさせたというケースが多かった。参加した小・中学生は初めは「どうやって遊ぼう」と戸惑った様子も見られたが、野球ごっこをしたり一緒にプールに入ったりするうちに、すっかり自分自身もリラックスしているようだった。

保育クラブの子どもたちは、初めは小・中学生の存在を大人だか子どもだか分からぬ不思議な存在として見ていたようである。しかし、一緒に遊ぶことで、すぐに彼らを「自分たちに近い存在」として認め、相手を信頼し身を任せようとする気持ちも生まれていた。小・中学生も、ボランティア活動終了後に「小さい子とかみ合えた」という感想を寄せた子もいれば、2歳児と3歳児の発達の違いを体験的に捉えてスタッフに話してくれた子もいた。

小・中学生ボランティアの保育クラブ参加プログラムでは、年齢の異なる子ども同士の間で、“気持ちの通い合い”が行われた点に意義があったと考えられる。今後は、受け入れの仕方や保育者の対応の仕方などの点で更に検討を加えていきたい。

(4) 3歳児の保育

3歳児の保育は、曜日ごとに異なる顔触れの3歳児11人と定期的に保育参加する4・5歳児33人の保育である。

週1・2回の保育に参加する3歳児は、従来は親がまだ毎日の集団参加を不安に思って、少しずつ集団にならしたい、という理由が主なものであった。本年度も、一緒に遊ぶ友だちがない、近隣とのつきあいもほとんどないなど、人とのかかわりが少ないので保育クラブの中でたくさんの人と出会ってほしいという理由が多く挙げられている。

3歳児の保育クラブでは、定型的に通ってくる幼児グループの4・5歳児、保育スタッフを始めボランティアや他部門のスタッフなどたくさんの人とかかわることが多い。また単調だった家庭生活から週に1度保育クラブに通うことにより、子ども自身に自分なりの生活のリズムが出てくる。

3歳児は同じ保育室内にいる4・5歳児と一緒に遊ぶことで、3歳児だけよりも遊びが広がり、その中で「今度は自分たちがまねをしてみよう」という気持ちが出てくる。この気持ちは2歳児との合同プログラムの場において、發揮されている。

更に、近年保育ニーズの多様化にこたえるためにさまざまな保育のプログラム（駅型保育、ベビーシッター、幼稚教室、地域子育てセンターなど）が提示されるようになったことから、これらのプログラムの特徴をよく調べて選択し、組み合わせて使い始めている例が目立った。具体的には、幼稚園（9人）と、保育所（3人）と、その他（7人）との併用などである。

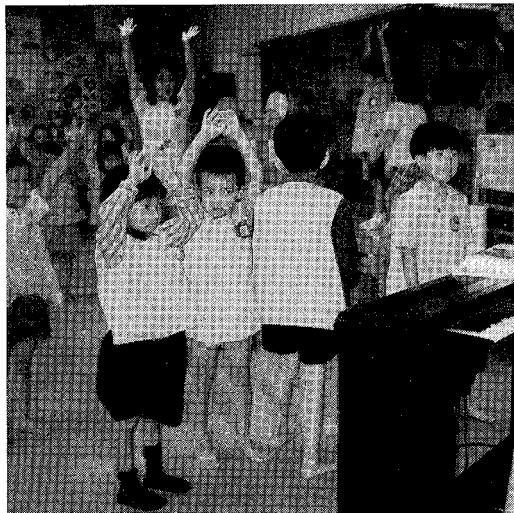
けいこごとや、駅型保育所、福祉センターなどのような非定型的なプログラムと併用する場合と、保育所・幼稚園のように定型的・連続的なプログラムと併用する場合とがあった。前者の場合は親が計画的にプログラムを組み合わせ、子どもの生活リズムをつくるべく、子どもの中で切り替えがうまくいき、1週間の生活リズムにも組み込まれてプログラム参加がスムーズにいく場合が多くかった。一方後者の場合は幼稚園や保育所の連続的な生活が中断されることになり子どもが戸惑ったり、保育所などの生活に影響が出てくることが懸念された。

(イ) 保育クラブ会員対象の親子イベント

保育クラブ2～5歳児と幼児グループの家族を対象とした親子イベントを行った。親子のskinshipを深める、会員親子の交流を図ることを目的として行われ、本年度は、①親子遠足（砧公園）②青空プレイ大会（都立代々木公園）③動物とのふれあいを行った。

それぞれのプログラムは、家族ぐるみでの多数の参加があり、親子遠足・青空プレイ大会は学校休日の第2土曜日に行ったこともあり、兄姉の参加も多く父親の参加も年々増え盛況であった。

「動物とのふれあい」プログラムは、(社)日本動物病院福祉協会の協力を得て、6月・12月と2回実施した。幼児グループはより深く動物を理解したり、触れ合えるように2回連続参加の「継続プログラム」とし、保育クラブは動物と触れ合うきっかけづくりのための「出会いのプログラム」とした。



みんな一緒に元気よく!! (3歳児)

(エ) 一般来館対象の親子プログラム

都会の生活空間の中では、特に低年齢児が十分動き回る場が制限され、この時期に大切な探索遊びや、感覚体験、そしてほかの子どもと出会う場が少なく日々求められているように感じる。これらの状況を踏まえ、保育クラブの活動が行われていない土曜日の午後2時からと、日曜日、祝日の午前10時から保育室IIに遊具や玩具を用意し、1・2歳児の遊び場として開放した。

夏休み特別期間と開館記念特別期間の2回、一般来館児・者対応のプログラムとして「作ってあそぼう 親子工房」を試みた。ここでは、親が子どもに教えるのではなく、共通体験をしながらそのことを語り合うという形で親子のコミュニケーションを図ること、身近な素材を利用してちょっとした発想と工夫で楽しく遊べるということに気づくことの2つのねらいでプログラムを考えた。日常の保育活動で実践した遊びやプログラムを一般にも広め、定着させていきたいと考えている。

また、保育活動を通して、親子、保育者、友だち、ボランティアとのかかわりの中から、子どもたちのいろいろな表情や場面を集め展示した写真展「育まれて」を開館記念特別期間に開催した。

3) 研修事業

(ア) 保育セミナー

「ぐるみ子育て論」のテーマで過去3年間にわたって論議してきたが、本年度は国際家族年にちなんで家族支援体制について「こども・家族・社会」を取り上げた。例年どおり厚生省などの後援を受けて8月6・7日の両日、〔子どもの城〕研修室で開催した。保育改革の時代を反映して先駆的な実践園や行政担当者の参加が目立ち、保育所の立場だけでなく、周辺領域との交流を求める声が聞かれた。

基調講演「対談・家族の中のデモクラシー——女性と家庭——」では、菅原真理子氏が時代とともに変わってきた女性の生き方を中心に述べた。柏女靈峰氏は児童相談所で子どもの福祉問題を担当し、その後厚生省で児童福祉行政に携わった経験から、家族の変遷について子育ての面から述べた。対談では、心や体に問題を持つ子どもの実態、女性が家庭と仕事を両立すること、3歳児神話などについて問題提起がなされた。会場からは、エンゼルプランについて子どもの側からの視点が見えないがどう考えたらいいか、と意見が出された。

第3分科会「保育のバックグラウンド——制度・財政・福祉——」では、まず清水康之氏から社会福祉はwell fareからwell beingへ変化していること、福祉財源の生かし方、保育ニーズの点検、保育改革の視点（公私格差、縦割り改革など）などが具体的に話された。保育サービスの概念についてなど、質疑応

答がなされた。まとめとして公私協力や1法人多施設化などにより、複合効果を期待していく時代であること、情報公開などによる住民参加も効果があるなどということが挙げられた。

シンポジウム「伝統的家族イメージからの出発」では、国際家族年のスローガンにちなんで“家族の中のデモクラシー”について論議した。深谷ペルタ氏は、家族のデモクラシーとは1人ひとりが集団の中に隠れるのではなく、自己決定と自己責任を意識することだと述べた。山崎美貴子氏はだれかの犠牲（献身）の上に成り立つ家族ではなく、それぞれが主体的・自主的に1人ひとりを大切にする、支え合える家族システムについて述べた。また、価値観が多様化している現在、法律もそれにこたえて、行政と個人を敵対関係にするのではなく、困った人に出会ったときに、相手がなぜそうなのかを理解するような開いたシステムが必要だと強調された。

(イ) 育児相談研修会

前年度の研修内容を踏まえて、保育所で保母が行う育児相談という観点で基本を確認しながら、「家庭育児の支援について——育児相談事業のすすめ方——」のテーマで年3回の研修会を行った。

保育所が行う育児支援事業に対する期待と関心の高まりは大きく、そのために各地で育児相談についての具体的な情報が望まれている。講師は例年どおり明治学院大学山崎美貴子教授と全国社会福祉協議会山田美和子高年福祉部長。

1回6時間という長時間にわたる研修会だが、各回とも事例に沿って具体的に相談の進め方についての問題点が明確化された。この研修には毎年多数の反響があり、今年も当初の予定より定員を増やしたが、申し込み者全員に応じきれなかった。今後は集中的に行う研修のほかに、若手保育者などを対象とした概論的な研修会も新たに設置し、並行して考えていく必要があると思われる。

各回のプログラムの内容は以下のとおり。

- 第1回=関係機関との連携についての基礎。「連携のできるまで」についての実践報告があり、それを基にディスカッションをした。
- 第2回=「エンゼルプランの周辺」「地域福祉計画の動向」についての講義の後、実際に参加者同士が交替で面接場面のロールプレイングを行い、その後先生方からスーパーバイズを受けた。



“こども・家庭・社会”をテーマに「保育セミナー」

○第3回＝育児センター機能とは何かについて「育児センタープログラムの実践」についての実践報告と「虐待をめぐる」事例研究を行い、本年度のまとめとした。

(ウ) ニュースレターの発行

本年度は5号・6号・7号と年3回発行し、年間講読料を1,000円として一般に頒布したところ、全国児童・保育関係主管課、育児相談実施の保育所を始めとした児童福祉施設から多くの申し込みがあった。

本年度は「地域が支える子育て」という特集を組み、行政関係の情報、地域の育児支援の実践報告、育児支援に関連する企業、経済界の動向、海外の子育て情報などについての記事を掲載した。

具体的な情報であること、ページ数が適当であることなどの点が好評で、特に育児相談研修会の概要報告に关心が高かった。各地の実践情報交換の場としても更に広げていきたい。

(エ) 実践報告および情報の提供

各地で育児支援活動への取り組みが活発になりそれに伴って〔子どもの城〕の保育実践について情報提供やプログラム紹介が求められた。主なものは以下のとおりである。

〈講演等〉

藤沢市教育委員会幼児期家庭教育学級（6.12） 中村裕

足立区保育園研修会「親子で楽しむ体操」（6.21） 中村裕

杉並区西保健所「1・2歳児の親子あそび」（10.27）

浦上純子・河原崎さとみ・平田一穂

五日市町教育委員会「親子で遊ぼう・親子スキンシップ教室」

（11.10・17, 12.1・8）

山田道子・浦上純子・新田久美・河原崎さとみ・平田一穂

新宿区四谷保健所母親学級（12.16, 1.20） 山田道子・河原崎さとみ

福岡市保育協会主任保母等同和保育研修会

「親の悩みにどうこたえていくか」（6.13・14） 岡本美智子

教護院教母研修会「家庭におけるこどもとのかかわり」（10.11）

深谷ベルタ

熊本市保育園長研修会「多様化する保育ニーズと育児支援」（11.22）

岡本美智子

〈学会報告〉

「保育者の現任研修のありかたについて」（第47回日本保育学会）

兼田文・岡本美智子

7 小児保健部

(1) 6年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
診療・相談 <小児科診療> 小児総合健康相談 育児・生活相談 乳幼児健診 <専門相談> 心理相談 栄養相談 小児肥満相談 小児精神相談 小児神経相談 耳鼻科相談 ダウン症相談 発達相談	月曜日を除く毎日 9:30~17:00 月 1 回 土曜日・日曜日	診療・相談はすべて予約制である。原則として健康保険が適用される。健康保険が適用されない場合には相談料扱いとなる（相談料 1 回 5,000 円）。 小児保健部の小児科医師、看護婦、保健婦、臨床心理士、栄養士、臨床検査技師が診療・相談を行う。また聴力検査・脳波検査、各種心理検査が可能。専門相談と連携しつつ行っている。 専門医が担当。耳鼻科・言語相談＝田中美郷（帝京大学医学部教授）、小児精神相談＝長畠正道（文京大学教育学部教授）、小児神経相談＝瀬川昌也（瀬川小児神経学クリニック院長）、ダウン症相談＝日暮眞（東京大学医学部教授）
赤ちゃんサロン	毎月第 2 ・ 第 4 火曜日 13:30~15:30	対象は 0 ~ 2 歳までの子どもとその親、あるいは妊娠婦。入館料対応。育児支援事業の一環として平成 3 年から実施。育児情報の交換や、医師、保健婦、栄養士、臨床心理士による育児相談が行われる。本年度は延べ 1,832 人が参加した。
第10回マタニティ・コンサート	4.29・30 14:00~16:00	妊娠婦に、妊娠中の生活を楽しんでいただこう、それによっておなかの赤ちゃんも健康に成長するからという趣旨のもとに行なった。青山円形劇場で、ソプラノ歌手柴田智子のコンサート。司会＝帆足由美、ピアノ＝金井紀子、メディカルゲスト＝野末源一・山王病院理事・巷野悟郎こともの城小児保健部長・市川英子日本赤十字社医療センター助産婦、企画・制作＝こともの城劇場事業部・小児保健部。参加 382 人。
第12回肥満児治療研究会市民講座	6.3 14:00~17:00	医師・保健婦・養護教諭等専門家向けの小児肥満の講座で、肥満治療研究会との共催で行なった。「小児肥満の理解と対策——肥満の子どもを見守って——」をメインテーマに内容は「小児肥満はなぜ問題か」（村田光範東京女子医科大学第 2 病院院長）、「肥満予防の生活と食事」（こともの城小児保健部太田百合子）、「肥満児の運動特性とその指導法」（こともの城体育事業部長羽崎泰男）、「小児肥満の心理学的理解と対応」（こともの城小児保健部次長吉田弘道）。参加 130 人。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
<夏休み> こども一日ドック	7.28・29 12:00~17:30	対象は小学生と中学生。体育事業部との共同事業。医師による診察、検査(呼吸機能・聴力・尿・血圧測定), 身体計測, 生活習慣調査, 食生活調査, 心理検査, 体力測定の結果に基づいた診断・指導。受診者は15人。
<開館記念> 赤ちゃん大集合～赤ちゃんサロン秋季大会	11.1 11:00~15:00	平常期間に行っている赤ちゃんサロンに, 各種のイベントを盛り込んで行った。小児科医トーク, 親子遊び(保育研究開発部), 親子体操(体育事業部), 育児漫才(小児保健部)など。参加者310人。
<〃> 家族芸術祭 無料子育て相談	11.2・3	親の子育てを援助し, 親子関係を振り返ってもらうために, 小児科医による育児相談を行った。二木武実践女子大学教授, 川野悟郎こどもの城小児保健部長が担当。参加者14人。
<〃> 第9回小児保健セミナー「目・歯(口)・耳」	10・29 10:00~17:00	発育する子どもの身体の中でも, 目・歯・耳という3つの具体的な器官を選び, 育児の中で起こりやすい心配や問題についてそれぞれの専門家が講演。「目」田中靖彦慶應大学医学部眼科助教授、「歯(口)」向井美恵昭和大学歯学部口腔衛生学教授、「耳」田中美郷帝京大学文学部兼医学部耳鼻咽喉科教授。参加者118人。
<春休み> こども一日ドック	3.30 12:00~17:30	受診者9人。

3) 講座・クラブ

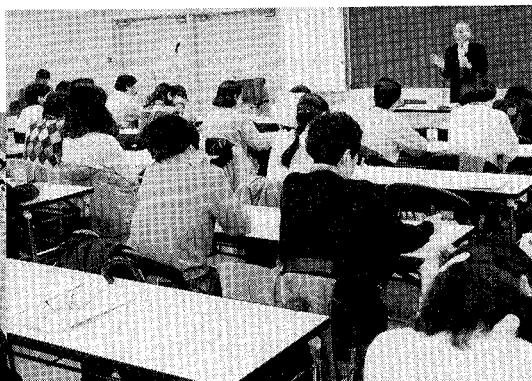
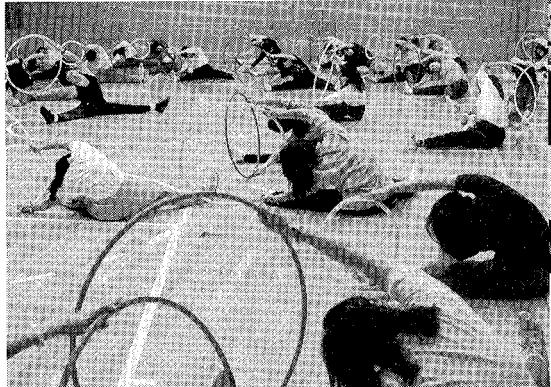
<講座>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
健康スポーツ教室 <太りすぎクラス>第10期	(組) 小学生1~6年生の太りすぎ児童とその親(25)	(組) ① 25 ② 25 ③ 25	土曜日 14:00~17:00	体育事業部との協力事業。太りすぎの改善のために医学指導・栄養指導・体育指導を行う。外部講師として, 村田光範東京女子医科大学第2病院院長・山崎公恵講師・市川みやぎ医師・数間雅子医師, 坂本元子和洋女子大学教授・小林幸子教授・石井莊子助教授・藤澤由美子講師。
マタニティ・スイミング	(人) 妊娠16週以降の妊婦(35)	(人) 4月15 5月16 6月20 7月19 8月21 9月23 10月16 11月9 12月11 1月12 2月15 3月19	水泳(火曜日・木曜日, 月7回) 10:00~12:00 レクチャー(火曜日または木曜日, 月1回) 13:30~14:30	体育事業部との協力事業。水泳という活動を通して, 妊娠中を心身ともに健康に過ごすことをねらっている。講師として, 日本赤十字社医療センター産科医師, 助産婦。 月1回水泳終了後に助産婦や産科医師などによるレクチャーを行った。質疑応答の時間も設けている。
母と子のリトミック<ダウン症クラス>第10期	(組) 3~5歳のダウン症児とその親(15)	(組) ① 8 ② 9 ③ 10	木曜日 13:30~15:30	音楽事業部との協力事業。音楽のリズム遊びを通して, 子どもたちが母親とリラックスして楽しく過ごせることをねらいしている。講師は音楽事業部吉村温子。

<講習会等>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
小児肥満のための指導者講習会 (第16回)	(人) 養護教諭、栄養士、保健婦、保母など (50)	(人) 59	10.28 10:00~17:00	小児肥満の指導を実際に行っている人、あるいはこれから行おうという人が集まった。保健所などで幼児肥満の指導も開始されていることから、関心が高まっており、講習会は活気のあるものとなった。内容「肥満の判定と指導」山崎公恵東京女子医科大学講師、「肥満改善のための食事・栄養指導」坂本元子和洋女子大学教授、「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長。
" (第17回)	"	56	3.10 10:00~17:00	全国から肥満児の指導について学習したいという人が集まった。内容「肥満の判定と指導」村田光範東京女子医科大学第2病院院長、「肥満改善のための食事・栄養指導」坂本元子和洋女子大学教授、「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長。
第1回小児保健研修会 「不登校とは何か」	養護教諭、保母、心理相談員など (30)	30	6.4 10:00~17:00	不登校について、3つの視点から問題を整理し、原点にさかのぼって考える研修会を持った。内容「学校制度から」日名子太郎聖徳大学児童学科教授、「教育の現場から」安藤順子町田市立第3中学校教諭、「児童の精神医学の立場から」稻村博一橋大学社会学部教授。
第2回小児保健研修会 「乳幼児栄養の実際」	栄養士、保健婦、看護婦、保母、養護教諭など (30)	52	3.4 10:00~16:00	多くの乳幼児向け食品が出回っているが、それらについての知識は必ずしも十分でない。今回は「乳幼児の食」についての知識を整理した。丹羽洋子育児文化研究所所長から「現在の食生活の問題点」を提起し、今村榮一元国立小児病院副院長(小児科医)からは、ミルク・離乳食・幼児食の実際などについて話してもらった。
アレルギー研修会	保健婦、保母、看護婦など (30)	16	5.14 14:00~16:00	アトピー性皮膚炎といわれる子どもたちが増えている。アトピーとは何か、どのように理解し、どのように対処したらいいのかなどについて分かりやすい内容の研修会。講師は山本一哉国立小児病院皮膚科医長。

体育室で「肥満児の運動指導・実技紹介」
(小児肥満のための指導者講習会)



第2回小児保健研修会

小児保健

(2) 小児保健部の活動

小児保健部は、子どもの心と体の健康の問題に取り組み、親たちの子どもについての心配や悩みの相談に乗りながら、子育ての支援をしていく目的を持っている。その活動は、個別に心や体の問題を対象としたクリニックの診療・相談活動、グループで行う講座や育児支援の活動、専門家向けの研修会などの啓発活動、そして研究活動の4領域に分けられる。ここでは、小児保健部の中心的活動であるクリニックの診療・相談活動と乳幼児の育児支援の活動について報告することにする。



「赤ちゃんサロン」は現代版“井戸端会議”

1) 診療・相談活動

小児保健クリニックは、予約制の小児科の診療所だが、ほかの診療機関と違う点は、腹痛や発熱といった急性の症状のある病気の医学的治療を目的としてはいないことである。ここではまず、小児科医が1回30分から1時間かけて、心や体についての発達や状態が気がかりな子どもの診察を行い、親からもよく話を聴いて相談に当たる。例えば、太りすぎ・食べない・風邪をひきやすい・アレルギーなどの体の問題、言葉の発達が遅い・自閉的傾向があるなどの発達

【月別診療・相談件数】(特別期間の無料相談コーナーの相談者を除く)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
診療	210	214	247	256	216	193	215	244	242	223	219	222
健診	15	4	28	7	8	11	16	11	11	4	7	10
相談	10	9	4	3	1	3	7	8	6	7	11	6
合計	235	227	279	266	225	207	238	263	259	234	237	238
内訳												
初診	29	17	37	37	31	21	29	29	23	24	15	18
再診	206	210	242	229	194	186	209	234	236	210	222	220

※診療合計=2,701件、健診=132件、相談合計=75件、総合計=2,908件

初診合計=310件、再診合計=2,598件

に関係した問題、学校や幼稚園に行かない・いじめる／いじめられる・友だちと遊べない・落ち着きがない・不安が強いなど情緒・性格・行動・集団生活への適応についての問題である。また、夜尿・チック（目をパチパチするなどの癖）・脱毛など心と体の両方が関係している問題もある。

これらの問題を解決していくために、小児科医の診察・相談の後、必要があれば各種の検査や専門相談部門に紹介される。そこで、例えば、発達の問題では、脳波・聴力などの検査および、精神科・神経科・耳鼻科の専門外来（場合によりダウントラウム外来）で医療上必要な診察を受け、臨床心理士による発達の相談も受けられる。

不登校などの心理的な問題については、心理相談に紹介されるが、十分に時間をかけ、患者である親子と信頼関係をつくって継続的に相談をする。このような子どもの問題の解決に当たっては、背景にある本人の生育歴・生活環境・家族関係・幼稚園や学校での生活などについて、詳しく聴き、理解することが必要だからである。そして、人間関係や社会性および人格の形成を目的に行っていくので、1組の相談について、毎週～隔週に1回通っても何年もかかることもある。

本年度は、社会的にも子どものいじめや自殺の問題が大きく取り上げられ、子どもの生活における心の面の援助やケアが話題となった年であった。小児保健クリニックは、[こどもの城]という“遊び場”の中にある診療所であり、子どもも親も病院より訪れやすく、小児科で心と体の両面を相談できる場として知られてきている。

本年度のクリニックの来所者概要をみると、診療・相談の総件数は、2,908件で、月別の内訳は前ページの表のとおりである。なお、新規来所者（初診数）は、310件で、マタニティ・スイミング

【新規来所者数】(初診カルテ発行数)

	実数(人)
診療	202
健診	79
相談（育児・心理）	29
マタニティ・スイミング	63
合 計	373

【来所者の居住地域内訳】

居 住 地 域	人 数	%
渋 谷 区	53	14.2
世 田 谷 区	61	16.4
新 宿 区	6	1.6
港 区	25	6.7
目 黒 区	15	4.0
そ の 他 の 23 区	98	26.3
都 内 (市 部)	17	4.6
神 奈 川 県	43	11.5
千 葉 県	25	6.7
埼 玉 県	21	5.6
そ の 他 の 都 道 府 県	9	2.4
合 計	373	100

【初回来所時年齢内訳】

(人)	
0	49
1	24
2	35
3	27
4	33
5	20
6	22
7	26
8	19
9	14
10	14
11	12
12~17	12
18歳以上	66
合計	373

受講者の数を含めると373件である。居住地域と年齢別の内訳は、マタニティ・スイミング受講者を含めたものであるが、地域的には東京都が約4分の3を占め、他県が4分の1を占めている。診療・相談の来所者は年齢的には乳幼児から学童が多い。この傾向はこれまでと変わっていない。診療とは、健康保険の適用を受けている診療活動であり、健診はいわゆる乳幼児健診および任意で受診する健康診断である。相談には、有料の育児相談・心理相談があり（相談料5,000円），特に不登校などの場合、親がせっぱ詰まって緊急に相談を受けたいという需要が高く、初回は相談料での心理相談で受けておき、その後医師の診察に移り、診療の体制に乗せることがある。相談の主な内容は次のとおりである（下表参照）。

診療では、言語や精神・運動発達の遅れ・自閉症・学習障害・ダウン症などの発達の問題で来所する例は31%で、件数も割合も昨年より増加している。子どもの発達の遅れが気になった場合の第一次受診機関として、受診することが多い。ダウン症は、専門外来の受診が目的であることが多い。

神経症・情緒障害・集団不適応など心理的な問題で来所する例は、診療の中では16%で、小児科医に初診を受けた後、心理相談に紹介されるものも多い。更に、心理相談に直接来所する緊急性の高い件数が増えているので、これを含めると、診療・相談の中で24%を占めている。

肥満は、診療・相談の中で13%を占めているが、健康教室を行っているため、外来受診も多い。外来から健康教室につながる例もある。最近は家族関係を含む生活や心理的側面についても詳しい助言や相談の必要な事例が増えている。

言葉の発達の遅れについては、内容的には、器質的な障害をベースにする例だけではなく、家庭で親が乳幼児期に子どもの成長に合った遊びや経験を提供できなかった例や海外生活の影響など、親のかかわり方や育児環境に援助の必要なケースが多く含まれてい

【診療・相談新規来所者の内容内訳】（重複あり）

	人數	%
言語発達遅滞（疑いも含む）	53	17.1
精神・運動発達遅滞（疑いも含む）	15	4.8
自閉症	3	1.0
学習障害・多動など	7	2.3
ダウン症、その他の先天異常	19	6.1
心身症・神経症・情緒障害など (夜尿・脱毛・恐怖症など)	45	14.5
その他の心理面の問題 (不登校・集団不適応など)	6	1.9
肥満	39	12.6
アレルギー疾患・湿疹など	4	1.3
その他身体面の問題（低身長など）	13	4.2
健康診断（乳幼児健診含む）	79	25.5
相談（相談料扱い）　育児	6	1.9
心理	23	7.4
合　　計	312	100.6

※重複2人を含む。%は初診合計の310人を分母にして算出。

る。

このようなことを考えると、個別の診療・相談も、広い意味での育児支援活動の1つであり、決して病的で特殊なケースのみを扱うのではなく、子どもの育つ環境のひずみやゆがみが子どもの症状となって現れてきているとみることができる。それは、個々の家族のみの問題でなく、社会全体の風潮や傾向を反映するものであろう。現在の社会の傾向や構造が変わらない限り、小児科の領域に、このような子どもの心身の健康の問題が持ち込まれることは、今後も減ることはないばかりか、増加するであろう。そして、個々のケースを時間と人手をかけて見ていくことは、経済性という点では効率が悪いが、今後必要とされる援助の在り方の方向性を構築しているのである。

2) グループで行う、講座や育児支援の活動

体育事業部と行っている「健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉」「マタニティ・スイミング」、音楽事業部と行っている「母と子のリトミック〈ダウン症クラス〉」など、ほかの部門と連携しながら行う講座があり、これらはクリニックでの臨床経験と他部門の専門的な指導力を生かして、生き生きと楽しい健康的な生活への援助を行うものである。

また、月2回行っている「赤ちゃんサロン」は、妊婦および生後3か月から2歳までの子どもとその親を対象にした、いわば“井戸端会議の場”である。一般来館の形で自由に集まってもらい、親同士の語らいと交流の機会を提供し、小児保健部の小児科医・保健婦・臨床心理士・栄養士が中に入って育児の疑問に答え、正しい育児情報を伝えるようにしている。若い母親たちは、家庭で孤立しがちで、育児への不安も高く、この「赤ち



10回目を迎えた「マタニティ・コンサート」
(青山円形劇場)



「赤ちゃん大集合～赤ちゃんサロン秋季大会」

「やんサロン」は、毎回多くの参加者を得ている（1年間で1,832人）。子どもの心身の発達に最も大切な乳幼児期への育児支援の活動として、今後いろいろな地域に広がっていくことが望ましい。「赤ちゃんサロン」は、日ごろは小児保健部の活動として行っているが、本年度は「家族芸術祭 親子体験ワークショップ」の一環として、特別に体育や保育のプログラムも織り込んだ「赤ちゃん大集合～赤ちゃんサロン秋季大会」というイベントの形でも行われ、大盛況であった。

3) その他の活動

このほかに育児にかかわる専門家向けの研修会・講習会と研究活動があり、個別の診療・相談やグループでの活動の経験を互いにフィード・バックし合いながら機能しており、現代の子育ての背景を支えるに必要な視点を提供している。

また、1月17日に起きた「阪神・淡路大震災」の心のケア活動にも参加した。淡路島の一宮町に臨床心理士1人が出向き、現地スタッフ（一宮町子育てふれあいセンター佐藤亮子所長）とともに、保育所の幼児については保母との話し合い、地域の母親たちについてはカウンセリングを行った。

企画部

(1) 6年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備 考
こどもの城入館者 1,000万人達成記念 セレモニー	10.30	おおよそ10か月に100万人の割合で区切りを迎える入館者。いとこの紹介で初めて【こどもの城】に遊びに来たという、墨田区の丸山奈緒子さん（9歳）が1,000万人目となった。音楽事業部の協力でアンクルンの演奏を行い、【こどもの城】のマスコット、マック・マックローと一緒にくす玉を割るなどして、ほかの来館者とともに祝った。
おりがみカーニバル	11.11~13	日本折紙協会との共催で、折り紙作品の展示・ワークショップ・講習会などを実施した。日本に昔から伝わる「折り紙」を単に遊び道具としてだけではなく、造形的な視野からもとらえることによって、近代的で知的な遊びとして再構築を図ることを目的とした。

2) 特別期間プログラム

名 称	期 間	備 考
国際家族年記念 おやこフェスティバル	5.3~5	親子で楽しめる参加型の音楽コンサートや、子どもたちの大好きなお話を朗読劇で見せ、聞かせてくれるリーダーズシアターなど。 5月3日 「おんがくがスキ！」 おんがくずき 5月4日 「愉快なコンサート」 ロバの音楽座 5月5日 「おはなししがいっぱい」 楽劇団いちょう座
「ひらこう子どもの 未来」展	4.29~5.8	【こどもの城】の各事業部のプログラムを〈あそび〉をテーマに、写真パネルで紹介した。そのほかに、健全育成の理念や子どもの権利条約の日本語訳などを、子どもたちにも分かりやすく紹介した。また、メキシコ大統領夫人および同大使館からの要請もあり、メキシコの「パパローテ子ども博物館」所蔵の玩具なども展示した。
マックロー グリーティング	5.5	5月5日は【こどもの城】のマスコット、マック・マックローの誕生日。こどもの日のお祝いを兼ねて、館内の子どもたちにグリーティング・カードを配ったり握手をして回った。
国際家族年記念 人形劇見本市	8.13~17	【こどもの城】を訪れる多くの親子連れにさまざまな人形劇を見る機会を提供するとともに、児童文化としての人形劇の魅力をより多くの児童健全育成関係者にも理解してもらうことを目的に実施。東日本専門人形劇団協議会との共催で、東京の劇団を中心に12の専門劇団が出演。

名 称	期 間	備 考
世界の子どもたちII ～アジアの仲間と くらし～	7.21~8.31	㈱日本ユネスコ協会連盟、東京都ユネスコ協会との共催で実施。昨年の「世界の子どもたち」の第2弾として、「アジアの仲間とくらし」と題し、アジアの子どもたちによる絵日記と日常的な玩具の展示を行った。子どもたちの身近なところから、異文化に触れたり理解しようという目的。
国際家族年記念 おやこフェスティバル 大地を搖るがす魂の響き～富岳太鼓コンサート	8.18	知的障害を持つ人の、生きがいあるリハビリの方法として始められた「富岳太鼓」のコンサートで、子どもたちの元気な演奏や女性だけの華やかな演奏、竜の舞もある迫力ある和太鼓を鑑賞した。曲はすべて富士山をテーマにしたオリジナル。フィナーレでは会場の子どもたちも“ばち”を持って体験、交流した。
家族芸術祭・開館9周年記念セレモニー	11.1	国際家族年記念家族芸術祭の親子体験ワークショップの開催セレモニーと併せて、アトリウムで実施。入館者1,000万人記念セレモニーと同様に、音楽事業部のアンクルンの演奏を楽しみながら子どもたちと一緒にくす玉を割るなどして祝った。また、子どもたちから歌のプレゼントを受けた。参加者全員に、記念として“子どもの城バッヂ”が配られた。
凧作りのワークショップ	1.4~8.14~16	日本の伝統的な遊びの文化を子どもたちに引き継ぐことを目的に、昨年まで実施していた「お正月の遊び大集合」の中から、凧作りのワークショップを行った。恒例となった「エイ凧」と気球の形をした「バルーン凧」のワークショップを日本の凧の会の協力により実施した。
新春もちつき大会	1.5	例年、冷たい強風が吹き荒れる屋上での「もちつき」。本年度は穏やかな日となり、多くの親子が参加。2組の臼と杵を用い、ほかの人�큏がつく様子を見たり自分で体験しつきたてのお餅を食べる楽しいお正月行事の1つ。
こま名人きたる！	1.14~16	名古屋にある日本独楽博物館の館長である藤田由仁氏を迎えて、独楽の技のデモンストレーションとワークショップを実施。このプログラムもお正月恒例となっている。藤田氏は“こまのおっちゃん”的愛称で、子どもたちに親しまれている。

3) その他

名 称	期 間	備 考
「おもちゃ図書館マックロー」	年末、年始を除く 毎週水曜日 11:00~16:00	心身に障害のある子どもたちを対象として作られた、全国に約400か所ある「おもちゃ図書館」の1つとして、昭和62年に「子どもの城」に開設された。おもちゃの貸し出し事業のほか、その場でおもちゃを使って遊ぶことができる、障害のない子どもたちも含めた共同の遊び場。10数人のボランティアによって運営されている。本年度には48回開催され、利用者は延べ711人、おもちゃの貸し出し数は463個。活動に参加したボランティアは延べ482人にのぼった。
豊かな遊びを広げるおもちゃ展	10.18~23	子どもの城ギャラリーで、おもちゃ図書館活動の紹介と市販されて使いやすい玩具の紹介を目的とした「豊かな遊びを広げるおもちゃ展」を開催した。
わいわいキッズコンサート	11.13	小田急吹奏楽団の協力を得て、青山円形劇場で「わいわいキッズコンサート」が開催され、多数の子どもたちが集まった。

4) アトリウムギャラリー使用一覧

名 称	期 間	備 考
「アートスケープ'94」	4.11~24	インターナショナル・スクールの生徒が制作した美術作品の展示。主催は東京・横浜地区のインターナショナル・スクール8校。
「ひらこう子どもの未来」展	4.29~5.8	【子どもの城】の事業。「国際家族年」「子どもの権利条約」の紹介。主催は財日本児童手当協会。
「池田大作とワイルド・スマス」展	5.20~29	池田大作とワイルド・スマス共同制作による絵本の原画展。主催は創価学会。
第7回遊びと造形発想展 -見つける、見たてる、見なおす-	6.11~26	造形の発想をテーマに、造形のおもしろさを発見し、体験する展覧会。遊びと造形発想の会と財日本児童手当協会の共催。
世界の子どもたちII ～アジアの仲間とくらし～	7.21~8.31	アジア地域の子どもたちの絵日記による遊びと生活風景の紹介。主催は、財日本児童手当協会、財日本ユネスコ協会連盟、財東京都ユネスコ協会。
「キルト・スタジオ・布細工」 作品発表会	9.2~4	キルト・スタジオ・布細工で学ぶ人たちが制作したキルト作品の展示。主催はキルト・スタジオ・布細工。
国際家族年記念 田沼武能の写真による 「世界の子どもと家族」写真展	9.10~10.10	写真家田沼武能氏が撮影した、世界の子どもと家族をテーマにした作品130点の展示。主催は、厚生省、財こども未来財団、財日本児童手当協会。
豊かな遊びを広げるおもちゃ展	10.18~23	おもちゃ図書館活動と市販されている玩具の紹介。主催は、財日本おもちゃ図書館財団、財日本児童手当協会。
国際家族年記念 「全国児童館造形フェスティバル」	10.29~11.27	「わたしたちの家族」をテーマに、児童館を拠点として子どもたちが制作した造形作品の展示。主催は、厚生省、財こども未来財団、財日本児童手当協会。
国際家族年記念 「家族・はがきアート展」	12.3~7.1.8	はがきのうえに表現した「家族」を全国から約2,000点集めて展示。主催は、厚生省、財こども未来財団、財日本児童手当協会。
Smiling Face '95	1.25~2.6	子どもをテーマにした写真コンクールの入賞作品の展示。主催は、Smiling Face '95実行委員会。
「第42回全国小中学生優秀 作品コンクール」入賞作品展	3.11~21	全国の小・中学生による絵画、書写、作文の入賞作の展示。主催は財児童憲章愛の会。
ゆかいな絵本と童話の世界展	3.24~3.31	童話と絵本のコンクール入賞作品の原画の展示。主催は日産自動車(株)広報部。

(2) 企画部の活動

各事業部が実施する事業の調整業務のほかに、国からの委託事業である国際家族年記念事業「家族芸術祭」の事務局および、国からの助成を受けた「動く子どもの城」の事務局としての業務が加わった（「家族芸術祭」「動く子どもの城」については175～184ページ参照）。

ゴールデンウイークには、各部の協力を得て“遊び”という統一テーマで各部の事業を紹介した展示や、「家族芸術祭」では、【子どもの城】全体で取り組んだ「親子体験ワークショップ」の担当者会議などを運営し、新しい形での全館的事業に取り組むことができた。

具体的な事業以外の部分では、来館児・者に快適に、かつ楽しく過ごしてもらえるように、行事の掲示、放送、総合案内、休憩室の確保についても取り組んだ。また、アトリウム（総合案内課）では、講座・クラブなどの受付業務や運営状況の把握、友の会運営、グループ活動や視察・見学の受け入れなどを行った。

1) 平常期間の活動

平常期間中は、各部のまとめや調整などを中心に業務を進めているが、本年度は「家族芸術祭」、「動く子どもの城」の事業の企画運営・準備なども同時に行った。

(ア) おりがみカーニバル

11月11日の「折紙の日」にちなんで、「おりがみカーニバル」を実施した。地下1階フリーホールでは、日本折紙協会会員による作品を展示するとともに一般来館児・者を対象にクリスマス装飾のワークショップを開催した。

児童館、幼稚園、保育所などの先生向けには、「おりがみにつよくなる講習会」を2日間開催し、日本折紙協会認定の折紙講師のためのレベルアップ勉強会も実施した。

2) 特別期間の活動

(ア) 児童福祉週間（ゴールデンウイーク）

4月29日から5月5日までを「児童福祉週間特別期間」とし、特にプログラムの充実を図っている。なお、5月5日の「子どもの日」は18歳未満の児童の入館は無料。企画部では、全体事業の調整のほか、館内の混雑状況の把握やけがや事故への対応のために、緊急対策についての組織を確立し、各部が連携して対応できるようにした。

(1)おやこフェスティバル

この時期は、「こども活動エリア」が大変混雑するため、来館児・者に少しでも楽しく過ごしてもらえるように、青山円形劇場を「こども活動エリア」の一部として使用し、親子向けの楽しい音楽プログラムなどを提供した。今年のプログラムは次のとおり。

○5月3日 「おんがくがスキ！」 出演：おんがくずき

珍しい太鼓や身近にあるものを楽器代わりに演奏したり、みんなに親しまれている曲をいろいろアレンジして聞かせるなどのほか、手遊びもあり、参加できる音楽バラエティーショー。

○5月4日 「愉快なコンサート」 出演：ロバの音楽座

ルネサンス時代の古楽器や民族楽器を使った演奏会。仮面劇ではビンを吹いて合奏するなど、身近なものを楽器代わりにしたものも紹介した。

○5月5日 「おはなししがいっぱい！」 出演：楽劇団いちょう座

お話を簡単な演技で見せ語りする朗読劇(リーダーズシアター)。絵本や昔話など5話を紹介。完全な劇にはなっていないので、空想が楽しい年齢層にはとても興味深いプログラム。

(イ) 夏休み特別期間

この時期の企画部の重要な役割は、ほかの特別期間同様、プログラムの調整と夏休み特別期間の“核”となるような大型の全館行事を行うことである。特に旧盆の来館児・者の多い時期には、児童福祉週間同様青山円形劇場などで「人形劇見本市」を実施した。

(1)世界の子どもたちII

子どもたちに身近なものを展示、紹介することによって、世界の国々について理解を深めようと行われたギャラリー展示の第2弾。展示だけでは参加性が弱いため、文化紹介のほかに実際にプログラムを共有するなど、ネイティブの人たちとの交流を取り入れていけるようにしたい。

(2)人形劇見本市

昨年に引き続き、子どもたちの感性を豊かにする児童文化の1つとして人形劇を取り上げ、公演を行った。本年度は、前年度の共催団体である日本人形劇人協会は協力、東日本専門人形劇団協議会との共催で実施した。

「人形劇見本市」は、さまざまな種類の人形劇の上演だけでなく、ワークショップも実施し、いろいろな角度から人形劇に直接触れる機会とした。

『人形劇見本市』

8月 13日	とんがり石のむこうがわ 花咲かじいさん ワークショップ	童心座 糸あやつり人形劇団みのむし 人形劇団ひとみ座幼児劇場	フリーホール 音楽スタジオB 研修室
-----------	-----------------------------------	--------------------------------------	--------------------------

14日	たっちゃんといっしょ あまがえる なぜなくの? ワークショップ	れもん座 マリオネット・グループ マスク トムテ・パペット・ショー	フリーホール 音楽スタジオB 研修室
15日	小さなお城 あれ?おや?げきじょう 人形パフォーマンス ワークショップ	人形舞台 エミ 人形劇団 くぐつ トムテ・パペット・ショー 東日本専門人形劇団協議会	青山円形劇場 フリーホール 音楽スタジオB 研修室
16日	ま・満月の夜に～シンポシオン メルヘン・ワールド・サーカス はっけよいポヤンボ ワークショップ	うさぎ小屋&カンパニー メルヘン人形劇場 つばくろ人形座 東日本専門人形劇団協議会	青山円形劇場 〃 フリーホール 研修室
17日	メルヘン・ワールド・サーカス 日本昔話より はなたれ童子 ぱたばた・ふうふう ワークショップ	メルヘン人形劇場 人形劇団ポボロ 人形劇団ひとみ座幼児劇場 メルヘン人形劇場	青山円形劇場 〃 フリーホール 研修室

(3)「大地を搖るがす魂の響き～富岳太鼓コンサート」

人形劇見本市に続く日程で、御殿場にある（社福）富岳会の和太鼓のグループの公演を実施した。日本の伝統的な楽器である和太鼓に触れる機会となっただけでなく、障害を持ちながらも練習を重ね、一心に演奏する姿を見、交流することができ、来館者にとって感動を残す公演となった。

(ウ) 冬休み特別期間

この期間には、特に日本の伝統的な遊びの文化を子どもたちに引き継ぐことをねらいとして、凧(たこ)，独楽(こま)，もちつきなどの伝承遊びを取り上げて正月らしい大型のプログラムを実施した。

【凧作りのワークショップ】

伝承遊びを紹介する中で、凧作りに挑戦するコーナーを地下1階フリーホールに設けた。自分の手で作り、それで遊ぶ楽しさを体験し、伝承遊びに興味を持つてもらうことが目的。日本の凧の会会員の方に指導をお願いした。

【新春もちつき大会】

伝統文化を伝えることや体験することを大事にしようと、子どもたちと一緒に屋上遊園で毎年行っている行事。

【こま名人きたる!】

お正月恒例、こま名人こと藤田由仁日本独楽博物館館長の出演。珍しい独楽の紹介から、練習次第で子どもたちでも挑戦できるような、安価な独楽でもできる技の数々、扇子や刀の上の独楽回しなどを披露。デモンストレーション

のあとには、回し方を教わり練習するコーナーも設けて実施した。

3) グループ活動

ここ数年、利用団体数の減少傾向にあったが、本年度は105団体、2,429人と、

【プログラム一覧】

担当部門	プログラム名	対象	定員(人)
音楽 事業部	忍者ってほんとうにいたの？	3～5歳	30
	スカーフであそぼう	〃	〃
	まつりばやし	〃	〃
	ガムランで遊ぼう	3歳以上、障	〃
	めずらし楽器大集合	小1以上、障	〃
	サンバでおどろう	4・5歳	〃
	たたいてみよう日本の太鼓	〃	25
	タムタム大王と遊ぼう	〃	30
	わいわいバンドで遊ぼう	3～5歳	〃
造形 事業部	インドネシア・アンクルン	小1以上	〃
	かげをうつそう	4歳	24
	木をつくろう	～小6、障	30
A V 事業部	粘土でジャングル旅行	5歳～小2、障	15
	みんなでつくろうばたばたアニメ	4歳以上	30
	フィルムに絵を描いてみよう	〃	〃
体育 事業部	ビデオであそぼう	小3以上	〃
	すてきな新体操	3歳～中3	30
	たのしい体育・運動	3～5歳、障	〃
	レクリエーション	小1以上、障	〃
	マット・てつぽう・とびばこ	小1以上	〃
	体力測定	小1以上、障	〃
	球技で楽しく汗を流そう！	小3以上	〃
プレイ 事業部	みんないっしょに	3歳～小2	45
	スペシャルじゃんけんゲーム	小1以上	〃
	子どもの城オリンピック	〃	〃
	ニューススポーツで遊ぼう	小3以上	30
	森へ行こう	4歳～小2	〃
	忍者修行道場	〃	〃
	五龍（ウーロン）大武闘大会	〃	45
	楽しいコンピュータ	5歳以上	30
	グラフィックス		
	カードを作ろう	小1以上	〃
企画部	ロゴで遊ぼう	小3以上	40
	パソコンミュージックに挑戦	〃	〃

※「障」は養護学校・特殊学級など

ピーク時の平成元年度105団体、2,348人、平成2年度110団体、2,482人に続く結果となった。なかでも幼稚園の利用が利用総数の約半数の50団体を占めたこと、また国際交流団体も43件と多く、特定の利用層の率が高かったことが、特徴となった。今後とも【子どもの城】の活動の3本柱の1つとして、更なる内容の充実と積極的な受け入れを進めていきたい。

- (ア) グループ活動利用状況(18ページ表参照)
(イ) まとめと今後の課題

時代を先読みするプログラム開発と【子どもの城】ならではの体験をしながらおうという姿勢に、より磨きをかけることが10周年を控えた目標となるだろう。学校5日制による登校日数の減少の中で授業としての取り組みの幅に「グループ活動」が入り込む余地をつくるための実情に合った参加料、内容の見直しを図る時期である。

4) その他の活動

- (ア) アトリウム・ギャラリー

アトリウム・ギャラリーの利用状況は125ページ表のとおり。

5) まとめと今後の課題

前述してきたように事業調整が企画部の主要な役割の1つであるが、そのためには正確な情報をできるだけ早い時期に収集し、調整を進めることが必要である。そのためには、季節ごとの入館者数や、年齢層についての傾向を把握し、効果的な対策を立てていくことが必要である。【子どもの城】の事業部全体の課題として、より早い時期に無駄なく、正確な情報を集めることができるよう、関係各部と協議のうえその方法を見直し、改善する必要がある。

【子どもの城】では、各部がその専門性を生かして事業を実施しているが、全体を見渡すことが困難であるという一面は否めない。企画部では、【子どもの城】としての統合性が図られるように、各部への働きかけについて、今後更に力を注ぎたい。そして、例えば「児童の権利に関する条約」などの子どもを取り巻くさまざまな問題に目を向け、いちはやく反応し取り組んでいくように、企画部が先導していきたい。

また、本年度から始まった「動く子どもの城」事業については、【子どもの城】が国立の児童センターとしての役割を果たすための第一歩であり、今後はよりその充実を図っていきたい。

9 劇場事業本部

(1) 演目一覧表

1) 青山劇場

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
<自主公演>	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
第9回青山バレエフェスティバル ～バレエ・ア・ラ・カルト～	8.12～14 (3)	3	A:7,000・B:6,000	3,384	3,282	97.0	
(小計)	1	3		3,384	3,282	97.0	
<貸し館>							
ミュージカル「ピーターパン」 (ホリプロ)	4.1～24(24)	33	S:7,500・A:5,500	36,234	29,904	82.5	3.28から続演
ミュージカル「アニー」(日本テレビ)	4.25～5.22 (28)	34	S:7,500・A:5,000	37,740	33,757	89.4	
ミュージカル「李香蘭」(劇団四季)	5.23～6.12 (29)	20	S:9,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000 ウイークテーマチネ1,000円引	23,160	19,269	83.2	
ミルバ「愛の讃歌」シャンソンの女王エディット・ピアフに捧ぐ	6.13～25(13)	10	S:10,000・A:8,000 B:6,000	11,780	9,790	83.1	
第5回日本小児科医会生涯教育セミナー	6.26 (1)	1		1,200	600	50.0	
少年隊ミュージカル プレゾン'94 『MOON』(ジャニーズ事務所)	6.30～7.31 (32)	35	10,000均一	37,870	36,197	95.6	
ミュージカル「ピーターパン」 (ホリプロ)	8.1～11(11)	12	S:7,500・A:5,500	13,248	12,077	91.2	
ミュージカル「ドリーミング」 (劇団四季)	8.15～11.6 (85)	99	S:10,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000 ウイークテーマチネ1,000円引	112,266	106,375	94.8	
四季の会感謝の夕べ(劇団四季)	10.2, 10.10 (2)	4		4,536	3,780	83.3	
「石川さゆり音楽会'94秋」(ホリプロ)	11.8～13(6)	7	SS:10,000・S:8,000	8,092	7,058	87.2	
DANCE CANADA'94 PLUS ONE 「バレエ・ブリテッシュ・コロンビア」	11.18～20(3)	3	S:8,000・A:7,000	3,522	2,744	77.9	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
'94囲碁公演	(日) 11.21~22(2)	(回) 1	(円) A:8,000・B:3,000	(人) 1,196	(人) 715	(%) 59.8	
「Can't Stop Dancin' PART 11」 (名倉ジャズダンススタジオ)	11.23~27 (5)	6	S:7,000・A:6,000 B:4,500	6,660	6,005	90.2	
サーカスコンサート'94 「歌を忘れたカナリアへ」	11.28 (1)	1	S:5,000・A:4,000	1,156	861	71.0	
林英哲 Solo Concert '94 「風の馬」	11.29~30 (2)	2	6,000均一	2,336	1,554	66.5	
谷村新司リサイタル '94 '95 「コラソンVIII BLACK AND BLUE」	12.1~26 (26)	20	VIP:10,000 オーケストラ:8,000 バルコニー:6,500	23,120	22,683	98.1	
ドラベンチャーミュージカル ドラえもん「のび太の恐竜」「サヨナラ1994 ドラえもん ファンタジーワールド」	12.27~29 (3)	4	3,500均一	4,768	4,487	94.1	
ロンドンミュージカル「カルメン」	1.2~29 (28)	32	S:15,000・A:10,000 J:9,000	36,128	32,651	90.4	
ビッグバンドフェスティバル in TOKYO '95 (東京都)	2.3 (1)	1	3,000均一	1,164	1,065	91.5	
ミュージカル「アンデルセン」 (劇団四季)	2.4~3.7(32)	33	S:9,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000 ウイークテーマチネ1,000円引	34,782	31,307	90.0	
ミュージカル「李香蘭」 (劇団四季)	3.8~26 (19)	21	S:9,000・A:7,000 B:5,000・C:3,000 ウイークテーマチネ1,000円引	22,134	17,672	79.8	
ミュージカル「ピーターパン」 (ホリプロ)	3.27~31 (5)	3	S:7,500・A:5,500	3,294	2,193	66.6	4.23まで続演
(小計)	22	382		426,386	382,744	89.8	
青山劇場 計	23	385		429,770	386,026	89.8	

2) 青山円形劇場

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
<自主公演>	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
五線譜のなかの動物たち13「ベートーヴェンの音楽遊園地 月光探偵団」	4.1~3 (3)	6	2,200	1,972	1,692	85.8	3.29から続演
第10回こどもの城マタニティ・コンサート	4.28~30 (3)	2	2,500	544	382	70.2	
五線譜のなかの動物たち14「バッハの音楽遊園地 ザ☆カーニバル」	8.1~7 (7)	10	2,200	3,290	2,963	90.1	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
第9回こどもの城・キリンファミリー劇場 「ぼくのイソップものがたり」	(日) 8.8~14 (7)	(回) 10	(円) 2,500	(人) 2,420	(人) 2,059	(%) 85.1	
こどもの城おまつり劇場 '94 「こども風土記」	8.19~21 (3)	4	無料	944	757	80.2	
第8回青山演劇フェスティバル ～女子高生1994～ 青山円形劇場+パキッシュ「青春グラ フィティ～わたしたちの戦争～」	10.3~10 (8)	9	3,800	1,962	1,151	58.7	
自転車キンクリーツカンパニー 「MARQUEE MOON(マークー・ムーン)」	10.11~17(7)	7	3,800	2,317	2,183	94.2	
双数姉妹「サナギネ」	10.18~24(7)	7	2,800	2,322	1,799	77.5	
プラチナペーパーズ「櫻の園」	10.25~30(6)	7	3,300	2,072	1,470	70.9	
青山円形劇場「転校生」	10.31~11.4 (5)	8	2,300	2,800	2,151	76.8	
「ア・ラ・カルト」 一役者と音楽家のいるレストラン	12.19~26(8)	9	5,000	3,321	3,162	95.2	
第7回こどもの城・キリン・ファミリー・オペレッタ 「トンガリぼうしの魔法つかい サボテン牧場のけとう」	12.27~29 1.2~8 (10)	12	2,500	4,368	3,943	90.3	
五線譜のなかの動物たちスペシャル 「プラテーコ」	1.9~16 (8)	9	3,500	2,532	1,570	62.0	
オブジェクトシアターVol.4 「マクベス/ミッシング」	2.15~19 (5)	5	3,500 前売3,000	1,500	1,154	76.9	
五線譜のなかの動物たち15「グリム号の大冒険」	3.28~31 (4)	5	2,500	1,552	1,112	71.6	4.2まで続演
(小計)	15	110		33,916	27,548	81.2	
<貸し館>							
プレイ ア ソング Vol.2	4.4~9 (6)	5	3,500	1,219	971	79.7	
音楽ファンタジー「十三月物語」	4.10 (1)	1	おとな2,800子ども1,800	260	252	96.9	
KEI ONO DANCE NUTS 「踊らせて鳥のようにVol.4」	4.14~17 (4)	5	3,500 前売3,000	1,190	941	79.1	
DANCE STATION EXPRESS 「D a v i a n t II」	4.18~24 (7)	8	5,000 前売4,800	2,016	1,845	91.5	
カンパニーKIMEI「悠久人」	4.25~27 (3)	4	4,500	1,188	878	73.9	
ステージドア「五番街のかけに」	5.1~2 (2)	3	2,500	912	770	84.4	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
友部正人コンサート「待ちあわせ」	(日) 5.8 (1)	1	(円) 4,500 前売4,300	(人) 376	(人) 301	(%) 80.1	
劇団新感線「スサノオ～武流転生～」	5.10～22(13)	14	4,120	3,864	3,585	92.8	
木村聖子リサイタル	5.9～5.23(2)	1	4,000	306	297	97.1	
花岡陽子スペニッシュダンスカンパニー 「DANZA ESPANOL」	5.24 (1)	1	3,000	260	224	86.2	
まぜ卵シアタープロデュース 「FLOWER IN THE DUST」	5.25～29 (5)	5	3,400 前売3,000 高校生以下2,500	910	863	94.8	
遊@機械／全自動シアター 「僕の時間の深呼吸」	5.30～6.24 (26)	31	4,500	10,571	9,838	93.1	
第5回日本小児科医会生涯教育セミナー	6.25～26 (2)	1		374	300	80.2	
PONTA BOX Live Tour 1994 Final	6.30 (1)	1	3,605	380	351	92.4	
ラッパ屋「阿呆浪士」	7.11～4 (14)	14	3,500 前売3,300	3,668	3,258	88.8	
ロフトアンドシアターアクティブパーティー11「元気な星からカウントダウン」	7.15～20 (6)	5	2,800 前売2,500	1,490	864	58.0	
東京演劇アンサンブル 「ぼくの鳥あげる」	7.21～27 (7)	11	3,605 前売3,090 学生・子ども2,575	2,036	1,238	60.8	
北村真実ダンススペース 「circus circus-in the mirrors-」	7.28～31 (4)	5	4,000 前売3,800	1,049	464	44.2	
波瀬満子のやってきたアラマせんせい	8.22～26 (5)	6	3,000 前売2,800 ペア5,000	1,432	848	59.2	
AOYAMAダイナマイトバレエ団'94 「ヴィリ ヴィリ ダンス」	8.27～31 (5)	7	6,180	2,408	2,230	92.6	
吉舎伊知郎「TALKING BLUES 7th」 ～MOON LIGHT DREAM～	9.2～10 (9)	7	5,000	2,547	2,394	94.0	
武元賀寿子「A・huu… Vol. II」 記憶する肉体	9.11～14 (4)	7	3,000	1,189	568	47.8	
谷山浩子101人 コンサートスペシャル '94	9.16～10.2 (17)	12	6,000	4,664	4,247	91.1	
DANCE CANADA '94 PLUS ONE 「トロント・ダンス・シアター」	11.5～8 (4)	3	5,000	556	394	70.9	
「カレン・ジェイミソン・ダンス・カン パニー」	11.9～12 (4)	3	5,000	719	546	75.9	
わいわいキッズコンサート	11.13 (1)	1	無料	192	108	56.3	
浦辺日佐夫 DANDE DRAMATIC 「ある愛の詩」	11.15～17(3)	5	5,000	1,199	1,064	88.7	

公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
dance show case vol.2 「だんすにGONE II」	(II) 11.18~20(3)	(回) 4	(円) 5,000	(人) 960	(人) 656	(%) 68.3	
ざ・ふあみりい	11.21 (1)	1	3,500 前売3,000	268	267	99.6	
ラッパ屋「三十郎大活劇」	11.22~12.4 (13)	15	3,500	3,960	2,771	69.9	
森比呂美第1回リサイタル	12.5~6 (2)	2	3,000	344	326	94.8	
ラフィング・キャツ Vol.5 「舞夢'94」	12.7~11 (5)	7	A:4,500・B:4,000	1,435	1,122	78.2	
'94 美歌ブランドSHOW UP VOL.5 「極楽鳥」	12.12~14(3)	4	6,500 前売6,000	972	775	79.7	
ザ・シャイニーストッキング 「クリスマスコンサート」	12.15 (1)	1	4,500	300	228	76.0	
サードステージプロデュース公演vol.8 「祈る女」	1.19~2.5(20)	20	4,800	6,584	5,738	87.1	
青い鳥プレゼンツ「それ！」	2.6~14 (9)	9	3,800 前売3,500	2,200	1,784	81.1	
日本映画学校 「KATYケーリーA サインバーの夜ー」	2.23~27 (5)	6	2,000	1,558	917	58.9	
吉岡しげ美 「空とぶさかなのハーモニー '95」	2.28 (1)	1	4,200 前売4,000	265	208	78.5	
ハワイアンチャリティコンサート 「がんばれ！難病と闘う人々」	3.1 (1)	1	5,000	296	286	96.6	
劇団クラーナ 「もうひとつのアラビアンナイト」	3.2~5 (4)	5	おとな指定2,500 自由2,300 子ども共通1,800	1,312	1,147	87.4	
世界民族芸術チャリティ公演	3.6 (1)	1	指定5,000 自由3,000	238	158	66.4	
チャリティ ポリネシアン・ショー	3.7 (1)	2	3,500	692	597	86.3	
劇団天童「なよたのかぐや姫」	3.8 (1)	2	おとな2,500子ども1,500	570	478	83.9	
波瀬満子パフォーマンス '95 「スーパー・AIUEO PART 2」	3.9~12 (4)	5	3,800 ベア6,500 前売3,500	1,250	672	53.8	
東京演劇集団風「ガラスの動物園」	3.13~19 (7)	6	4,000 前売3,800 学生3,300	1,620	894	55.2	
鶴瓶嶽 '95春	3.20~24 (5)	5	3,090	1,860	1,645	88.4	
(小計)	46	264		73,659	60,308	81.9	

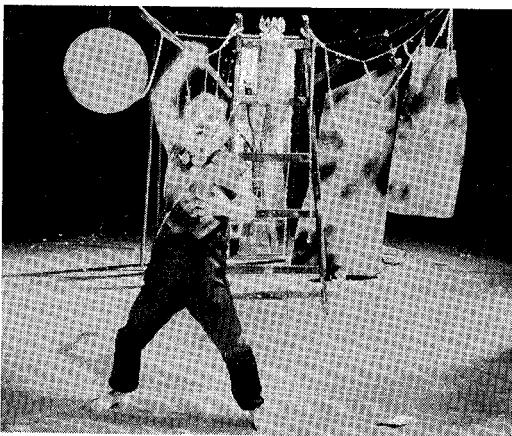
公演名称	期間	回数	料金	総席数	入場者数	入場率	備考
<子どもの城事業部企画>	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
おやこフェスティバル	5.3~5.5 (3)	9	無料	2,970	2,513	84.6	企画部
人形劇見本市	8.15~17 (3)	8	無料	2,628	2,381	90.6	"
富岳太鼓コンサート	8.18 (1)	3	無料	900	367	40.8	"
ミセスサンタズクリスマス	12.16~18 (3)	3	無料	990	745	75.3	国際交流部
ぼくらのサウンド '95	3.25~27 (3)	5	無料	1,052	913	86.8	音楽事業部
(小計)	5	28		8,540	6,919	81.0	
青山円形劇場 計	66	402		116,115	94,775	81.6	
劇場総計	89	787		545,885	480,801	88.1	



「ア・ラ・カルト～役者と音楽家のいるレストラン」
(青山円形劇場)



「トンガリぼうしの魔法つかい
～サボテン牧場のけつとう」(青山円形劇場)



青山円形劇場オブジェクトシアター
「マクベス／ミッシング」



五線譜のなかの動物たち14
「バッハの音楽遊園地～ザ☆カーニバル」(青山円形劇場)

(2) 劇場事業本部の活動

1) 本年度のまとめ

前年度からの景気低迷感が抜け切れず、企業協賛や入場券販売の面で“不景気”を痛感した1年であった。

舞台関係に限らず文化全般に言えることだが、一般的に見て、企業が自社のイメージを高めるために文化事業に協賛する現象は下火になり、商品やサービスの売り上げに直接効果が現れる宣伝戦略に針路変更してきたことが感じられた。

いわゆる冠スポンサーのような大口協賛からプログラム広告のような比較的小口の協賛に至るまで、民間企業の協賛に大きな期待ができる経済情勢が相変わらず続いた。また入場券販売の面でも、消費者個人の文化に対する支出が減少傾向にあるため、各劇場・公演団体とも動員面でこれまでになく苦労していた。

そのような慢性的景気低迷感の中で、青山劇場・青山円形劇場とも、新たな協賛企業や共催団体を開拓することはできず、前年度からの協賛・共催の枠の中で、地道に1本1本の企画を実施していった。ただ、マンネリ感や衰退感を漂わせることはなく、舞台制作を取り巻く苦しい社会状況の中でも、個々の公演の質の維持・向上、新鮮な話題性、オリジナル性などといった面で、他劇場や団体にそん色ないラインナップを展開できたと思う。

本年度の共催・助成・協賛などの実績は下記のとおり。

【青山円形劇場】

- ①第10回こどもの城マタニティ・コンサート=P&G(協賛)
- ②こどもの城・おまつり劇場'94=芸術文化振興基金(助成)
- ③第9回こどもの城・キリンファミリー劇場

「ぼくのイソップものがたり」=キリン福祉財団(共催)

- ④第8回青山演劇フェスティバル=日本テレビ(共催)

- ⑤ア・ラ・カルト=キリンビール(協賛)



第9回青山バレエフェスティバル「バレエ・ア・ラ・カルト」
から「Give Me Mother」(武元賀寿子振付)

- ⑥第7回こどもの城・キリンファミリーオペレッタ
「トンガリぼうしの魔法つかい」=キリン福祉財団（共催）
⑦プラテーコ=芸術文化振興基金（助成）

2) 本年度の主な演目

(ア) 青山劇場

(1) 「第9回青山バレエフェスティバル」

毎回、さまざまなテーマを軸に開催されてきた「青山バレエフェスティバル」だが、今年は特にテーマを設けずに、「現代の若者たちはバレエをどのように受け止めどのように消化しているのか?」「ダンサーや振付家にとって踊るという行為は?」「クラシックとかモダンとかの枠を取り払い表現方法の違いを楽しんでもらう」、そんな目的で開催した。ブルノンヴィルやプティパの古典作品から、モダンの創作作品まで、バラエティー豊かな内容は多くの観客に楽しんでもらえた。また、現在最強といわれている我が国の男性舞踊手のなかでも、特に輝いている堀内元、熊川哲也、小嶋直也などのスーパー技術が観客を魅了した。

(イ) 青山円形劇場

(1) 「第10回こどもの城マタニティ・コンサート」

教育的な“胎教”の観点からではなく、妊婦が心身ともにほんとうにリラックスすることを目指すコンサート。1986年から始まったこのシリーズも、今年で10回目を迎えた。音楽のジャンルもクラシックに固定せず、ジャズ、ボサノバ、ビートルズナンバーなど多岐にわたって展開してきたが、10回目の今回はニューヨークを中心に活躍する世界的なオペラ歌手、柴田智子さんを迎えた。曲目はモーツアルトやバーンスタインからこのコンサートにふさわしいものを選び、会場は温かな雰囲気に包まれた。

(2) 五線譜のなかの動物たち シリーズ第14弾

～バッハの音楽遊園地「ザ☆カーニバル」～

クラシック音楽の中から動物の曲を集めて芝居仕立てに構成した、[こどもの城]オリジナルのファミリーコンサートシリーズ。夏休みに上演したシリーズ第14弾は、バッハの名曲を中心に構成した。出演者には、ピアニストと役者と2人のクラウン（道化）に、ヴァイオリニストを加えて、深遠なバッハの曲から躍動感あふれるジプシー音楽まで、バラエティーに富んだ構成で好評を博した。

(3) 「こどもの城おまつり劇場'94——こども風土記」

日本の伝統芸能や郷土芸能を伝承する子どもたちの活動を紹介する夏休み恒例の企画。今年は“節句”にちなんだ日本舞踊、わらべうた、邦楽などを紹介

した。また、郷土芸能のゲストとしては、神奈川県厚木市から「相模里神樂」を伝承する酒井子供会の一行が来演した。

(4) 第9回こどもの城・キリンファミリー劇場「ぼくのイソップものがたり」

「オトナに観てもらいたい。コドモには観てもらいたくない」をキャッチフレーズにしてきた劇団「MODE」が、小さいころからだれもが親しんできたイソップ物語の寓話を新しい形の児童劇として表現しようと試みた。がらくたや日用品を用いて工夫しながら動物に変身していく様や、これまでの多くの児童劇にありがちな演出や表現を避け、我々の普段の会話と同じ自然な状態で話が展開されたことは、大人にも子どもにも新鮮な感覚を与えたと思う。また、本作品は、東京都優秀児童演劇賞を受賞した。

(5) 第8回青山演劇フェスティバル～女子高生1994～

「今を見つめる演劇の祭典」として定着している演劇祭の8回目。毎年テーマを設定しているが、今年のテーマは「女子高生」。ねらいは、流行や風俗の最先端をいき社会現象化している、時代のキーワードとしての「女子高生」を演劇の現場で読み解いてみようというので、大きな話題を呼んだ。上演5作品は次のとおり。

■青山円形劇場+パキッシュプロデュース

「青春グラフィティ～わたしたちの戦争」

脚本は、人間の心の繊細さを温かなタッチで描いて評判のアメリカの新進作家。ベトナム戦争を抱えていた1970年代のアメリカ、そんな特別な時代の痛みを、青春という特殊な季節の痛みと重ねるようにして描いた。脚本=S・メトカルフ／演出=綾田俊樹。

■自転車キンクリーツカンパニープロデュース

「MARQUEE MOON（マーキー・ムーン）」

他人の思惑でスターに祭り上げられた1人の女子高校生が自己を取り戻し自立するまでの姿を、台詞を最小限に押さえ音楽とダンスを多用する感覚的な方法で表現して、内容的にも方法論的にも、現実の女子高校生とオーバーラップさせた。主演はアイドルタレントの松下由樹。構成・演出=鈴木勝秀／振付=川崎悦子。



第8回青山演劇フェスティバルから
「MARQUEE MOON」(青山円形劇場)

■双数姉妹「サナギネ」

早稲田大学演劇研究会を母体に結成された平均年齢22歳の若い劇団。太宰治の「女生徒」をモチーフにして、普遍的な青春期の不安と倦怠を実験的な方法で描いた。作・演出=小竹竹見。

■プラチナ・ペーパーズ・プロデュース「櫻の園」

創立記念日にチェーホフの「櫻の園」を上演するという名門女子高校演劇部を描いた人気漫画を原作に、90年に映画化され数多くの映画賞を独占した名作の舞台化。オーディションで選考した若いキャストのナチュラルな演技は感動を呼び、朝日新聞紙上で94年演劇作品ベスト5の中に選ばれた。原作=吉田秋生／脚本=じんのひろあき／演出=堤泰之。

■青山円形劇場プロデュース「転校生」

夏休みに行った「青山演劇ワークショップ」(120人参加)から選出した21人の現役女子高校生が、今最も注目されている若手演劇人平田オリザ(平成6年度岸田戯曲賞受賞)の新作舞台に立つという画期的な企画として大きな話題を呼んだ。内容はカフカの「変身」と宮沢賢治の「風の又三郎」をモチーフに、ある日突然、何の理由もなく自分が転校生になっていたという不思議な女子高校生を迎えたクラスの1日を描き、人間存在の不条理性を等身大のユーモアを交えて表現した。作・演出=平田オリザ。

(6) 「ア・ラ・カルト——役者と音楽家のいるレストラン」

6年目を迎えた大人気のクリスマス企画。とあるレストランの開店から閉店までを、しゃれた寸劇と音楽でつづる上質なエンターテインメント・ショー。今年は“ニュー・メニュー”と称して内容に大きく手を入れ、新鮮味を出した。出演は、遊●機械／全自動シアターの高泉淳子、白井晃、バイオリンの中西俊博ら。年末には恒例の大坂・近鉄アート館公演(近鉄百貨店主催)，更に年明けには仙台公演(仙台放送主催)を行った。ツアー展開が広がっていくことは、内容的にも商品価値的にも成熟したことを示す。演出=吉沢耕一。

(7) 第7回 こともの城・キリンファミリーオペレッタ

「トンガリぼうしの魔法つかい～サボテン牧場のけとう～」

【こともの城】のスタッフが総力を挙げて作る、正月恒例のオリジナル・ファミリーオペレッタ。トンガリぼうしシリーズの4作目。今回の話は、アメリカのサボテン牧場を舞台にした西部劇。拳銃をめぐるタイムリーなテーマで、人を憎むことの愚かさや、人を信頼することの大切さを描いた。客席を360度囲んで映し出される大映像やレーザー光線、目前で繰り広げられる演技や生演奏などは、観客と舞台の一体化にたいへん効果的であった。

(8) 「プラテーコ」

スペインの詩人ヒメネスの有名な散文詩集「プラテーコとわたし」に、イタ

リア生まれの作曲家カルステルヌオーヴォ＝テデスコが作曲した、ギターと語りのための音楽「プラテーロとわたし」を基に、アンダルシアの自然の中で繰り広げられる詩人とろばの心の交流を描く舞台作品とした。ギター独奏には、数々の国際コンクールで優勝し、日本を代表するギタリストとしてヨーロッパを中心に活躍する鎌田慶昭、ろばのプラテーロは「人形芝居かわせみ座」の山本由也が操る人形で、そして詩人役は若手劇団「花組芝居」の植木潤という異色の組み合わせ。スペイン・アンダルシア地方をほうふつとさせる構成・演出で、「斬新なアイディア、思い切った手法」と音楽・演劇両面から高く評価された。

「五線譜のなかの動物たち」シリーズのスペシャル版として上演。構成=光瀬名瑠子／演出=吉田雅之。

(9)オブジェクトシアター vol.4 「マクベス／ミッシング」

大人の鑑賞にも堪えうる斬新な人形劇の開発を目指すオブジェクトシアターの第4弾。チェコ在住の人形劇作家、沢則行の仮面と人形を遣う一人無言劇という、日本だけではなく世界でも通用する表現形態で、独自の世界をつくりだした。公的助成や企業協賛の獲得ができなく苦しい制作予算ではあったが、シンプルな中にも創意工夫がみられる手作りの舞台公演だった。動員においては、日本では無名の作家だったので苦戦したが、新聞・テレビでの広報宣伝が実り新しい人形劇のファンが確実に増えた。

(10)五線譜のなかの動物たち シリーズ第15弾

～奇想天外音楽活劇「グリム号の大冒険」～

春休みに上演したシリーズ第15弾は、グリム童話の世界とクラシック音楽をドッキングさせた新たな試み。演奏家をピアノとヴァイオリンとフルートという3人編成にしたこと、曲目構成と表現に幅が出たことが特筆に値する。

なお「五線譜のなかの動物たち」は、雲仙普賢岳噴火災害救済のための事業に選ばれ、前年度のシリーズ第12弾（平成5年1月）で上演した「モーツアルトの音楽遊園地～パパゲーノ！」を長崎県島原市で公演し、地元の家族連れに大いに喜ばれた（5年1月22日島原文化会館）。



「プラテーロ」（青山円形劇場）

3) 今後の課題

いよいよ開館10周年を迎えるに当たって、これからも青山劇場・青山円形劇場が常に充実した企画を発信し続けるためには、過去の年報でも課題として指摘し続けてきたことの繰り返しになる点もあるが、次の諸点を常に念頭において、今後の劇場運営に当たっていくことが重要であろう。

(1)ソフトの地方公演

景気の動向に左右されやすい企業協賛にばかり依存していくは、よりダイナミックなソフト展開の立案や中長期的な視野に立った劇場運営が難しく、文化の発信拠点であるべき劇場が、単なる建造物に終わってしまう危険性が大きい。個々の演目で企業協賛を募り、継続性のある協賛企業を維持・開拓していく努力は継続するものの、演目によっては劇場で企画制作したソフトを積極的に地方展開することも、制作費の負担軽減に大いに役立つと思われる。当劇場のように、真の意味で自主制作する人材とノウハウを兼ね備えた劇場こそ、それが可能であろう。地方公演の積極的展開は、外に対しては文化発信拠点としての劇場機能のアピール、内に対しては制作費の負担軽減と、今後の健全な劇場運営に大いに資することになる。また、このことは「動くことの城」構想とも連動して展開できる可能性もあり、今後より一層の積極策が必要である。

(2)ソフトの再演

また、劇場の財産でもある過去の演目を再演することも重要であろう。1回限りの上演ではなく、(1)で述べた地方公演も含め、長期的な展開と予算措置を考えたうえでの企画立案が必要となってくると思われる。

(3)貸し劇場先の開拓

また、劇場が新鮮かつ魅力的な自主公演を実施していくうえで、一方の貸し劇場業務もこれまで以上に積極的かつ強力にてこ入れする必要がある。過去の上演団体との情報交換を緊密にするとともに、新しい上演団体の開拓・獲得も急務である。

(4)営業・宣伝・広報の充実

景気低迷の影響からか、従来の入場券販売や宣伝・広報の効果に変化が出てきた。流通の経路や売れ行き動向の変化、マスコミに対するミニコミの波及効果増大、パソコンの普及などによる顧客側の情報入手手段の変化など、時勢を的確に把握しながら、今後の広報・宣伝・営業・制作を含めた劇場運営業務を展開していくことが必要であろう。

III 各部の活動(2)

1	広報部	145
2	研修教養部	151
3	国際交流部	161
4	営業部	168

1 広 報 部

(1) 6年度の活動

広報部では〔子どもの城〕をより多くの人に理解してもらうために、『子どもの城ニュース』や『児童手当』などの定期刊行物と『事業年報』の編集・発行のほか、新聞・雑誌などの各種媒体への情報提供・取材の対応と広告の掲載、特別期間のちらし・ポスターなどの制作を行っている。

本年度は「国際家族年」であり、〔子どもの城〕でも多彩な事業が展開されたため、『子どもの城ニュース』増刊号を8月1日に発行した。また、昭和54年4月から、財日本児童手当協会（子どもの城）が編集を担当してきた『児童手当』（月刊）が、平成7年度から財子ども未来財団が発行する『子ども未来』に生まれ変わるために、3月に最終号の発行となった。

1) 機関紙・誌の編集と発行

定期刊行物として『子どもの城ニュース』と『児童手当』の2つの活字媒体を編集・発行している。主な配付先は別記のとおりで、『子どもの城ニュース』が〔子どもの城〕の利用者など一般向け、『児童手当』が児童館などを含む行政機関向けと読者対象を区別している。

(ア) 『子どもの城ニュース』の編集・発行

本年度から体裁を改め、ブランケット判（新聞大）から、B3判にサイズを一回り小さくした。効率的な印刷ができるようにして、経費の節減を図った。表面が4色（カラー印刷）、裏面が1色印刷という体裁は従来どおり。本年度は、増刊号を含めて7回発行した（発行日と主な内容は別表のとおり）。

〔子どもの城〕では、小さなものから大きなものまで毎日さまざまなプログラムが行われている。それぞれのプログラムは、健全育成という大目標に向かた“ある意図”が隠されていて、参加することによって、その意図は自然に子どもたちに伝わる。〔子どもの城〕のプログラムは、楽しさやおもしろさだけを体験する〈あそび〉ではなく、〈あそび〉を通して出会いや発見をして人間性豊かに、大きく成長してほしいという願いが込められている。〈あそび〉にいろいろな意味が込められているので、それを理解してもらうことが広報活動の重要な役割の1つと考えている。

しかし、限られたスタッフ、限られた時間、限られた予算の中で作業してい

くには、難しい問題も少なくない。各事業部との関係を密接にするなど、協力体制作りを考えていかなければならぬだろう。

各号の主な内容は以下のとおり。

	発行日	内 容	発行部数
第51号	平成6年4月15日	〔子どもの城〕のグループ活動	25,000部
第52号	平成6年6月15日	〈家族〉から友だちの〈世界〉へ ～保育研究開発部の活動から	25,000部
第53号	平成6年7月15日	人形劇見本市	35,000部
増刊号	平成6年8月15日	国際家族年記念家族芸術祭「地球は家族」展	25,000部
第54号	平成6年10月15日	同「全国児童館造形フェスティバル」	25,000部
第55号	平成6年12月15日	同「家族・はがきアート展」	25,000部
第56号	平成7年2月15日	生まれて、育って、産んで、育てて	25,000部

【子どもの城ニュースの主な配付先】

ネットワーク会員	-----	4,380部
子どもの城友の会会員	-----	約3,800部
都道府県民生部（全国57か所）	-----	1,150部
保育所、幼稚園、小学校、中学校（渋谷区、港区）	-----	438部
	(219件×2部)	
渋谷区町会長、渋谷区ボーイスカウト、ガールスカウトほか	-----	284部
	(142件×2部)	
その他（一般入館者、招待者、視察・見学者等）	-----	約15,000部

(イ) 『児童手当』の編集・発行

『児童手当』は、発行が財日本児童手当協会（子どもの城）、監修が厚生省児童家庭局。B5判16ページで、表紙はカラー印刷。年4回「ネットワーク」のページが差し込まれ、カラー4ページが増える。「ネットワーク」のページは6月、9月、12月、3月の各月に子どもの城全国連絡協議会機関誌のページとして作られているもの。

平成7年3月1日に最終号を発行。平成7年4月から『こども未来』（発行＝財こども未来財団）として生まれ変わった。『児童手当』誌は昭和47年1月に創刊され、最初は財児童問題調査会が季刊で発行していたが、昭和54年4月から財日本児童手当協会（子どもの城）が編集を担当するようになり、月刊化した。20年以上（通巻218号）にわたり、児童手当制度の普及・啓発、児童の健全育成に努めてきたが、その役割を『こども未来』に託すことになった。

平成6年度の『児童手当』の主な内容は下記のとおり。

平成 6 年 4月号	児童手当	No.24-1	児童手当法の改正と児童育成事業の展開ほか
	子どもの城	No.70	人形劇の出前もします ～ボランティア人形劇グループの活動
平成 6 年 5月号	児童手当	No.24-2	「厚生白書」についてほか
	子どもの城	No.71	春休み 2 つの野外活動
平成 6 年 6月号	児童手当	No.24-3	児童手当の社会保障上の地位ほか
	ネットワーク	No.38	地域の資源を活用し野外活動
平成 6 年 7月号	児童手当	No.24-4	国際家族年記念家族芸術祭「地球は家族」展ほか
	子どもの城	No.72	音を遊び、創造する自由な楽器 ～エレクトリック・アンサンブル講座の活動
平成 6 年 8月号	児童手当	No.24-5	子どもの環境教育ほか
	子どもの城	No.73	映像ワークショップの展開
平成 6 年 9月号	児童手当	No.24-6	「21世紀福祉ビジョン」と児童家庭対策ほか
	ネットワーク	No.39	「国連地球環境サミット・インしまね」
平成 6 年 10月号	児童手当	No.24-7	アレルギーの増加と生活形態ほか
	子どもの城	No.74	小・中学生が保育活動に参加
平成 6 年 11月号	児童手当	No.24-8	子どもの“食”を家族で考えるほか
	子どもの城	No.75	夢の世界に形を与える〈造形宝島〉
平成 6 年 12月号	児童手当	No.24-9	座談会「病後児保育」について考えるほか
	ネットワーク	No.40	科学館と児童厚生施設の共存
平成 7 年 1月号	児童手当	No.24-10	対談「子育て支援の在り方」をめぐってほか
	子どもの城	No.76	手作り楽器のワークショップ
平成 7 年 2月号	児童手当	No.24-11	いじめにかかる非行対策と健全育成課題ほか
	子どもの城	No.77	「世界の子どもと家族」写真展の全国巡回展
平成 7 年 3月号	児童手当	No.24-12	今、なぜ家族か～世代間関係から考える～ほか
	ネットワーク	No.41	遊びのニューウェイブを考える

【主な配付先】

都道府県市町村----- 3,760部 関係省庁等----- 251部 その他----- 551部
 社会保険事務所----- 287部 関係各団体----- 151部

(ウ) その他

定期刊行物のほかにも、パンフレットやちらし、『事業年報』などの印刷物の

製作も行った。作成した印刷物は下記のとおり。

開館以来使用している「子どもの城のご案内」(和文、英文)は、現状にそぐわない面もでてきたので全面改訂。子ども活動エリアの位置関係を分かりやすくすること、各部門の活動のねらいを簡潔に紹介すること——など、子ども活動エリアを利用する来館児・者を念頭に置いて情報を整理し、分かりやすく親しみやすいものになるようにした。



新しい「子どもの城のご案内」

日本語版に続いて英語版も作成した。英語圏以外の利用者・見学者も増えていることから、ほかの言語版の必要性が高まってきているが、製作コストなどを考慮すると、それぞれの言語に合わせて作ることは難しい。日本語版の対訳を用意する(原版をコピーして使用する)ことで、対応していきたいと考えている。本年度は近隣のアジア諸国の利用者も増加していることから、ハングル語の対訳を作成した。

また、講座・クラブ一覧は、前年度と同様に対象年齢別に整理したものを作成。新聞折り込み広告の実施に併せて、折り込みしやすい形式を採用した。

そのほか各種ちらし類は、夏休みなどの催物案内や講座・クラブの募集案内など。特別期間や募集時期に併せて制作した。

名 称	発行部数	内 容
平成5年度事業年報	1,300部	5年度の【子どもの城】の活動記録 (B5判, 202ページ)
平成7年度講座一覧	100,000部	7年度全講座・クラブの案内 (B3判, 4ページ)
子どもの城の案内(和文) 〃(英文)	250,000部 20,000部	【子どもの城】の館内案内を全面改訂 【子どもの城】の館内案内の英語版。
その他(各種ちらし)	100,000部	GW, 夏休み, 冬休み, 春休みなどのちらし(日本語・英語)

2) 広告関係

経費削減に伴い、必要最小限の広告を行うにとどめた。限られた予算で有効な広告活動を行うには、専門的な知識が要求されるが、広告代理店などと相談しながら実施した。

(7) 新聞広告

夏休み、冬休みの特別期間前に、以下のように新聞広告を実施した。デザインは、ポスター・ちらしに合わせ、イメージの統一を図った。

掲載紙	掲載形式	掲載日時	掲載内容
朝日新聞	半5段 半2段 タブロイド5段	平成7年7月9日～20日 高校野球別冊、西部版（夕刊） 都心版、東部版、南部版、北部版 「風」	夏休み特別期間の催し物案内
東京新聞 読売新聞 朝日小学生新聞 毎日小学生新聞	半5段 〃 〃 タブロイド3段		
東京新聞 朝日小学生新聞	全7段 〃	平成6年12月19日 〃 〃 23日、25日	冬休み特別期間の催し物案内
朝日新聞 東京新聞 朝日小学生新聞 読売新聞	全5段 半5段 〃 〃 全5段	平成6年2月19日（都内版） 〃 〃 20日 〃 〃 15日 〃 〃 20日 〃 〃 15日	平成6年度第1期講座・クラブ
毎日小学生新聞	タブロイド3段 ½	平成7年3月17日	春休み特別期間の催し物案内

(1) 折り込み広告

平成6年度の講座・クラブの受講生募集に当たっては、受講者が〔こどもの城〕周辺地域の人であることを考慮し、渋谷区、港区、目黒区、世田谷区などを中心に、読売新聞と毎日新聞に折り込み広告を行った。

3) 取材関係

デイリーなメディア（新聞など）での取材は少なくなっているが、ミニコミや単発の雑誌・情報誌（特に、子どもや若い家族を対象としたもの）の取材は、さほど減少していない。ガイドブックの中で、施設紹介の形で取り上げられる

ことが多い。博物館・美術館などのスポットの1つとして、認知されてきた証拠といえる。

個別の活動（プログラム）を紹介してもらうのは、難しい側面がある。取り上げる側の意向として、“新しさ”“珍しさ”などの要素が必要とされるからだと思う。さまざまな所でたくさんの類似の催しが行われている中で、いかに“違い”を際立たせるかが鍵となる。【こどもの城】の活動をより深く、1人でも多くの人に理解してもらうという地道な活動を続けることが必要だ。

取材を受けた媒体には、定期的に催物の情報などを送るようにしている。宣伝（広報）予算の限られている【こどもの城】のような施設にあって、取材＝パブリシティーというのは大切なこと。各媒体と良好な関係を保っていけるように努力していきたい。

本年度の取材料件数は、新聞22件、テレビ34件、ラジオ7件、雑誌40件、その他46件の合計149件だった。

4) その他

(ア) 渋谷スタンプラリー

夏休みには恒例となった「渋谷スタンプラリー」に参加した。今年が11回目。今年は「N H K展示プラザ（現・N H Kスタジオパーク）」が改裝工事のため不参加。「こどもの城」「電力館」「たばこと塩の博物館」「東京都児童会館」「五島プラネタリウム」の5館で実施した。約1万人が参加した。

このスタンプラリーは、渋谷周辺にある各館が共同して施設の存在と活動をPRすることを目的としている。<点>ではなく<面>でPRするところが大きな特徴といえる。

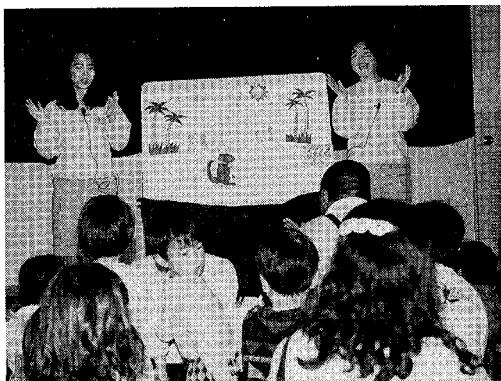
2 研修教養部

(1) 6年度活動一覧

1) ボランティア関係の活動

〈平常期間の活動〉

名 称	期 間	備 考
おはなし紙芝居のつどい (プレイ)	火曜日 15:00~15:30	8年以上続けている女性ボランティアに、新しい期のボランティアが加わり定期的に活動している。紙芝居の持つ温かさを伝えることを目的としている。
おはなし人形広場 (プレイ)	水曜日 15:00~15:30	女性ボランティアの人形劇・影絵グループと青年ボランティアのパネルシアターグループが週替わりで公演。毎週の練習も欠かさず、充実した活動を展開している。
手作り人形 (研修教養)	木曜日 11:00~15:00	女性ボランティアのグループが、週に1度集まり、プレイホールの抱き人形や、保育の廊下のタペストリー(壁掛け)を作成している。
おりがみ遊び広場 (プレイ)	木曜日 14:00~15:00	本年度は青年ボランティアの参加が難しく、女性ボランティアが中心となって運営。シーズンごとのプレイホール壁面構成の制作も軌道に乗ってきた。
木曜ワンダーランド (音楽)	木曜日 16:00~16:30	手遊び中心のプログラムを実施していたが、参加者が低年齢のため運営が難しく、現在は音楽のスタッフが運営する“サンバ”的リズム遊びの補助をするようになった。
楽器であそぼう (音楽)	金曜日 15:00~15:30	6人の女性ボランティアが定期的に活動。音楽のスタッフと一緒に“サンバ”を素材としたリズム遊びのプログラムを運営している。
手足の不自由な子どものスイミング (体育)	土曜日 17:00~18:00	ハンディキャップを持つ子どもたちを対象とする唯一の活動。定期的に活動しているボランティアが増えているので、マンツーマンで指導補助ができるようになった。
体育室の活動 (体育)	日曜日 14:00~17:00	日曜日の体育室プログラムに指導補助を主に行う。週替わりで実施されるスポーツゲームのチームリーダーが役割。



青年ボランティアの「パネルシアター」



女性ボランティアが中心となって「おりがみ遊び広場」

名 称	期 間	備 考
マックロー人形劇場 (研修教養)	第3土曜日 15:00~15:30	【こどもの城】のキャラクター“マックローとその仲間たち”が繰り広げる人形劇を中心に公演をしている。子どもたちは毎回マックローの大冒険を楽しみにしている。
キッズクラブ (プレイ)	毎月2回土曜日 15:00~17:00	小学校低学年30人の遊びのクラブ。ボランティアは、グループワーカーとしての視点からプログラムの立案・準備にもかかわっている。
ユースクラブ (プレイ)	毎月2回日曜日 13:00~15:00	小学校高学年から中学生までの40人が対象。グループリーダーとしてのボランティアは、思春期の子どもたちにとって“モデル”的な大きな存在となっている。
ファミリープレイタイム (プレイ)	毎月1回日曜日 11:00~12:30	親子を対象に毎回さまざまなプログラムに挑戦。プログラムの運営をサポートした。今年から本格的にボランティアもかかわるようになる。毎回1人程度。
十べえの会 (研修教養)	金曜日(不定期) 13:00ごろ~	女性10期の有志によるプレイホールでの自由遊びの一環として、来館する子どもたちと電車ごっこを展開してみた。手作りの電車をつくり試行錯誤中。
絵本のよみかたり (研修教養)	日曜日(不定期) 15:00~15:30	プレイホールで、幼児を対象に絵本の集いを実施。絵本を媒体に、子どもたちとコミュニケーションを図ることを目標にしている。
さよならのつどい (研修教養)	日曜日(不定期) 16:00~	その日【こどもの城】で遊んだ子どもたちとボランティアが集まり、じゃんけんゲームやダンスなどのレクリエーションプログラムを運営。

※()は主催事業部

<特別期間の活動>

名 称	期 間	備 考
<児童福祉週間> キヤッスルファイト ～五龍大武闘大会～ (プレイ)	4.29~5.5 11:00~16:00 (受け付け)	子ども同士がさまざまな種類のじゃんけんに勝ち進みながら、手持ちのカードのレベルを上げ、伝統ある武闘大会に出場する、というのが目標。運営するボランティアが“劇遊び”的世界に入り込めるか否かにかかっている。屋上ふしきが丘で開催。
<〃> マックロー人形劇場	5.3~5 ①13:00 ②15:00	5月5日は【こどもの城】のキャラクター、マック・マックローの誕生日なので、毎年この時期に「マックロー人形劇場」(保育室I)の公演を行っている。マックローは、幼児を中心とした大人気であった。また、5月5日には、ボランティア人形劇グループのメンバーが、着ぐるみを着てグリーティングも実施した。
<夏休み> ウォーターアドベンチ ャー'94	8.16~21 11:00~16:00 (受け付け)	屋上ふしきが丘を使って、5人程度のグループを組んだ子どもたちが、水鉄砲と盾を駆使して、数々の難関を突破しながら大敵「水の魔神」を倒すというストーリーのもとに実施。ボランティアは、魔神の手下、子どもたちを率いる隊長、魔神の宮殿の門番などの役割を演じながら、子どもたちとともにすばぬれになった。天候不順で中止した日が多かったのが残念であった。
<開館記念> チャレンジゲーム大会 わーくわーく おしごとランド	10.30・31, 11・3 11:00~16:00 (受け付け)	子どもたちが将来なってみたい職業をゲームの基本コンセプトとして考え、記録にチャレンジするゲーム大会を企画。
<〃> あそびのおもちゃばこ	11.21・23 ①11:00 ②13:00 ③15:00	人形劇、影絵、紙芝居、パネルシアター、音楽、絵本のグループの合同公演を実施した。公演の合間に、軍手で作った手作り人形で遊ぶワークショップを運営した。日常一緒に活動する機会が少ないので、ボランティアにとってお互いによい経験となつた。フリーホールで開催。
<冬休み> こまであそぼう	1.3~8 12:00~15:00	木ごまを中心に親子で参加してもらうプログラム。お父さんの参加も多く、ボランティアが教わる場面もあった。寒空の下ではあったが、アットホームな行事となつたようだ。屋上ふしきが丘で実施。

名 称	期 間	備 考
<冬休み> 紙相撲初場所 '95	1.4~8 11:00~16:00 (受け付け)	毎年恒例となったこの行事は、村杉紙相撲道場の村杉輝治氏の協力で行われている。自分で力士を作りけいこを積み、みごと大闘になった力士は「横綱決定トーナメント」の出場権を握る。今回はプレイホールで実施。
<春休み> 春休みスペシャル あそびの鉄人	3.25・26, 31 4.1・2 ①11:00 ②13:30 ③16:00	さまざまなレクリエーションを1時間構成のプログラムにして、来館する親子を対象に遊ぶ。メインは「袋じゃんけん」「レクダンス」など。講習会を修了したての31期が多く参加し、先輩ボランティアのアドバイスを受け、日に日にレクリエーションの技術を高めていった。天候不良のため、1日の回数が2回になることが多かった。

<L. I. T. (Leader in Training)の活動>

名 称	日 時	備 考
年間計画立案 ※前年度からの継続者	4.1 11:00~16:00	高校2・3生が中心となり、本年度のプログラムを計画。新入生の受け入れについても話し合った。
開講式、個人面接	5.8 10:00~16:00	新規・継続者を含め、面接。活動に対する熱意、期待が感じられた。
全国一斉ウォークラリー 大会出場	5.15 10:00~14:00	3チームに分かれて競技に参加。うち1チームが優勝。参加者も多く、よい親睦の機会となった。鉄砲洲公園会場（東京都中央区）。
夏の活動ミーティング	6.19 13:00~17:00	夏の活動の説明。小グループに分かれグループワークトレーニング。
夏合宿	7.9・10	夏の活動に向けて、L.I.T.としての心構えをする意味で、野外活動の修得と話し合いを実施。神奈川県南足柄市どんぐりの家。
ちびっこ冒険団	8.4~10	1人が参加、本部運営を担当。この時期は学校行事が多く参加者が少なかった。
ジュニア・アウトドア・スクール	8.4~10	6人が参加、本部と班活動の補助を2グループに分かれ行う。
ウォーターアドベンチャーのオリエンテーション	8.13 10:00~12:00	【こどもの城】でのボランティア活動を体験する目的で参加。事前に活動内容の説明会を実施。
ウォーター アドベンチャー '94	8.22 11:00~16:00	今年は1日の参加。しかし、当日途中から雨となり、午後は下半期の計画を立てることとなった。
夏休みの活動反省 下半期の計画	9.4 14:00~17:00	夏休みに各々が参加した活動について1人ずつ発表した。今後の活動として、レクリエーション講習会を計画。
レクリエーション講習会	9.25 13:00~16:00	こどもの城全国連絡協議会の神谷事務局長を招き、講習会を実施。しかし、テストなど学校行事が入っているものが多く、参加者2人。
ネイチャーゲーム講習会	11.6 10:00~15:00	日本ネイチャーゲーム協会から講師を招き、代々木公園で実施。当日雨天だったこともあり、参加者が少なく、また、連絡がない者も多く、反省する点が多かった。自分たちで立てた企画について、もっと責任を持とうと今後の活動への心構えを再確認する機会となった。
クリスマス会の準備	11.13, 12.18 10:00~15:00	クリスマス会の準備として、3グループに分かれ、レクリエーションの練習を開始。ボランティアにマンツーマンで指導してもらう。
クリスマス会	12.23	各グループが練習した成果を発表。1つ1つのゲームを振り返りシートを使い、評価していく。どのグループも成長の跡が見られる有意義な時間となった。このころから熱心に活動する1年生が、活動の中心となって会をリードするようになる。

名 称	日 時	備 考
冬合宿	1.6~8 (2泊3日)	長野県・高遠少年自然の家で実施。体感温度-20°の中、ハイキングや、フィールドゲームを実施。冬の自然を体験する絶好の機会となつた。しかし、冬季講習など、参加できる人が少なく、1年生のみ8人の参加で実施。
来年度の計画	3.21 13:00~17:00	新入生を迎えるに当たり、自分たちの活動についてどう説明をしていくかが話し合われた。
フライングディスク講習会	3.28 10:00~17:00	体育事業部のスタッフを講師に、昭和記念公園でフライングディスクゴルフを行う。

<ボランティア講習会>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
第30期 ボランティア 講習会	(人) 18歳以上 (50)	(人) 46	6.4~23 18:00~20:30 (6.10~12宿泊研修)	社会人の参加が過半数を超える。 講習会修了後すぐに実施された野外活動に多数が参加を希望。 同時に、夏休みの大型プログラムにも、企画の段階から積極的に参加した。宿泊研修は千葉県市川市少年自然の家で実施。
第31期 ボランティア 講習会	18歳以上 (50)	50	2.4~28 18:00~20:30 (2.17~19宿泊研修)	来年度進学予定の高校3年生も2人参加。プレイ事業部のメンバーが参加。春休み、GW行事など、講習修了後すぐに【子どもの城】のさまざまな活動に溶け込んでいった。宿泊研修は千葉県市川市少年自然の家で実施。
第10期 女性ボランティア 講習会	女性 (20)	15	10.6, 14, 18, 20 14:00~16:00	【子どもの城】に非常に興味を持って参加してきた方が多い。 グループとしてのまとまりもよく、プレイホールの日常活動に定期的に参加をする。

<ボランティアグレードアップ講習会>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
日本赤十字社 救急法救急員資格 認定講習会	(人) 職員・ボラ ンティア・ 外部 (30)	(人) 31	5.10~21(7日間) 18:00~20:30	認定講習会を実施。日本赤十字社の要望により、広く一般の方々も対象と考えた。外部からの参加は7人。講義と実技を交えた講習。講師は日本赤十字社救急法指導員。
野外活動講習会	野外活動に 参加するボ ランティア (20)	12	5.24~6.14 18:00~20:30 (5.27~29宿泊研修)	講義は「子どもの城とキャンプ」「キャンプカウンセラーと子どもたち」「キャンプ生活とプログラム」の内容で実施。宿泊研修(埼玉県・横瀬高原パークキャンプ場)では、キャンプ生活で必要な技術を中心とした実技講習や自然をテーマとしたプログラムの企画・実施などを行った。
スキー講習会	スキーキャ ンプに参加 するボラン ティア (15)	9	3.2 オリエンテーシ ョン 18:30~20:30 (3.12・13実習)	実習は、スキーの個人的な技術の向上および、スキーの指導体系の把握を目的にして群馬県尾瀬岩鞍スキー場で実施。そのほかに、「キャンプカウンセラーの役割」などの講義を実施。

2) 講座・クラブ

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
手話講座（前期）	(人) 高校生以上 (30)	(人) 36	火曜日 18:30~20:00	4月から7月までの4か月間、全15回の講座。講師は(社福)トップ文化館貞広邦彦館長。指導への人気高く、継続して手話を学ぶ受講者が多いのが特徴である。
手話講座（後期）	高校生以上 (30)	30	火曜日 18:30~20:00	10月から2月までの5か月間、全15回の講座。講師は前期と同じく貞広邦彦館長。社会人がほとんど。
点訳入門講座	高校生以上 (30)	30	火曜日 18:30~20:00	1年間、全24回の講座。講師は(社福)日本点字図書館の河井久美子氏。新聞掲載によって情報を得た受講者が多く、視覚障害者福祉への関心の高さを再認識した。
点訳サークル（クラブ）	点訳入門講座修了者 (30)	26	火曜日 18:30~20:00	毎月1回、全12回。昨年は17人だった受講者が、今年は26人と充実したサークルとなった。講師の河井久美子氏の指導の下、和気あいあいと点訳奉仕活動を継続している。
子どもの心を考える講座	20歳以上の 子育てに関 心のある人 (60)	40	①6.25 14:00~16:00 ②7.2 ③7.9	今回のテーマは「子どもの心が見える親とは」「家族の子育て機能とは」「21世紀を創ることも一開かれた家族とはー」。講師は平井信義大妻女子大学名誉教授。

3) その他（野外活動など）

〈主催キャンプ〉

名 称	期 間	備 考
ジュニア・アウトドア・スクール	8.3~9 静岡県 県民の森キャンプ場	Aコース6泊7日（中学生のみ）31人、Bコース4泊5日（小学4年生～中学生）68人、スタッフ36人、合計135人で実施。Aコースは大井川鉄道SL列車の旅を体験した。好天にも恵まれ、Bコースと合流した4泊5日は、大自然の中で充実したキャンププログラムを行うことができた。
ジュニア・スキーキャンプ	3.30~4.2 群馬県 尾瀬岩鞍スキー場	小学校3年生～中学生まで68人、スタッフ18人、計86人で実施。スキー指導は外部講師を依頼。申し込みが募集定員を満たさなかったのは初めて。小学4・5年生の参加が多く、中学生の参加が減った。春らしく天候は晴れ、雨、吹雪と毎日変化したが、プログラムに大きな変更もなく全日程を終えた。

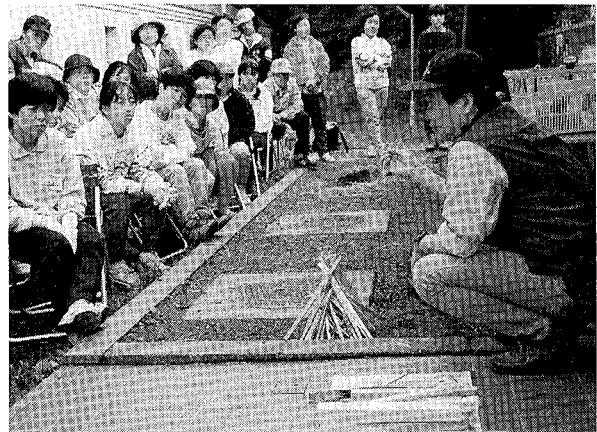


「ジュニア・アウトドア・スクール」では、ボランティアが班付きカウンセラーや本部スタッフとして活躍

<児童厚生員等実技指導講習会>

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備 考
平成 6 年度 第 1 回児童厚生員 等実技指導講習会	(人) 児童館職員 ほか (50)	(人) 38	曜日・日時 5.10~13	「学校 5 日制の拠点をめざして パート II~児童館を拠点とした屋外の活用法」をテーマに、屋外活動を展開するためのさまざまなプログラムを紹介。海岸線を利用した追跡ハイキングは大好評だった。神奈川県立観音崎青少年の村で開催。講師は東京小中学生センターの柴田俊明氏（日本キャンプ協会専門委員）。
平成 6 年度 第 2 回児童厚生員 等実技指導講習会	児童館職員 ほか (50)	65	10.22~24	「ひとりひとりが輝くレクリエーションプログラム～もう一度見直そうレク財の効果的な活用法」をテーマに、室内レクリエーションを中心に、クラフト、ダンス、ゲーム、マジックを実習した。【こどもの城】で開催。講師は横浜レクリエーション研究所の兼松ムツミ氏、東京都レクリエーション協会事務局長奥野正恭氏（日本レクリエーション協会上級指導者）ほか。
平成 6 年度 第 3 回児童厚生員 等実技指導講習会	児童館職員 ほか (50)	39	1.19~21	「あそびのニューウェイブを考える」をテーマに、パソコンとビデオを使ったくあそび>を取り上げた。実践をとおして豊富なノウハウを持っている【こどもの城】の活動を紹介。前々日、阪神大震災があり、関西方面の参加者 8 人が欠席となった。【こどもの城】で開催。講師は【こどもの城】プレイ事業部スタッフと A V 事業部スタッフ。

社会人の参加が過半数を超えた
「ボランティア講習会」



講師の柴田俊明氏の話に熱心に耳を傾ける児童厚生員
（「児童厚生員等実技指導講習会」から）

(2) 研修教養部の活動

本年度の研修教養部の活動は、①ボランティアの養成、活動関係 ②野外活動関係 ③福祉講座関係 ④実習生・研修生の受け入れ関係の4点を中心として活動が展開された。

1) ボランティアの養成と活動

〔子どもの城〕の事業に協力するボランティアを養成するためにはボランティア講習会を実施しているが、本年度の講習会修了者は111人。実際に

〔子どもの城〕で活動を希望し登録をしている人は、前年からの継続者も含め年度末現在446人となった。

近年、ボランティア活動が社会的に話題になっていること、週休2日制が社会で定着していることなどの理由で、年々社会人ボランティアが増加し、土・日曜日にはたくさんのボランティアが活動をする姿が見受けられた。反面、大学生のボランティアで平日に活動をする人が減少してきている。

また、主婦層を中心とした女性ボランティアが人形劇や影絵といった児童文化を中心に活動を活発に展開するようになってきた。

今後増加する社会人ボランティアの受け入れ、活動の活性化を図るために、スタッフの態勢（遅番など勤務時間のシフトなど）を検討する時期にきている。

(ア) 平常期間プログラムの中での活動

〔子どもの城〕のボランティアは、各事業部からの要請を受け定期的に平常期間のプログラム活動に参加している。各活動とも長く継続しているものが多く、メンバーの技術の向上のための準備や練習の活動も充実してきている。

一方、世代交代の時期にさしかかり、新しいボランティアがメンバーとして参画するようになり、新規プログラムへの試みも積極的に行われた。

また、社会人ボランティアが増えたことによって、土・日曜日の活動が一層活発になった。平日には女性ボランティアの参加が著しく増加し、経験も増えたことにより、週間行事の中心役となって活動を進めている。



恒例となった正月行事「紙相撲初場所」

(イ) 特別期間プログラムの中での活動

子どもたちの学校の長期休み期間で来館者が集中する時期を利用して、より多くの子どもたちが、一度に参加して遊ぶことができるプログラムを計画。スタッフとともにボランティアが企画段階から参加し、[子どもの城] オリジナルのユニークな行事を実施した。

毎年恒例となった行事を目当てに来る来館者も増え、“屋上でのプログラム”を楽しみに来館する声も多く聞かれた。一方、

平常期間活動と同時並行して計画されるため、準備不足やメンバー不足が表面化することもあった。今後、これらの行事に対して、スタッフがどうボランティアを導き、励ましながらより新しく、楽しいプログラムを生み出すかが課題である。

そのほか「節分」「ひなまつり」「母の日」などの季節行事の運営補助も行った。

(ウ) L.I.T. (Leader In Training) の活動

L.I.T.は、Leader In Trainingの略で、[子どもの城]で活動をする高校生のグループ。メンバーは、いずれも過去に[子どもの城]の講座やクラブ、キャンプ活動に参加をしていた子どもたち。高校生になってからも[子どもの城]を活動の基盤にして、スタッフや経験の豊かなボランティアリーダーとともに、学校生活だけでは体験できない活動を自主的に計画しながら活動した。

活動の基本は、将来ボランティア活動をしてみたい、[子どもの城]に遊びに来る子どもたちと遊びを通してリーダーとしての心得や社会参加の活動を学んでいきたい、という考え方で活動している。本年度は、レクリエーションを中心に、外部講師を招いて指導していただいた。また、自分たちでレクリエーションプログラムを企画し、経験豊かなボランティアに指導してもらい、クリスマス会の中でそれを実施し、お互いにプログラムを評価するという活動がメインとなった。

本年度は30人が登録。月平均2回程度の活動を展開した。

(エ) ボランティア養成のための講習会

ボランティア活動が初めてという人のために、基本的な考え方（ボランティ



開館記念の「チャレンジゲーム大会」

ア論、子ども論、リーダー論など)、【子どもの城】とその活動内容などを理解してもらい、ボランティアとしての共通基盤を作ることをねらいとして、次の講習会を実施した。

(1)青年ボランティア講習会

本年度は、学生および社会人を対象にして2回の講習会(第30・31期)を実施した。8回の講義と2泊3日の宿泊研修を盛り込んで行った。

社会人の参加が急増し、ついに受講者の半数を社会人が占めるようになった。熱心に受講する社会人の態度に、ともに参加している学生たちも刺激され、宿泊研修などでも意欲的に取り組むメンバーが増え、講習の雰囲気もしだいに活発になってきた。年間を通して96人が修了した。

(2)女性ボランティア講習会

育児経験や社会経験の豊かな家庭の主婦を対象に、4回の講義を中心とした講習会を実施した。年齢層は30代から60代までとバラエティーに富んだ人材が集まった。

修了者は15人で、修了後は主にグループで、プレイホールでの自由遊びの活動を企画・運営するなど、活動に広がりをみせている。

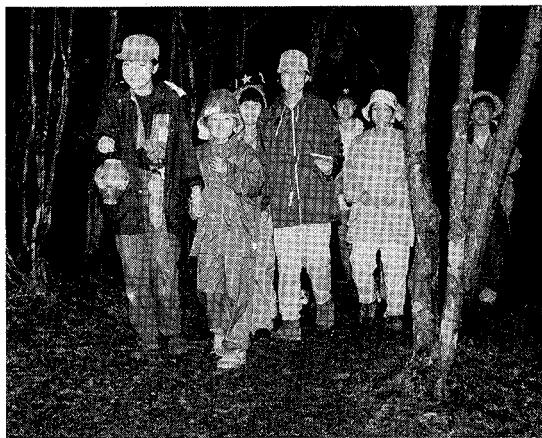
(オ) ボランティア・グレードアップ講習会

【子どもの城】で活動をしているボランティアを主な対象として、その資質や技術の向上を図ることを目的に実施。本年度は「日本赤十字社救急法救急員資格認定講習会」「野外活動講習会」「スキー講習会」を行った。受講者は52人。

2) 野外活動

「ジュニア・アウトドア・スクール」「ジュニア・スキーキャンプ」のほかに、他事業部が行う次の野外活動にもボランティアが参加し、班付きカウンセラーや本部運営を積極的に行った。

キャッスルキャンプ(プレイ事業部)/スポーツキャンプ(体育事業部)/ちびっこ冒険団(プレイ事業部)/合唱団合宿(音楽事業部)/ゆきんこ冒険団(プレイ事業部)/スキースクールII(体育事業部)



ちょうちんの明かりを頼りに「ナイトウォークラリー」
([ジュニア・アウトドア・スクール]から)

3) 福祉講座

〔子どもの城〕の社会福祉講座は、開館以来実施してきたが本年度は、「手話講座」「点訳入門講座」「点訳サークル」「子どもの心を考える講座」の4講座を実施した。受講者は延べ162人。

4) 実習生・研修生の受け入れ

大学・短期大学や専門学校などからの依頼により実習生の受け入れを行っているが、本年度は保育研究開発部、体育事業部、プレイ事業部、音楽事業部へのコーディネートをした。

研修生については、全国から児童館単位での職員研修の依頼を受け、主に〔子どもの城〕の事業概説などの説明を行った。また最近は、各事業部のプログラムの企画や運営について、実際に現場での研修を希望する児童館も増加する傾向にある。

5) その他の活動

(ア) 児童厚生員等実技指導講習会

子どもの城全国連絡協議会をネットワークに、全国から児童厚生員などの関係スタッフを集め、年3回の講習会を実施した。研修教養部は、本講習会の事務・実施に際しての運営を子どもの城全国連絡協議会と連携して行った。

野外活動が活発になる夏休み前に行われる1回目の講習会は、年度当初ということもあり、参加者が少ない傾向があるが、全国で同じ活動をし、日夜同じような悩みを抱えて頑張っている児童厚生員同士が一堂に集まり、さまざまな情報交換をすることは大きな意義がある。各回とも、多くのものを得て、お互いに励まされ全国へ帰っていった参加者も多く、好評であった（詳しくは、全国連絡協議会の項を参照）。

3 国際交流

(1) 6年度の活動一覧

1) 平常期間プログラム

名 称	期 間	備	考	
アートスケープ展 Artscape '94	4.11~24 (10日はレセプション)	【こどもの城】では9回目、通算で15回目を迎えた春の恒例展覧会。東京・横浜地区的インターナショナルスクール9校の生徒(中・高生)たちの美術作品約400点を1階のアトリウム・ギャラリーに展示。今回は東京大学附属中学・高校、東京ラーニング・コミュニティー(国際養護学校)の両校が初参加した。美術を通しての国際交流を図るべく、生徒たちはすべてボランティアで参加し、レセプションや一般客のための陶芸のワークショップなどを行った。入場は無料。		
ミセスサンタズ クリスマス Mrs. Santa's Christmas	12.17 12.18	①14:00 ①11:00 ②13:30	幼児から小学校低学年、そしてファミリーを対象にバイリンガルで行われるクリスマス・ファミリーシアター第21弾。ミセスサンタと【こどもの城】の講座パフォーミング・アーツ・グループ(PAG)の子どもたちが観客といっしょに創造する、愉快なクリスマス・プログラム。土曜日は幼児向けに特別プログラムが行われ、保育クラブと幼児グループの子どもたちが出演した。また、オリジナルバージョンのクリスマス・ソングや、伝統的な英国の遊びをバイリンガルで紹介した。入場は無料(入館券対応)。開演の1時間前にアトリウムで整理券を配布した。	

2) 講座・クラブ

〈講座〉

名 称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備	考	
パフォーミング・アーツ・グループ Performing Arts Group(PAG)	(人) 小1~6 (30)	(人) ① 35 ② 29 ③ 20	(回) 4.20~7.13 9.21~12.14 12.15・16 (リハーサル) 1.18~3.22 水曜日 16:00~17:30	12 11 2 10	講師はテリー・スザーン(アメリカ)。 さまざまな年齢(6~12歳)と少数だが外国籍の子どもたちが いっしょにダンス、歌、演技、表現力をバイリンガルで学ぶ。 本年度は子どもたちが1人で表現を創造できることに重点を置き、その一環として、グループに分かれてオリジナルの表現劇を作り、講座の時間中に発表した。	

(2) 国際交流部の活動

〔こどもの城〕における国際交流部の役割というものは、まだ十分に認識されているとは言いがたいが、日本人と外国人コミュニティーを結ぶ架け橋となることだと考えている。〈国際的〉という言葉の中にはまず基本として〈人〉と〈人〉との〈関係〉が含まれると考え、そのふれあいと交流を大事に活動している。

外国人利用者が年々増えていることもあり、外国人も参加できるようなプログラムの必要性が高まってきている。例えば祝日や冬休み、夏休みに来館する外国人利用者のために、2か国語のできる外国人スタッフを増すようにすれば、日本人のスタッフも今まで以上に外国人になじみ、理解も深まると思うのである。

国際交流部ではちらし・パンフレットなどの英語版作成、各事業部の英語表示などの作成協力、外国人視察・見学の案内などの活動のほかに、在日外国人と日本の子どもたちとの交流を図るためのプログラム（「アートスケープ展」や「バイリンガル・ファミリーシアター」など）、小学生を対象とした講座「パフォーミング・アーツ・グループ（PAG）」を実施している。

1) 平常期間・特別期間

(ア) アートスケープ展

アートスケープ展は1980年5月に始まり、〔こどもの城〕では9年前から開催している恒例展覧会である。東京・横浜地区のインターナショナル・スクールの小学5年生～12年生（高校3年生）、70か国以上の国籍の生徒たちの手による水彩画、油絵、版画、陶芸、ガラス工芸、建築、写真など400点以上の作品が毎年アトリウム・ギャラリーに展示される。

通算15回目を迎える今回の参加校は、クリスチャン・アカデミー・イン・ジャパン、清泉、聖心、セント・メリーズ、横浜、西町の各インターナショナル・スクールとキニック・ハイスクールの7校に、東京大学教育学部附属中学・高校、東京インターナショナル・ラーニング・コミュニティー（TILC=国際養護学校）の2校の初参加校を加えた全9校。最終日には、聖心インターナショナル・スクールの生徒と先生による陶芸、アニメーション、金属細工のアート・ワークショップが行われた。

このような活動により、〔こどもの城〕と外国人コミュニティー、インターナショナル・スクールの生徒たちとの間に文化的・国際的な交流が生まれ、身边にコミュニケーションできるようになった。

本年度の新たな動きとして、日本の学校の生徒たちとTILCの参加があげられる。今回初めて東京大学教育学部附属中学・高校の生徒の作品が40点ほど展示された。その作品は3月に卒業したばかりの生徒のものであり、レセプションには校長しか参加できなかつたのが残念であった。これはインターナショナル・スクールと日本の学校の学期スケジュールの違いに由来している。インターナショナル・スクールは9月から7月、日本の学校は4月から3月だからである。今後双方の生徒たちに都合のよい開催時期を考える必要がある。

TILCには自閉症・ダウン症・言語障害・脳性麻痺・視聴覚障害などで特別な手助けを必要とする5歳～16歳までの子どもたちが通っている。彼らの作品を展示することにより、ハンディキャップを持った子どもたちとの交流の場を提供することができた。

恒例行事になっている前夜祭（フリーホールでのレセプション）も、各学校から多くの生徒と先生が参加した。席上、アートスケープ展の設立者であるウーセラ・今出川さんからスピーチがあった。今年は参加した生徒の保護者が経営しているインド料理店から料理の差し入れがあり、大いに盛り上がった。

〔子どもの城〕での開催回数を重ねるごとに、少しずつではあっても、国際交流の輪は広がっている。「アートスケープ展」が新たな外国人利用者を増やす、よいきっかけになることを今後も希望する。

(イ) バイリンガル（2か国語）・ファミリーシアター

バイリンガル・ファミリーシアターの歴史は1980年12月のファミリー・ディスコに始まる。このイベントを始めた目的は、①日本人に海外の習慣・伝統的行事（クリスマスやハロウィーン）を紹介すること ②日本語以外の言葉による外国人向けのファミリー・プログラムが少なかったこと（外国人利用者をもっと増やすこと） ③家族全員が楽しく参加でき、日本人家族と外国人家族が交流する場を提供すること ④家族で参加（日本人の場合は特に父親）して楽しく踊ることにより、家族のコミュニケーションを図ること——など。つまり“家族のための＝ファミリー”，“一緒に踊る場所＝ディスコ”が名前の由来である。



「アートスケープ展」でワークショップ開催

を重ねるうちに内容も変化し、より幅広い意味を持つ“シアター”という現在の名称に変更した。

舞台は同時通訳でない独特のバイリンガル方法で進行し、春とクリスマスの年2回、青山円形劇場で行われる。国際交流とファミリー・ディスコを中心に観客もいっしょに参加できる楽しい舞台を目指している。

音楽、ドラマ、ダンスを通して家族の触れ合いを深めるためのバイリンガル・ファミリーシアターは、日本人と外国人の家族が一緒にステージに登り、共通の体験を通して理解し合う絶好の機会といえる。また、いろいろな国々の習慣や考え方を紹介することで、近年増加の一途にある帰国子女や海外に居住経験のある人にはなじみ深く参加しやすいプログラムといえる。だが、このようなプログラムは多大の経費を必要とする。“バブル”崩壊後の今、協賛各社の協力には限度があり、経費・人材面などの厳しい条件からいかに効果的に公演を成功させるかが、このプログラムの存続の鍵となっている。

(1) ミセスサンタズクリスマス

バイリンガル・ファミリーシアター第21弾。通算回数では103回目。今回の公演は従来と違い、公演の入場料を無料にし、入館料のみで入れるようにした。整理券は開演の1時間前から1階のアトリウム受付で配付。全公演とも325人の定員数を早くから配り終えた。

内容は、北極に住むミセスサンタと、そこへ修学旅行にやって来た子どもたち(PAG)を中心に歌、ダンス、ゲームやファミリー・ディスコからなる楽しいステージ。17日には幼児のための特別プログラムとして、[こどもの城]の保育クラブと幼児グループの子どもたちが出演し、「森のクリスマス」など数曲を歌った。この1時間半ほどの公演は、観客とキャストがゲームやダンス、歌などにいっしょに参加することで効果を発揮する、多人数に適したプログラム。子どものみならず、大人だけでも十分に楽しむことができた。

音楽は聖心インターナショナル・スクールでアートスケープ展を担当しているスティーブ・トゥートゥル(イギリス・作曲)と、テリー・スザーン(アメリカ・作詞)。イギリスの伝統的なファミリー・ゲーム・ソングとオリジナルのクリスマス・ソングを幾つか紹介した。そのほか、4人の劇団員がクラウンや熊、赤鼻のトナカイに扮し、舞台の進行を補った。また保育研究開発部のスタッフもうさぎ、恐竜、クラウンなどの衣裳を身にまとい、ピアノ演奏や会場内の進行に協力してくれた。

PAGの子どもたちは、自分たちのパジャマに色とりどりのモールを付け、クリスマスの雰囲気が出るように工夫を凝らした。保育クラブと幼児グループの子どもたちは歌に出てくる動物の帽子を頭にかぶり、元気よく歌った。観客も、PAGの子どもたちが考えたオリジナル・ゲームや歌を大いに楽しみ、ファミリ

ー・ディスコでもロック調のクリスマス・ソングに積極的に参加してくれた。

本年度はどの企業からも協賛が得られず、予算も、過去から比べると約10分の1に縮小された。ちらしは1色刷り、舞台装置は予算の都合上作れず、クリスマスの絵が描かれた垂れ幕も4年前のものを使うなど、公演の規模も顕著に縮小された。

今回のように金銭的に苦しい状態で、入場料を取らず整

理券のみ配付する方法は、今後の公演に向けての新しい試みといえよう。このシステムは観客に気軽に入场してもらえる反面、整理券の紛失や観客が舞台を見ずに帰ってしまった分だけ空席ができてしまうという側面がある。入場料を無料にしたことがマイナスでなくプラスになるような対応方法を考えなければならない。

過去の公演から現在まで、舞台で観客との交流を図る役割は、PAGの子どもたちを中心に演じられてきた。今回もPAGのメンバーは公演で行われる歌やゲームなどのパフォーマンスで観客をリードし、自分自身を劇的に、創造力豊かに表現した。公演は彼らが自分自身を表現し、それを発表できる数少ない機会であり、その創造性は、子どもたちの健全育成につながっている。

保育グループのパフォーマンスはとても愛くるしく、1度だけの公演というのが残念だったが、時間や出演などの都合を考慮、調整するなどし、今後の公演参加を検討したい。

2) 講座・クラブ

(ア) パフォーミング・アーツ・グループ (PAG)

パフォーミング・アーツ・グループは小学1年～6年生を対象に、週1回、英語と日本語のバイリンガルで演技、歌、ダンスなどの表現活動を指導する講座である。通常の活動に加え、毎年12月には青山円形劇場で国際交流バイリンガル・ファミリーシアターに参加している。

この講座の目的は単に舞台に向けて演技や歌などを指導するだけではなく、舞台を作り上げる過程において必要な協調性や、自分自身を表現する方法を子



バイリンガル・ファミリーシアター
「ミセスサンタズクリスマス」

どもたちの中に芽生えさせることである。そして国際交流の一環として、いろいろな国籍の子どもたちが集まり自分を表現することができる。日本以外の人や言葉との接触の場として、外国人の指導者を招いている。

本年度の活動内容であるが、第1期は「ぽんぽん」作りをした。最初は新聞紙で、その後はビニールで作った。それまで一度も「ぽんぽん」を作ったことのない子、手先を使った細かい作業が苦手な子、「ぽんぽん」の音に感動した子など、反応はさまざまだった。その後「ぽんぽん」を使った表現を考え、発表した。

第2期は毎週の活動に加え、クリスマスのためのプログラム作り、そして中野区社会教育委員会の依頼で、文部省主催の「生涯学習もみじ山フェスティバル」のイベント "Hungry? 元気が出るわっくわくライブ" に参加、講座でその練習をした。このイベントは中野区立図書館の創立1周年記念として催されたもの。毎年青山円形劇場で行われる国際交流バイリンガル・シアターを見た中野区教育委員会の方が、中野区主催で国際交流に関係した公演を希望し、実現したのだった。1,300人収容の中野ゼロ・大ホールでのバイリンガル・ライブは、中野ゼロのスタッフにとっても初の試みだったが、国際交流と家族交流が1度にできたことを非常に喜んだ。PAGの子どもたちは中野区ゼロ・キッズやジュニア・リーダーたちといっしょに、"Get Genki" の曲を元気よく踊った。結果は好評であった。

第3期はダンスに力を入れて進めた。第3期は年長の6年生が、受験などの理由で講座を去っていった。中・高校生を受け入れるプログラムがないため、続けてきたことが途切れてしまうのが残念であった。

講座に長い間携わっていると、子どもや両親が望んでいることが表現力からバイリンガルへ、そして円形劇場の公演に参加できることへと変化していく。舞台に立ったことで自分に自信が持てるようになったからである。日本の学校では軽視されがちな表現活動、自分を表現すること (Self Expression) が持つ大きな効果の1つとして、このような心のリハビリテーションがあげられる。講座の中ではグループで歌や踊り、ゲームを作ることをしているが、これは子どもたちの忍耐力、理解力、協調性を高めるのに非常に適している。6歳から12歳までの年齢差、外国人がいる場合には言葉の壁を乗り越えなければならないからである。グループで考え、想像してものを作ることで子どもたちは自然にそれらを身につけることができる。「表現力」の育成は、ひいては子どもたちの健全育成につながっていくのである。

PAGで学んだことを一般の人々に知ってもらうため、青山円形劇場のほかにNHKホール、中野区で行ったような表現活動を今後も続けていきたいと思っている。このような活動が子どもたちにとって、そして近い将来、必ず【こど

もの城]にとっても大切なものがになると信じている。

3) その他

広報部への協力（特別期間の催し物ちらし、講座募集ちらしなどの英語版作成、英字新聞などへの催し物案内）をはじめ、各事業部の英語表示などの作成協力、外国人視察・見学の案内、電話の英語対応などを行った。

日本にいる外国人には、英語は読めるが日本語は読めない人が多い。そのため、英語表記による案内や説明が必要になる。まずは英語から始め、それから他の外国語も取り入れるようにしていくべきだろう。

PAGやアートスケープ展は人ととのコミュニケーション（国際交流）に大きく貢献している。国際交流部の活動を更に大きなものにし、そして日常的なプログラムとして展開していくためには、部内のスタッフを増やし、他部との協力体制を強化していくことが必要になる。〈国際交流〉を単なる言葉として終わらせるのではなく、[こどもの城]の重要な活動の一部だと認識して、今後は他事業部と協力してプログラムを考えていきたいと思う。



PAGの子どもたちが
「Hungry? 元気が出るわくわくライブ」に出演

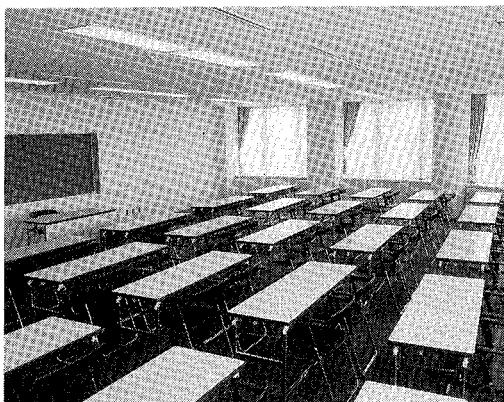
4 営業部

(1) 業務の概要

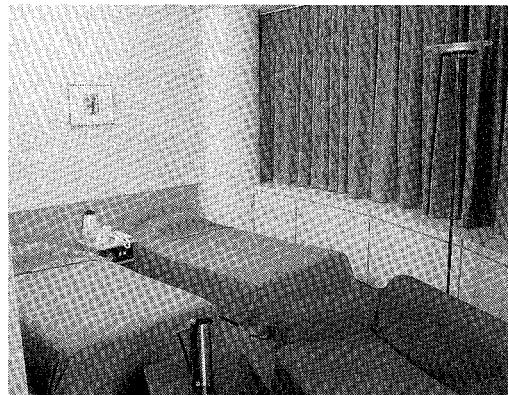
業種	店名等	場所	利用客席数	営業日・営業時間等	備考
ホテル	こどもの城ホテル	6・7階	客室数 27 客室定員64	無休(12月29日から1月2日までを除く)	洋室24室(シングル3, ツイン10, デラックスツイン11)和室3(4人用1, 5人用1, 10人用1) 料金1泊6,300円(税込み)~
飲食関係	カフェテラス「アンファン」	1階	客席数 140	無休(12月29日から1月2日までを除く) 営業時間: 7:30~20:30	喫茶、軽食および弁当仕出し、パーティーなど ホテル宿泊者の食事
	すし「ひさご」			無休(12月29日から1月2日までを除く) 営業時間: 11:00~20:30	すし、和食および弁当・料理の仕出しなど
コーヒーラウンジ「アミティーエ」		2階	客席数 60	毎週月曜日休業 営業時間: 11:00~20:00	喫茶、軽食
劇場内「スナック」		青山劇場内地下口 ビーおよび2階口 ビー	立食	公演に合わせて営業 営業時間: 開演前・幕間	喫茶、軽食
貸し室	研修室	8・9階	室数 10 ※一部通じて使用できる。利用人員350人ぐらいまで	無休(12月29日から1月2日までを除く) 営業時間: 9:00~21:00	研修および会議など 料金: 1単位時間 11,500円~(税別)
	ギャラリー	1階アトリウム内		無休(12月29日から1月2日までを除く) 営業時間: 10:00~18:00	各種展示会および実演など 料金: 1日 30,000円(税別)
物品販売	売店	1階アトリウム内	1か所	毎週月曜日休業 営業時間: 開館時間中	絵画、造形用品、文具、遊具、玩具、印刷出版物、電気用品、音楽用品、衣料、スポーツ用品、劇場関連用品、催事関係用品、雑貨など
	自動販売機	館内各所	飲食・乳販売 12か所 たばこ販売 7か所 フィルム 1か所	無休	通常ドリンク類、牛乳類、スナック類

業種	店名等	場所	利用客席数	営業日・営業時間等	備考
公衆電話		館内各所	14か所	無休	
駐車場		地下2階～地下4階	約113台 (業務車両分を含む)	無休(12月29日から1月2日までを除く) 営業時間：8:00～22:30	一般車両は地下、バス等大型車両は1階ピロティに駐車 料金：普通車両1時間600円 (税込み)

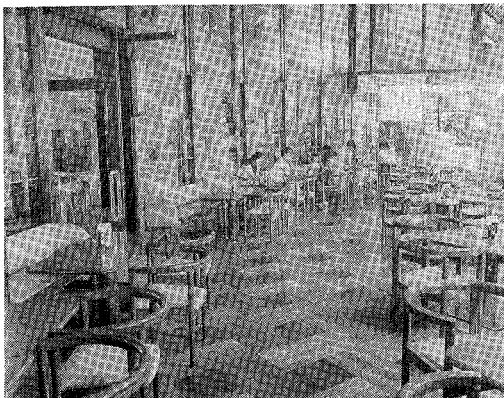
- 注) 1. この表は、平成6年4月1日以降の利用者サービス事業について掲げたものである。
 2. 春休み、夏休み、冬休み等の特別期間については、【こどもの城】全館の日程に合わせて休業日にも営業を行う。
 3. 劇場公演日程に合わせ、関連部門は休業日であっても営業する。
 4. 各事業部の事業上必要なときは、当該事業に合わせて可能な限り上記場所以外でも営業を行う。



研修室



ホテル客室



カフェテラス「アンファン」

(2) 業種別の状況

1) ホテル

営業収入は、本年度1億33万円で、前年度1億576万円に比べ543万円の減収となっている。これは、改修工事があったため営業を休止したことによるものである。

客室がどのように利用されたかを本年度についてみると、客室利用率(注1)は全体で81%，客数比率(注2)では67%となっており、前年度に比べ客室利用率、客数比率ともほぼ横ばいである。

客数比率が客室利用率に比べて低いのは、主としてツインルームおよび和室の利用人員が客室定員より少なかったためなどの理由によるものである。今後とも利用効率の向上に努めるとともに、PR営業活動による顧客開拓、また顧客に対するサービスの向上などに努力していく必要がある。

【ホテルの利用状況】

客室種別	客室利用率	客数比率
シングル	90.9%	90.9%
ツイン	82.1%	73.7%
和室	66.7%	50.4%
平均	81.4%	67.4%
総利用者数	14,791人	

(注1)

$$\text{客室利用率} = \frac{\text{(期間中利用室延べ人数)}}{\text{(期間中日数} \times 27\text{室)}} \times 100$$

(注2)

$$\text{客数比率} = \frac{\text{(期間中利用客延べ人数)}}{\text{(期間中日数} \times \text{定員} 64\text{人)}} \times 100$$

2) レストラン・喫茶

飲食5店舗の営業成績は、[こどもの城]の入館者数、劇場公演および各種会議などによって大きく左右されることになるが、営業収入で見ると、前年度3億4,200万円、本年度3億1,600万円で、対前年度比92%，約2,600万円の減収になっている。これは、平成6年9月末日で8階レストランを閉鎖したことによるものである、来年度においてはPR活動をさらに活発化するとともに、各店のメニューの見直しを行い、外部の一般客の利用拡大を図る必要がある。また、今後も引き続き喫茶メニューの改善、料金の低廉化とサービス向上を図っていく必要がある。

3) 貸し室・ギャラリー

長期にわたる景気低迷の影響は【こどもの城】においても例外ではなく、ここ数年利用率は減少傾向にある。売り上げ額は本年度1億146万円となっている。研修室の利用率も平均で66%となっている。

利用の内容は、外部への有料貸しのほか、【こどもの城】の企画による催事などにも利用されている。とりわけ春・夏・冬休み、ゴールデンウイーク（児童福祉週間）などの特別期間中は、研修室、ギャラリーのいずれも内部利用の割合が極めて高く、【こどもの城】の限られたスペースでの充実したプログラム作りに寄与している。

【研修室利用状況】

項 目	区 分	年 計					
		有 料 利 用		内 部 利 用		計	
		件 数	利 用 率	件 数	利 用 率	件 数	利 用 率
研 修 室	午 前	1,922	57.1%	218	6.5%	2,140	63.5%
	午 後	2,388	71.3%	223	6.7%	2,611	78.0%
	夜 間	1,281	47.3%	214	7.9%	1,495	55.2%
平 均		5,591	59.3%	655	7.0%	6,246	66.3%
ギャラリー		51	14.2%	183	50.9%	234	65.2%

(注) 利用率は次により算出した。

$$1) \text{ 研修室利用率} = \frac{\text{各室を午前・午後・夜間各1とした場合の年間利用数}}{3 \times (\text{午前・午後・夜間}) \times 10\text{室} \times \text{年間営業日数}}$$

ただし、日曜日・祝日の夜間休業、じゅうたんクリーニング・工事などの利用不可能日は除く。

4) その他の業務

売店、自動販売機による販売、駐車場の提供、館内公衆電話の管理などについては、前年度に引き続き【こどもの城】事業活動に即応する形で利用者サービス事業の一環として実施してきている。これらの収入の状況は、本年度1億8,165万円となっている。【こどもの城】の利用を促進していくうえで、これらの利用者サービス事業はいずれも欠くことのできないものなので、引き続き多様な利用者需要に合わせたサービスの向上を図っていく必要がある。

【営業許可等の状況】

業種	店名等	営業許可を受けた日	営業許可番号	行政庁	備考
旅館業	こどもの城ホテル	昭60.10.30	60謹保衛環旅 第10号	渋谷区保健所	表示基準適合(渋谷消防署) 昭62.10.1謹予762号
飲食業 (飲食店)	レストラン 「ラブニール」	昭60.10.22	60謹保衛食ほ 第1552号	"	平6.9.30閉鎖
"	カフェテラス 「アンファン」	昭63.11.12	60謹保衛食ほ 第2307号	"	
"	コーヒーラウンジ 「アミティーエ」	昭60.10.22	60謹保衛食ほ 第1554号	"	
"	劇場スナック	昭60.10.22	60謹保衛食ほ 第1553号	"	
"	自動販売機	昭60.10.31	60謹保衛食ほ 第2072~5号	"	
飲食業 (喫茶店)	"	昭60.11.20	60謹保衛食ほ 第2308~9号	"	
"	"	昭60.11.30	60謹保衛食ほ 第2310号	"	
乳類販売	"	昭60.11.30	60謹保衛食ほ 第2311号	"	
食料品販売	"	昭61.4.28	60謹保衛食れ 第20,21号	"	
乳類販売	"	昭63.6	60謹保衛食ほ 第2816号	"	
たばこ小売	"	昭60.9.30		大蔵省 関東財務局	

注)期間が定められている許可などについては、当該期間満了後更新手続きをとっている。

IV 「家族芸術祭」と「動く子どもの城」

- 1　国際家族年記念　家族芸術祭175
- 2　動く子どもの城
(キャラバン隊派遣事業)180

1 国際家族年記念 家族芸術祭

(1) プログラム一覧

名 称	期 間	備 考
田沼武能の写真による「世界の子どもと家族」写真展	9.10～10.10	さまざまな環境の中で、いきいきと生活している子どもたちの姿を撮り続けることで世界的に著名な田沼武能氏の写真を通じて、家族というものを改めて考えてみる機会を広く提供した。田沼氏が長年にわたり世界各地で撮り続けてきたフィルム・ライブラリーから、家族と子どもをテーマに130点を選んで構成し、展示した。
全国児童館 造形フェスティバル	10.29～11.27	全国約4,000館の児童館に呼びかけ、「わたくちたちの家族」をテーマとした造形作品を募集し、応募のあった93館の作品を展示した。作品は、90cm×90cmという大きさのみを規定し、自由な素材・技法で制作できるようにしたため、立体の作品が多く見られ、子どもたちの創造性や感性の豊かさを感じさせる展覧会となった。
こどもの城親子体験 ワークショップ 「おやっ！と発見 子と発見！」	11.1～3	【こどもの城】が開館以来実施してきたさまざまなプログラムのうち、特に親子を対象としたワークショップを全館的に実施した。親子で共通の体験をすることによって、日ごろは気がつかない家族の一面を見つけてもらうことをねらいとした。また、全体での統一感を持たすために、6月ごろから定期的な会議をもって運営を進めた。
家族・はがきアート展	12.3～1.8	「はがきに家族を自由に表現してください」と全国に公募し、約2,000通集まったはがきの展覧会。絵画ばかりではなく、写真や文章で家族を表現した作品も見られた。また、公募すると同時に、さまざまな分野で活躍する招待作家の作品も展示した。幅広い年齢層から寄せられた作品は、その世代の家族観を如実に表していた。

〈全国巡回展〉

名 称	期 間	場 所	備 考
「世界の子どもと家族」写真展 秋田県巡回展	12.3～5 9～11 17～27	大曲市仙北広域交流センター 鷹巣阿仁広域交流センター 秋田県総合生活文化会館	主催：秋田県福祉保健部児童福祉課 後援：秋田県教育委員会
〃 青森県巡回展	1.12～15 19～22 26～29	弘前市立勤労青少年ホーム 青森市民美術展示館 八戸市ラビアプラザ	主催：青森県児童環境づくり推進協議会・青森県・ 青森県教育委員会ほか
〃 兵庫県巡回展	2.5～26	兵庫県立こどもの館	主催：兵庫県立こどもの館
全国児童館 造形フェスティバル 広島市巡回展	1.5～29	広島市こども文化科学館	主催：広島市児童館連絡協議会・広島市こども文化 科学館
〃 富山県巡回展	2.5～3.5	富山県こどもみらい館	主催：富山県こどもみらい館
家族・はがきアート展 群馬県巡回展	3.1～15	ぐんまこどもの国児童会館	主催：ぐんまこどもの国児童会館

(2) 家族芸術祭について

1994年は、国連が提唱する国際家族年であった。社会の基礎的単位である家族の重要性についての関心と理解を高め、1人ひとりが個人として尊重されつつ、社会や家族の一員として生きがいのある生活を送ることのできる豊かな社会を築いていくことがこの提唱のねらいであった。

政府全体で取り組む「国際家族年記念事業」の一環として、財団法人未来財團からの助成を受け、[子どもの城]でも厚生省の呼びかけに応じた記念事業を実施することになった。

[子どもの城]では、その建設理念に基づいた開館から9年に及ぶ実践活動によって得られた経験と知識を基に、厚生省・財団法人未来財團との共催で、さまざまな角度から“家族”を考える「家族芸術祭」を開催した。

準備期間には、[子どもの城]の事業部や企画部・広報部などから集まったスタッフで委員会を組織した。通常の活動が子どもはもちろん親子を対象として行われている[子どもの城]で、改めて“家族”に焦点を当ててできること、ナショナルセンターとしての役割を生かせること、[子どもの城]らしい取り組みとはどんなことか検討を重ねた。最終的に、「家族芸術祭」の内容を3つの展覧会と[子どもの城]館内で繰り広げる「親子体験ワークショップ」の合計4つの催しと決定した。それらは、プロの写真家が撮った写真を通して考える“家族”，子どもの目と作品を通して知る“家族”，日本中のさまざまな年齢層の人々がはがきに表現する“家族”，[子どもの城]の日常活動を通して体験する“家族”，といった多様な側面から“家族”を考えることを目的とした。

1) 「家族芸術祭」の4つのプログラム

(ア) 田沼武能の写真による「世界の子どもと家族」写真展(9月10日～10月10日)

「子ども」「家族」の作品を撮り続け世界的にも著名な写真家、田沼武能氏の協力を得て実施した展覧会。氏が長年世界を駆けめぐって撮り続けてきた膨大なフィルムライブラリーから、今回のために自ら世界各地で生活する家族の姿



「家族芸術祭」のオープニングと併せて『田沼武能の写真による「世界の子どもと家族」写真展』のテープカット

— 176 —

を選びだし、当事務局スタッフとともに構成に当たった。

作品出展数は130点で、登場する国数は76か国にのぼる。これらの写真を通して、世界の家族を見て、感じ、自分たちの家族と対比することにより、自分の家族を見つめ直し、これから家族を考える場となることや、自分なりの家族観、人生観を見いだすきっかけとなることを期待して実施した。

「家族芸術祭」の事業決定から実施まで期間が短かったにもかかわらず、新聞などのパブリシティには各方面で取り上げられ、「家族芸術祭」のオープニングとしては、広く一般に広報できたという点からも非常に有効であった。

開催初日には、「家族芸術祭」のオープニングと併せてセレモニーを実施した。式典には、田沼武能氏および主催者の各代表が出席し、作品に関するスピーチやテープカットを行った。期間中の入場者数は延べ5,090人。

また、この写真展に出品された作品は、カタログとして特別に編集し、全国の子どもたちに「紙上展覧会」として観覧してもらえるよう、児童館（全国約4,000館）に配付した。

(イ) 全国児童館造形フェスティバル(10月29日～11月27日)

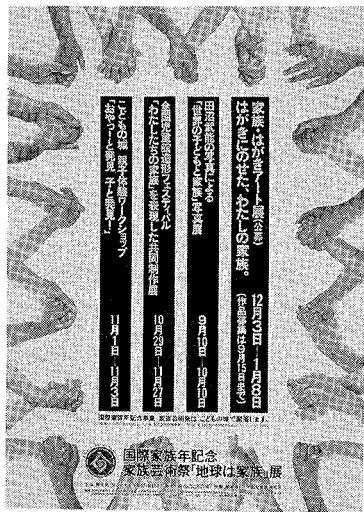
全国の児童館で活動する子どもたちが「私たちの家族」をテーマに「家族について考える」、「家族について話し合う」過程を経て共同制作した作品を展示了した。自由な技法、素材で造形表現をすることや、児童館での造形活動の活性化にもつながった。

テーマを「わたしたちの家族」とし、素材、技法とも自由とした。寸法は、平面作品は90cm四方、立体作品は底面が90cm四方。各都道府県・政令指定都市の児童福祉主管課および児童館連絡協議会を通じて要綱を配付し、参加児童館を募った結果、38都道府県・政令指定都市から93の児童館の参加があった。作品それぞれは、その児童館の地域の特性や日常の活動が十分に生かされたものばかりで、子どもから大人までが楽しめる展示となつた。[こどもの城]からの出品を含めた96作品の約3割は立体作品であった。

この展覧会には多くの児童館関係者も訪れ、情報交換の場ともなり、今後の児童館活動の活性化にもつながっていくことも期待される。[こどもの城]にとっても、具体的な事業を通じ直接多くの児童館と情報交換ができるネットワークの土台ができたことは、予想以



「全国児童館造形フェスティバル」の会場入口



上に貴重な財産となった。期間中の入場者数は延べ7,000人。

(ウ) こどもの城親子体験ワークショップ
「おやつ！と発見 子と発見！」

(11月1日～3日／開館記念特別期間に当たり10月29日・30日にも同一プログラムを実施)

家族芸術祭の中で唯一、[こどもの城]に来館する親子を対象にした事業で、9年間にわたる[こどもの城]の実績を十分に生かして実施した。「親子で遊ぶ」ことを共

通のテーマとし、各部門がそれぞれの専門性を生かしながら、通常行っているプログラムを更に拡大したり、新規プログラムを開発し、幅広い内容のワークショップとなった。

当初の予想を超えて1万人以上の来館者があり、さまざまなプログラムに積極的に参加していた。親子が「遊び」を通して、お互いの知らなかつた姿を発見し、交流を深めるきっかけとなったと考えられる。また、この事業は、今後の[こどもの城]における親子プログラムの開発や幼児向けのプログラムの充実に向けての、1つのステップとなった。

(エ) 家族・はがきアート展

(12月3日～1月8日)

「はがき」という身近な通信手段を利用し、「家族」をテーマに子どもから高齢者まで幅広く公募した作品と、同じ作品規定の下、さまざまな分野で活躍する招待作家の作品を展示了。応募者1人ひとりが作るときには、家族を考え、来館者は見るときに多様な家族を見るなど、家族の大切さやその社会的な役割を改めて考えることになったと考えられる。



約2,000点の応募作品をすべて展示
（「家族・はがきアート展」）

郵政省（後援）の協力で全国の郵便局、ほかに社会福祉協議会、児童館などを通じて7月20日から10月31日まで募集し、約2,000点が集まった。作品は年齢、性別、環境（地域）の異なる応募者それぞれの家族観の表れであり、同一テーマの下、価値観の多様な現代という時代を反映した作品が集まった。全応募作品のうち、18歳未満の作品が全体の4分の3を占め、子どもたちの参加が多かった。学校や幼稚園、保育所、児童館などからの団体応募もあり、国際家族年としてみんなで家族について話し合い、表現する機会を提供することとなった。

応募のあった全作品を展示したが、なかでも個々の家族観が十分に表現されている作品100点を、5人の選考委員に選んでいただいた。招待作品は展覧会により一層の彩りを添えることとなった。また、通信総合博物館の協力で、郵便に関する資料やポストを展示した。入場者数は延べ4,225人。選考委員、招待作家は下記のとおり（順不同・敬称略）。

選考委員＝福田繁雄（グラフィックデザイナー）、日比野克彦（アーチスト）、中川李枝子（童話作家）、神宮輝夫（児童文学学者）、小島弘伸（財日本児童手当協会・子どもの城理事長）

招待作家＝福田繁雄（グラフィックデザイナー）、日比野克彦（アーチスト）、やなせたかし（漫画家）、やまわきゆりこ（絵本作家）、黒井健（イラストレーター）、五味太郎（絵本作家）、高橋克雄（子どもの映像作家）、金子之（イラストレーター）、山村浩二（アニメーション作家）、高泉淳子（役者・劇作家）、岡林信康（ミュージシャン）、あまんきみこ（童話作家）、松永真（グラフィックデザイナー）、林家二楽（紙切り）、波瀬満子（パフォーミング・アーチスト）

2) 家族芸術祭全国巡回展示

国際家族年記念事業として行われた「田沼武能の写真による 世界の子どもと家族 写真展」「全国児童館造形フェスティバル」「家族・はがきアート展」の3つの展覧会は、[子どもの城]での会期を終了した後、全国で巡回展示を行った。

秋田県、青森県では、より多くの県民に鑑賞してもらおうと県内3か所で実施するなど、6県10か所で巡回展示を実施した。

2 動くことの城（キャラバン隊派遣事業）

(1) 6年度の活動一覧

1) プログラム一覧

〈子どもとその親を対象としたプログラム〉

名 称	内 容
造形ワークショップ展	〔ことの城〕の造形スタジオで実践してきたプログラムを視覚的に分かりやすく、パネルで展示し、その中から幾つかのプログラムを子どもたちやその家族を対象に実施。
おんがくがスキ！	観客が演じ手といっしょに楽しめるように、歌遊びや手遊びの要素が盛り込まれたコンサート。演ずる・見る・聞く・楽しむなどの行為が一体となり、音楽の楽しさを体験できるプログラム。
がらくた楽器コンサート	ふだんは、楽器に使われるなどとは想像できないものが、扱い方ひとつで楽器に変身。それぞれの物の固有の音を快く聞かせる異色のコンサート。
アニメ・ワークショップ	子どもたちが優れた映像作品に触れ、また遊びを通して映像の仕組みを考えるためのプログラム。国内外のアニメーションの上映と、アニメの仕組みを簡単に体験できるワークショップで構成。
ボランティア・プログラム	〔ことの城〕で活動しているボランティアリーダーによる影絵や人形劇などの公演と、地域のボランティアとの交流や情報交換を図るプログラム。
交流コンサートなどのプログラム	〔ことの城〕の講座生と、各地の子どもたちとの交流を図るためのコンサートなどのプログラム。

〈児童厚生員等を対象としたプログラム〉

名 称	内 容
造形プログラム	〔ことの城〕の造形スタジオで実践してきたプログラムの講習会。どこにでもある素材を用いて、少し発想や技法を変えると今まで見えなかった新しいプログラムが生まれる。
手作り楽器のワークショップ	普段ではがらくたとして捨ててしまうようなものを生き返らせて、さまざまな楽器に変えてしまう。金属の缶やフィルムケースで楽器を制作したら、みんなでコンサートも行う。
アニメ・ワークショップ	映像の基本的な原理について、遊びを通じて理解させるためのプログラムを体験するワークショップ。

2) 実施一覧

名 称	期 間	実 施 場 所	備 考
岩手県 国際家族年記念事業	7.29~31	盛岡市盛岡劇場 二戸市民文化会館	【こどもの城】が企画し、実施している人形劇を「木ぐつの木」に委嘱して公演。
岩手県 国際家族年記念事業	8.1・2	水沢市文化会館 大船渡市県立福祉の里 センター	【こどもの城】が企画し、実施している中南米の音楽のコンサートを「エルコンドル」に委嘱して実施。
こどもたちからの サウンドメッセージ	8.28	三重県南牟婁郡 御浜町中央公民館	こどもの城児童合唱団と御浜町のリトルリトルコーラスとの交流コンサート。合唱団の合宿の一環として実施。
造形ワークショップ	10.27	公立学校共済組合秋田 宿泊所「千秋会館」	秋田県児童館連合会および秋田県児童会館主催の児童厚生員の研修会として実施。
第9回国民文化祭 みえ'94	10.30	三重県南牟婁郡 御浜町中央公民館	国民文化祭の一環として行われた「こどもフェスティバル」にこどもの城和太鼓グループの講座生が、【こどもの城】を代表して出演。地元の子どもたちとの交流を図った。
手作り楽器の ワークショップ	11.14	富山県こどもみらい館	富山県児童館連絡協議会およびこどもみらい館主催の児童厚生員の研修会として実施。
手作り楽器の ワークショップ	11.30	広島市職員会館	広島市児童館連絡協議会主催の児童厚生員の研修会として実施。
アニメワークショップ	1.29	尾道市総合福祉 センター	尾道市社会福祉協議会（尾道市児童センター）主催の事業として、来館した子どもたちを対象に実施。
造形ワークショップ	2.1	鬼怒川温泉ホテル 「たかはら」	栃木県児童館連絡協議会主催の児童厚生員の宿泊研修会として実施。
手作り楽器の ワークショップ	2.3	与野市コミュニティ センター	埼玉県児童館連絡協議会主催の児童厚生員の研修会として実施。
ボランティア プログラム	2.25・26	福島県橋本町 児童センター	橋本町児童センターでの母親クラブとの交流および、来館した子どもたちに絵の公演を実施。
アニメワークショップ	3.5	恵那市大井児童 センター	恵那市大井児童センター主催の事業として、来館した子どもたちを対象に実施。同時に児童厚生員研修も実施。

動くこどもの城

(2) 「動く子どもの城」について

国からの助成を受けた「動く子どもの城」が本年度から始まった。当事業の公称は「キャラバン隊派遣事業」だが、【子どもの城】が地域の児童館の協力の要請に応じて日本中を東西南北へ移動するという意味で「動く子どもの城」と別称している。

開館当初から【子どもの城】の担う役割として、東京の渋谷区にある、地域に貢献する大型児童館としての役割と、ナルプロジェクトとしての【子どもの城】の活動の成果を全国の児童施設に波及していくというものがある。その後者に当たる事業が、この「動く子どもの城」である。

今までも、実験的なプログラム、新しい児童文化財の創造、あるいは埋もれた児童文化財の再発見などを、実践を通じて培い、積み重ねて、その結果を講師派遣という形で伝達し、小規模ながらも児童施設の方々と共有する活動もしきているが、それは地域の児童施設などからの要請による専門職員の派遣というもので、ネットワークを生かした組織立ったものではなかった。

【子どもの城】では開館以来9年間にわたり、遊びを通して協調性や社会性を獲得するプログラム、造形感覚を養う体験プログラムや制作プログラム、音やリズムを媒介とする音楽体験プログラム、映像の原理を体験的に知ることのできるアニメプログラムなどを年間100万人を超す来館者に提供してきた。そして、その実践活動をフィードバックしながら、先駆的な活動のための新しい礎となるような貴重な経験と知識を得てきた。

「動く子どもの城」は、体育・プレイ・造形・音楽・A Vなどのいろいろな分野の専門スタッフが協力し、開発・研究に力を注いできたそれら【子どもの城】独自のプログラムを館外へ移動し、児童の福祉文化の活性化のために地域の児童館などと連携して、積極的に実践協力を進めるものである。

1) 実施に当たっての問題点

本年度の実施状況は別表のとおりだが、「動く子どもの城」のプログラム意図



「アニメワークショップ」(広島県・尾道市)

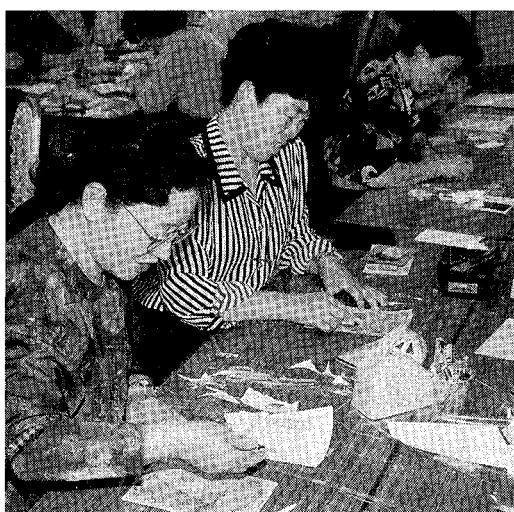
が活用されたかどうか、実施方法はどうだったかを振り返ると、次のようなことがあげられる。

まず、「動く子どもの城」の事業決定が前年度の夏ごろに国から伝えられたため、早い時期にパンフレットが配付できず、そのためか主旨が浸透せず、主旨を理解していないと思われる要望があったこと。例えば、「動く子どもの城」のプログラムをイベントのアトラクションの1つとして派遣してほしいなどの要望や、プログラムの真意を伝えるため展示と制作のセットで組み合わせになっているプログラムを、会場などの都合で單一で行いたいなどの要望である。

いずれも実情は理解できるが、場所や時期を十分熟慮して対処すれば豊かな収穫をあげられるもので、国による補助事業の意味と児童の福祉文化の向上の意義を考慮すれば、プログラムの主旨を無視したような安易な発想は、巡回事業の質を低下させてしまうことになる。子どもたちにとって「何が必要であり」、そのためには欠けているものを明白に確認し、それを「動く子どもの城」のプログラムに求めてくるなら主旨にも沿い、児童福祉文化の活性化になると思われる。「子どもたちのため」を考えずに、催事だけを先行させて企画の空白に「動く子どもの城」のプログラムを入れ込むような発想はたいへん残念である。

実際に巡回をするに当たって生じる問題もあった。それは、この事業の実施主体が當時活動している〔子どもの城〕であるため、繁忙期には派遣が不可能となることである。地域の児童厚生員の実情で考えれば、春休み、夏休み、ゴールデンウイーク、祝日などにこそ来館者が多く、「動く子どもの城」のプログラムを展開したいという要望も理解できるが、それらの時期は〔子どもの城〕においても繁忙期であるため、職員スタッフは協力のために外部に出て行くことができない。こういった時期の問題で断らざるを得なかった場合もあり、たいへん残念であった。

しかしながら、北は青森から西は広島までいろいろな地域で「動く子どもの城」を実施し、児童厚生員など専門の人々や、余暇を子どもの放課後の活動に捧げる「母親クラブ」の女性に数多く出会い、子どもの状況や、現実に直面している児童館運営の問題、喜び、苦悩を直接見聞してきた。そして、子どもの状況はもちろん、子どもの現場に携わる私たち大人も、場所は違っていても同じ問題に突き



児童厚生員を集め「造形ワークショップ」(秋田市)

当たっていると、改めて認識することができた。

2) 今後の課題

子どもの心身の健全育成の第一義とは、子どもを取り巻く環境をよく整えることである。よい環境のもとで、未来を支える子どもの「心身を健やかに育てる」のは私たち大人の義務である。また、子どもの領分を保証するだけではなく、子どもの行為や考えを柔軟に理解し、共鳴できる開かれた大人が多くなることも大切なことである。

「動く子どもの城」は、実践活動と経験から集積されたさまざまなプログラムを、児童厚生員や現場の人々との共同の研修や公演を通じてお互いに広く影響し合い、21世紀を生きてゆく子どもたちの厳しい状況を先導して切り開き、豊かな環境を築き上げる開明的な大人を増やしていく作業でもあるといえる。

明日の子どもたちのために、「動く子どもの城」の事業を質的により高く、そして豊かにしていくには、今後とも多くの方々の協力が必要であり、この事業が幅広い協力と熱烈な支援を得て、ますます充実し、永続することを願っている。



「手作り楽器のワークショップ」（広島市）

V その他の活動

- | | | |
|---|--------------|-----|
| 1 | こどもの城全国連絡協議会 | 187 |
| 2 | チャリティー事業 | 192 |
| 3 | こどもの城友の会 | 193 |

1 こどもの城全国連絡協議会

こどもの城全国連絡協議会は、全国の児童の健全育成に資することを目的に、会員相互の連携により事業を展開してきた。具体的には、情報交換、資料提供、催事の支援、研修会の開催などを行った。

(1) 事業実施状況

1) 情報交換・資料提供・事業協力支援

加盟している児童館・児童センターの健全育成活動の活性化に資するため、[こどもの城]の活動紹介を中心に情報・資料の交換・提供、および直接に加盟の館の主催事業の支援活動を実施した。

(ア) 機関誌の発行

会員へ「ネットワーク」を年4回(6・9・12・3月)4,900部余を送付し、健全育成活動の紹介に努めた。

(イ) 情報交換・資料提供

(1) [こどもの城] の情報提供

会員へ「こどもの城ニュース」を年6回(4・6・7・10・12・3月)各4,900部余を送付し、各地域の児童館活動の参考に供した。

(2) 地域児童館活動の紹介

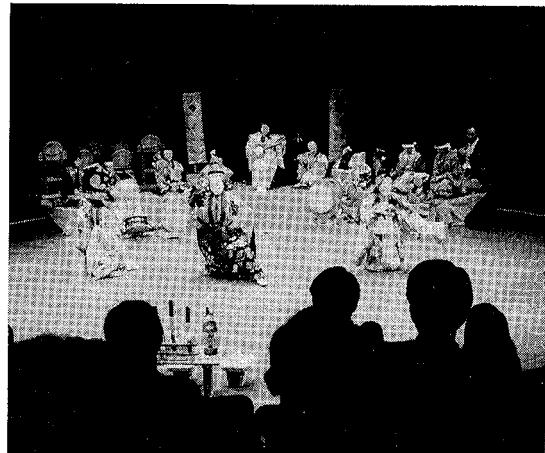
会員へ「あそぶっく～活動事例集」(富山県こどもみらい館発行)を送付し、各地域の児童館活動の参考に供した。

2) 児童文化・芸能等の活動紹介

加盟している全国の児童館・児童センターなどの所在する地域の児童文化活動・芸術活動・スポーツ活動の支援を目的とした、公演・競技会を開催した。

(ア) 「こどもの城おまつり劇場」の開催 (青山円形劇場)

子どもたちが今もその伝承の



「こどもの城おまつり劇場」(青山円形劇場)

担い手として受け継がれている、地方の伝承芸能を紹介し、その活動を励ます催し。今回は「こども風土記～五つの節句」と題して、5つの節句によせた歌と踊りのバラエティーショーを開催した。また本年は、来場者すべてを対象とした“富くじコーナー”や“日本の楽器アタックコーナー”も設けられ、催しにお一層の彩りを添えた。

出演は、神奈川県立厚木東高校O Bひがし座と同厚木市酒井新宿こども会の皆さん。そのほかに、日本舞踊わらんべ座、[こどもの城]の三味線グループと和太鼓グループ。

期 間：平成6年8月20・21日（2日間、4公演）

入場者：約1,200人

(イ) 「児童館こども卓球大会」の開催（体育室）

東京都内の児童館活動に参加している小・中学生たちによる卓球大会を開催し、子どもたちの交流を深め、児童館活動の活性化を図った。また併せて、「国際家族年」を記念して、家族の交流も図る家族大会を実施した。共催は東京都公立児童厚生施設連絡協議会。

期 間：平成6年8月6日・7日（2日間）

参加者：小学生／30チーム、約120人

中学生／14チーム、約56人

家 族／5チーム、約10人

3) 児童厚生員等の研修・現任訓練

児童館・児童センターで実際に子どもの指導に当たっている児童厚生員の資質の向上を図るために、研修教養部の協力を得て講習会を開催した。また、児童館・児童センターからの要請に応じ、職員研修の受け入れた。

特に児童厚生員等に対する研修は、児童館活動の実態を考えた実技を中心に実施した。5月は児童館を取り巻く屋外の資源の活用方法、9月はイベント活動の中核をなすレクリエーション財の活用方法、1月は[こどもの城]各事業部の開発した実践プログラムについて実施した。

(ア) 第1回 児童厚生員等実技指導講習会

「学校5日制の拠点をめざして パートII～児童館を拠点とした屋外の活用」

本年度は前年度の第1回講習会に引き続き、児童館を1つの拠点とし、その外側に広がっていく活動を紹介する講習会とした。

期 間：平成6年5月10日～13日（3泊4日）

会 場：こどもの城／神奈川県立観音崎青少年の村

参加者：38人（男子6人・女子32人、19都道府県）、スタッフ2人・ボランティア3人

【プログラムの概要】

実技：「屋外を使ってダイナミックに遊ぶ～ガキ大将を育てるゲーム」
 「夜を仲間と遊ぶ～ナイトウォーキング」
 「歌を感動的に遊ぶ～キャンプソングを中心に」
 「火を神秘的に遊ぶ～みんなでつくるスタンツナイト」ほか
 講師：東京小中学生センター 柴田俊明氏（日本キャンプ協会専門委員）
 こどもの城 神谷明宏（日本キャンプ協会専門委員）
 ハ 浦本桂子（日本キャンプ協会公認中級指導者）ほか

(イ) 第2回 児童厚生員等実技指導講習会

「ひとりひとりが輝くレクリエーションプログラム
 ～もう一度見直そうレク財の効果的な活用法」
 いろいろな集いの場面を想定したレクリエーションプログラムの基礎知識と
 基本技術の習得を目的とした講習を行った。

期 間：平成6年9月28日～30日（2泊3日）

会 場：こどもの城

参加者：65人（男子8人・女子57人、22都道府県）、スタッフ2人

【プログラムの概要】

実技：「ジャンケンだけで充分遊べる」
 「オリジナルソングに挑戦だ！」
 「誰もが楽しいレクダンス」
 「紐とスカーフの簡単手品」
 「遊んでこそレククラフト」

見学：「こどもの城事業概説・館内見学」

研究協議：「情報交換」、「レク財の活用法を語ろう」

講師：大田区城南第二小教諭 仁平勝巳氏

民族舞踊研究家・日本レクリエーション協会副会長 奥野正恭氏

児童文化研究家・人形劇団コロンボ主催 荒木文子氏

造形作家・横浜レククラフト研究所所長 兼松ムツミ氏

こどもの城 神谷明宏（日本レクリエーション協会専門委員）

(ウ) 第3回 児童厚生員等実技指導講習会

「あそびのニューウェイブを考える」

最近クローズアップされてきている、ビデオとパーソナルコンピュータを使った遊びをテーマにした講習会。特に大がかりな機材を使うことなく、ちょっとした家庭用機材の活用によっても、十分に楽しめるプログラムの考え方とその展開方法にスポットを当てる内容とした。

期 間：平成7年1月18日～20日（2泊3日）

会 場：こどもの城

参加者：39人（男子13人・女子26人、19都道府県）、スタッフ2人

【プログラムの概要】

実技：「レクリエーションゲームで仲間作り～遊びの主人公は子ども」

「パソコンの可能性を考える①～遊び道具としてのパソコン」

「パソコンの可能性を考える②～グラフィックスとその応用」

「いろいろなソフトで遊んでみよう！～市販ソフトの活用方法」

「不思議な映像実験室①～ビデオなんかなくてもできる！」

「不思議な映像実験室②～動きの秘密にせまる！」

見学：「こどもの城事業概説・館内見学」

講師：こどもの城 神谷明宏（日本レクリエーション協会専門委員）

小川能男（プレイ事業部長）

昼間行雄・山岡一馬（AV事業部）

(イ) 現任訓練のための各児童厚生施設からの職員派遣

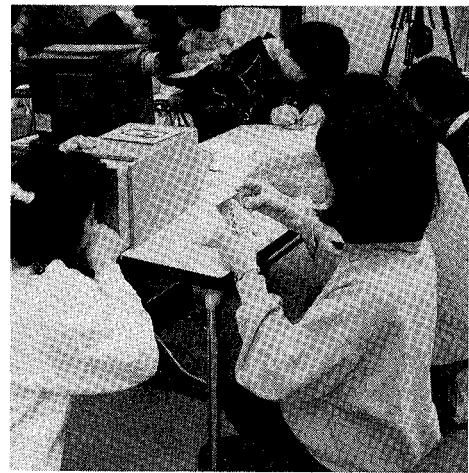
富山県立こどもみらい館職員（2人）

(2) 総会・幹事会など

平成7年3月2日、午前に「幹事会」、午後に「総会」をそれぞれ開催し、本協議会の事業予算・決算について審議決定した。なお、本年度の各都道府県（指定都市を含む）児童福祉主管課・児童館連絡協議会・関係団体等の本会入会状況および役員は次のとおりである（平成7年2月現在）。

(ア) 会員数

区分	都道府県	指定都市	団体等	合計
入会	42	9	6	57
未入会	5	3		8
合計	47	12		



映像を使って〈あそぶ〉

(イ) 役 員(平成 7 年 3 月 1 日現在)

区分	氏名	ブロック	所属する会員組織の役職名	勤務先
会長	小島 弘伸	こどもの城	日本児童手当協会理事長	日本児童手当協会
副会長	津金 正司	東京	東京都公立児童厚生施設連絡協議会長	東京都児童会館
"	濱口 公子	近畿	大阪府福祉部児童福祉課長	大阪府福祉部児童福祉課
幹事	木村 吉基	北海道	北海道児童館連絡協議会長	釧路市福祉部児童家庭課
"	大江 重子	東北	宮城県児童館連絡協議会長	大河原町立上谷児童館
"	朝原 法江	中国・四国	広島県児童館連絡協議会長	呉市二原児童館
"	久々山義人	九州	熊本県児童館連絡協議会長	本渡市役所
"	弓掛 正倫	こどもの城	日本児童手当協会常務理事	日本児童手当協会
会計監事	椿 幹夫	関東	神奈川県公立青少年育成施設連絡協議会長	神奈川県立青少年センター
"	市川勝太郎	中部	愛知県児童館連絡協議会長	豊橋市福祉部

(ウ) 会 計

こどもの城全国連絡協議会会計を設け、会費（1会員年5,000円）および日本児童手当協会助成金を原資として、前記の業務に関する経理を次のとおり施行した。

【平成 6 年度収支決算書】

科 目	収 入	科 目	支 出
	(円)		(円)
繰越金収入	911	役員会・総会費	289,890
会費収入	285,000	業務諸費	5,280
日本児童手当協会助成金収入	3,887,000	機関紙発行費	2,089,778
雑収入	3,065	協力援助費	1,771,704
合 計	4,175,976	合 計	4,165,152

(注) 収支差 4,175,976 - 4,165,152 = 10,824 円は次年度繰越金

2 チャリティー事業

本年度の青山劇場、青山円形劇場におけるチャリティー観劇は養護施設などの児童らを対象に延べ21回、809人を招待した。

その内訳は、養護施設などの児童85か所、637人、母子寮の母子13か所、120人、障害児・者のグループ9か所、32人、そのほかホームヘルパー、ボランティアなど20人となっている。

月 日	回数	場 所	演 目	入 数	対 象 者
4.2・3	(回) 2	青山 円形劇場	五線譜のなかの動物たち13	(人) 82	養護施設等の児童 母子寮の親子
8.3~7	4	"	五線譜のなかの動物たち14	154	養護施設等の児童 母子寮の親子 社協のボランティア
8.5 ~11	6	青山劇場	ピーターパン	229	養護施設等の児童 母子寮の親子 社協のボランティア 障害児(者)グループ
8.11 ~14	4	青山 円形劇場	ぼくのイソップものがたり	138	養護施設等の児童 母子寮の親子 社協のボランティア
7.1.4 ~5	3	"	トンガリぼうしの魔法つかい	147	"
1.12 ~16	2	"	五線譜のなかの動物たち 「プラテーゴ」	59	"
計	21			809	

3 こどもの城友の会

(1) 平成6年度の活動概要

年7回の「こどもの城ニュース」を含め、年14回のダイレクト・メールを「こどもの城友の会」会員に発送し、行事予定、講座募集などの案内をした。この案内には、青山劇場および青山円形劇場の公演の優先予約1回、料金割引による優待6回を含む。また、会員を対象として、次項のようなハイキングとキャンプをそれぞれ1度ずつ行った。

1) 会員向けの催し物

	実施日	場所・活動内容
ファミリー ハイキング	5月22日	実施場所＝埼玉県秩父方面芦が久保周辺 会員家族を対象とした、自然に触れる会員の親睦プログラム。今回は自然の恵みを見るだけでなく、味わう企画として、バーベキューといちご狩りをプログラムの中に取り入れた。参加者は新緑の山道で澄んだ空気を満喫したのち、自然の恵みを味わい、親睦を深めた。8家族24人（大人11人、子ども13人）とボランティアリーダー3人、スタッフ2人の計29人で実施。
ファミリー キャンプ	10月8日 ～12日	実施場所＝神奈川県南足柄市「どんぐりの家」 どんぐりの家のでのファミリーキャンプは、今回で4回目となった。2泊3日のAコースが11家族37人（大人19人、子ども18人）、1泊2日のBコースが9家族30人（大人16人、子ども14人）、ボランティアリーダー16人、スタッフ4人の合計87人で実施。家族で初めてキャンプに参加する初心者向けのプログラム。テントの扱い、野外炊事などの基本のほか、ます釣りとくん製作り、いも掘りとやきいもなど複数の選択プログラムを設けて、好みに合ったプログラムを楽しんだ。

2) 友の会会員・地区別分布

【地区別会員分布】

(平成7年3月31日現在)

	東京都					埼玉県 川崎市	神奈川県				千葉県	茨城県	その他	不明	合計						
	特別区			市町村	小計		横浜市	その他	小計												
	渋谷区	港区	その他																		
家族数 (世帯)	183	190	1,149	229	1,751	194	118	163	82	363	156	40	128	15	2,647						
人 数 (人)	693	717	4,238	837	6,485	741	423	588	291	1,302	606	166	479	54	9,833						

「その他」の都道府県別内訳（家族数）

北海道	2	青森県	1	秋田県	4	山形県	1	宮城県	4	福島県	5	新潟県	5	栃木県	17	群馬県	6
山梨県	2	長野県	6	富山県	2	石川県	3	岐阜県	1	静岡県	20	愛知県	7	三重県	1	京都府	4
奈良県	3	大阪府	13	兵庫県	7	鳥取県	1	広島県	5	山口県	2	香川県	1	徳島県	1	福岡県	2
佐賀県	1	大分県	1														

【就学区分別】

区分	未就学児	小学生	中学生	高校生	大人	計
人数 (人)	1,302	2,249	281	113	5,888	9,833

注) 1. 就学区分は、平成6年度の区分による。

2. 全世帯のうち207世帯が大人のみの世帯。

3) まとめと今後の課題

減少の程度は多少鈍ったものの、会員数は前年度の2,978世帯から本年度は2,647世帯へと引き続き減少した。従来のハイキングとキャンプに加え前年度から始めた、夏休み特別期間の「人形劇見本市」への招待は今年もたいへん好評であった。今後、会員の幅広いニーズにどうこたえていくかが課題である。

子どもの城事業年報 平成6年度

平成7年11月1日発行

財団法人 日本児童手当協会

理 事 長 今泉 昭雄

〒150 東京都渋谷区神宮前5-53-1

電話 03(3797)5666

印刷所 オーイ・アート・プリントィング